THE CENTRAL REVIEW

中央公論

12-1915

十二月號

第三十年第十二號　第三百廿五號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

(前付の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

代表的名作選集

第十六編 別れた妻

近松秋江作

曾て「別れたる妻に送る手紙」として公にされた作。作者が半生の慘澹たる苦痛の實際經驗を如實に寫せる所の、生々しき實感味を有つ一の人間の證券である。或は纒綿の情を描き、或は凄愴の恨を描き、愛の喜び、愛の悲み、複雜なる男女愛情の眞髓を揚出してそこに赤裸々なる人間の姿を示す、最も異色ある作品として當時を動かしたものだ。

島村抱月
生田長江
相馬御風
中澤臨川
共編

■羽二重表紙
■特製極美本
■一冊參拾錢
■郵送料四錢

東京市牛込區
矢來町三番地
新潮社

第十五編 戀ざめ

小栗風葉作

淫靡なる海岸町を背景として、中年の一文學者と、美しき女學生との、南國の春に蒸さるゝ戀を描いたもので、艶麗にして豐潤、作者の特色を最もよく發揮せるものである、先に世に公にするや風俗壞亂の廉を以て**發賣禁止**の厄に逢つたが、今こゝに復び蘇るに至つた。大に中年の戀を論じたる花袋氏の長序文、また意味深き讀物であらう。

第一編	牛肉と馬鈴薯（附）欺かざるの記	國木田獨步
第二編	坊ちやん	夏目漱石
第三編	蒲團	田山花袋
第四編	透谷選集	北村透谷
第五編第六編	春（上下二册）	島崎藤村
第七編	わが袖の記 たけくらべ	高山樗牛 樋口一葉
第八編	爛れ	德田秋聲
第九編	平凡	二葉亭四迷
第十編	高野聖	泉鏡花
十一編	何處へ	正宗白鳥
十二編	今戸心中	廣津柳浪
十三編	耽溺	岩野泡鳴
十四編	明治詩歌選	詩壇六名家

信用なき店舗及び卑猥なる實品の廣告掲載は謝絶す

（前付の四）

海老名彈正先生著

最新刊

基督教十講

四六判美本
定價金八拾錢
郵税金八錢

内容

第一講 豫言者より基督まで
第二講 原始基督教
第三講 教父時代の基督教
第四講 中世紀の基督教
第五講 プロテスタント教
第六講 新プロテスタント教
第七講 近代哲學と基督教
第八講 近代文藝と基督教
第九講 近代政治と基督教
第十講 日本固有思想と基督教
附錄 近代進化説と基督教

基督教はたとへば一の樹木とも見るべきか。深く根帶を過去人類の經驗に下ろしそが發達し來りて欝蒼たる樹木をなす。而して現代に織りなせる哲學科學政治文藝は夫れ輝ける枝葉か、花果か。先生の造詣深く地中に祕められたる根柢を尋ねて亭々たる幹心を攀ぢ、遂に繁茂せる樹上に大觀す。本書を讀まずして現代精神を語るべからず。

發兌 東京京橋尾張町 警醒社書店 振替東京五五參番

古河家經營

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監查役 安達仁造

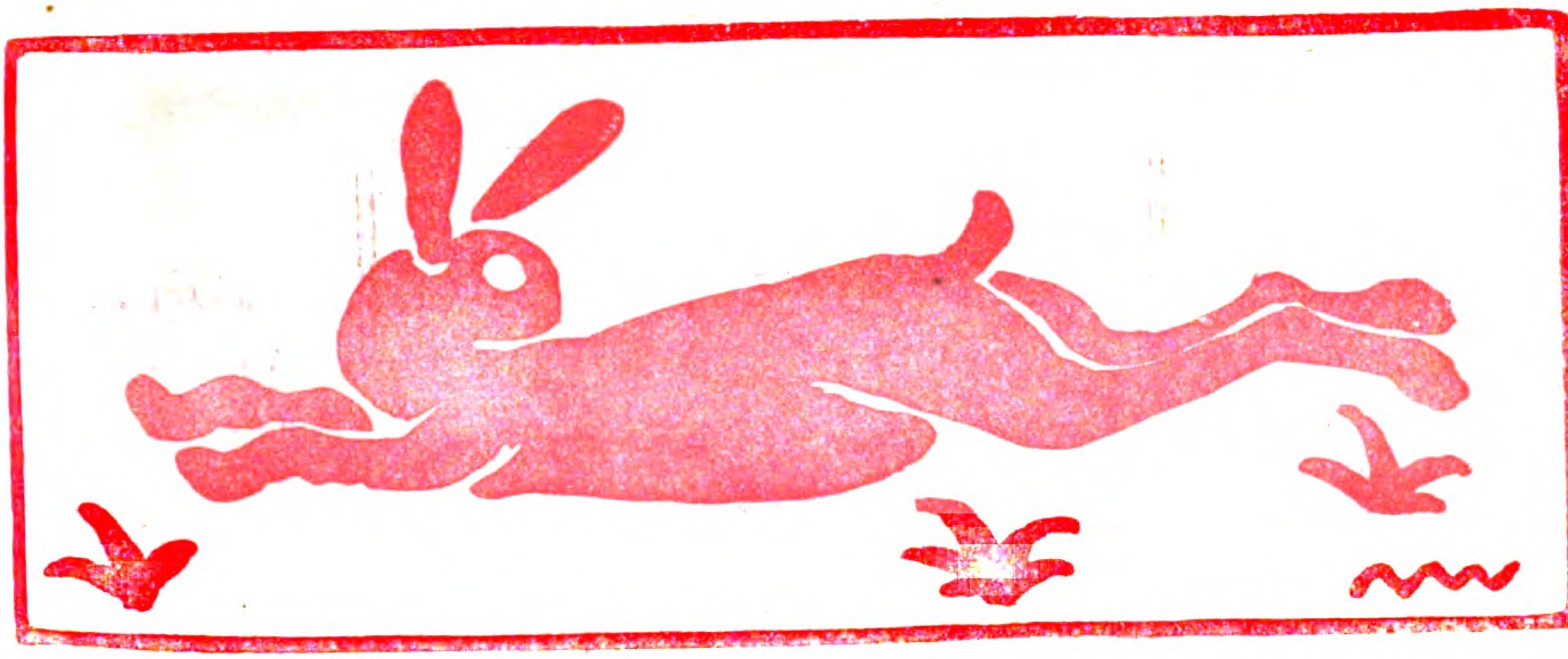
本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
支店 大阪市東區本町一ノ一三(電長本局二三一一番)

電長本局一八五六、五一五〇、一二八七番
振替貯金口座東京一七一七番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齢範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり



中央公論第卅年十二月號目次

茅原華山論

〈評論〉

《創作》


營業品概目
○懷中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド 並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話局新橋 一一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇七

ALFRED PÖLL



Evening on Lake Karer

中央公論



第三十年第十三號
十二月號
第三百二十五號

平和主義と軍國主義

(一)

歐洲の大亂は既に十有六月を經過し漸く正に闌なり、其何れの日に終局すべきや眞に逆睹す可らず、初め獨逸は力を佛國方面に傾倒し佛軍を破滅し單獨講和を强ゐんと期して志を得ず、次に白府を陷れカレーに進出を企て痛く英國を威嚇せんと試みしも亦果たさず、更に露國に向ひ全力を傾けガリシヤを掃蕩し露軍を波蘭に壓迫し之を三方より狹擊し遂にワルソウを拔き長驅して露本國に侵入し第三防禦線に殺倒せしも、英佛露の團結愈々堅固にして露國と單獨講和を結ぶの希望遂に水泡に歸せり、玆に於て軍を南方に轉じて巴爾幹に向ひ勃國を誘ひ同盟側に加擔せしめ南北策應して塞爾比に侵入しベルグラー

ド、ニッシ等を陷れ今や塞國の山河大半擧げて敵の蹂躙に委せられんとす、蓋し獨墺が宛も最後の手段として巴爾幹侵入を策せしは漸く其食糧軍資の供給に窮し土耳古方面に向ひて活路を求めんとする外、波斯、埃及、印度を煽動して英國を困殺せしめんとすにあるなるべし、轉じて聯合諸國側を見れば露國は波蘭土を撤退せしに關はらず毫も其兵力を減ぜず近來漸く軍需の供給を得て能く獨墺軍を防止する耳ならず亦た將に大に攻勢に出でんとし佛軍は久しく堅忍して時機を待てる結果近來に至り獨軍の疲弊と反比例に頗る精鋭を加ふるの觀あり、英國亦た百萬の精兵を佛白方面に支持する耳ならず、最近キチナル元帥を近東に派遣して巴爾幹の戰局に對し新生面を開かんとするに似たり、獨逸實に勇强猛烈なりと雖も聯合諸國亦た堅く團結して最終の勝利を期せり、此間我日本の如き大に軍資の供給に盡す處ある耳ならず、東洋の時局に關し時々機宜の處置を取り以て英佛露をして後顧の憂なからしめんとする如き、戰局の前途に向ひ影響する處決して淺からず、然れども前途遼遠にして今日は尙ほ戰局の終結を論ずべき時に非ず、但だ試みに思を時局の外に悠游し國際的平和論の由來を回顧し軍國主義の前途をトし、列國平和を把持すべき方法を講ずる亦た一興たらずんばあらず。

歐洲大戰の開けて以來財を費やすこと六百億圓にして人命を損失すること四百萬人に及ぶと計算せらる、外に家を燒かれ田園を荒され一家亂離の苦に泣くもの幾千萬なるを知らず、此の悲痛慘憺の光景に對し誰か復た近代式戰爭の殘忍酷烈を感受せざらんや。殊に近來世界各國に於ける平和の唱說頗る普及し人道の旨義最も尊重せられんとするに際し乍ち文明先進國間に今次の大戰爭を勃發せしことなれば

人類一般の道德感念は爲めに一種甚大の震動を受けしは素より其處なり、抑も近來の平和運動は列國の軍備擴張に追隨して勢力を加へ來れるの觀ありて、列國間に軍備の競爭を見ると同時に軍國主義と平和主義の大競爭あり、列國も遂に主義として平和神の前に叩頭せざる可らず即ち孰れも其軍備擴張の目的を以て平和維持の爲めに外ならずと聲言するに至れる耳ならず、一八九九年露帝の提議に基ける萬國平和會議の開催せられし以來海牙に仲裁常置裁判廷の設ありて既に其判決を待て國際問題を平和に解決せし例も少なからず、即ちヴェネズヴェラ國と歐洲債權國との葛藤(一九〇四年)、英、佛、獨と日本間の永代借地問題(一九〇五年)、合衆國と英國間の北大西洋漁獵權の爭論(一九一〇年)、其他九件に及び、目下該審判廷に懸案中のものゝ中にはオコック海鱈漁權に關する日露間の件案もあり、斯の如くして萬國平和會議は其効果未だ列國間の軍備を輕限して大に世界平和を促進するに至らざるも仲裁の便法を開きて國際間の親善に資する少なからず、且つ第二平和會議は一九〇七年を以て開催され、「輕氣球より爆裂物の投下を禁止する宣言」を決議したり、之に加ふるに第一回萬國平和會議に於て決議せられたる「窒息せしむべき又は有毒瓦斯の散布を禁ずる宣言」及び「特種彈丸使用禁止の宣言」を以てせば戰爭の慘憺を輕減すべき目的を有する重大なる決議已に三件に及ぶ、想ふに獨逸は此三件中前二件に對しては未だ調印し居らず故に今次の戰爭に於ける此等の宣言違反行爲に對しては法律的の責任なしとするも、若しも此等の規定が汎く國際間に嚴守せらるゝに至らば人道の一大進歩たるべきは言を待たず、即ち海牙會議が此等の宣言を發して大方針を示したるは以て一成功とせざるを得ず、而して第三回萬國平和會議

は一九一七年を以て海牙に開會すべく決定し居れり、轉して他方面を觀れば米國と英國とは總括的仲裁條約を協定し唯だ其批準の一段に至り米國元老院の反對に遭ふて破れたるも、兩國の關係は爾來益々親密にして殆んど總括的仲裁條約あると擇ぶ處あらず、今後英米間に開戰の場合あらんとは世人の想像にも上らざる處たり、現に兩國は一八一二年兵火相見て以來一百年間能く平和を維持し得たるを祝せんとして双方種々の計畫あり本年は正さに盛に其祝會を催ほすべき豫定なりしに大戰亂勃發の爲めに其議に及ぶ能はざるも米國人民が軍國の英國に對し表示せる深き同情は各種の實物問題に付て現はれ兩國を益々密接に聯結する上に於て寧ろ一時の祝祭騷ぎに優るものあるべきなり、更に平和運動資金としてカーネギー氏提供の二千萬圓の如きあり、海牙に平和宮殿を建築し(一九一三年)て、茲に仲裁審判廷を置き、且つ世界各方面に亘り平和促進の爲め目下重要なる調査に着手し居れりと云ふ。

斯の如く近來の平和運動は近世文明の人道的方面を飾るものゝ如く、其代表的言論を見るに從來の聞慣れたる宗教的平和論と科を同ふせず前日の如く空想的ならず斷定的ならずして今は大に實務的形式を帶び來れり、別言すれば新教の一派たるクエーカ信者若しくはトルストイ一流の平和論者は主として其根帶を宗教觀念に置き、天地の神を父とし人類を兄弟とする博愛の立脚地より戰爭の非人道を論じて曰く目を以て目を償ひ齒を以て償へば怨千載に結び解くる時あるべからず、惡を以て惡に復ゆること勿れ善を以て惡に報ひよ、人若し爾の右の頰を打たば之に左の頰をも打たせよと、然れども是れ純然たる個人の道德として必ずしも可ならざるに非ずと雖も試みに一家の主長たる身を以て考ふれば此無抵抗主義

を極端に實行せんとするに於て父母妻子弟妹に對す保護の責任を全ふする能はず、況んや國家の責に任ずるものに於てをや、自ら其主義に殉して死するは可なれども、其主義を奉せざる千萬人をして同じく之に殉せしめんとするが如きは決して仁愛の道に適へりと謂ふ可らず、此に於て輓近に至り社會、經濟の原理を根據とする新派の論者を生ずるに至れり、即ち一八九五年に『戰爭の將來』なる大著作を爲せし波蘭士の銀行家ブロッハ氏の如き是れなり、其議論の根據とする所は近世歐洲社會の經濟的發達と軍器の進歩に在りて、文明列國間の戰爭は一方が勝ち一方が負けると云ふを以て終らず却て雙方供斃自滅に終るべきを以て、今や列國は盛に軍備に焦心すれども到底其實行は敢てすべきに非ずと云ふに在り、曰く獨佛戰爭當時と比較すれば現時の小銃は十二倍の發動力を有し又今の重砲は種々の點より考へて百十七倍の效果を奏す、故に戰爭は總て塹壕内に於て行はれ將校も兵卒も悉く塹壕内に在るべく、鋤鍬は銃と同一に必要なるべく、斯くて戰爭の終結は戰爭に由らず寧ろ饑饉に由らん、從って一たび開戰の上は從來の戰爭の如く急速に結着せず少なくとも二箇年を要すべしとは故モルトケ將軍の意見なりしと云へり、今此ブロッハ氏の獨創的觀察は大に露帝ニコラス二世の心を動かし遂に帝をして萬國平和會議を提唱せしむるに至らしめたりと稱せらる、更にノルマン・エンヂエル氏著グレート・イルリウジョン(大なる幻想)の如きは初版を一九〇九年に發行し昨年を以て第十四版を重ね世界各國語に飜譯せられたるを以て其廣く注意を惹けること知るべし、其大意に曰く

一、列國の軍備の競爭は互に防禦を目的とすと稱するを以て見れば實際は孰れか攻撃を目的とするもの

ありと言はざる可らず。

二、一國が他を攻撃するとせば、必ずや其動機なかる可らずして、其動機とは領土の延長と政權の擴張に在りと斷定せざる可らず、何となれば民族の發展、商工業の進歩皆な領土の延長と政權の擴張に伴ふものと世人に想像さるればなり、故に此論據によれば國家の興廢は主として兵力の優劣に因ると云ふの斷定に歸着せざるを得ず。

三、然れども事實は斯の如き斷定を許さず、何となれば他國を征服したればとて其新附の人民を容易に同化し得べからざる耳ならず又新領土に於ける各種の私有財産を沒收し得べからざればなり、且つ大國なればとて必ずしも商工業の特種の發達を期す可らず、是れ一に經濟信用の程度如何に由るものにして國の大小には關係せず、例せば白耳義、和蘭の如き小國なりと雖も商工業の繁榮は第一流に位す。

四、然らば實利實益を離れ國家的理想の爲め戰爭するの必要ありと云はんか、是また非なり今や文明國民は國家的理想よりも寧ろ國内に於ける、例せば個人主義に對する社會主義の如き、問題を重大視するに至れり、現に此種の新問題は已に世間の敵愾心をして國外に對するより國内の新方面に轉せしむるの傾向を生じ來れり、故に孰れの點より之を觀るも文明列強の軍備擴張は無用の長物にして、之を爲すは舊思想に囚はれ居れる結果なり、是れ一日も早く舊思想を打破し新思想を普及し、以て國際平和を確保せざる可らざる所以なりと。

以上二氏の平和論は之を代表的と云ふべく、而して大戰勃發後の事情は其一部を裏書するの觀ある外、

戰前の國際事件中には大に他の一部を支持する如く思はれしものあり、即ち一九一一年摩洛哥問題に關し獨逸は盛に佛國に壓迫を加へ兩國の關係方に危機に迫らんとするや、英佛資本家は却て財政上の壓迫を獨逸に加へて以て開戰を敢てする能はざらしめしことあり、玆に於て算盤は銃よりも威力ありとの感を一部の觀察者に起さしめたり、又た一九一三年の巴爾幹の亂に際し英獨能く意思を疎通し戰爭の局限を謀りしかば遂に辛ふじて歐洲の大亂を未然に防ぐを得たり、是亦た列國が戰爭より來る損害の絕大なるを思ひ戰爭を敢てし能はざるものとして平和論者に歡迎せられたり、即ち此二事件の如き正に平和論者の平生の主張に裏書するものと認められ、彼等は得々として其主張の最後の勝利を步みつゝありしなり、此時に際し霹靂一聲世界大亂の幕は開く、彼等が宛も電光に打たれしが如く乍ら啞然茫然自失し已に一年有餘の今日に至るまで口の開くべきを知らず手の出すべきを知らざる素より其所なり、然れども吾人は之を以て平和論者が永久に閉息すべきものと思惟せず、最近已に現戰爭に對する平和運動は開始せられんとし、戰後に於ける其活躍寧ろ想像に餘りありと謂はざる可らず。

（二）

蓋し輓近平和運動の盛況は宛も一種の陰影の如し其實體は即ち此間に於ける列國の軍備擴張に外ならず、具體的に之を云へば此總ての原因は獨逸軍國主義の樹立に在りと謂はざる可らず、一八七〇年の役を終るや獨逸政府は佛國が必ずアルサース・ロルレーン割讓の復讐戰を起すべきを慮り軍備の大擴張を行ひ以て列國をして之に倣ふを餘儀せしめ、爾來獨逸は列國軍備擴張の音頭取たるの觀あり、海軍に於

ても獨逸は英佛に對し遙かに後進者たりしに拘はらず、一八九三年大に海軍改革を斷行して以來未だ多年を出でざるに佛國を凌駕し、更に一躍大英の壘を摩せんとするの氣勢を示すに至りしかば、流石の英國も終に晏如たること能はず寧ろ狼狽の態にて必死の競爭を試むるに至れり、故に最近五六十年間の列國軍備擴張の狀態を知らんと欲せば獨逸國に就て之を觀るを最も便利なりとす、試に舊版の英國政治年鑑に由るに、一八七二年度に於ける獨逸の常備軍は步兵百四十八聯隊、ライフル銃兵二十六大隊、騎兵二十六聯隊、砲兵二十八聯隊、工兵十六大隊、鐵道兵十六大隊、後備諸本營二百十六大隊にして、之を總計すれば將校一七、三九五人、兵卒三八六、一六五人、馬匹八五、一〇一、砲一、〇八五門と註せられ、戰時編制の上は增加して將校二八、七八九人兵卒一、一六九、三二一人たるべしと記さる、而して之に對する軍費は一三八、八四八、二四一圓にして、總歲出の三分一强を占む、次に二十年を越へて一八九二年に至れば將校二〇、五二四人兵卒四九一、三二〇人に增加し戰時編制將校四七、三二一人兵卒二、七三六、六五七人と註せられたり、而して陸軍費に至りては無慮二一三、一八八、一四〇圓に達し、總歲出の三分一强を占む、之より更に二十年を越へ、一九一二年に至れば將校三三、三九一人兵卒六二二、七五三人と註せられ、其戰時編制に至りては獨逸陸軍省は之を秘して發表せざるも英國政府筋の調査に由れば三、八〇〇、〇〇〇人を下らざるべしと云ふ、而して其陸軍費は四三〇、〇〇〇、〇〇〇圓を算し、加ふるに此時已に海軍大擴張の結果として海軍費二二八、七〇〇、〇〇〇圓を算するに至りたれば、一九一二年に於ける軍備費は實に六五八、七〇〇、〇〇〇圓の巨額に達し、依然全歲計の三分一强に

相當せり、此を四十年前の獨逸軍備と比較すれば陸軍に於ては平時に於て約二倍の兵力を增加し、戰時編制上に於ては三倍弱を增加せり、而して海軍に至りては殆んど皆無より世界第二の位置に上進せるを認めざる可らず、之を獨逸が此間其人口に於て四千一百萬人より六千六百萬人に增加し、即ち七割を加へたるに過ぎざると對照せば以て獨逸の軍備擴張か如何の大速力を以て行はれしかを知るを得べし、而して佛や、露や、英や、墺や、伊や又は北米合衆國なり、極東の日本なり、皆な歐洲中原に於ける軍國主義樹立の直接又は間接の相伴者として多大の軍備擴張を强ひられしを思へば獨逸軍國主義の樹立は甚だ以て價値安からずと謂ふべきなり。

今平和論者の觀察に由れば此巨大なる各國の軍備は凡て無用有害のものにして、此あるが爲めに戰爭の危險あり、偶々戰勝の結果大に國疆を擴大し得たればとて必ずしも其人民個々の事實上の幸福を增加し得べきに非ず、小弱國の人民は寧ろ生命を安んずるに於て却て便利なる場合あり、籍を大國に屬するを以て得意とするが如きは一種の妄想虛榮に過ぎずと、然れども此論は恐らくは人類多數の承認を經べきものに非ず、何となれば人の生命は其食するパンの多寡に由らず寧ろ其身を殉すべき理想に由ればなり、其理想なるものゝ中には古來宗教の問題は最も重要の一案件たりしも、近來漸く世界一般に人心の傾向を異にし獨り國家主義の勢力益々大ならんとするものあるは否む可らず、社會主義の主張は國家主義と根本に相容れざるものありと雖も、個人主義若しくは自由主義の能く國家主義と相調和するを得るは英米佛等の例に由り明かなりと謂ふべし、彼のノルマン・エンヂエル氏の如き其議論に由れば個人の幸

福は毫も其屬する國の大小に依らずと云ふに歸着すれども、實際の問題として彼れ果して偉大にして光榮ある英帝國の一員たるを以て心緒に滿足し又永久英帝國の地歩を維持せんことを希望するものに非ざるなきを得んや、此點に於て平和主義なるエンヂエル氏が英國の全世界に對する天職を信ずる豈に戰爭論者たるベルンハーヂー將軍が獨逸の天職を信ずると多く擇ぶ所あらんや、即ち文明國人の頭腦を根本的に支配するものは個人の衣食又は趣味の問題に非ずして國家問題なり、假令平時に於ては心底深く潜伏して殆んど識別すべからずとするも國難一たび來らば愛國の熱火は乍ち炎々として燃上するは世界各國に見得べき狀態なりとす、抑も國家主義若しくは愛國心は決してトルストイ等の論ずる如き私我的一偏のものに非ず、一國を限り疆域を定めて以て他の人類に對すれば一視同仁の旨に及ばざるに似たれども、民生を厚ふし文明を增進せんとせば國家を立つるの必要を認めざるを得ざる耳ならず、其特種の文明を國外に廣めて他の民族又は國民を恩惠に浴せしめんとするの必要より自然國權を張るの止むを得ざるに至らざるを得ず、從て國際競爭の免る可らざる所以なり、個人は小なれども國家は大なる個人なり、各人この大個人の一部として之を我物視するに至りて亦乍ち大個人と化するの感あり、且つ世界到る處何となく羽振よきを感じ又た便宜少なからざるを知るに至りて始めて强大國に屬するの有難味を味ふを得んなり、此等の點よりして觀れば戰爭に由り國基の定まり國土の擴大するは亦以て大に歡迎するに足れり、北米合衆國は世界中最も平和を尊重するの國なりと稱せらる、然るに其歷史を觀れば七年間に亘る戰爭に由り初めて國家の獨立を全ふし、更に四年間に亘る大戰爭により國內統一の業を成し、最後の西

班牙との戰爭に由りフヒリツピーン群島を獲て東亞細亞に對する策源地を得たり、又我邦の如き決して戰を好むものに非ずと雖も、日清日露の兩大役を經て始めて文明國として世界に認識され大和民族多年の蟠屈を伸ぶるを得たり、若しも此二大戰役なかりせば今日に至るも尚ほ世界は我國を以て美術骨董に富めりとして其好奇心を動かすに止め我國民の眞價を知るに至らざりしなるべし、戰爭の犧牲は巨大なり、殊に金錢を以て償ふべからざる人生を芥塵の如く放棄するに於て眞に忍びざるの感なき能はず、ナポレオン戰爭に於ては敵味方の死するもの前後三百萬人の多きに及び、殊に佛國人の死傷夥大にして且つ孰れも國民丁男中の精華なりしかば戰後に於て佛人の身長一吋を減じたりと云ふ、四箇年の米國南北戰爭には七十萬人の死者を出し、獨佛戰爭、日露戰役には各二十萬人に近き死者を出だせしが、今回の歐洲大戰に於ては開戰後未だ一年半に及ばずして已に約四百萬の死者を出せり、今後戰爭尚ほ一年を持續するとせば殆んど六七百萬人を犧牲にするに至るべきは疑を容れざる所にして、近代的戰爭の慘憺眞に想像の外に在り、然れども此戰爭の結果として一方獨逸の暴戾を懲らし、同時に各國獨立の基礎を堅固にするを得べしとせば斯の大なる犧牲亦た止むを得ずと云ふべきか、之に由て之を觀れば平和主義者の理想に對しては吾人滿幅の同情を惜むものに非ざるも人類の戰爭を廢するの日果して何時に來るべきか、誰か平和主義の前途を望み茫乎として津涯なきの感なきことを得んや、蓋し平和論の困難は宛も社會主義の困難なるが如し、其論理整然として一の缺點なきが如しと雖も試みに之を實行せんとせば乍ち人間の性情に適せざる所のものあるを發見すべし、即ち社會主義の困難は個人の自由を束縛せんとする

に在るが如く平和論の困難は國家の自由を束縛せんとするに在り、ローラン夫人の曾て斷頭臺上に於て怨言せし如く、古來自由の名に由り如何に多くの惡事の行なはれたるかを知らざるに非ざれども、人間は個人としても國家としても其自由を束縛せらるゝを欲せず、個人として生存の爲めに、勢力を得ん爲めに戰ふ如く國家としても亦た獨立の爲めに戰ひ權勢の爲めに戰はざる能はず、銀行預金に由り安穩の生涯を送るの意氣地なきが如く發展擴大の元氣なき國家は已に衰運の下に立てるものなり、即ち國勢の現狀を維持し又は場合に由りては進んで新運を開拓すべき準備あるべきは立國の必要條件なり、而して兵備は實に其必要條件中の必要條件なりと云はざるべからず。

（三）

終りに國際戰爭の前途をトせんとするに臨み、今次の大戰爭が果して歐米人心に如何の影響を及ぼすべきかを研究するの必要あり、想ふに文明國双互間に對等の戰爭を爲するの困難にして其結果の終に雙方供斃に歸すべき恐あることは獨逸軍人の夙に氣付けることとなるは言を待たず、即ち前段云ふ如く故モルトケ將軍が來るべき戰爭の必ず二年以上の永期に亘り決して獨佛戰爭の七箇月を以て終局せし比に非ざるを預言せしに由て察すべきなり、然るも尙且つ一種の樂觀を以て彼等が開戰を敢てせしは獨逸に一二の秘したる奥の手ありしに由れるものゝ如し、奥の手とは他なし(一)四十二珊巨砲(二)獨特の潛航艇(三)密集團の攻擊(四)小銃多射即ち是れなり、蓋し現代の正式要塞は之を包圍攻擊するも少なくとも三箇月を經ざれば拔く可らずとはブロッハなどの唱說する處なりしが、獨逸は例の法外の巨砲を陰密に用

意し置き數週間を以て白佛の堅牢なる要塞を拔けり、然れども半永久的の塹壕に對しては流石の巨砲も之を用ゆる能はず從つて周圍塹壕線を以て防禦せるヴェルヅン、ナンシー等の大要塞に對しては未だ巨砲を用ゆるの便を得ざるものゝ如し、又た三、四千哩の長距離に航行し得べき潜航艇は一時英國の艦隊を威嚇するに於て多少の效果ありしが如くなるも幾許もなくして其四十餘隻の潜航艇中大半は已に英の捕獲網に係りて執られ今や波羅海に於て獨逸の海軍は却て英の潜航艇に威嚇せらるゝの狀態に立到れり、更に步兵密集團の攻擊は數の力を以て萬障に打勝ち得べきが如くなるも死傷者を生ずること夥敷、殆んど軍隊として自殺的なりと謂はざる可らず、是亦永續的に行ふべき兵術に非ず、更に又小銃多射に至りては、當初頗る成功の觀あり聯合諸國は獨軍に釣られて多射して乍ち戰爭未だ央ならずして彈藥の不足に苦めり、其結果の最も著るしきは波蘭の露軍に於て之を見るべし、然れども補充の法を立つれば容易に勢力を回復すべく、佛英軍が近時寧ろ獨軍より優勢にし露軍亦た着々英氣を輓回しつゝあるを以て見るべく、即ち彈藥の不足は比較的容易に補充し得べきも密集團攻擊の結果等に由り失へる軍隊の精銳は到底回復すべからず、此等の事情に由り當初樂觀なりし獨逸も近時漸く前途悲觀するの傾向あり、殊に糧食、軍資の供給に關しては英佛伊海軍の封鎖に苦しむこと益大ならんとするに似たり、若しも巴爾幹方面に於て其進路を堅く遮斷せらるゝに至らば獨墺は宛も八方重圍の中に在る巨大なる要塞なり、其遂に糧食、軍資に盡きて落城すべきこと蓋し疑を容れざるなり、然れば流石に獨帝の秘藏せし奥の手も遂に效果を奏せず、近代式戰爭の甚だ容易ならざること愈明白となれり、而して戰期遂に二年三年

に亘るにも至らば交戰各國に於ける財政經濟の組織は根本に破壞せられ、其整理若しくは再建造を見るまでには絕大の努力を要すべきこと想像に餘あり、即ち歐洲諸國は今次の戰爭に由り各人身に浸みて戰爭の慘憺、其損害の大にして却て效果の乏しきを會解するに至るべく、且つ戰後國力の回復亦た容易のことに非ざるべきを以て、重ねて列國間大戰爭を勃發するの危險は極めて乏しかるべきに似たり、然れども試みに獨逸をして之を觀せしめば果し左も安々と將來の戰爭を斷念すべきや否や、獨人の眼を以てせば今次の戰爭に於ける根本の誤は英國を向ふへ廻はしたるに在り、英を敵としたればこそ伊太利は遂に同盟を脫したるなれ、若しも英國中立し、伊國にして同盟の誼に依り南佛を襲ふの擧に出でしめ又其海軍を以て墺の海軍と聯合して、地中海に於ける海上權を佛と爭はしめば戰局の開展は必ずや絕對に獨の利に歸したらんこと睹易きの理なり、故に獨人は云はん策の誤りは戰略の上にあらずして外交の打算に在りと、是れ確かに一說なり、此點よりして觀れば獨逸の作戰は遺憾なく必勝の算十分なりと雖も、外交の拙劣遂に國を誤れりと云ふべきなり、然れば若しも獨逸にして捲土重來を期せば能く外交の打算を明かにせば即ち可なり、戰場の事に至りては自ら復た新奧の手の工夫もあるべく遂に中原に覇たらんこと蓋し有望ならずとせざるなり、殊に現戰局の終結多く獨逸の不利に歸すと假定するも、戰後墺匈國に對する獨逸の勢力は一層增加すべきは疑ふ可らずして獨墺匈打て事實上一國となすに於ては、其面積人口は乍ち今の獨逸に佛國の面積人口を加へたるより以上の大國を作すべく、之を軍事上經濟上獨逸特有の組織の下に置くに於て一躍して四隣を威嚇する强大勢力たらんこと自ら容易ならん、然れば獨逸が今

回の一敗に由り將來永く列强に雌服すべしとは思はれず必ずや捲土重來を畫するの日あるべきは疑を容れず、故に吾人は戰後を豫想して獨逸軍國主義の再興あるべきを斷定せずんばあらず、然らば一方に國際平和の運動は如何と云ふに是れ亦た前日に劣らざる熱度を以て唱說せらるべきことと疑なく、但だ其實際の效果に至りては多くを望む能はず何となれば平和を希望するの感情は優美なるに相違なけれども、國家的野心の猛然として發現せらるゝ場合に至らば優美なる人道主義の制裁は宛も綿絲を以て巨人の腕を扼せんとするが如く殆んど一顧だも値せざる可ければなり。

之に由て之を觀れば過去に於ける如く今後も然らん、國際的平和を把持するの道只だ列國均勢の方法を講ずるに在らんのみ、歐洲に於ける平和は現在の國際分類を維持するより外に方法なかるべしと雖も、東洋に於ける均勢は果して如何して之を保つべきか、太平洋の一方に富强宇内に冠たる米國あり又他の一方には尨大にして統治の弛廢せる支那あり、而して世界の列强は孰れも競ふて其勢力を支那に擴張せんと努むべきに對し我帝國の態度及經綸亦實に至難なりと謂はざる可らず、米國との關係又は極東の問題よりして遂に獨墺に對峙する英佛露伊及日本の聯合諸國間に破綻を生ずるの憂なきか、我邦の一擧一動はやがて列國環視の中心たるべく、進むこと一歩を早くせば第二の獨逸として猜疑せられ、退くこと一歩を誤れば極東の大事を失ふことなきを保せず、故に陸海軍の精銳素より第一の要件なるも遠見達識の外交に待つこと一層多大ならざるを得ず、若しも一たび外交を誤まり均勢の打算を失するにも至らば兵備は却て亡國の因たらざるなきを保せず、獨逸が比公の賢明雄大なる外交に由りて興隆し現皇帝の外

交過失の爲め今日の災禍に陷れる以て鑑みるに足れり、今後歐州の兵塵一たび收まり極東却て多事なるに至らば世界平和の保持は一に懸りて我外交當局の双肩に在らん、想ふて茲に至れば吾人は時事に對し轉々慨然たるもの無んばあらず。

大典後の政治界

去る十一月中の大半擧げて休戰の狀態に在りし我政治界も御即位の終了と共に復た前日來の不穩の光景を現し來り議會開會と共に將に一大政戰の幕は開始せられんとす、政友會は現內閣の當の政敵として正面より之に刄向ひ國民黨亦大體に於て政友會と一致の步調に出で、純無所屬團頭數小なりと雖も亦反對黨として大に努力すべく、無所屬團中亦多少の政府反對者あるべく、蓋し衆議院の大勢は素より非政府黨に非ならざるを得ずと雖も政府より之を觀る決して樂觀を許さゞるものあり、之を昨春政變當時の事に照らすに當時山本內閣は終始衆議院に於て政友會の援護を得、常に二百有餘の絕對多數を制するを得たるも、海軍瀆職問題の爲め甚だしく天下の人心を失ひ、終に貴族院の大反抗に遭ひて瓦解せり、今日の大隈內閣亦頗る當時の山本內閣に類するものあり、乃木大浦兩事件は事或は宮中に關し或は內閣の職責に關し識者の反對を惹起すること少なからず、殊に立憲主義を標榜しながら猥りに　陛下の思召に藉口し政界の廓淸を叫びつゝ其閣員中より贈賄瀆職者を出だしたるが如きは最も識者の指摘に値すと謂

はざる可らず、但だ新聞の操縦頗る老巧にして所謂言論界の反對未だ甚だしきに至らざるは現内閣の一强點たるに相違なしと雖も、貴族院の暗流は、恐らくは甚だしく現内閣に不利なるものあらん。

最近支那帝政延期忠告の結果未だ全く收らずして大に警戒を要するを以て擧國一致の必要を説くものあらんかなれども、大凡支那の關繫には近年大小の事故殆んど間斷なく發生し來るを常とす、内亂の如き大事變の際にてもあらば格別、今日は擧國一致を叫ふ程の急迫を告げず、毫も内閣の交迭あるを妨げざるなり。

大隈内閣の成立以來已に一年有半を經過す、此間稀有の時局に遭遇しなから献替多くは其宜きを得ず、内治に於て責任支出を濫りにし選擧干涉を擅にし議員操縦を名として政界の腐敗を増長せり、而して外交に於ては日支交渉の大失態を初めとして非議すべきもの甚ざ多し、今後更に尙ほ在職して内、政爭を益々激甚ならしめ外、帝國の威信を失墜せんとするが如きは吾人の見るに忍びざる所なり、吾人は寧ろ此際假令形式に政黨内閣たらざるも聲望材能に富み且つ雍容雄大の氣象ある新内閣の出來らんことを冀望す、而して内政爭の險惡なる氣風を一掃し外歐洲平和の議に參加するを得ば自ら憲政の進歩に資する所も亦多かるべし、吾人は斯の如き意味に於て内閣の交迭を必要なりと思惟せずんばあらず。

公論

近世世界の形勢を論じて姑息なる海軍補充案を難ず

法學博士 戸水寛人

私は曾てフリントの「歴史哲學(フイロソフイ・オブ・ヒストリー)」を讀んだ事がある。其中に斯う云ふ事が書いてあつた。「歴史上の事實は個々別々に孤立のものではないので、之を水に譬へて見れば此等の事實は水上に浮ぶ所の泡沫(うたかた)たるに過ぎずして、其下には滔々として流るゝ所の暗流・潮流がある」と。獨逸人の所謂ツアイトガイスト即ち時代精神の觀念もフリントの言と趣旨を同じうして居ると思ふ。彼の支那に於て詩を論ずるものは、唐の詩の氣格と宋の詩の氣格と違ふと云ふ事をよく云ふ。日本に於て繪畫を論ずるものも、王朝時代の繪畫と德川時代の繪畫とは風を異にするとか、又德川時代の繪畫と現代の繪畫とは風を異にするとか論ずるのも同じ思想に基いて居ると思ふ。一體世の中には風潮と云ふものがある、大勢と云ふものがある。萬事萬物皆此風潮此大勢の爲めに支配せらるゝ。十九世紀の中頃から二十世紀に跨つて居る所の風潮を見るに、小さな國は獨立を全うすることが出來ない、大國でなければ列國の間に介在することが困難になつて居る。加之大國と雖も矢張り人種

及び風俗を同じうする他の大國と結合しないと競爭上敗を取るの怖れがある。それだからして世界到る處同人種の同盟が企劃せられて居る。今から二十年ばかり前には濠洲、加奈陀等は英國から分離して自治を發達させたいと云ふ考を持つて居つた。此等は明かに右の風潮大勢に反して居るものであつて、恰度其頃に英國の政治學者シーリーが「英國の膨脹」と題する本を著はして英の本國と英の殖民地即ち濠洲、加奈陀等とは合併して一大帝國を作らなければならぬと云つた。斯の如く云へば、相離れて居る所のものが互に合併すると云ふは餘程滑稽と批評する人があるけれども此批難は誤つて居る。昔羅馬帝國なるものがあつた。其東から西に旅行するのには數ケ月を費やした。今の英國の殖民地たる加奈陀、濠洲は互に本國から離れて居るが、其間の海、即ち太平洋、太西洋の如きは快速力の船を以て渡れば直ぐ渡れる。此等の太洋は恰かも自分の領土内の湖水の如きものである。此等を合併して一大帝國を樹立しても何の不都合もないと。シーリーは斯くの如く論じて居るのである。其當時に於て濠洲、加奈陀等の希望とシーリーの意見とは正反對である。一方は遠心力の如きもので、一方は求心力の如きものであつた。而して濠洲加奈陀等の輿論が未だ定まらざるに當つて明治二十七八年になつて日清戰爭が起つた。日本は連戰連捷の勢を以て支那を破つた。そこで濠洲などは俄に恐怖の念を抱いて英國の殖民地は、英本國と相結ばなければならぬ事になつた。即ち濠洲は英本國と結んで日本と爭はなければならぬことゝなつた。斯くの如くしてシーリーの意見が暗々裏に實現せらるる傾を生じたのである。其後に亦一八九九年にトランスバールの戰爭が起つて來た。英國人が亞弗利加の南端を席捲して自分の領土としたのである。此時に英國の殖民地からも出兵した。戰勝つてから後に一九〇〇年の九月十八日に濠洲のニュー・サウスウエルス、ヴクトリア、サウスオーストレリア、クウインスラント、タスメーニア、ウエスターン・オーストレリア、以上六つを合はせてコンモンウエルス・オブ・オーストレ

リアとして倫敦に於て式を擧行した。即ち此時以前に於ては以上のものは別々の殖民地であつたが、此時に之を合併して統一政府の下に置かるゝと云ふ事になつたのである。さうして其式は濠洲に於て擧行せられずして英國の首府たる倫敦に於て之を擧行したのである。此時に英國の皇族を初めとして諸大臣皆列席した。間もなく其當時の英國女皇ヴイクトリアの最愛の孫のコンウオール及びヨーク公ジヨールヂ皇子即ち現英國皇帝ジヨールヂ五世陛下が一九〇一年を以て英國の殖民地に派遣せられた。之は即ち殖民地に對して禮を述べんが爲めである。殖民地の人が兵をトランスバールに派遣して、英國が其援を得て亞弗利加南端を征服した。其れに對してプリンスジヨールヂを派遣したのである。其時の旅行記は「ウエブ・オブ・エムパイア」に書かれた。之を書いた人は曾てタイムス新聞記者であつてプリンス・ジヨールヂに隨行したりしマツケンヂー・ウオーレスである。此時にプリンス・ジヨールヂは英國の領土のみに上陸し、他國の領土を踏まない。英國の領土は何人も知る如くに世界到る所に散布して居るものであるから、他國の領土を踏まずして旅行することが出來るのである。プリンス・ジヨールヂは殖民地到る所大いに歡迎せられた。斯くの如くして英本國と殖民地とは益々相親善した。英國の政治家チエンバレンの如きは斯くの如き狀態を以て滿足せずして更に屢々アングロサクソン同盟を唱へた。即ち英國と米國とは互に相親善し相結合して他の國民と競爭しなければならぬと云ふ事を云つて居る。近頃又ケネデーと云ふ人が汎アングルスと云ふ本を書いた。其中にニユージーランド、オーストレリア、サウスアフリカ、ニユーフアウンドランド、加奈陀、英本國及び北米合衆國の七つを合併して一政府の下に置かなければならぬと云ふ事を云つて居る。斯くの如き理想は速かに行はるゝとも思はれないけれども、然しながら大體の形勢を論ずれば、英語を話し、英人と人種を同じうするものは益々相結合せんとするの傾向があるのである。

然るに又獨逸の方面を觀ると云ふと、元來獨逸人種

と云ふものは、昔時に於ては今日の獨逸人が有して居る所の領土よりも外の場所にも蔓衍して居つたもので、殊に今の露西亞領になつて居る所にすらも住まつて居つた事がある。且つ又或時代に於ては和蘭、白耳義、瑞西なども獨逸帝國の版圖に歸して居つた事もある。然るに近世に於ては獨逸の國勢久しく振はなかつたが、フレデリック大王が立つてからは普魯亞が大變强盛に赴き、亞いでビスマルクが政權を握つてから後は獨逸人の組織して居る所の國々を合併して一大帝國を作らなければならぬと云ふ事を企て、苦心慘憺の後に遂に之を實行した。即ち一八六四年に於て普魯西と墺太利と相計つて丁抹と戰つて、シュレスウイック、ホールスタインを奪ひ取つて、更に此二州に關して墺太利と釁隙を開いて一八六六年に墺を破つて遂に獨逸聯邦の盟主となつた。更に一歩を進めて一八七〇年に佛國と戰つて之を破り、今日の所謂獨逸聯邦なるものを打て一團としたのである。昔時獨逸人は相結合して一大帝國を作らなかつた爲めに屢々佛蘭西の爲めに壓倒せられた事がある。けれども斯くの如く獨逸人種が結合して一大帝國を作つた以上は佛蘭西のみならず四方の邦國を壓倒して歐羅巴に雄飛するやうになつた。然しながら獨逸國民は之を以て滿足せずして更に海外に於て新たな領土を作つて英國と競爭せんとして居るのである。之をなすについては一面歐羅巴大陸に於ける諸國に對抗する丈けの陸軍を作ると同時に、大いに海軍を擴張して英國の海軍を打破るの計畫を立てることになつた。獨逸の現役兵は之まで六十萬であつたけれども、更に之を增加して八十七萬にすることにして、其計畫の未だ十分に行はれざるに當つて今回の戰爭が起つたのである。獨逸の海軍を擴張するについては先づ以て海軍協會（フロッテン、フェライン）を作つた。之は政府の作つたものでないので、人民が人民の醵金を以て作つた所の團體である。每年五十フェニヒ(約二十五錢)以上を納むるものは會員となることが出來るとしたから、貧民と雖も皆加入することを得た。一時に一千マルク(約五百圓)を納めたものは終身會員となることが出來る。斯

くの如き方法を以て集まつた此の金額が甚だ多額である。即ち毎年の歲入は實に五拾萬圓の多きに達して居る。そして此の海軍協會の背後には獨逸皇帝が居られた。之は海軍擴張の輿論を喚起する爲めに出來たものだ。黨派の如何を問はず、何人も海軍擴張に反對することが出來ない形勢になつて居る。而して又獨逸皇帝が熱心なる海軍擴張主張家であつて、先年日淸戰爭の折に日本の海軍が威海衞を攻擊する時に、列國の艦隊が其附近に集つて居つた。獨逸皇帝は其圖を書いて國會議員に示した。其意味は諸國の軍艦を大きく書いて、獨逸の艦隊を小さく書いて、擴張しなければ此通りであると諷せられた。皇帝は繪も一寸巧いからこんな頓智を用ひられたのだらう。此等の關係からして獨逸の國會議員のみならず、獨逸國民も一般に海軍擴張に熱中し、努級艦、超努級艦を澤山作つて英國の海軍に對抗せんとした。昔時に於て英國の海軍に次ぐものは佛國の海軍で、獨逸の海軍は後へに瞠若たるものであつたが、一躍して英國の壘を摩するに至つた。そして獨逸と英國と戰爭が起るとすれば、獨逸は先づ潜航艇を放つて敵の戰艦を沈沒せしめ、そして英獨の勢力略ぼ相當るに至つて決戰せんとするのである。即ち今日は其實行中である。加之獨逸に於ては夙にアールドイッチエル、フエルバンド即ち汎獨逸同盟、換言すれば獨逸人種大同盟が出來て居る。此の初めて出來たのは一八七五年獨逸皇帝の學友たるハッセ博士が殖民地同盟なるものを作つて亞弗利加及び亞細亞にある獨逸の經濟力を膨張しなければならぬと云ふ事を主張した。此協會が後に變じて今日の所謂汎獨逸同盟即ちアールドイッチエル、フエルバンドと爲つた。而してハッセ博士は其會長となつたのである。今日にあつては其會長はマインツの法律家のクラッスと云ふ人である。此協會の牛耳を執つて居る人は右クラッスの外にリーベルト將軍、カイム將軍、ステッセル、クリンゲマン、イッチエンブリッツ等である。此協會の勢力は甚だ强大であつて、社會黨と雖も今日に於ては多くは此協會の主張を容れて獨逸の帝國主義者の中に加つて居る。

だから今回獨逸が聯合軍と戰爭するに當つても、社會黨中には此戰爭に反對するものは極めて少い。獨逸皇帝と雖も屢々此協會の爲めに攻擊せられた事がある。獨逸皇帝は雄心落々、獨逸の國權を擴張するに熱心なるは論なきも、時としては又軟弱なる政策を行ひたることないではない。其時に右の獨逸人大同盟を企てた所の人間は憤慨して、獨逸皇帝の政策を攻擊し、併せて其輔佐する所の大宰相を攻擊した。曾て大宰相たりしカプリビーの如きは大いに侮辱せられ「皇帝の柔順なる僕」といはれた事がある。ビスマルク居つたならばあんな事は遣れまいと攻擊せられた事がある。獨逸皇帝は素より獨逸國權の擴張主張家に相違ないが、實際は寧ろ獨逸の國論を行つて居るのである。獨逸の國論を云ふならば、獨逸皇帝の意見と符節を合する如し。盛んに獨逸國權を擴張して歐羅巴のみならず、世界に雄飛せんとするのである。目下獨逸人は英佛及び露の聯合軍と戰つて居るが、戰止んだ後に和蘭の如きは必らず獨逸聯合の一つとなると思ふ。平和條約に於て和蘭が聯邦の一になる事はないとしても斯くの如き事は戰爭後に於て生ずるものと云ふて可なりである。世界の大勢から云へば和蘭は一國の體面を維持する力を有つて居らぬ。海軍擴張に於ても超弩級艦を澤山作ることが出來ぬ。故に大勢から論ずれば和蘭は獨逸の聯邦に入るものと見てよろしい。然る時は東洋に於て和蘭の有して居る所の領土例へばジャバ、ボルネオの南部、スマトラ、セレビス、モルッカ島、チモール多島海、ニューギネーの西部などは獨逸領の中に入るのである。事此に到つては獨逸人は此等の島を根據として太平洋の覇權を爭はんと欲するのは論を俟たぬ。獨逸の人口は目下六千七百萬位ある。そして毎年九十萬以上殖える。英國の人口は四千五百萬位ある。毎年四十萬程しか殖えぬ。人口の競爭に於ては獨逸人は遙かに英國人の上である。獨逸人は實に恐るべき國民である。日本の人口は五千萬で、そして毎年七十萬殖える。日本もなか／＼盛んなる國民であるけれども、然しながら日本と雖も人口の點に於ては獨逸人に劣る。日本國

民たるものは獨逸に對して大警戒を要すると思ふ。

更に又露西亞の方面を見ると云ふと、歐洲東部に於ては露西亞人は已に獨逸人と競爭して居るのであつて、巴爾幹及び墺匈國に居る所のスラブ人と露西亞人とは相結合せんと企てゝ居るのである。巴爾幹に於ては羅馬尼はラテン人種である。土耳其領には可なりの土耳其人があるけれども、然し其數は左まで驚くに足らぬ。スラブ人種も澤山住つて居る。希臘の人民は大體に於て希臘人で、アルバニアにはアルバニア人あり、其外は巴爾幹半島の人民は多くはスラブ人である。塞國人はスラブ、黑山國人もスラブ、勃牙利人は蒙古人とスラブ人との合の子である。然し塞國人と言語相通ずる。墺洪國に於ては、一九一〇年の調査に依ると云ふと、人口二千八百萬の中九百萬が獨逸人で其外は大抵皆スラブ人に屬して居る。尙之を細別すれば五百九十萬がボヘミア人及びモラビア人で、四百萬が波蘭人、三百萬がルゼニア人、百萬がスローベンスである。洪牙利に於ては人口二千萬の中一千萬が洪牙利人、二百二十萬人がルーマニア人で、二百萬が獨逸人で其外は悉くスラブ人種に屬して居る。尙之を細別すれば百九十萬がスローバック人、百八十萬がクロアチア人、百萬がセルビア人である。夫れ斯くの如く墺洪國の住民中獨逸人種に屬して居るものが比較的少くして大抵はスラブ人である。露西亞人は夙に此等のスラブ人と相結合することを企てゝ居る。今から六十年ばかり前にボヘミアに於てスラブ人種大同盟の會合を催した事がある。今回の歐洲大戰亂には種々の原因があるけれども獨逸人種とスラブ人との爭が原因の最も主もなるものゝ一つである。世界に於ける强國は英吉利に獨逸に露西亞に北米合衆國及び我日本で、佛蘭西以下は其次に位して居るものである。而して此等の中で英人も獨人も露人も各々人種を同じうして居るものと相結合せんことを企てゝ居るものであつて、米國の如きは此競爭の渦中には未だ入つて居らぬけれども、早晩英國と益々相親善することは疑を容れない。

之を要するに今日の世界の大勢を論ずれば同人種に

して同言語なるものは互に相結合して他の國民に當ることになつて居る。斯くの如き勢を來たした原因は主として科學の進歩である。科學進歩の結果として種々の發明も出來て、殖産工業も益々盛んになり、自國の物産を諸國に賣り弘めなければ商業上の競爭に敗を取る怖れがある。又科學進歩の結果として世界の交通機關發達して、其れが爲め世界に於ける競爭が益々盛んになつた。何れの國々單獨では競爭に困難する故、それで自然相似たものが相結合するの結果を生じたのである。目下歐羅巴人は戰爭に從事して他を顧るに暇ないが大戰亂止むの後は必らず相競うて絶東及び太平洋に於て商業の競爭に從事するに違ひない。戰後諸國は皆疲弊して何も出來まいと觀測する人も無きにあらざるも、然し予の見る所では、其創痍を速かに癒さんとして却て絶東及び太平洋に商權を張らんとすべきは、昭々乎として火を睹るよりも明かであると思ふ。而して其商權を擴張する商船を保護する所の軍艦も亦何れ増加するに相違ない。世界の大勢已に斯くの如き以上は日本國民たるものは非常なる奮勵努力をするに非れば、競爭に勝を制することが困難である。幸にして日本は太平洋の一隅に位して居るから、太平洋の爭覇戰に於て勝を制するに甚だ便利である。けれども太平洋の一隅に位して居る丈け、若し怠慢して敗を取らんか、其打撃を蒙ることも亦從つて大である。夫れ故に私は日本の海軍は大いに擴張しなければならぬと思ふのである。そして其海軍の擴張を計るべき時機は即ち今日に在り。若し適當の時機に後れて海軍の擴張をせんとすれば其完成せんとする前に他國の爲めに戰爭を强いられて日本の海軍を打破せらるゝの恐がある。獨逸人が今日の如く海軍を擴張するに當つて大いに心配したのは即ち此事である。トランスバールの戰爭前に南阿のドクトル・ゼームソンが兵を起してトランスバールを打つて失敗した事がある。さうすると獨逸皇帝は大統領クルーゲルに向つて祝電を發した。英國が大いに怒つて戰爭の準備をした。そこで獨逸がへこまざるを得なかつた。獨逸人は之が爲めに大いなる侮辱を

感じて海軍擴張熱が更に一層勃興した。獨逸の大宰相たるフォン・ビューロー公の書いたものを見ると、海軍の完成前に英國からやられると實に困ると非常に心配したが、今日ではもうよろしいとある。政治家の心配すべきは全く此點であると思ふ。我日本の心配すべきも亦此點にあるので、今日は實に擴張すべきの最好時機である。日本人が重税を課せらるゝことは非常に困る。然し一度其苦痛を忍んで海軍を擴張して置けば、太平洋の海權を獲得するに當つて非常なる利益がある。其時に於て若し我利權を侵害せんとするものあらば、米國にしろ、又或は英國にしろ、之を敵に廻はすとも少しも怖るゝ所がないと思ふ。然しそれには其れ丈けの事を爲し得る準備をして置かなければならぬ。且つ又今回の戰亂の後平和會議が開かるゝが、其時に日本が强大なる艦隊を有して居れば日本の主張を通し易い。今日は眞に海軍擴張の好時機である。然るに今の當局者のなす所を見れば僅かに補充案を出して一時を糊塗するのみである。之れ甚だ憂ふべしである。

一艦隊を組成するには通常八隻の軍艦が要る。英國や獨逸の艦隊は弩級型或は超弩級型を以て艦隊を組織するけれども日本に於てはさう云ふものを以て組織することが出來ぬ。金剛艦は超弩級で攝津は弩級であるが、薩摩の如きは本當の弩級艦でなくて混合武裝の船である。斯くの如く相異つて居るものを寄せて一つの艦隊を作つては其船が揃はない。種々の、違つた、つぎつぎのものでは完全な本當の艦隊は出來ぬ。斯う云ふ缺點を速かに補つて置かなければ太平洋の競爭に從事するに當つて非常の不利を蒙る。日本の艦隊などは實際を云ふとなつてゐないものだ。然るに海軍の當局者は殆んど斯くの如き事情を無視して僅かに補充案を出して一時を糊塗するは誠に不都合の話と思ふ。陸軍に於ては上原將軍の如きは二個師團增加案を提出して頑として反對者の言に耳を傾けなかつた。斯くの如き態度が甚だ賴母しい。之でこそ眞に軍事當局者の典型と稱することが出來る。海軍に於ては先に八代將軍の如きは減税の俗論に耳を傾けて海軍の大擴張を計り得なか

つた。加藤中將が代つて海軍大臣となるや我々は大いに望を囑して居つた。然るに其爲す所を見るに、區々たる補充案を出すに止つた。之は大いに不都合である。加藤氏の如きは眞に日本の國防を托すべき人物か否か疑無き能はずである。昔時和蘭人が軍艦製造費を惜んで遂に英國の爲めに破られ、遂に領土を失ふに至つたと云ふ事實もある。日本國民たるものは此等の事情に鑑みて大いに海軍擴張を實行しなければならぬと思ふ。

日本農民性論

(我が國民性と農業との關係)

横田英夫

(一) 農民性と國民性

世界に邦をなしてゐる民族は十指を屈す、之等の國民性を一々比較研究して、各國民性の由來特色を明かにすることは、到底吾人の能くし得る所ではない。國民の性を作すは氣候風土等の自然的事情や或ひは民族の遺傳性及び種々の史的事情に原因してゐるので、其の由來を審にしやうとすれば頗る多岐多端に渉る。故に之等の詮索は暫らく措いて、唯國民性の尋究に就いて注意すべき一事がある。夫れは國民性は往々經國の政策と其の國の産業の影響とを受けて、不知不識の裡に孚育生化される傾があることである。例へば英國の國民性は其の自由政策と商工業の極盛によつて影響された。獨逸の國民性はビスマークの大陸政策と、農商工の保護的發達によつて化育されてゐる。佛蘭西の國民性は倒冠定めなかつた政治的革命と、生産國たるよりも寧ろ資本國となつた事情によつて變徵した。露西

亞の國民性は破天荒なペートル大帝の侵略政策と、未開民の生業狀態とが育てた所が多い。米國の國民性に至つては領土解放に沸熱した血と、新興商工業のツラスト的發達に負ふ所が多い。或ひは之等の事情が國民性を孚育生化したと云ふよりも、國民性の潜顯が隨時四圍の事情によつて、之等の結果を誘起したと云ふのが適當かも知れないが、兎に角經國の政策と其の國の產業狀態とが國民性と密接な關係を有することは、如上の諸國民性を味嚼して爭へない事實である。今之れを我國に就いて觀れば果して如何。

我國は云ふまでもなく古來獨立自尊の國であつて、領土侵略の野心も懷かず、大陸經營の政策も執らず、自存自榮を大道としてゐた。而して國運民命を擧げて農耕の一業に托した國である。玆に於てか、吾人は二千年の長程に養はれて來た我國民性と、二千有餘年の國運に終始して來た農業との間に、何等かの密着した關係があることに着到せざるを得ない。否、既に農業が國礎となり國本と稱せられて二千年の國命を育て丶來た以上、國民性が農業に負ふ所が多くなければならぬ筈である。而して亦兩者に密着の關係があるとすれば、國民性の特色は、即ち農業との密着關係から生れて來たものと見なければならぬ。而して若し我國に於て農業が國體と特殊な交涉を持つてゐるとすれば、今我國が眼前の經濟的事情に迫られ、輕々しく英國の顰に倣ふて農業を蹂んずる結果は、國體に煥發した優秀なる國民性の特色を滅沒する恐があるではないか。我國に於て農業が國體と特殊な交涉を有するや否やを知る必要は、即ちこ丶に其の意義を有してゐる。若し之れを究めないで歐洲の產業過程と我國の產業過程とを同一に取扱ひ、東西無差別の不見識を以て我國の農業に臨んだならば、之れ農業の使命を單に食糧供給の一途に限つた淺薄の議論で、啻に採るに足らないのみか、遂に國運を危うするの議論である。歐洲の農業觀と我國の農業觀とでは、其の意義使命に於て正しく天地の相違がある。今之れを顧みず、歐洲の農業觀を以て直ちに我國の農業觀とするならば、寧ろ我國の歷史一切を

塗抹して、歐洲歷史の一頁として讀む方が面倒臭くなくてよいではないか。

思ふに我國と農業との關係は、歐洲の學者によつて解釋された國家と農業との關係以外に、更に密接な具體的關係に結ばれてゐる。從つて我國の農村問題は此の特殊の關係を透して見て、初めて實際的の立言をなし得るのである。此の特殊の關係を透し見ないで我國の農村問題を論ずる時は、其の議論は歐洲の農村問題を換骨脫胎した無權威なものとなる。否、換骨脫胎なら未だよいが、或ひは直譯模倣の論となるではあるまいか。我國の農村問題を論ぜんと欲せば、先づ我國の農村に沒頭して立言せよ。さもなければ到底我國に於て農業絕望不可なきか、商工立國可なるかなどと云ふ問題を解決することは出來ない。吾人は先づ我國の農村論者に向つて、換骨脫胎の農村論や飜譯模倣の商工立國論を風發するの徒爲なるを告げたい。

今や我國は空前の國際的難局に會して、興廢榮辱の機を眼前に迎へて居る秋である。此の秋に當つて農業は其の前途を悲觀され、商工立國主義が高唱されてゐる。然も當面した未曾有の歐洲大戰爭は物質的、商工的、文明の瓦解を報じ、精神的、農業的、文明の必要を痛切に語つてゐるではないか。更に亦世界の潮流は東へ東へと流れ、我國は東西文明の合流地として國民性變徵の危機に瀕してゐる。然も物質に禍された歐洲頹廢の窮通は、最も雄辯に國民性の自覺を語つてゐるではないか。我國は今立國政策の取捨に迷ふよりも、寧ろ過去の立國政策に對して精明な研究を爲さねばなるまい。歐洲の物質的商工的文明に追隨する前に、先づ過去の我文明に對して權威ある批評を試みなければなるまい。換言すれば農業の保護や農村の維持を講ずる前に、先づ農業及び農村に對する歷史的研究と批評が爲されてゐなければ、切實に徹底した方法は生れて來ない。農業保護論や商工立國論は盛に口にされてゐるが、之等の議論が或ひは保守舊弊に陷り、或ひは飜譯模倣に奔るのは、即ち其の根柢となる意義が確的に把握されてゐない結果である。觀よ、當然爲さるべき

筈の農村の歴史的研究や批評が、我國の何人から國民に告げられてゐるか。吾人はこゝに敢て學者未染の研究を爲さんと欲するものではない。又能く爲し得るものでもない。然しながら之れを國民に促す第一聲として、先づ大體論として我が國民性と農村との交渉を極めて粗雜ながら說いて見たいと思ふ。

（二）世界唯一の無階級國

世界萬邦の上に冠絕せる我が國體の精華とは何ぞや、東西古今の史に比儔なき我が國民性の特色とは何ぞや、吾人は今之れを說くに當つて最も便宜な一事から明かにして行かう。

「西洋には階級があるが日本には階級がない」と云ふことは、近來我國民の自覺するに伴ひ、東西生活の一批判として頗る注意すべき問題となつて來たやうである。果して西洋に於ける意味の階級が我國にないと云ふことが事實だとすれば、我國體の精華、我國民性の特色は即ちこゝに存するもので、我國將來に橫はる凡ての問題を解決する鍵は、此の一事の詮索によつて容易く發見されるではあるまいか。即ち所謂西洋東洋の文明並びに社會生活の相違や、東洋西洋の接觸から生れる我國の將來に關する問題は、政治と云はず、敎育と云はず、生活と云はず、凡て此の一事の尋譯により刄を迎へずして解釋されるではあるまいか。而して此の一事の詮索とは、我國にも階級……西洋に於ける意味にて謂ふ……が起り得るかどうかと云ふ將來の研究ではなくて、我國には階級があつたかどうかと云ふ過去の詮索で澤山である。而して果して我國に階級がなかつたとすれば其の理由は何故であるか。將來階級が起るとすれば其の起る理由は何處にあるか。起らなかつたのは賀すべきことであるか、或ひは亦弔すべきことであるか。起るのは慶すべきことであるか、或ひは亦憂ふべきことであるか。

我國の現在は恰度未知不解の胞子が醞釀されてゐるやうなもので、やがて發芽するものが抑々如何なるもので、亦如何なる風に生長するかは自分でも判明しない。我國の危機、我が國民の苦悶は、即ち此の自分の

將來が未知不解な爲めではあるまいか。此の時に當つて東西生活の一批判として、最も注意すべき階級の有無を提問し、委曲を尋譯して其の當否を究明することは、所謂「故を溫ねて新しきを知る」所以で決して徒爾の業ではない。吾人は階級有無の問題が更に親切に更に深刻に、識者に廣議され批判されんことを望むものである。

「西洋には階級があるが日本には階級がない」と云ふ意味は、「西洋の社會は階級化し、從つて階級間に對抗競爭が行はれるが、日本の社會は階級化せず、從つて階級間に對抗競爭が行はれない」と云ふことである。そこで吾人は階級とは何ぞや、階級化とは何ぞや、階級間の對抗競爭とは何ぞやと云ふことを一言して置く。

西洋で謂ふ所の階級とは相對抗する社會區別を指し、大別して產業上の階級、政治上の階級、社會上の階級、經濟上の階級となる。政治上の階級は治者被治者の對抗から起り、社會上の階級は氏姓門閥等の上下の對抗から起り、經濟上の階級は貧富の對抗から起り、產業上の階級は農、商、工の對抗から起る。或ひは嚴密な意味から云へば、之等の階級區別そのものが直ちに對抗の導火となつたのではなくて、其の階級化したことが相對抗せしめる所以となつたのだかも知れぬ。階級化とは利害の衝突から階級的自覺をして分裂したのを云ふ。然し夫れは兎に角として階級の區別を別な言葉で云へば、社會層の縱斷が即ち主として產業上の階級となり、社會面の横斷が即ち政治上の階級と經濟上の階級と社會上の階級とになる。

既に相對抗する階級が存在してゐるとすれば、そこに必ず利害勢力の競爭が起らなければならぬ。所謂「階級闘爭」とは即ち之れである。たゞ近來慣用される「階級闘爭」と云ふ言葉は、主として貧富二階級の競爭を意味してゐるが、廣義の階級闘爭は決して經濟上にばかり行はれるのではない。著るしきと著るしからざるとの緩酷の差こそあれ、凡ての場面に於て凡ての階級に行はれる。彼の西洋に生れて西洋に死し、西洋のみ

を知つてゐたマルクスが「世界の歴史は階級闘爭の歴史なり」と結論したのは、蓋し這般の消息を喝破したものである。吾人は西洋の歴史を讀み、其の權力移動の影に展かれてある爭鬪の幕を觀て、今更のやうにマルクスの非凡と大膽とに傾倒せざるを得ない。思ふに活眼を以て西洋の歴史を讀破したものは、必ず眼光がこゝまで徹しなければならぬ筈である。眞に然り、西洋の社會は縱橫上下悉く階級化し、其の歴史は悉く階級闘爭の歴史に外ならなかつたのである。亦以て上下縱橫の社會區別があり、此の社會區別が階級化した爲めに、西洋が古往今來如何に慘憺たる爭鬪を激成して來たかゞ分明するではないか。そこで「西洋には階級があるが日本には階級がない」と云ふ結論の當否を究めるには、西洋の所謂階級闘爭史を觀た眼を以て、直ちに我國の歴史を洞觀すればよい。

吾人は今こゝで史料に徵して我國の歴史を洞觀し、所謂階級のあつたか否かを考證する餘白を有たない。之等の考證は他日に讓るが、其の結論だけは云ふことが出來る。曰く、我國には西洋で謂ふ意味の階級はなかつたと。人若し四民平等、四海同胞の理想が實現された國は何處ぞと問ふならば、吾人は言下に應じて「即ち我國が之れなり」と答へるに躊躇しない。此の點に於て我國は世界唯一の無階級、國史上無二の理想國として自讃するに足る國柄である。思ふに階級のない我國、階級化さない我國の社會、階級的自覺のない我國の人民には、愛があり理會があり調和があつた。階級のある西洋、階級化した西洋の社會、階級的自覺の銳い西洋の人民には、權利主張があり强制があり衝突があつた。假に階級區別のあつたことは西洋も我國も同じであつたとしても、我國の社會は聯立調和の關係であるが、西洋の社會は對抗競爭の關係であつたのである。再言すれば我國は古聖者の說く四民平等、四海同胞の理想を比較的完全に實現した國であると稱へても決して溢美の言ではない。

君臣の別は峻嚴にして紊すべからずとされてゐた我國では、政治上のことは云ふまでもないが、社會上及

び經濟上から見て何處に西洋で謂ふ意味の階級があつたか。我國には故なく弱者の懷を掠奪する資本家階級もなければ、之れに反抗して憐れにも生存權を主張する勞働者の階級もなかつた。人情關係に結ばれて犧牲に甘んじた奴僕はあつたが、權力關係に縛られて屈從を强ひられた奴隷階級はなかつた。我國民は「君の爲め國の爲め」と云ふ以外には、決して故なく他人の爲めに働かせられたことはない。其の他人の爲めに働いたのは、衷心の利他心が發露した結果であつて、心にもない犧牲を他から强ひられたのではない。我國には從者、屈者と云ふものはなくて、國民を擧げて皆經濟的、社會的に獨立した生活の主人公だつたのである。故に西洋に於ける貴族とか地主とか云ふやうな、絕大な社會的地位と經濟的勢力とを併せ私してゐた資本家階級もなければ、上在階級の爲めに壓倒され、强者を呪詛して滅び行く弱者階級もなかつた。農本位時代に於ける唯一の資本とも云ふべき土地の所有に就いても、我國では所謂「普天の下率土の濱王土にあらざるはなし」と云ふ公有的觀念が根柢をなして、如何なる權力者と雖も徹底的に土地を私有して仕舞ふことは許されてゐなかつた。我國に於て上下自他を結んだ人情關係は實にこゝから生れて出たのではあるまいか。我國の社會が自他相爭はず、上下相親しむやうに築かれ、生活の實際が亦自他相爭はず、上下相親しむ人情關係に濕潤してゐたと云ふことは、殆んど西洋に見ることが出來ない著しい我國の特色だと云つてもよい。あゝ人情とは何等の好語ぞ。我國民の對他的心理、我國の社會關係は正しく此の人情美の發露されたものではなかつたか。

階級鬪爭の禍害の恐るべく亦忌むべきことは、西洋の歷史を讀んだ心ある人をして、人類の爲めに戰慄と長大息とを禁ぜざらしめる位である。殊に近世に至つて激しくなつて來た經濟上の階級鬪爭に至つては、犧牲者が多數者階級であるだけ夫れだけ、世界の將來を蔽ふ暗黑問題として識者に恐れられてゐる。若し此の世に階級鬪爭の跡を絕つならば、世界は如何に幸福と

平和とに充たさるべきかとは、獨り矯激なマルクスの想像ばかりではない。西洋の歴史の暗黑な大部分の頁は、全く此の階級鬪爭の悲慘な血によつて染められてゐるのではないか。

玆に於てか、吾人は我國に斯くの如き階級のなかつたこと、從つて我國の歴史が慘酷なる階級鬪爭の血によつて汚されなかつたことを一種の誇とし、此の階級化さない我國に生れた幸福を感ぜずにはゐられない。西洋に囚はれた急進的思想家は、階級的自覺のない我國民は憐な人民だと評してゐるが、階級的自覺をなすべき時に自覺しない人民は不幸かも知れないが、階級的自覺と云ふ苦味を經驗する必要のない人民は、寧ろ幸福平和の人民ではあるまいか。吾人は到底望み難いこととしても、能ふべくんば我國をして永久に調和化した國とし、亦我國民をして永く階級的自覺の必要なき國民の境遇に置きたいと希ふ。然し將來も永く我國には西洋で謂ふ意味の階級が起らないかどうか、と云ふことは頗る疑問であつて、之れは我國に何故階級がなかつたか、我國の社會が何故階級化しなかつたか、我國民は何故階級的意識を有たなかつたか、と云ふ理由を知つた上でなければ、豫斷することは到底不可能である。我國に階級區別がありながら渾然として調和化してゐた理由が、將來も依然として儼存するものとすれば、我國は依然として西洋で謂ふ意味の階級は起るまい。亦此の調和化の理由が將來消滅するとすれば、我國は滔々として西洋の跡を追ふであらう。其の何れにしても調和化の理由を解明することは、現在の我國に取つて極めて必要なことである。

我國に西洋で謂ふ意味の階級がなかつたのは何故であるか。我國の社會關係が聯立であつて對抗でなく、調和であつて衝突でなく、人情關係に濕潤してゐて權利義務の規定でなかつたのは抑々何故であるか。既に我國に所謂階級がないと觀る以上は、吾人は當然此の理由を究めなければならない。

(三)　島嶼的地理と天孫民族の調和性

吾人の觀る所によれば、我國に西洋で謂ふ意味の階級がなかつた理由

は、一は我國の地理的事情に原因し、一は天孫民族の特性と、此の特性に相應しい國民の生活事情に原因してゐる。

先づ第一に地理的事情を觀るに我國は東海の邊陲に孤在して餘り大陸と交渉する機會なく、全く世界諸民族の起仆興亡と列を離れて、殆んど一民族の爲かと見紛ふばかりに、純一無雜の民族のまゝで發展して來た。既に他より侵し入る敵なく我より冒し出づる地なくして、孤在獨立した國であつたから、我國は何等の不安猜疑のない至極安穩の國であつた。また既に純一無雜の民族の感があるから、我國民は些しも悲痛冷酷の情を經驗しない至極平安の民であつた。國は自ら足りて安んずる國、民は自ら足りて安んずる民であつたから、西洋のやうに國運を勝敗に賭し、民命を競爭に枯らす必要はなかつた。即ち妥協あり交綏あり、而して妥協交綏を好む心理は既に階級的意識の生れる素質ではない。地理的事情が我國の社會を階級化しなかつた一原因となつたと云ふことは之れで首肯される。

第二の原因となれる天孫民族の特性とは如何なるものか。吾人は我國を創建した民族が蒙古から來たものであるか、或ひは亦南洋から渡つたものであるか。其の邊のことは能く知らないけれど、神代史に現はれた天孫降臨前後の事蹟と、一意愛民德治の政道に執したのを觀て、天孫民族は或る一所の土地に愛着し、且つ自然人事に對して極めて調和的感情に富んだ民族であつたと云ふことを想像するに難くない。天孫降臨と云ふ神話に徴して見れば、我國を創建した民族は何れの地よりか此の國土に渡來し、國土在來の民族を征服懷柔したものには相違なからうが、此の移從征服は彼の他民族のやうに原人的本能に衝動された征服の爲めの征服、遊牧の爲めの移從とは其の選を異にして、安心から四季自然の調和した天惠の豐な土地を戀ひ慕ひ、切に一所不移の國土を求めんと欲して渡來したものと思はれる。そこで一度理想國土として戀ひ慕つた國が、此の「大八洲國」であることを發見してからは、茲に思遂げ望成つたもののやうに熱心に經營に着手し、無窮發展の策を樹てたのではあるまいか。之等の推斷は決して吾人の架空の臆測でなく、其の消息が天孫降臨の際に於ける神々の言行に炳乎として現はれてゐる。

自然人事に調和同化する特性を有してゐた天孫民族は、一所の土地に愛着しやうとする念願が叶ふて日本と云ふ國土を發見し、此處に永住不移の計をして特有の愛民德治的政道を垂れて無窮の國運を開いた。土地を戀ひ慕ふ民と天惠の豐な良土、怡樂調和の性と四季自然の國、斯くの如く念願と機緣とが遇會し、民の性と地の情とが合致した國が他にあらうか。加ふるにそこは東海孤立の日出づる國である。我國は之等の事情から觀ても、平寧の氣に充ち怡樂の色に漂ふた「自然の樂園」的國家として發達すべき瑞運を有つてゐたのである。

また看過してならぬ一事がある。夫れは我國は國家として建てられたと云ふよりは寧ろ一家として建てられたと云ふのが適評に感ずることである。故に上古に於ける我國の政道は、治國の策にあらずして寧ろ齊家の計に存してゐたと云ふのが適切で、從つて國民は被治者として遇され

たと云ふよりは寧ろ家族として待たれてゐた。此の一事は祖先崇拜の念と相俟つて國民の心理に非常な感化影響を與へ、君王に對する心は被治者が治者に對する强弱の差別觀念でなくて、家族が家長に對する尊卑の差別觀念となつてゐる。加之ならず、如是の觀念に加へて我國民は事實上純一無雜な民族の觀がある。換言すれば我國民は假令其の數が千萬に上るも、悉く之れ一家族の分裂と云ふ感に繋がれてゐた。既に純一無雜な民族であり、一家族の分裂であるとすれば、全國民には一樣に建國創業に與つた祖先の血が遺傳してゐるものと信ぜられ、祖先鴻業の追憶から生れる血族的意識は、國民に「我は神族なり」と云ふ一種の誇を懷かしめ、之れが强烈なる刺戟となつて常に國民の團結心を喚起してゐたに相違ない。而して全國民に一樣に血族的意識が流れてゐたとすれば、之れが擴充されて同胞的意識となり、自他之れ兄弟の感を懷かせるのは蓋し當然である。

國に住するものは悉く之れ創業の際事を共にしたる神族の分裂なり、自他の觀を質せば皆之れ兄弟なりと感ずれば、日本の國土は即ち之れ我國土、王土に住む民は即ち之れ我兄弟であつて、國民の心には他人と云ふものなく亦他人の有と云ふものもない。他人の有は即ち我有、我有は即ち他人の有。斯くなれば最早冷酷な而して打算的な對他的關係の經驗と云ふものがない。從つて骨肉相食むよりは寧ろ和衷協同を尊び、同胞相爭ふよりは寧ろ交綏讓步を重んずるのは自然の情である。我國民の心は即ち之れで、生活の爲めに兄弟勝敗を決し、利害の爲めに同胞角逐するは、之れ蠻夷の外道なりとして卑しめられてゐた。再び云ふ、妥協し和衷し交綏し讓歩する心理は既に階級的意識の生れる素質ではない。

(四) 國民皆農生活と兵農一致

然しながら我國が地理的に孤立獨立して榮え、天孫民族が調和同化の素質を有つてゐたばかりで、我國に所謂階級がなかつたと觀るのは未だ淺見である。渾圓球上いづれの民か生れながらにして孤立の性、打算の心、酷薄の情を有するものあらんやである。所謂習は性をなす、素質は後天的境遇によつて如何やうにも變質するものである。我國民に調和化の素質があつたと云ふもの丶、二千有餘年の歳時を辿る内には、政治の降替變遷もあれば生活の難易變遷もなくてはならぬ筈である。然も之等の幾多の變遷を經過して、此の素質が苦楚辛難に磨過されながら、猶藹然として自他相睦み、政治的權力又は經濟的勢力の競爭から當然生るべき階級的意識を經驗しなかつたのは何故であるか。之れが最後に殘された大なる疑問である。吾人は一議もなく之れに答へて、之れ我國民の特性に相應しい生活

事情に因ると斷言したい。然らば我國民の特性に相應しい生活事情とは何ぞや。曰く、國民皆農生活即ち之れ。請ふ吾人をして暫らく國民皆農に就いて語らしめよ。

開國の歷史に遡つて見ると、我國の基礎は農を基礎として建てられ、我國民の生活は農耕の業によつて樹立されてゐる。此の間の消息は彼の天照大神が天孫を我國に降し給ふ時に、我國を指して「豐葦原瑞穗國」と仰せられたに徵しても明かである。豐葦原とは肥草豐生の狀を指し、瑞穗とは稜登潤饒の義で、即ち禾穀穰々として實る豐饒の國土にして初めて冠せらるべき名詞である。例を云へば春秋自ら季をなして亦温涼其の中を得、綠染む麥隴、黃金垂る稻田に彩れる我國の如きが夫れなのだ。思ふに天照大神が我國を指して斯く仰せられた所以のものは、我國が農業國として最も天惠の豐な國、從つて我國は將來農業の發達によつて繁榮すべき國であることを聰明に看取し給ひ、國名に藉りて不言不說の裡に其の旨を天孫に告げられたものであるが、更に一面から斯くの如き國名の起つた所以を稽へれば、我國は國土が空しく草深にとざされてゐた太古から、既に農業國として極めて有望な將來が啓示され、亦農業國として最も多幸な前途が祝禱されてゐたものと見てよい。而して之等の事實に基いて觀察すると、農本の國是は夙に天孫降臨の時に策立せられ、此の國是は即ち「豐葦原瑞穗國」に實行されて國民皆農の生活となり、玆に動なき我國の礎道が固められたのである。

建國立農の歷史が斯くの如くであるから、云ふまでもなく上古歷代の皇室は、農業立國の大策に基づいて國土を經營し民を治め給ふたので、我國は名實共に國民皆農の國として發展して來たのである。試に一闢を排して我國民生活史を觀よ、我國は農業立國と云ふよりは、一層切實に國民皆農と云ふ方が妥當ではないか。たゞ中道に至つて藤橘二氏が著はれて月卿雲客となり、源平二姓が起つて武門武士となるや、此の一族の子孫郎黨が朝野に蟠つて權位を世襲した爲めに、こゝに初めて農民の名を冠しない極少數者が現はれて來たやうであるが、實は決して然らず、九重の上まで農桑の業を脩はせ給ひ、皇族大臣一人として決して農民生活に沒交涉ではなかつた。尤も極少數者は賜姓皇族の後裔として、普通の民と其の出所行徑を異にしてゐたが、他の多くは野に下つて農耕の民となり、武技の如きは多く餘務とされてゐた。

國民皆農は即ち國民皆兵となるのである。我國は神代尙武の氣風を延いて人皇の世となるに及んでも、其の初は政體簡易、文武一途、海內を擧げて皆兵となつてゐた。後に源平二族が自から武門武士と名乘りながらも猶農民生活を離れず、兵即農となり農即兵となつて、我も甘んじ他も之れを賤しめなかつた所以のものは、實に建國の鴻緒に垂示された兵農一者の大制に遵ひ、能く其の精神を繼承してゐたからではないか。言を換へて云へば、國民皆農なるが故に皆兵、兩者はもと一であるから農にして兵となるも當然なるが如く、兵にして農となるも亦何の憚る所あ

らんやと云ふ思想が頭に浸みてゐたからではないか。而して此の農兵一者の制度が國民皆農の國に必然起るべき制度であることは、蓋し何人にも容易に首肯されることであらう。

東西孰れの國を觀ても未だ法制式道の備はらなかつた時代に於ては、最も權力あり亦最も尊敬されたものは兵である。然るに我國では此の權力あり尊敬さるべき兵は農から出たので、兵務が能めばまた平然として農に歸つてゐた。此の兵農一者の制度は我國民生活の特色……或ひは我國社會組織の特色……を保つ上に、非常に深い關係を持つてゐたと同時に、反面に於ては我國が國民皆農の國であり、從つて尊農の國であつたことを裏書してゐる。思ふに生存競爭の單純な時代にあつては、尊農の國は即ち國民皆農の國となり、國民皆農の國は即ち尊農の國となる。尊農の我國が國民皆農の國となり、茲に兵農一者の制度が起つたのは當然のことであつて、後年武士と云ふ階級が現はれたにもせよ、此の階級が決して卑農者、脱農者階級でなかつたことは何人にも肯認される。

史を論ずる一部の人に云はせると、此の源平の崛起は兵農を全く分ち、武士と云ふ卑農者、脱農者階級を上在せしめた封建制度の端を開いたものである。從つて兵農一者の制度は此の頃から既に破壊されて來たのだと云ふが、之れは未だ看て髄に到らない見ではあるまいか。成程當時源平を中心として殆んど絶えなかつた武門の私闘が、源なり平なりをして所謂家人と稱する常時附隨の兵を養はせた爲めに、自から兵農二者を分離せしめ、階級制度の封建時代を招徠したに相違ない。然しながら之れは今云ふ通り武門の私闘が絶えなかつた爲めに、一部の民に農たるよりも兵たることを要請したから、農出でて隨時の兵とならざるを得なかつただけで、決して此の二者が截然として分れ、農は農、兵は兵の生活に即して仕舞つたのではなかつた。形式に於ては兵農分離の傾向を現はして來たが、精神に於ては決して兵農分離を來してゐない。彼の源頼朝が家人を守護地頭に任じた時にも、所謂農食六分、兵食四分の制を採つたと云ふが、然も其の兵は矢張り土着であり、亦必ず土着せしめたと云ふではないか。之等の事實を考へて見れば、封建時代は兵農が分離した時代であると云ふものゝ、古來から繼いだ兵農一者の制度が一種の變制を來したと云ふだけで、之れを目して直ちに兵農一者の精神が滅没したと云ふことは出來ない。

之れが證據には武士と雖も平時は田園に歸服して、悠々農民としての生活に自適してゐたではないか。故に兵農分離と云ふことは、治亂に應じて或ひは兵たり、或ひは農たりの進退を餘儀なくされた結果で、却つて兵農が一者であつた左券である。國内の治亂と制度の弛張とに伴ふて、召募來應の方法こそ革まりたれ、所謂出づれば兵、歸れば農と云ふ趣意は依然として繼がれてゐたのだ。之れによつて觀れば、藤橘が出世し源平が崛起したけれども、兵農一者は不易の大制として取扱はれ、國民は依然として皆農であつたと云つてよい。故に政治の要義は能く農制を保維完成し、能く農民を撫育役御するに存してゐたではないか。

其の後諸豪競ひ起るに及んで國内の亂るゝこと久しきに亘り、農から

徴召された兵は戎衣を解くの暇なく、遂に勞ひ專兵たらざるを得なくなつて來た。而して此の專兵となつた農兵は、封建時代に移り替つてからも歸農せず、其のまゝ武士と云ふ特殊の階級を形造るに至つたのである。然し武士とても給するには米地の石祿を以てされてゐたので、全然其の出生たる農を疎んじ、其の生活が土を離れて仕舞つたのではない。畢竟するに武士と云ふのは一種の終身召集、若しくは永世召集に外ならなかつたのである。頻發繼續する攻伐防禦に從ふ上から、成るべく訓練ある兵を得る必要ある爲めに、已むを得ず少數者を拔いて永久兵、世襲兵として常備したまでゞ、建國以來の大制たる兵農一者の精神は毫毛も沒却されたかつた。たゞ斯くの如き武力競爭の餘習と、此の間に養はれた我國民の好戰尙武の氣象とは、此の武士に特別な尊敬を拂ひ絕大な權力を與へた爲めに、玆に初めて士民の別を見るに至つたが、多數の國民即ち庶民と總稱された一般民の中では、士に次で尊きものは百姓なりとせられ、農は本業にして商工は末業なり、と云ふ尊農的思想と農本的觀念とは毛毫も渝らなかつた。從つて封建政府が覇者政治を行ふにさへ、此の農本主義から來た重農政策を執つてゐた。封建の諸侯が如何に農民を重愛し、如何に農政に苦心したかは農政の史料を涉獵して吾人の思半に過ぎるものがある。彼の德川幕府が諸侯に示達した令條の中に、「百姓を難儀せしむる時は領地改易のこと」と云ふ意味の一箇條が特筆されてゐたのに徵しても明かである。

之れを要するに國民皆農と云ふことは、土地に愛着する天孫民族の特性と、農業國として最も天惠の豐な我國土とが契成して農本思想を植え、此の農本思想が國家草創の緒に就くと共に國民の生活に顯現した結果で爾來世代幾變遷を經るも不易だつたと云つてよい。

（五）尊農性と四民歸農

我國が國民皆農である以上、當然の結果として國土即農村とならなければならぬ筈である。然り、國民皆農であつた。我國は、同時に國土即農村の國であつた。後年文化の開發に伴ふて都市が興り、交通の發達と共に分業が行はれて來たけれど、商工業は所謂末業餘業なりとして賤しめられ、國民皆農、國土即農村の趣態は容易に革まらなかつたのである。例へば吾人は絡繹たる都市の中央に猶一頃の圃を有する農民を見、白砂青松の漁濱にすら鍬を手にする民あるを見る。我國に於ける國民皆農、國土即農村の趣態と、此の皆農思想の根ざす所が如何に深いかは、斯くの如く生活は必ず土に即くものと云ふ慣習となつたのを見ても、其の一斑を窺ひ知ることが出來るではないか。

國民皆農はまた農民即自主的農民となる。我國では

近世に至るまで土地國有制であつたから、法律的に農民の土地私有權と云ふものは認められなかつたが、土地公有の精神から詮考して見ると、耕作權が即ち所有權として認められてゐたのである。夫れ欲するまゝに土地を耕し、望むまゝに土地を與へられた農民は、云ふまでもなく自主的農民である。自ら土地の所有者……國有制時代に管理者と云ふ意味に於て……であつて又自ら土地の耕作者である。然も耕作し切れないほどの土地は之れを所有するも詮なく、所有に委せられた丈けの土地は決して荒蕪させない、之れが自主的農民の面目であり、亦自作農民の本來の長所ではあるまいか。文化未だ開けず、人口稀薄な時代にあつては、地餘ありて人少しと云ふ狀態であつたのは云ふまでもないから、農民は欲するまゝに土地を耕し、望むまゝに土地を與へられた譯である。現に我國で最初に制定された斑田收授の法の精神は之れであつた。而して土地分割の目安は彼の口分田の斑給の如く、眞に「經營耕作し能ふ」と云ふ農民の勞力を限度として分配されたのである。茲に於てか、國民皆農は農民即自主的農民になり、農民即自主的農民は耕作權即所有權となつて、農村即自作農と云ふ結果を齎らす。

既に王土によつて生活の安固を保障され、優に經濟的獨立を保ち得たとすれば、國を擧げて平和の農村となり、民を擧げて一如の農民となり、別に他を羨む情も妬む心も起らず、靄然として自他相和することが出來る。靄然として自他相和す、また何處に階級と云ふ鬪壁を設け、慶弔相頒つべき同胞間に醜く慘ましき鬪を演ずる必要があるか。顧みれば我國民の祖先は自然人事と調和した生活によつて、「自然の樂園」的國家を建設した民族である。此の血を承けた我國民の人生觀、社會觀、國家觀は恐く歸一平等と云ふ所から芽を出してゐる。然るにそこへ一如の生活境遇を經て來てゐる。即ちそこに調和あり、安心あり、知足あり、觀念あり、妥協あり、隣保あり、即ち現はれて血族的意識となり、調和化となる。我國民の生活史は實に二千年の歲時を貫いて、平面に畫かれた「國家圖」の觀があるではな

いか。

吾人は我國民を指して生活に餘裕があつた國民、從つて生活を主張することを知らなかつた國民と云ふ。また我國を呼んで美しい人情の國、從つて人情を撤してまでも生活を主張する必要のなかつた國と云ふ。而して我國が斯くの如かりし所以のものは、實に國民皆農なりしが故に國土即農村、國土即農村なりしが故に農民即自主的農民、農民即自主的農民なりしが故に即農村自作農であつたからではないか。吾人は繰返して云ふ、國民皆農は國土即農村となり、國土即農村は農民即自主的農民となり、農民即自主的農民は農村即自作農となり、農村即自作農は即ち國土即自作農、而して國土即自作農は貧富の平均即社會の調和となる。建國の源から流れ出た國民皆農の思想と生活とは、再流し三流し逆流して美しき人情の國となり、生活に餘裕ある國民となり、調和化した社會となつたのである。吾人は蔣平として國を敵ひ國を保つて來た我國の農村を以て、一所の土地に愛着して自然人事と調和した天孫民族の國民皆農生活が、最も完全な結實作用を遂げたものであると觀ず。

云ふまでもなく階級鬪爭は社會の階級化から起り、社會の階級化は人民の階級的自覺から起り、人民の階級的意識は生活に虐げられた酷薄な心から打算して自己の生活を衞る爲めか、然らずんば生活によつて評價された人格價値の差別觀から生れるものである。他人の爲めに自己の生活が脅かされ、共に苦楚辛酸を嘗めて生活の恐怖を感じたものでなければ、自己を衞る爲めに露骨な生活の主張を爲し得ない。また斯うした酷薄殘忍な心持にならなければ、人格價値に差別を附けるやうな沒義道な考は起り得ない。何れにしても階級的自覺は我から他を虐げるか、他から我を虐げるかでなければ生れて來る筈がないのである。王土の德澤を享けて生活に餘裕があつた我國民は、抑々何人に生活を脅威されたか、また脅威されると感じたか。我國民の胸には感謝好愛の情こそ溢れゐたれ、酷薄打算の心などは毛頭なかつたのである。之がなかつたから我國民は生活の苦味を知らず、從つて權利の主張によつてまで自己の生活を衞る必要はなかつた。然らば此の民に階級的意義の經驗さるべき筈はない。

更にまた貴族は貴族、奴隷は奴隷と云ふ人格價値の差別が階級的意識を胎生する。然るに我國では出所は同じやうに貴族は貴族、平民は平民であつたけれど、決して西洋のやうに奴隷が貴族の方便とはならなかつ

た。貴族には貴族の天分あり、平民には平民の天分あり、卑しと雖も方便物にあらず、各々獨自の境致に住してゐた。何故差別を附けてゐなかつたかと云ふに、我國民の頭には既に同祖一血族と云ふ意識があり、亦現前の生活としても同じく農業を尊重し、農耕に衣食して土地に愛着してゐたから、歸農と云ふことによつて生活も境遇も人格も平等化されてゐたのである。貴族と雖も農を離れず、平民と雖も農より下らず、其の士に執し農に即する時に等しく一箇の平等農であつた。換言すれば貴族にまれ、武士にまれ、平民にまれ、歸すれば唯之れ一如の農民に過ぎない。農を尊重し國民皆農であつた我國では、農に歸すれば貴人匹夫も平等な赤子同胞であつた。彼も最も尊ぶべき農民、我も亦最も尊ぶべき百姓であるとすれば、人格價値と生活境遇の差別から分れる上下の階級は、農民の名によつて拭ふが如くに融化されて仕舞ふではないか。

西洋の島帝國たる英吉利が、階級闘爭の爲めに國民全體の利害を如何に多くの犠牲に供したかを思へば、吾人は我國に西洋で謂ふ意味の階級なく、我國の社會が階級化せず、之等の階級間に階級闘爭が起らなかつた幸福を喜ぶの情に堪へない。而して此の階級闘爭の起らなかつた有力の理由が、國民皆農を母胎として生れた農村の繁榮に存してゐるのだと思へば、吾人は我國體と農村との關係が、決して單純な抽象的關係ばかりでなかつたことを認めざるを得ない。玆に於てか、我國に於ける國家と農業との關係と、西洋に於ける國家と農業との關係とは、其の間に著るしい輕重の相違がなくてはならぬ。西洋人に云はせると農業の功能は、食糧の供給と兵力の長養と國民元氣の作興との物質的方面に過ぎないかも知れないが、我國民から觀れば農業は精神的にも物質的にも殆んど我國の全部である。農民を外にして我國の何處に國民があつたか。農村を外にして我國の何處に國土があつたか。農業を措いて我國の何處に國民の生活が營まれたか。吾人の説き來つた所を以て、單に我國に所謂階級がなかつたのは農業の賜物だ、と云ふ階級論の解釋のみと雲煙過視する勿れ。我國が階級化せず、我國民に階級的意識がなかつたと云ふことは、僅に日本と西洋との社會組織の相違に過ぎないが、此の階級がなかつたと云ふ事實の原因と結果とは、我國體の精華と我國民性の特色とを總稱したものとして、西洋に對して大に誇るに足る

ではないか。

文明は農業を捨てる傾向がある、然しながら農業を捨てた文明は夫れが如何に絢爛を極めても遂に病的たるを免れない。農業の衰へた國家は假令如何に商工業が盛榮に趣いても常に一種の不安を感じてゐる。況んや偉大なる物質的文明の集積なく、商工業も亦餘りに發達してゐない我國に於て、今農業を輕視したならば果してどうなるか。また況んや國民の全部が農民であり、國土の全部が農村であり、國家の全部が農業の保持する所であつた我國が、我國に根柢のない西洋文明の模倣と、未知數な商工業の將來などに安心して、農業重んずるに足らずとしたならば、國家の前途は果してどうなるか。吾人は必ずしも今まで我國の凡てが農業によつて保たれて來たから、今後も亦我國の凡てを農業によつて保たせなければならぬと云ふものではない。國運に限なくして農業に限ある以上、國民皆農と云ふことは最早望み得べからず、亦決して望ましいことでないのは能く知つてゐる。然しながら今我國の農村に問題が起り、已むを得ず農本位の舊態を脱却して經濟政策を一變せしめやうとするには、先づ當然の用意として我國體及び國民性と農業との關係に顧み、我の農村は果して如何なりしか、我國の發展に對する農業の功過は果して如何なりしか、と云ふことだけは充分に辨へて置かなければならぬ。若し之れを無視して徒らに眼前の新裝に眩目したならば、我國は新裝せんが爲めに祖先から受けた大切の髮膚を傷つけ却つて帝國の根柢が土崩瓦解する憂がある。

我國の地位勢力が一進するのは誠に結構なことではあるが、舊態の破壞される時には往々にして舊特色も亦喪失され、將來に於て得難い貴重な過去の努力を失ふことがあるのを忘れてはならない。例へば我國に今までに西洋で謂ふ意味の階級がなかつたけれど、今後も決して起らないと觀るのは誤つてゐるではあるまいか。何となれば我國に所謂階級がなかつたのは、我國に今までの農村、今までの農民が健在してゐたからである。若し將來此の今までの農村、今までの農民が失

はれたならば、夫れと同時に我國にも所謂階級が起り、階級闘爭が現じて來るのは當然の結果と觀なければならぬ。何となれば我國から今までの農村、今までの農民を失はせる潜漸の力は、即ち民心に階級的意識を植ゑ、社會を階級化する力だからである。而して此の恐るべき力の漸到を抑へ得るものは、實に今正に崩れ行く農村、滅び行く農民の健在によつて保たれてゐた政治、生活を通ぜる我國の特色であるではないか。

（六）國民皆農の破却と階級化

吾人は以上の事實に基づいて、今後の我國には西洋と同じやうに所謂階級が起つて來ると信ずる。吾人が前來說いて來たやうな我が國體及び國民性と農村との特殊な關係が破れた時と所に必ず激烈なる階級闘爭が演じられて來るに相違ない。而して其の時とは云ふまでもなく、國民皆農の遺風が破却され、農民即自主的農民の境遇が沒滅し、最多數農民の生活が脅威される時である。此の時最多數の農民の人格は少數な資本家の爲めに方便物として取扱はれるであらう。而してまた其の所とは、即ち少數の資本家的地主が跋扈して安分、平等、平和が破壞され、猛獸の如き資本主義が三百萬戸の農業勞働者を驅使する農村である。之れは西洋の生活史を檢して、階級發生の原因を知つた人の必ず首肯する所であらう。我國では即ち今日、現に一日は一日より、一年は一年より、我國民の階級的意識が萌されて行くではないか。今は昨より、明は今より、漸次我國の社會は階級化して行くではないか。西洋の野で吹く階級的自覺の笛の音に、我國民が踊らないと思ふのは大間違である。舊態の破壞される時には往々にして復と得難い舊特色が喪失すると云ふのは即ち此の謂で、舊態は破壞されるに任ず、唯舊特色だけは惜いから保たせやうと夢みてゐるものがあつたならば、夫れこそ痴人の夢と云ふべきではあるまいか。階級の論は此の位で措くが、兎に角我國の農村を回顧して見るに、我國は國民皆農の國であつて國土は即ち農村、農民は即ち自主的農民、而して農村は即ち自作農によつて維持されてゐたと云ふことは、吾人の特記しなけ

ればならぬ結論である。

偶々「我國にも昔から小作人と云ふ百姓があつたではないか」と反問して、吾人の結論を肯定しない論者がある。然り、我國にも小作人と云ふ下流農民が昔からなかつた譯ではないが、之れが爲めに決して如上の結論を飜へす必要はない。吾人は我國の農村を「農村即自作農」と觀じたからと云つて、萬戸の農家が萬戸悉く自作農であつて、其の間に一人の小作農なしと斷ずるものではない。

我國には既に土地國有の上世から貴族の私有地があり、中葉からは莊園と名ける私領地も出來て、資本家的の地主も多少現はれて來たのは事實である。殊に戰國時代の季世に至つては國內麻の如くに亂れ、農業の秩序も平和も全然破れて仕舞つたことがあつたから、此の時に私慾を逞しうする强者の掠奪や、歸農して望を武功に絕つた鄉士と云ふ輩などの爲めに、所有權不明の土地の併合などが行はれて、國有制の弛廢すると共に著るしく土地の分配が不平均になつて來た。加之ならず、德川時代に及んでからは諸侯の勸農政策として、河川の埋立や未耕地の組織的開墾などが保護の下に實行された結果、おのづから大地主が生じて來たやうな事情もある。然しながら均分せんが爲めに土地國有制を採つた我國では、後年土地の私有が許されてからも、農民の生活保障と云ふことは最も重要なことゝ目せられ土地の管理權又は耕作權は、殆んど所有權と同じ程度に重んぜられてゐた。之れは農民の經濟的獨立を保障する爲めに外ならない。故に假に少數な小作農家が存在してゐたとしても、夫れは西洋に見るやうな經濟的從者でなくて、立派な自主者として獨立した農民だつたのである。たゞ德川時代の末に農村人口の增加するに伴つて耕地の狹少を感じた藩があり、之等の藩には多少經濟的從者となつた小作農民も現はれて來たやうであるが、之れは眞に九牛の一毛に過ぎなかつたのである。既に我國の農村は昔から耕作權即所有權を得、經濟的に自主獨立した農民によつて九分も十分も占められてゐる。然らば世襲的の大地主が三四存

在し、又隷屬的小作人が五六農村にゐたとしても、「農村の最多數者は自主自作の農民なり」と云ふ結論は下し得るであらう。

吾人をして最後に重ねて云はしめよ。國民皆農を母胎として生れた我國の農村は、自主獨立、何者にも脅威されなかつた農民を育てゝ、繁榮の裡を平安に歩んで來たのである。吾人は我國の農村を呼んで「自主獨立したる農民の樂しき住所」と稱へるの極めて適切なるを覺える。夫れ自主獨立したる農民には、眼中不安なく羨望なく亦嫉妬なし。樂しき住所には生活苦なく階級化なく世に荒ぶる風波が襲はない。肇國以來太平の夢を結ぶこと二千年、我國の農村には生活問題は起らなかつたのである。

然れども記せよ、我國の農村が斯く二千年の太平を保ち得たのは、決して無代價で得られたのではなくて夫れ相應に農政の苦心が拂はれてゐたからである。此の先人の農政の苦心を知らずして我國は何によつて今後の農村を取扱はんとするか、請ふ農村論者よ、眼前頭後の農村問題を論ずる前に、先づ首を回らして故きを溫ね、而して後新らしきを知つて之れに應ぜよ。

京都近代學術史論（下）

文學博士 新村出

五

堀川系統の儒者が江戸における勢力の微々たるに反して京都における徂徠派の消長は注目すべきものがある。京都は服部南郭を物門の高足に有する光榮を擔ふ。南郭は元歌人であり國書に通じたものであつて、元祿中十四歲を以て東遊し歌と書とで仕へたのであ

る。生地出所が既にさうであるから思想の傾向は春臺とは正反對で師徂徠とも大に違ひ、餘程日本的愛國的である。江戸では眞淵等と話が合ひ、縣門の高弟村田春海の如きは、南郭の子仲英、南郭の門鵜殿士寧に詩文を學んだといふ程である。然し南郭は京を出でて五十年目の延享に一寸歸京したこともある丈で帝都の物氏學には直接の關係がない。東涯門の原田東岳が後年西國から江戸に下つて南郭及其一派に就いたことがある位なものである。

京の徂徠派は長州の山縣周南門下の俊才林東溟が東涯の歿する元文元年に大阪より入洛した頃から起る。東涯の門に物門の東海・麟嶼が遊び、後年東涯門下の東岳・琴所が物門の徒に就いた様な相互の出入はあるけれども、古文辭が京に感化を及ぼす様になつたのは恐くこの頃から始まる。尤も之より先き宇野士朗が享保の中期に東遊して晩年の徂徠に就き、其兄士新の如きも徂徠派の感化を受け古文辭に手を染めた様なことがあつたけれども、兄弟共に物氏に背いてしまひ、其爲江戸の同派から京洛の學風は輕浮であると誹謗せしめた。林東溟も亦その行爲については非難さるべき事もあつたので旁〻京都の物派は評判が好くない。一體徂徠派は關東に起り關西では學問の根底の堅い上國を飛んで西國の方で盛であつた様であるが、京阪地方では同派中にも異論家や背反者が多く、又駁撃者も自他の中に少くなかつた。京でも例へば龍公美にしろ宇野兄弟にしろ一は異論者である一は背反者である。關東の物學を其儘に受入れることは京の學界ではなし得なかつた。彼等自身は其上互に排擠して相容れなかつた様に異を立てあつたのである。岡白駒にせよ那波魯堂にせよ清田儋叟にせよ西山拙齋にせよ初は物氏に傾き後には物氏を出でたものであつた。殊に那波清田（伊藤）二氏の如きは活所・坦庵以來の家學の因襲的勢力も强かつたわけである。服部天遊の物氏駁撃に餘力を餘さなかつたのは痛快ともいふべく、京の宇野・阪の五井と並び稱して上國における反物論者の巨擘といはれる。

京都の儒學界は元祿以後殊に享保以降は文運東移の餘を受けて段々見劣りがするが、それでも東涯在世中は天下に重きをなしたけれども、元文以後になると寂しくなつて來る。松永・那波・堀・兩伊藤・江村などの名家は連綿として續いてはゐるが、江戸の林家と同じく又或者は京都の菅清兩家の末流の樣になつてしまひさうに見えた。那波氏にては魯堂、伊藤、江村氏にては錦里北海三兄弟の如きものも出た。堀氏にては景山南湖從兄弟の如く、南郭からも「光をつゝみたる學者あり」と讃せられ、「平安は此二人と東涯となり」と過褒された樣なこともあり、殊に景山が初め宣長の師となつた樣な緣故も出來たが、大觀すれば新人物が拂底になりかゝつた。

さういふ時代に宇野明霞が徂徠に反對して論語考を著はして徂徠を痛擊したのは、京都の爲に東國に對する一大氣焰を吐いたものとも云ふべきである。然し西は東涯の門より出で東は南郭の下に就いた原田東岳の如き徒より、東奧の平野金華輩に比せられ最劣等だと毀られた明霞は京都の經學詩文衰頽期に起つた一異彩と目するだけで、江戸の物派から、京都の學者を罵倒される種子を作つた巨魁である。たゞ門下に大阪に下つて混沌社の盟主となつた片山北海を出し、加ふるに寬政異學の禁に抗議した赤松滄洲を出したのは、宇野氏の名譽であつた。明和以後片山氏の詩社が中井氏の懷德堂と相俟つて浪華の文學を飾り幾多の俊才を牽引した功績は其因を宇氏に發すると云はねばならぬ。之について龍草廬が明霞に學び又徂徠及春臺に就きて後遂に幽蘭社を都下に組織して大阪の混沌社に對峙したのを盛觀とする。

明和安永年間に於ては前代寶暦における闇齋派の輕擧の當代儒風の威信なきを曝露した後を受けて禁廷裡の先覺者や二條城内好學の有司が大阪より中井兄弟を招いで正學を聽いたやうな時勢で、弱冠に足らぬ賴春水や菅茶山の京都遊學を見、柴栗山が讃岐より京に移住して堀川に塾を開いたり稍後れて精里が大阪を經て入洛して闇派の西依氏等に學んだりした樣に、寬政以

後江戸における學政一新思想統一の機がこゝに胚胎されたこともある。栗山はその東下登用までは多年在京して上國學界の實狀をも知悉して居た筈である。栗山に抗議して異學の禁を難じ思想劃一の謬を辨じた赤松滄洲の如きも、栗山在京中に組織された三白詩社の仲間であり、開物學の淇園、闇齋派の成齋等と、共に其社の頭領となつて居たのである。同じ頃には栗山や滄洲の外に、異學禁令を賛成して前者を辯護して後者を反駁した魯堂門下の西山拙齋も在京した樣てある。

天明に至ると高辻胄公の建學企圖に對する竹山の上書が注意をひく。栗山が東に登用された前後に近衛公が彼に學事を諮問される、淸家の伏原宣條の門下に巖垣佐野兩氏が古註を闡明するといふ樣に、臺閣の學派も色めいて來た。その巖垣の門人には幕末伊勢に聘せられた猪飼敬所が出た。かゝる際に天明寬政の學界に異彩を放つ獨立の經學者は皆川淇園であつた。京都古學の四大家として前記の巖垣佐野二氏および村瀨栲亭と並稱されるけれども、淇園が名物字義の解析に基いて一新學說を開いたのは、確に群を拔いてをり京都學界の光明であつた。從つて貴族や諸侯の彼を師と仰ぐものもあつたとは云へ、伏原高辻二公等の建學に當つても彼を度外においたのは、道德上に非難を免れない點もあつたらうが、また其學派の異なるが爲であらうと思ふ。

文化の初には淇園が歿し文政の元には栲亭が逝き、其頃からは京都の儒學は寂寥を極むるやうになつた。山陽が京都に住して日本外史を完成したのも化政年度のことで、好評早く江戸の儒者にも傳はり、遂に樂翁公に之を獻じて題言を得、やがて日本政記の執筆に從事して半途で世を去つた樣な始末が京都文壇の此期に特筆さるべき事柄であらう。吾等は純乎たる史學の立場から見ずに一種の國民文學好箇の勤王文學として日本外史を見ると、この名著の完成が詩人の生地大阪でもなく修業地江戸でもなく、況して水戸でもなくこの京都であつたことを嬉しく感ずる。幕末に近づくに從つて京の儒學は益々尊王的革命的色彩を帶び來り、元

我家の臣春日潛庵の王學に志すに先だちて、備中の山田方谷が出京して九條家の臣にて宋學派なる寺島白鹿に學びて陽明に歸し、吉村秋陽池田草庵等が中國より洛に遊びて王學を唱說するが如く、天保年間になると江戸の一齋や大阪の中齋に對して京都に王學者が輩出したのは注目すべき現象である。弘化以後學習院の講師には朱學の寺島氏古註の猪飼氏の如きも員に列したが、幕末京都を守護した會津藩の學者秋月胤永の觀光集によるに、學習院の學風が王學に傾いたことが認められるのである。吾等は最後に梁川星巖が弘化より嘉永安政にかけての十數年間京都に來住して終つたことを附言しておきたい。

吾等は京の儒學の盛衰を大觀して幕末に至つた。專ら諸派の學系を尋ねてその勢力消長を探り、東西學問の流轉を究め、學說の分析的歷史的研究は專門家にゆづることにした。紙面に限あり頗る簡潔に敍述し了つたが、若し更に書殘したことを補足し得るならば、新に諸流派の學問を化育した京都は享保の中期に於て朱學王學さては佛老の諸說を斟酌して通俗的に加味したいはゆる心學を石田梅巖によつて開き市井の徒を導く道を得、學問がいかにも京都らしい發達をなしたと云ふことを附加へておきたい。梅巖の心學は堵庵に傳はり其門道二によつて天明年中江戸に弘まり、下つて天保の頃には京の鳩翁が諸國の巡講あり藝の賴杖が東都における道話あり歸依者が非常に多かつたのであつた。こんな通俗教育もやはりこゝに源を發した。

六

京都における國學の新興は儒學に後れ而も儒學ほどの目ざましい活動はなかつた。これは國學と漢學との內容の相違からも來るであらうが、德川氏以前には歌論と神學との外には歌文註釋や語彙編纂があるくらゐなもので眞の古典學は未だ成立たなかつたから、儒學のやうに前代の學問を發展させたり外邦古人の舊說を輸入したり又は舊基礎の上に新學說を建てたりする樣な都合にはゆかず全く新しい學問を開くのであるので從つて發達も後れ又舊智識の徒との奮鬪も捗々しくな

かつたのであらう。近世の初め細川幽齋より中院飛鳥井冷泉烏丸等の堂上衆に至るまでの歌文の傳統は儒學に於ての五山の禪徒にも比すべく、貞德が承應以前の學界における位置は惺窩のそれに似よる。貞德門下より北村季吟と加藤盤齋とを出したるは、惺窩の弟子に林羅山と松永氏等とがあるにも匹すべく、季吟の東遊は羅山の東下に對照することが出來るが、時代は八十年も後れ、而も前者は六十代の老齡後者は三十の壯年に行はれた。季吟及子孫が永く幕府に仕へて和學方となつたのは林家の經歷を連想せしむるが、林家ほどの事業勢力門生は北村氏には見ることが出來ぬ。然し彼が在京時代幾多親切なる註釋書を編して後學に資したのは元祿以前における京都國學史上に特筆すべきものである。而も寶永中彼よりも一年後に歿した戸田茂睡をして江戸に名を成さしめ、元祿の末彼よりも四年前に逝ける契沖をして大阪に功を奏せしめ、京都をして國學の發達に一時期後れしめたのは、彼の力量の及ばなかつたばかりでなく、因襲の勢力の強さにもよることゝ思ふ。貞德門にて京都に殘つた盤齋は講述と抄解とに力を盡し、同門にして歌道に優れたる望月長好と名を競うた所で、松永尺五門下より出た順庵の樣な俊髦はあらはれなかつた。然りながら地下の徒に歌文の學の普及したのは貞德等の功績と稱すべく、從つて延寶より元祿にかけて浪華に下河邊氏や契沖阿闍梨を出したと云はば云はれる。

江戸而も日本橋生れの吉川惟足が承應明暦の頃關東より上京して吉田家に神典を學び遂に一派の神道を開き、京の山崎闇齋の如き朱學者が後年之に就いて古典說を攝取したやうな事は、洛人には思ひもかけぬ所である。垂加の流を汲んだ京の鴨玉木の如き國學者も間接に吉川氏に負うてゐるわけである。古典學の如きは兎角傳統に泥み舊說に拘はりがちであるから京都の樣な株守的な土地からは古學の新興はむつかしかつた。是に於て伏見稻荷の祠官たる荷田春滿が堂上の流を汲みつゝも東西の復古說に刺戟されて古學の創立を計り國學校の設置を企てたのは破天荒の擧であつた。

丹波生れで京に出でゝ宮家に仕へ堂上派の和漢學に育成された安藤定爲には爲實爲章の二子があつて、二人とも延寶以後水戸に仕へ兄は扶桑拾葉集禮儀類典の編輯を管し弟は釋萬葉集の事業の爲に奔走したが、いづれも京都縉紳の學系に出でゝをる。兄弟が水藩の國學に盡したのは、儒者にしては佐々宗淳・鵜飼錬齋・三宅觀瀾・栗山潛峯等が皆京都より入つて義公の修史に關係したのと併せ考ふべきである。弟爲章には紫女の七論あり守津保榮花等の考證あり年山紀聞と共に世に知らるゝ。然し彼の功勞は契沖と義公との間に立ちて阿闍梨の學問を東國に傳へ契沖を奬勵して萬葉研究の業を大成せしめ近代文獻學の基を肇めしめた點にある。

契沖と春滿との關係は不明である。故人往々師承の關係を說くも確かな根據はない。浪華の阿闍梨に先んじられた京都は稍々後れて春滿を祠官に得て辛うじて國學史上に名譽回復をした。大阪は契沖の前に長流があつた。京都には荷田氏の前には革新家とも稱すべきものが見えない。荷田氏の學は半ばは東方より出でゝをるので、その點は契沖と源流を異にする。阿闍梨の入寂する二年前の元祿十二年に春滿は三十一歲を以て東遊し在留十四年にして歸洛した。京では仁齋が歿し江戶では徂徠が起る間頃のことである。春滿か宮家の仕や大名の聘を辭して古典の研究に從事したのは、長流や契沖が義公の恩顧に應ぜず大阪に留つた高節さては仁齋東涯父子の終生仕へなかつた淸操と共に上國學問の興隆に資したとは感謝すべきである。但し春滿が享保七年幕府の命によつて東下し或は秘閣の典籍を披閱して斯學の資料を得、或は書物奉行下田師古等の質疑に應じて學殖を發揮したる事は、後年その義子在滿の東移を促がし、又創國學校の啓文を呈出する由緣となつて影響の及ぶ所少くなかつた。契沖には京の今井似閑、浪花の海北若冲などの高足があつたけれども、萬葉學上彼等の功績は傳ふべきも獨立の古學者としての事業は別段認められない。阿闍梨の著書を京に讀んで起つたものに宣長があるやうに書物上の感化の及ぶ所

は計り知るべからざるものが存する。然し春滿における子在滿や門人眞淵の如き者は契沖にはなかつた。在滿の東住は季吟歿後の江戸國學界には大なる意義がある。享保元文の際田安家　仕へて歌學には國歌八論を作つて新しき刺戟を與へ儀式には貞觀延喜の式を投じ、殊に元文年中櫻町天皇の大嘗會に際して上京し、歸來具釋便蒙の二書を撰して忌憚に觸れたやうに、元祿時代における季吟とは選を異にして居る。春滿は我國古道の顯揚を唱道した點について眞淵宣長の先驅となり又契沖を凌駕して居る。享保の末彼の晩年に方つて眞淵は來遊從學すること四年、その間の感化は遂に縣居の古學說を生んだ。その結果として在滿が江戸に大嘗會の著述を公刊した頃、眞淵は東下しては江戸國學の勃興を來たし、西には本居宣長を起たしめることとなつた。

七

元文以降の京都國學界はさびしいものであつた。故實家として有職學者として名高い壺井義知は河內の農家の子ながら京に入つて斯學の智識に精通し遂に享保年間春滿に次いで幕府の招致を受けて東下し下田師古の質問に對へたこともあり、其門より出でた多田義俊の京阪に於ける著述並に講說の事業もあつたけれども、彼是ともに大なる國學者といふべきにもあらず、多田の如きは非難も多い人物であつた。而も二人は享保の末より十數年を相隔てゝ歿してしまつた。されば元文の元年には京の儒學が東涯を失うて頓に寂寥を感じたやうに洛の國學は春滿に逝かれ永久に人材を逸した。同年には神道家の玉木葦齋も歿し翌年には有賀長伯も逝いた。この頃在京した眞淵と谷川士淸とは、京都が引付けた二大俊才であつた。而も二人の師なる春滿と葦齋とは同年に死んだ。天は春滿の代りに二年後禁裏の御醫に富士谷成章を生ませた。後寶曆の竹內事件によつて罪を得、蟄居三十年の間に大內裡考證を編して天明の皇居炎上後に入洛した松平定信に獻じて驚嘆させた京神裏松光世の生れたのも元文元年である。正に有職家壺井鶴翁の歿後一年の出生である。

其頃より文化文政時代に至る八十年ばかりのさびしさよ。京の儒學にはまだまだ活動力があつた。國學者には谷川士清が日本紀通證を著はした翌年の寶曆二年に上京して有栖川宮家に入門して歌道を學んだやうな殊勝な振舞もあり、丁度同年に同じ國から本居宣長が入洛して「光をつゝみたる學問」の堀景山に從學した事もある。近代京の歌人に其人ありと知られ江戸の春海や千蔭と對比せらるゝ小澤蘆庵が尾張より京に出張して冷泉爲村の門に入つたのも寶曆中期の事である。堂上歌學の餘威と儒學の勢力とはすばらしいものである。然し是等の事柄は京都の國學の不振を示すものであつて、たゞ流石は帝都だけあつて宣長がこゝに契冲の諸著を讀んで漢學醫術の研究から國學の研鑽に轉ずる動機をなしたことは特筆すべき價値がある。龍公美が詩文の造詣を以て契冲を欽慕し、同じく春臺門下なる僧文雄が契冲を氣取つて音韻文字の攷究を試みたのも、阿闍梨の遺德をこそ示せ決して帝都の誇りではなかつた。

明和安永の頃京の異彩は富士谷成章の國語學であつた。宏才宣長をして嘆服せしめた彼の文法學の系統は其資料が舊堂上家の手爾波研究より出で、其組織或は兄皆川淇園の開物學に受くる所があると云ふが、いづれにせよ國語學上の新學說と目することが出來る。然し祖述し繼承する者の極めて寥々たるは惜しきことにて本居氏の語學の勢力の爲に一頃は埋沒してしまひさうであつた。狷介孤負を以て聞ゆる上田秋成は膽大小心錄に於て兄淇園を「あほうには違ひはない」と評し「弟の富士谷千右衛門は兄よりかしこいで學文も何もよかつたとぞ」と云つて居るので當代の評判の分るゝ所が知られる。

この頃關東からは秋成の師にして縣門四傑の一人加藤美樹や類聚名物考の編者にして亦元と同門から出た山岡俊明が上京して其儘洛に歿し、後れては眞淵の高足にして兼て徂徠派の漢學を修めた村田春海も入洛して淇園に就いて學んだといふ樣なことはあるが、京の國學界は高橋圖南とか藤井貞幹とかいふやうな故實家

や好古家が名高い。前者は東涯の門に出でゝ柴栗山に國學に教へ又故實學の橋經亮を門下に出し、又後者は同じく山田以文を弟子に持つたと云ふ程の感化はあつた。古典古史の研究上資料として得がたきものを學界に供しただけの功績は認めておかねばならぬ。この邊が京都學の特色とも呼び得るであらう。偶〻貞幹の衝口發が出て新設があらはれると、宣長から狂人あつかひにされて口を鉗せられた位な失敗を見る。

江戸では塙氏の努力によつて和學講談所が建つ頃、同じ寛政五年に宣長は上京して蘆庵や蒿蹊の如き歌人また季鷹の如き狂歌師一流の徒、さては好古家の經亮に逢うた。門人の澤眞風に長歌一篇を與へて關東筑紫に古學盛んにして京都に皇道の興らざるを慨歎した。春滿の啓文あつて正に六十五年、京都は始めて古學振起の聲を聞いた。鈴屋門人の統計表を村岡氏の著によつて見るも、京都における門人の數は割合に少數だといへる。而して寛政九年に城戸千楯が入門した外、あまり有名な學徒は京では得られなかつた。千楯も鈴門一流の弟子ではなかつた。宣長が其歿年なる享和元年に七十三歳の高齢を以て京都に入つて講說したときは、初て多數の聽講者を得殊に縉紳の來聽も少からず、同時に門人に五人を加へた。是に於て京都の國學界も少し動搖しはじめた。其時には東西鈴門の高足が數名も京に落合つたのであつた。但し西からは伴信友東からは平田篤胤が門人に名を列ねたのは翁が歸郷歿後の同じ年の事であつた。

文化には西國から鶴峰戊申が上京して舊派の學者に就遊する、伴信友が所司代酒井氏に從ひて上洛する、伊勢からは本居大平が講義に來る、塙檢校が江戸から史料採訪に來るといふ始末であるが、京都その土地に於ては、國學上目覺ましい活動も起らなかつた。文化の末頃には鈴屋歿後の二高弟篤胤と信友との交情も密であつたが、其頃より信友は京都勤務となつた。文政の初には高田與淸や淸水濱臣の遊京があり、又七十四の塙や六十四の大平が何度目かの上京をして、兩老家の面談があつた。濱臣は千楯の如き鈴門の學徒や有功

の如ぎ搢紳歌人と交はつた。然し京都の國學は何の得る所があつたかを知らない。

文政の四年には信友は致仕して京に住し専心一意各般の史的考證に從事しはじめた。この頃に至つてより京都の古學は漸く勃興の機運が開けた。同じ時代に香川景樹の東塢塾ありて八田山田の如き薩藩の士を引きて從遊者が多かつたが、要するに歌文の輩を寄せたに過ぎず、鈴門の藤井高尙も備中より出京して鐸の舍を開き、同學の伊勢人服部中庸向日神社の六人部節香等も京に居たのであるし、又穗井田忠友は大阪より鈴木重胤は淡路より足代弘訓は伊勢より、この文政天保の交には相前後して入京し或は留學或は見學した樣なこともあつて、京都は他國人によつて多數を國學界に占められた。然しさすがは土地柄とて依然として公卿搢紳は尊崇信遇を博して居た。弘訓が年五十入京して堂上の學風を視察して失望したのも天保の四年であつた。

こんな際中に小濱藩の信友が京都に居て關東の篤胤に對して學風に陰陽の區別こそあれ國學界に重きをなして居たのは京都の爲に慶ぶべきであつた。文政より嘉永にわたる二十七八年の間、信友の研究には驚嘆すべきものがあつた。今は一々著述について縷述する必要はない。而して東國に覇たる篤胤が上京して藤井服部等の鈴門の高足に交はり、自著古史成文等を光格上皇及仁孝天皇に献上して、「せゝらぎに潜める龍の雲を起し天に知らるゝ時は來にけり」と欣喜措く所を知らなかつたのも、文政六年で、信友が致仕攷學の初期であつた。天保に至つては篤胤は關東より東叡山の宮家を通じて大扶桑國考や天朝無窮暦を相尋いで關白に呈し皇室に献じた。天保の末には胤篤派の野々口隆正が京に入りて報本學舍を開いて岩倉鷹司の如き諸公卿の入門もあり、自ら京住の喜悦を述べては「うれしくぞ都の人となりにける舌だみたりしことばながらに」と詠んだ。彼が爾來京都を中心として熱烈なる調子を以て本學すなはち國學を說いたのは、闇齋派の學徒が往時の講說にもまさつた。彼は嘉永以來ま

すく〱京都に復古熱を鼓吹するに勉めて王政維新に至つた。

天保の末年に京に移住した信友が數年後の嘉永初年に二條の所司代屋敷に歿した頃からは、信友のやうな穩健な學風は再び見られなかつた。天保弘化頃には義門の國語音韻の學もあり、足代弘訓の國史學が三條公によつて採用されて禁中における國史の會に資せられた事もあつた。然し嘉永には矢野玄道や六人部是香が、聖護院の島津邸内に國學校ヶ建てゝ國學者を養成しようと云ふので、齊彬公に請願したこともある位に、平田派の學者の運動は着々進んでいつた。この時の建學は薩藩の儒者の爲に反對されて成立たなかつたのであるが、京都にある學習院は主として漢學を敎へるのであるから、之に對して國學の學校を興さうと企てたので、春滿以來百年にして再び創國學校の議があつたのは注意すべきである。然し時勢が時勢であるから、よし設立された所で當年の學習院と同じく健全な發達を遂げずに終るやうになつたらうと思ふ。

幕末の京都における平田派殊に野々口の徒の囘天事業に關する言說及運動はこゝに精叙するのを避ける。安政中には猶鬼島廣蔭や中島廣足の上京もあり、必ずしも國學者の新運動には拘はらなかつた。文久元治まで下ると長野義言や伴林光平や平野國臣の悲慘な最後がある。野々口門で岩倉家の臣なる玉松操が反正の擧に盡瘁するあり、平田派の權田直助が上京して五條錦小路等の貴族に交はつて復古の業に參加するなど、京の內外の國學者は信友一流の穩和沈靜なる研究三昧には沒頭出來なかつたわけである。野々口隆正は維新の初に「花さきぬ牛となりても大君のみ幸の車ひかむとぞ思ふ」と詠んだ。いかに其頃の國學者の感激が高調に達したかが想像される。

八

終に臨んで平安京における醫療博物の學と天文算數の學とを一瞥して最後に京都の洋學史について一言したいと思ふ。

京都の儒學について述べた所は醫學についても當つ

て居る。近世初期における京洛の名醫が關東に出張またあ轉住して江戸の醫術を開いた後永く京都は醫家の淵叢となつて居たのは儒者の場合と似て居る。儒と醫との關係は極めて密接であつて京都には殊にいはゆる儒醫が多かつた。仁齋と天民と師弟の間に有名な儒醫論が鬪はされたこともあつた位である。古林見宜の古きは姑く論ぜず名護屋玄醫一たび古方を唱へてより京に古醫方を說くものに江戸より歸住した林門の後藤艮山があつた。彼の父はもと京人で江戸に住んでゐたのであるが、艮山が父母と共に西歸した頃は丁度仁齋が堀川に古學を講じて名聲の盛な時分であつたので、初め林家の門に儒を學んだ彼は、儒たらんとせば到底仁齋を凌ぐことが出來ぬから、四方の衡に當つて學徒の來聚する京都に住し、醫道を復興して天下に弘めるといふ志を起して儒を棄てゝ醫を取つたので古方家の隨一と目される。彼は仁齋と對峙せんとする考を起したけれども彼の高足香川修庵が來遊するや之を仁齋に紹介して學ばせた程堀川の學を崇敬して居た。尤も太冲は數年後儒を廢して醫を取り師の例を追うてしまつた。艮山以後京の醫界に重きをなすは山脇東洋と吉益東洞とであらう。やはり共に古方家で宋以後の醫說を排斥した。東洋は京醫の舊家に生れ、初め宋學後に古註を奉じた學者で門人に長州の永富獨嘯庵を有し、事業に臟腑解剖と臟志の選述とがあるので名高い。臟志は關東の蘭學者に暗示を與へて解體新書の飜譯事業を促がした點に於て京都醫界の誇りとするに足りる。高足獨嘯庵の門より京都洋學者の魁たる小石元俊を出したのも亦記憶すべき事柄である。若夫れ吉益東洞に至つては藝州の醫家に生れ山縣周南の古文辭學を修めた者で、京師に居るに非ずんば授導の方廣からずと云つて京都に遷り住し、東洋に才能を見出されて名聲大に揚り、遂に陸奥南部侯の疾を往診するに至つた。東洞が歸途江戸を通過したとき彼と並稱せられて天下の二名手といはれた江戸の侍醫望月三英と醫學の對論と治術の比較とを試みろと命ぜられた。それは執政堀田正亮の命令であつた。醫術における東西の競爭は昔もあ

つたものである。然し東洞は辭して歸西した。ともかく東洞に拮抗する樣な醫家か八代將軍の治下に於て江戸に出たのは東西學術界の勢力の一轉機を示すものである。尙又門人たる長州人の岑少翁が東下して東洞の學を江戸に唱へ、中津の藩醫前野良澤が江戸で東洞派の說を奉ずるに至つた樣な影響もある。

明和の初年幕醫多紀氏が江戸に醫學校を興した後、京でも御醫畑氏が醫學院を建てゝ朝廷の保護もあつたが、多紀氏の私學が後に寬政の新政によつて官立に昇格して益盛大に赴き、京醫福井楓亭を召して講師とし、稍下つては小野蘭山を登用して本草を講じさせたやうに新施設があつたのに比べると、京の醫學院は微力なものであつた。この頃になると江戸には既に蘭醫も根底を得て醫官の桂川甫周をはじめ諸藩醫の杉田玄白大槻玄澤等が輩出した時勢で、これらの新學になつては京都は江戸の敵ではなかつた。斯くて醫學の中心は東に移つた。

本草學も醫學に伴うて京都が永く中心となつて居た。向井元升や貝原益軒が斯學に關する新智識を以て京都に居た延寳時代には稻生若水はまだ二十代で初めは京都で儒を學ぶために仁齋の門に入つた居た。彼は江戸生れで父と共に幼時大阪住ひをし寬文の末頃に京に來たらしい。延寳の中程すなはち向井元升が歿する時分であるが、皇明經世文編を讀んで、日本は物產が豐富で何も不足はないが、藥品だけは支那から供給を仰がなければならぬと書いてあるのを見て感奮して藥物の國產を奬勵する必要を悟つた。それから本草學を攷究して遂に斯學の泰斗となつたのである。其頃好學の賢君と稱せらるゝ前田綱紀は若水に祿を與へて重に京都に在住させて本草學の研鑽に從事させた。これは元祿六年以降のことであつた。が、其後四年經て庶物類纂の編纂を命ぜられたのを十六年後の正德に完成して之を加州侯に上つた。それを享保になつてから侯が將軍家に献上した。こんな大著も元祿時代に京都で出來た。若水の門人のうち伊勢の丹羽正伯と野呂元丈とは幕府に仕へて江戸の本草學を、東北生れの阿部將翁

及其門下と共に發達させたが、も一人の高足松岡玄達は京に留つて前記二三の江戸の本草家に對して學界の耆宿となつて居た。一度江戸に召されたが、直に歸京した。其際江戸に岩永元浩といふ門人を得た。玄達の高足は小野蘭山であつて幾多の門人のうち京には山本亡羊が一番名高い。蘭山は寛政中江戸に登用されて醫官となり幕府の醫學館に本草を講じた。さういふ樣に寛政頃にも英才を求めて飽くことを知らざる幕府は猶この博物學者を京都から奪つていつた。否、京都にはその頃までも遺醫をもつてゐた。

然し本草學の如き四方に出遊して研究を要する學問になると、幕府の力でないと到底新しい研究は出來がたい。從つて享保以來若水門下の逸足と阿部將翁の門人及流派の俊才とで江戸の博物學は長足の進歩を遂げた。阿部門下の田村元雄が醫官に擧げられ寳曆七年第一回の物產會を江戸に開いて斯る催しに先鞭を着けて後、三年經て大阪に戸田旭山の物產會が開催され、更に一年後れてやつと京都で同種の陳列會を見るに至つたといふ樣に新しい事業は江戸に早く起り京都はとかく後れをとらざるを得なかつた。

本草學では寛政の頃まで東國に對して猶名譽を保有した京都は曆算の學については一旦これらの科學的智識を東漸させて以來は最早見るべきほどのものはなかつた。上國では却て大阪の方に發達して京都は空名を懷くばかりで實力を缺いてしまつて居た。先づ數學の方面で見ると、毛利重能は近代初期の醫學者や本草家が支那や長崎に遊んで新智識を求めたやうに矢張明國に入つて算學を學んで歸朝した人で、元和以後京に寓して數學を敎授して數百の門人中高足の三家があつた。其一人は塵劫記の吉田光由である。他の一人は今村某で其流派からは有名なる澁川春海の師なる江戸の池田昌意が出た。毛利門第三の一人は高原某であつて此門人から數學史上いな本邦の學術史上の一偉人關孝和が生れた。元祿以後算數の名家も門下に多く輩出した孝和も江戸人であつた。されば貞享改曆の事業を遂行した澁川春海も京都にあつて闇齋の埀加神道を奉じ

た學者であつたが、數學は江戸の池田氏に學んだのである。享保年中將軍吉宗の暦算學を助けた建部賢弘も江戸人で關孝和の高弟であつた。建部が推擧して事を共にした門人中根元圭も京の住居ではあつたが江戸に數學を修めたのであつた。寶暦の補暦に測量に從事した算數天文學者西村遠里の師なる池邊某も京人であつたが中根氏と共に建部の門から出た。一々算へ擧げれば際限もないが、數學は何しろ京都の地では誇るに足るものがなかつた。

　數學と關係深き天文學は如何かといふに、これ亦同樣であつた。京都には天文や暦には門閥家が居て新學の發達を妨げて居た。然し數學と共に星學は眞僞の結果がすぐあらはれる學問で、觀測が間違ふと直に智識の不足が曝露されるのである。儒學や國學の如く傳來的の權威を振ふことは出來ない。基礎智識薄弱にして多少運命の左右が伴ふ醫術とも亦趣が異なる。從つて門閥家の土御門氏(安倍氏)や幸德井氏(賀茂氏)は東西の新進科學者の前には公然甲を脫がなければならなかつた。純粹の智力の戰であつたからである。澁川春海の上表によつて一千年來の古唐暦を廢して新暦を用ゐた際には、京の西南梅小路に天文臺を設けて觀測に從事したのであつた。春海が幕府の天文方となつてから初めて暦術の東遷することとなつた上に彼が上京して暦博士に新暦の講釋をして聽かせることとなつたのは未だしも、元祿になると春海の私邸が司天臺となつたり暦博士が東下して彼に暦術を學ぶといふ風に時勢が變つて來た。貞享改暦までは門閥家の反抗は春海に對して强かつたのであつたが、到底敵せざるを悟つた爲であつた。

　享保延享の際吉宗によつて幕府の天文學は非常に進んだ。長崎から西洋の舊式星學說を後れ馳せながらも採取した。寶暦の補暦に際しても江戸より西川澁川山路の諸家が上京して京の西村遠里等と共同して西八條梅小路の觀測所で測定したのであつた。その時も東西の新進學者が暦の誤謬を發見して改修しようと計つたので、斯くて出來上つたものがいはゆる寶暦甲戌暦で

丁度山脇東洋の臓志の成つた同年に成つた。門閥家の士御門泰邦も科學者が實證の前には威信がなかつた。

かくて星霜四十年、京には中井氏の建學私議が實行の運びに至らざるに江戸には昌平校學政の振興を見、京には畑氏の醫學院微々たるに際して江戸には多紀氏の躋壽館が官學に昇つて一大刷新を經、京には鈴屋翁をして古學不振を歎ぜしめたに反して江戸には塙氏の和學講談所の設置が遂げられた。その寛政の七年に大阪から豊後の人麻田剛立の高弟たる高橋至時と間重富とを擧用して天文臺に入れて又もや寛政の改暦を企てた。恰も大阪の懐徳堂が焼けて再建が成る時分である。改暦は手續上江戸大阪の新學者が幕府の天文臺から京都に出張して型の如く濟ませたが、京都の學者は手を束ねてゐるのみであつた。幕府の人材を抜擢するや至れり盡せりである。嚮きには本草學者を京都より擧げ今また天文學者を大阪より任用した。かくて伊能忠敬の沿海測量地圖編製となり世界地圖の編纂出版となり江戸天文臺の事業は延いて蘭書翻譯局の創設となりて大學の前身たる蕃書調所の基礎がこゝに置かるゝやうになつた。京の天文學は疾うに光明を失つてしまつて居たのである。

京都に洋學の曙光がさしそめたのは東方から杉田玄白が小濱侯に従つて歸國の際入洛した天明五年であつた。その際同藩出身の小石元俊は上京して玄白に蘭學を尋ねたのが緣となり、翌年元俊は東遊して大槻玄澤に寓して新學を學んだ。元俊は翌年歸京して蘭學を唱說し、やがて大阪に下つて和蘭醫術を開き其業大に行はれた。浪華の小職人なる橋本宗吉を江戸へ留學させて玄澤に就いて蘭語を學ばせたのも元俊と間重富とであつた。されば京阪蘭學の創業者は小石元俊であると云ふべきである。

久我家の諸大夫辻蘭室が蘭學を始めたも右の時期に接續する寛政初期である。華頂宮の侍醫廣川某が長崎に遊んで遠西の事物を見聞したのも寛政中である。小石元俊の子元瑞が東下して玄澤に從學したのも同じ頃である。後年ながら藤林普山が蘭醫を以て有栖川宮に

侍した樣な新傾向が續々京都にあらはれた。

江戸ハルマの辭典を編纂したといふ譽を荷ふ海上隨鷗が文化の初に京に移住して藤林普山小森桃塢等の從遊する樣になつて以來京の蘭學は正則に開けた。藤林の譯鍵および和蘭語法解の著述出版は文化中のことである。一は蘭語の辭典他は文典で、茲に至つて始めて實用に堪へる語學書が京都は於て出來たといふのは頗る面白い現象といはねばならぬ。廣川某の蘭例節用集の如き進歩したものが公刊されたのも同じ頃である。伊藤圭介が尾張より、竹内玄同が越前より京の藤林氏に從學に來るといふ樣になつたのは文政の四五年頃である。野呂天然の京都在住、新宮涼庭の長崎遊學は共に少し遡つて文化年間にある。天保の九年大阪に緒方氏の塾が開かれた其翌年には新宮氏の順正書院が建つた。江戸の坪井門なる廣瀨元恭が京に來住し帷を下して蘭學を講じたのは弘化嘉永の際で、その理學提要の出版されたのは、賴山陽の保護に任じた蘭方の小石元瑞の歿した嘉永二年より三年後のことである。京都の蘭學界も先づこのやうに開けつゝあつた。然しながら幕末の儒者や國學者の回天運動に比へれば微々たるもので論ずるに足らない樣であるが、新學問の扶植は京都でも相當に進みつゝあつたものである。

列國均勢の由來及將來

横井時雄

(一)

列國均勢即ちバランス・オブ・パウルは近世歐洲の特產思想なり、其目的は國際公法の制裁と相待つて世界の平和を把持するに在り、中古及び古代には歐洲に

於ても均勢論の唱へらるゝなく、東洋に於ては古來幾千載なるも曾て數個の列國双互に獨立を認識し勢力の均衡を把持し以て平和を保持せんと試みしことあるを聞かず、西洋に於ても往古は均勢論なし、羅馬の盛んなるや地中海沿岸地域を主として英、佛、西班牙より埃及、波斯に及ぶまで悉く征服されて其版圖に屬して外に對立の獨立國を許さず、印度支那あるも未だ遠征を試みるに及ばず素より訂盟修交の誼ありしに非ず、西暦一六一年即ち後漢桓帝の延喜四年に於て羅馬帝マルカス・アウレリアスの使節が支那の首府河南の洛陽に到りし場合の如き蓋し羅馬は支那の國情を探知せんとするを主たる目的となせしこと疑を容れずして、洛陽朝廷に在りては大秦（羅馬）の朝貢使來聘せりと見做し西域の一方に新たに一附庸國を加へたりとて得々たりしや想像に堪へたり。双方孰れに在りても互に獨立の權利を尊重して修交訂盟の目的を有したるに非ず、天に二日なく地に二王なしとは當時世界東西の思想なりしなり、羅馬の將に與らんとするや一衣帶水を隔てて阿弗利加の北岸にカルタゴ國あり、富强文明を以て一日の長あり、若し當時列國均勢の思想存在したらんには羅馬は之と協定して勢力圏を限定し以て平和の裡に双方國家の成長を見るを得べかりしも、兩雄國遂に並立すべからず、初めシシリ島の主權を爭ひ後ちに天下の權を爭ひ、三回の悲慘なる戰爭を經て竟にカルタゴの全滅を以て局を結べり、此戰爭中有名なるハンニバルは北阿と西班牙の兵を率ゐてアルプスの險嶺を越へて羅馬國に侵入せしこともありて勝敗の數未だ劇かに斷定す可らざるが如くなりしも、羅馬に於ては國中の壯丁皆な兵役に服して國防に任ぜしに反し、カルタゴに於ては其富力に任せて傭兵に依賴したればハンニバルの智勇を以てするも遂に國家の亡滅を救ふこと能はざりしなり。

羅馬帝國は紀元三六四年を以て統治の必要上東羅馬と西羅馬の兩帝國に分離し、一は羅馬府を以て首府とし他は司須丹丁堡を首府とし且つ其行政の範圍も限定せられしを以て二個の獨立國は相隣りて存立するの形あるを免れざりしも、理論の上には二個の帝國あるに非ずして一の帝國

を統治の便宜により二分せるに止まりし耳、東西兩帝ありと雖も主權は一に歸し即ち羅馬皇帝（イムペレーター）の權能を二帝の身を以て臨時分擔せるのみ、且つ西羅馬帝國は四七六年を以て滅び、第八世紀の後半シャリマン大帝が獨逸、佛蘭西の新民族を統一して西羅馬帝國を再興せし頃には東羅馬帝國は僅かに巴爾幹半島の一角に殘喘を存し四方蠻族に包圍せられ皇帝の虛位を擁したる耳、是れよりしてシャリマン帝の復活せし神聖羅馬帝國の理想は中世期一千年の間獨逸皇帝により把持實現せられき、但し獨逸皇帝は便宜上實質上之を稱するも正格に云へは獨逸聯邦の王として羅馬皇帝の稱號を兼有するものなりしなり、即ち羅馬皇帝とは天下唯一の至上尊位にして、列國王と稱するもの少なからずと雖も孰れも尊嚴に於て皇帝に及ばずと思惟せられたり、然れども中古期去り近世期に入るに及んでは各國王の獨立自重の精神も漸く加はり容易に皇帝に屈ざるに至れり、十六世紀の初めに當りチャルス五世が獨逸王兼西班牙王として羅馬皇帝の位に即くや其聲望威權四方を壓するの概ありしと雖も佛國王フランシス一世の如きは終生帝に敵對して獨立の威力を示し、英國王ヘンリ八世また傲然として皇帝に對抗し敢て其下風に立つを肯んぜざりしなり、蓋し此時宗教改革の影響を受けて各國孰れも競ふて民族的自覺を發揮し以て列國獨立の基礎を堅固にせり、第十七世紀に入れは瑞典は王國として北歐を壓し、佛國の大宰相リセリウの巨腕により國家統一して歐洲第一の强國たり、三十年戰爭の後を善くすべく開催されしウエストフエリヤの平和會議（一六四八年）こそは世界開闢以來の列國會議にして、列國均勢の主張も玆に初めて公けに認識さるゝに至れり、羅馬皇帝の稱號は今後猶ほ依然として獨逸聯邦王の佩ぶ所たりしも、漸く有名無實の虛器に過ぎざるに至れり、佛、英の二國は各々霸權を四方に稱し、露國亦た東に起って中原に雄飛し、同しく獨逸聯邦中に在りても普魯西は往々にして皇帝の權威を凌ぎ、最後にナポレオン起りて帝位に即くや彼は羅馬法王を巴里に招きて即位の式を擧ぐる耳ならず更に伊太利ミランの府に於て即位式を行ひロムバルヂーの鐵王冠を戴き、而して其版圖は西歐一圓、伊太利を包有し且つ獨逸の一半にも及びしかば、時の獨逸聯邦王にして羅馬皇帝の位を占めしフランシス二世は實質なき虛位を擁するに堪へずとなして獨逸聯邦王と皇帝の兩稱號を辭して新たに墺太利皇帝の稱を取れり、是實に地に二王なしと誇れる神聖羅馬皇帝たる稱號の最後なり、ナポレオンは隱然羅馬皇帝の復興を期せしが如く（ナポレオン帝其嗣子を羅馬王と稱せり）なるも終に其稱號を用ゐるに至らず、現獨逸帝亦絶大の野心あるも未だ羅馬皇帝を稱するに至らず、世界は益々實利實力の世界と爲り空想的名稱に拘泥せずなれり、帝といひ、王と云ひ、大統領と云ふも苟も獨立の國家に元首たらは理に於て平等の地位に立つ、而して互に獨立を認識すれば修交訂盟の必要あり又た自衛上一方に數國聯合すれば他の一方にも同盟して對抗するに至る、此れ列國均勢の起る所以なり。

（二）

以上論ずる如く歐洲に於ても古代、中世期を通じて

列國均勢の主義遂に認めらるゝに至らず其始めて公然と認めらるゝに至れるはウエストフエリヤ條約の時に在り、眼を轉じて支那を觀るに孔孟の時代より以來二十四朝を經るも天に二日なく地に二王なしとは支那根柢の政治主義なり、支那の歷史を觀れば古來泰平の治に浴せし時期は比較的に少なく、列國分立して亂世と稱すべき時期の寧ろ多きに驚かざるを得ざる程なるも、斯る列國分立の場合に互に獨立の國家として修好訂盟を爲して平和の保持に努めし例あるを知らず、列國各々は他の諸國を兼併し遂に天下を獨占するの野心に驅られざるにはあらず、若しも力微にして直に天下を取るの望なき時は數國聯盟し一强國に抗し以て併呑を免んとするに外ならず、曾て相互に獨立を認識し疆界を限定し修交訂盟して以て永久に中國の平和を維持せんとするの計を立てしものあるを聞かず、春秋戰國の時、蘇秦は合縱を說き齊楚燕韓魏趙六國の同盟を唱へたるも其目的は六國協力して强秦を亡ぼさんとするに在り、若しも合縱の目的達せられて秦の滅びたる後には六國再び相反噬するに至らんこと勢の當然にして蘇秦の智を以てするも均勢を策して永久の平和を維持するの甚だ優れるに思及ばざりしなり、又た張儀は連衡を主張し六國を說き秦と同盟せしめんと試みしも、是亦た獨立國としての同盟に非ず寧ろ秦の爲め六國を說きて附庸國の地位に立たしめんと欲するに外ならず、孟子序說に天下方に合縱連衡を務め攻代を以て賢とすと云ふもの能くこの情勢を盡すと云ふべし、列國均勢の說竟に諸子百家中一人の之を說くものあらざりしは以て彼等が如何に支那傳來の統一思想に囚へられしを知るべきなり、降て漢代を過ぎ三國時代に至れば魏は十三州九十一郡を有し倨然として中原に蟠居するも未だ天下を統一するに至らず、吳は江南一圓を包容し五州四十三郡を有し面積廣袤を以てすれば魏に讓らず且つ長江の險固あり以て僅に獨立を保つに足れり、蜀に至りては三州二十二郡を有するに過ぎずして形勢尤も振はざるが如きも素と是れ沃野千里天府の國、且支那第一の天險を要害とし國治まり兵强く以て天下の

計を害するに足れり、若しも列國均勢論にして支那に起ることあらば正に三國時代に在るべしとこそ思はるれども、孔明の智謀孫權の雄略を以てするも竟に均勢論を唱ふるに至らず、三國の君主は孰れも帝號を取り他の二國を亡滅し竟に天下を統一するを唯一の志とせざるはなし、出師表に所謂漢賊並立せずとは即ち古來の『地に二王なし』と云へる理想を具體的に言表はせる耳、照烈の崩ずるや諸葛孔明は蜀呉の同盟を以て魏に當るの策を立てゝ尚書義陽鄧芝を特使として呉王孫權に說かしめしことあり、孫權は說を聽きて同盟を快諾し且つ芝に告げて若し天下太平とならば蜀呉の二主分治する亦樂しからずやと云ふや芝慨然として答て曰く天に二日なく地に二王なし魏を併合する後の如き大王も未だ深く天命を識られざるなり、各君主其の德を茂し臣は各〻の忠を盡し將は抱鼓を提げ（即ち戰爭により）雌雄を決せん耳と、史家更に記して呉主大笑して『君の誠欵を以てせば爾か云ふも』無理ならずと言へりと云ふ、蓋し孫權が二主分治を云ひしも亦好辭柄のみ、呉主も孔明も若しも其心事を僞なく吐露せしめば當に鄧芝の言の如くならんのみ、更に降りて唐代を經て兩晋南北朝時代に入れば天下復た列國分立の形勢を示す、然れども竟に均勢論を開くに至らず、又降りて南宋の時に至れば金主亮懷を述べて曰く萬里車書合混同、江南何有別提封と、即ち金宋兩立分治を許さゞるを云ふなり、此時南宋の君臣平和を主とし交涉大に努むるも遂に同等の權利を以て修交訂盟すること能はず、宋より金に國書を送る場合從來『大宋』と記せしも其大の字を除き又は『皇帝』は皇の字を去りて謙讓の意を示し且『再拜』等の語を用ゐて臣禮を取れり、而して金使の臨安に至るや帝は起立して金皇帝の起居を問ひ座を降りて書を受け、奉使のもの自ら陪臣に同ふす、平等修好の理を解せざる當時の情僞以て想像すべからずや。

古來支那人は支那地域內に於て列國均勢の主義を解せざる耳ならず外國に對しても曾て之を認識せず、歷代の帝王は唯我獨尊にして其四圍の民族に向つて常に中華夷狄の區別を嚴重に立てし耳ならず、朝鮮は之を

藩屬視し日本の如きも時に附庸視せられ曾て同等の獨立國として取扱はれしことあらず、元の忽必烈が遠征軍を派遣せしも我を征服せんが爲なりしは言を待たず、太閤秀吉の征明の雄圖は我大和民族に取り振古の盛擧にして前代に於ける國辱を雪ぎて餘あり、然れども當時の我邦に於ても修好訂盟の眞義を解せず二國和議を媾すれば必ず其一方は主にして他は從たらざるべからずとなせり、即ち明國との和議に際し封冊朝貢に關して双方その見解を異にせしが如き根本に於て修好訂盟の眞義を解せざるに基くものなり、我は豐公の明國王に封せられ明より我邦に朝貢を致すべきを豫期せしも之に反し北京政府に於ては秀吉を日本國王に封し以て足利氏に對するの先例に倣ひ大明の主權を海東の大和民族に及ぼすの形式を襲はんとせり、豐公が未だ明の境域に侵入もせずして明國王に封せられんことを要求せしは頗る解すべからざるに似たれども當時の我軍の勇武は已に北京朝廷を震恐し彼をして頻りに媾和使を派遣せしめし事實を以て察するも我水師已に大敗して遠征に便ならざるものありしに關らず我國は朝鮮の大半を有し明國に對し七分の强を持せしこと疑ふ可らず、即ち豐公が明國王に封せらるゝを一條件となせしこと一理なきに非ず、蓋し明王に封せられて、其實權を握らんとするに非ず我主權の大陸に及べるを表示して永く其征明の雄圖を靑史に印せんと欲せしものゝ如し、彼我を征服せざれば我彼を征服すべく、我彼に對し主たらんか彼我に制を垂れん、二者その一を擇ばざる可らず、若しも封冊の一箇條なくば文祿末年の媾和談は其生命を缺く、而して封冊とは豐公の明王に封冊せらるゝを指すものにして、後に明の國書に記せる秀吉を日本國王に封ずる意に非ざりしこと一點疑を容れず、然るに此頃より歐洲に於ては列國均勢の主義漸く認められ約二百年を經て、遂に日本の開國と共に此新主義は東洋に移入せられ、我が高誼に由り朝鮮の開國を見、支那亦た漸く尊大の陋習を去り列國と平等の交際を爲すに至れり、玆に於て支那傳來の唯我獨尊主義は四千載の久しきに亘り世界の一半を支配したる後

遂に其跡を絶つに至れり。

（三）

列國均勢の主義は既に云へる如くウエストフエリヤ會議（一六四八年）に於て世界の公認を受くるに至れり、抑も該會議は空前の大會議にして、羅馬法王、ウエニス共和國を仲介者として獨逸帝國、瑞典、佛國、西班牙、瑞西、其他普魯西（當時ブランデンブルグと稱す）索孫等數百の獨逸諸侯、自由都市等之に參加し、其目的は三十年戰爭に對する善後策を定むるに在り、主たる問題は獨逸聯邦の組織、瑞典の賠償、佛國の疆界擴張に在り、會議の結果としては皇帝は將來聯邦議會の議長として虛器を擁することゝなり、和蘭、瑞西は獨立を公認せられ、獨逸の各聯邦亦事實上獨立國の權利を得たり、此時英國は未だ其存在を認められず、英國は革命戰爭に忙殺され大陸の事件に干與する能はず、瑞典、佛國に至りては爾來却て獨逸皇帝を凌駕するものありしが、兩國爾後の形勢には自ら大相違あり、瑞典は國貧に人口乏しく其一たび占めたる第一流の地步を保つに堪へず幾許もなく沈衰に陷りしも佛蘭西はリセリウの統一策功を奏し國富み兵強く漸く歐洲の覇權を握らんとする運命の下に立てり、此大機會を能く捕へ佛國の光輝を四方に放ちしものを路易十四世となす。

路易大王の佛國に政を親しくするや獨逸は聯邦の結合甚だ薄弱にして帝國の稱あれども其實の見るべきなく、英國はクロムウエル時代より頽敗せる王朝時代に復し歐洲大陸に對しては國家の威容頗る振はざるものあり、西班牙亦た早く已に衰運期に入れり、故に西歐の時局概ね王の意圖の如くならざるはなく、遂に路易大王は獨逸域內に多くの領地を求め又た西班牙國王位繼承問題を利用して事實上西班牙國を統併せんと企圖したり、是れ實に十七世紀の末葉に屬しウエストフエリヤ條約を距ること已に五十年、玆に歐洲の均勢は佛王の飽くことなき野心の爲めに終に破裂せらるゝに至れり、此時に至り英國は已に腐敗せるスチアート王朝を一掃し第二革命を了し（一六八八年）、內政を整理して稍々中原に馳騁するの餘力あり、乃ち蹶然起ちて對佛同盟の中堅となれり、當時西歐の諸國は孰れも利害の共通あり墺太利、ブランデンブルク（後の普魯西）、和蘭皆な英の提唱に和し聯合軍を組織して佛と戰ひしこと一再に止まらず、遂に最後の西班牙王位繼承問題（一七〇一年）に關しては交戰十二年の久しきに及びしなり、此戰爭中英のマルボロ墺のユウヂエン最も盛名あり其作戰宜しきを得てブレンハイム、ラメエー、オードナルト等の大勝利を博したれば流石の路易大王も遂に力窮しウツレヒト平和條約を締結するに至れり（一七一三年）、今列國均勢論の立脚地よりウツレヒト條約の結果を研究せんに、佛國は依然として強國の第一位を占むるを得たるも列國は佛の將來の侵略を防禦せん爲め十分の注意を拂へるを見る、即ち佛國と西班牙の王位は將來決して同一人に由り占む可らずと規定せられ、ネザランド（後の白耳義）を墺國に與へ和蘭と協力して佛の東北境に備へ、其他墺太利、普魯西は佛國の東境を守り、サボイ及び北伊に於ける墺の新領土は佛の東南を防ぐことゝなり、而して英國は西班牙

の南端ヂブラルターの一角を得て地中海の咽喉を制すべく又加奈太を佛國より獲得して殖民帝國の基礎を築けり、此條約によりブランデンブルグは普魯西王國として公認せられサボイ亦た王國と爲れり、後ちに普魯西は獨逸帝國建立の首腦となり、サボイ（後ちのサルヂニヤ）亦た伊太利統一の基礎と爲れり、要するにウツレヒト條約は佛國に法外の屈辱を加へず唯だ路易大王の野心再發を戒め兼ねて均勢の破らるることなからん爲め必要なる保障を設けたる耳。

斯くてウエストフエリヤ條約後一たび破壞せられし列國間の均勢はウツレヒト條約に由り再び整理せられ歐洲の天地は爲めに小康を得たり、是より十八世紀の末に亘り佛國大革命の勃發するまで歐洲の均勢は甚だしき打撃を受けずして支持せられたり、但だ普王フレデレツキの野心に基き七年戰爭の亂ありしも、素と是れ小國の勃興に伴ふ動搖にして他日の影響は別として、當時に於て未だ著るしく列强の均勢を破るに至らず、十八世紀の最後の十年間に於て革命勃發後の佛國が絶大の武力を發揮し自由平等の主義を宣傳すると稱して四隣を震恐せしめたる後、ナポレオン執權の期に入りてよりは列强の不安は更に一層甚だしきものあり、一八一一年前後に於ける佛蘭西帝國は北は白耳義、和蘭を包有し、且つハムブルクを經て波羅的海岸に達し、南は伊太利を奄有して巴爾幹の一部に及び、其他西班牙國、獨逸の萊因同盟、瑞西共和國、ワルソウ太公國等皆な佛の附庸たり、普魯西ありと雖も其國土の一半を殺がれて佛帝に抵抗するの望なきものの如く、墺太利は依然大邦の形骸を存するもナポレオンと姻戚の關係上帝に背く可らず、東端の露國また久しく帝の政略に致されて同盟の親を持せり、是實にナポレオン霸業の全盛絶頂に爲し、歐大陸は擧げて帝の節度に服し、唯だ北海に英國あり蕞爾たる葡萄牙を以て大陸に於ける策源地となして各地の非ナポレオン氣勢を煽りたりしも、孤軍援なくナポレオンの霸業を覆へし列國の均勢を挽回せんこと殆んど絶望に堪へたり、然れども大凡そ物窮すれば通ず、西班牙の民軍は意外に頑强にして漸く侮る可らざる形勢を示し來り、普國はスタインの建策を用ゐて國政の大改革を行ひ又た徵兵令を布きて兵制を一新せり、而して露國に在りては貴族翼擧げてナポレオン帝の大陸封鎖令に反對しアレキザンドル帝を擁して佛國と分離せしめんとせり、斯くて非ナポレオンの氣運は東西に勃興し一八一三年の初には露普攻守同盟成立し、英軍の將ウエルリントンは西班牙に於て佛の名將ジユルダンを敗り、墺太利亦た同盟に加入し、瑞典亦た英國に伴ひて同盟側に立てり、玆にナポレオン反對の歐洲同盟は成立し所謂歐洲の獨立戰爭なるものは開始せられ　此より形勢は急轉直下しリウツセン、バウツセン、ドレスデン等の戰に於ては勝利は依然として佛帝に歸せしも遂にフイプチヒの大決戰（十月十六、十八、十九日）に至り佛の十八萬は聯合軍の三十萬人の爲めに粉碎蹂躪せられたれば、和蘭反旗を飜へし、英軍は深く南佛に侵入し、國内の人心亦た離反の兆あり、大帝の威望雄略を以てするも頽勢を挽回す可らず、退位してエルバに謫せられ、佛國はブルボン王家を迎へたり、玆に於てヴイエナ大會議の開催となり、中間ナポレオン配所より遁歸り

て百日帝政の事ありしもウオトルルーの決戰に由り大勢玆に定り、列國會議は首尾たく歐洲の地圖を改定し列國の均勢を挽回せり。

ウエストエリヤ平和會議よりウーツレヒト平和會議を經てヴイエナ大會議に及ぶ、此間歲を閱すること百六十七にして近世歐洲列國成熟期に屬し、最も國際思想の發達に富めり、即ち列國均勢の論亦此間に十分の發達を爲せしを見るなり、當時の國際法學者にして普國使節の幕僚たりしフリドリッヒ・フオン・ゲンツは列國均勢に付き定義を下して曰く、列國均勢とは(一)或る一國が他の凡ての列國を制壓すべき程に强大ならんとするを防止すること、(二)如何なる國にても現狀を破壞せんとするものは他の列國より壓抑を免れざるべきこと、(三)何なる國にても他の列國より壓抑せらるべき危險あるが故に各々其欲求を制限すべきこと、(四)一國あり他の列國一般の意向を無視し得べき程の勢力を有するに至らば列國は之を共同の敵として取扱ふべきこと、即ち試みに之を言換ゆれば歐洲列國間の關係に於て其最大國は檢束せられ其最小國は庇護せらるべしと云ふに外ならずして、由來均勢の爲めには幾度か大戰爭の開始を見たり、現に獨逸の横暴を懲らさんとして歐洲の大戰爭は開展されつゝあることとなるが、均勢保持の目的は戰爭に非ずして平和に在り、即ち列國共同の利益及び相互の責任關係を規定して平和維持の條件を具備せんとするに在るなり、但し均勢の保持は即ち現狀を維持することとなれども之を絕對的とは解す可らず、國家は一種の有機體にし每に盛衰なきこと能はず、又た時に新强國の突然として勃興し宛も地變により海中に新島の突出し、又は舊島の乍ち形を失する如く、四圍の事情に大變動を起すことあり、例せば十八世紀の初に露國の勃興せしが如く又は近代に至り日本の突如として國際間に現出せしが如き、西班牙が十六世紀に第一流國たりしに關はらず十八世紀には二流國に下りしが如く、又は支那が多年自ら尊大にし列國に大國視せられしに關はらず近年に至り頓に虛名を失し頻りに列國の侮蔑を招くに至れるが如き即ち是なり、然れば均勢又は現狀の維持と云ふ如きは或る

短時期を限りての意味に解するを要す、世界の事は形勢常に變化し一刻も油斷を許さず、之を大にして云へばウエストフエリヤ條約に由り規定せられたる列國の形情はウツレヒト條約に由り改正せられ、更にウイエナ會議に由り歐洲の地圖は全然訂正せられたりと云ふが如く、又た巴里條約(一八五六年クリミヤ戰爭前役)、伯林會議の決定等が幾度か事實上に改定せられて今に及べるを見て知る可し、故に機を見て均勢の整理を謀るは國際政治の要訣にして、能く機宜を制して誤ることなくんば庶幾はくは戰爭の慘憺を見るに至らずして止むを得ん、例せば若しも英國が一八七一年獨佛條約に際し能く露墺と協力してアルサース・ローレンの割讓を防止することを得たらんには今日の大戰爭を見るに至らずして止みしならん、然れども事後に智者たるは易し、當時英國が内治の改良に專らにして歐大陸の國際政治より離脱するを以て理想とせしに際し遂に獨佛の間に周旋するに至らざりしを尤むるはピヤノーが機關銃の代用をなし得ざるを尤むるに同し、爾後英國が約半世紀を經て遂に其光輝ある孤立を悔悟し均勢恢復の爲め國家を賭しての大戰爭に從事しつゝあるは聊か以て其前年の怠慢を償ふに足れりと云ふべきか、デトクウイル曾て米國の自由制度を論して曰く自由の代償は永久の警戒にありと、國際間の均勢を把持し各國の平和を保證せんと欲せば須らく間斷なき警戒を要す國家をして絕悲絕慘の戰爭の渦中に投ぜしむるが如き往々にして外交上油斷怠慢の罪に對する天の刑罰たらざるを得ず。

(四)

列國均勢の主義はヴイエナ會議に於て其最後の認定を受けたり、爾來一百年列國の離合集散多くは均勢の理想に制せられ、和戰の機亦た之に制せらるゝを免れず、抑も第十九世、殊に其後半期に於ては列國間均勢の移動に重大の影響を及ぼせし事件に乏しからず、伊太利王國の建立(一八六一年)を以て該半嶋が地理的名稱たるを免れ、一政府の下に統一せられしが如き其一なり、之に由り歐洲に一强國を加へ均勢の整理を要す

るに至れり、又た北米合衆國の勃興は其二なり、米國は十八世紀の後半期に於て華盛頓の統率の下に十三州獨立を遂げたるを建國の始とす、爾來漸次に人口を增し隆盛を加へ來りしが其進步は南北戰爭（一八六一—四）以後に在りて最も著るしく、奴隷の解放は合衆國內に於ける政爭の一大因子を取除きて國基を安固にしたる耳ならず海底電信は米歐兩大陸を比隣となし鐵道敷設の急速の進步は中部西部の諸州をして產業的に新紐克と接近せしめしかば、高率なる關稅の保護と相待ち、米國の產業は躍然として發達し、未だ十九世紀を終らざるに富强世界に雄視するに至れり、玆に於て合衆國亦た孤介にして列國關係以外に超然たること能はずモンロウ主義を把持し兩米大陸の霸者を以て任ずる耳ならず比律賓を策源地として雄を極東に張らんとし、而して其傳道事業の關係より土耳古の問題亦た其度外視し能はざる所たらんとす、更に日本の勃興は列國の均勢問題に新たに一大異分子を加へたり、從來國際公法とは歐米基督敎諸國間の公法にして、亦た白皙人種各民族の公法とも云ふべき性質を帶び、土耳古、支那、日本の如き異敎異種の國に向つては同等の交際を爲さず、白皙にして基督敎徒たる國民の土耳古、支那、日本に寄寓するものは皆な治外法權の下に保護せられたり、故に此等各國の歐米諸國と交はるや獨立國として體面を尊重せられざるに非ずとするも事實上一種の不具者として取扱はれたるものなり、然るに我日本は銳意法制の改良を行ひ以て歐米をして治外法權を維持するの口實を失はしめ、强兵の實を擧げて其或者は我と同盟するを利益とするに至らしめ、列國均勢の範圍を擴大し東洋諸國をも含有するに至らしめしは一に日本の功に歸せずんばあらず、故に以上數へ來れるが如く伊太利の統一、米國の隆盛、日本の勃興は第十九世紀後半に於ける最も重大の事件と云ふに足ると雖も、獨逸帝國の建立は更に此三件の孰れよりも重大なり、是れ其地理的位置が列强の中間に在ることにも由ると雖も主として其建國の根本に於て軍國主義を國是となし以て世界の平和を威嚇するものあればなり、試みに當時列國の形勢を觀れば英國はコブデン、ブライト、グラ

ッドストーンの人道主義に風靡せられ、佛國亦たナポレオン三世の術數に弄せられて人心頗る浮動せるの觀あるも民主主義の風潮國內澎沛たるものあり、露國の如き農奴を放解し將に憲法發布を見るべき機運に屬せり、總て十九世紀後半の形勢は列國競ふて平和文明の理想に大に近づかんとする傾向盛なるに當り獨逸軍國主義の勃興は此人道的進運に一大頓挫を加へたり、列國の陸海軍競爭の慘狀を回顧すれば其主因、其原動機は職として獨逸の軍國主義に在りて、鐵血宰相と現皇帝の賜なりと謂はざる可らず、比公は流石に鐵血政略を以て築き上げたる鴻業に少なからざる無理あるを自覺し、殊にアルサース・ロルレーンの獲得は永久佛人の恨を買ふべきを知り、自衛の必要上墺伊と三國同盟を結び(一八八二年)、佛露亦た之に對して軍事同盟を成立せり(一八九二年)、斯く歐洲大陸は二個の大陣營に分れて對立するに至りしが、獨逸は更に英國と海軍競爭を開始(一八九三年)し英の世界的海上權を奪はんとする大野心を爆露せしかば英國また自衛の必要上佛露と協商を爲すことゝなり、一九一一年摩洛哥問題に付き一たび均勢破れんとして彌縫せられ終に今次の大開戰を見るに至れるものなり。

開戰の順序及び過去一年有餘間の出來事に付ては玆に說明の要なく皆な讀者の知れる處なり、唯だ其終局如何に至りては何人も之を豫言し能ふものあらじ、試みに獨墺側を觀れば兵數資力共に容易に缺亡せず其作戰亦た着々功を奏し敵ながら驚歎を禁ずる可らざるものあり、轉じて聯合軍側を見れば開戰の準備甚だ整はずして數々不覺を取りしは否む可らざるも、近來に至り兵數大に增加し物資の供給亦將に充盈せんとするものゝ如く且つ英佛露の團結愈々堅固なるは聊か人意を強ふするものなくんばあらず、双方共に斃れて止むか將た其一方が斃れて止むか、兎に角斃れて止むの外平和克復の日あらざるべきは殆んど疑を容れざるに似たり、而して戰後均勢の回復が如何の形式に於て行なはるゝにせよ、獨墺の同盟は今後益々鞏固となり墺は事實に於て獨に併合せらるの運命を免れ能はざるべく、

從つて獨の勢力は依然として隆々たるものあるべし、殊に支那を中心とする東洋に對する貿易、工業の競爭の如き寧ろ前日と面目を一變し動もすれば列國をして後に瞠若たらしめんとするの慨あるべし、更に眼を大平洋の東岸に注げば巴奈馬運河の開通と共に米國の勢力は世界第二の海軍國として政治的にも經濟的にも支那方面に壓倒し來らんこと毫も疑あらず、吾人は一派の論者の如く歐洲大戰の後には米獨間に支那問題に關し一種の協商成立するに至るべしとは斷言せざるも、其必無を保證し得べしとも思はず、萬一にも米獨一致して支那開發に從事することともならば共れこそは實に由々敷大事にして乍ち均勢破壞の動機たるなきを保せざるなり、現在の歐洲戰局に於て獨墺側と露佛側の關係に對し英國の態度が至大の影響あるが如く、將來極東に於ける今の協商側と同盟側との競爭に對しては米國の態度如何は亦實に至大の影響あらん、即ち米國が獨逸に與みするか日本に與みするか如何は世界の平和に直接の關係を及ぼすの日必ず來るべし、吾人は近き將來に於て我邦が露佛英を味方として極東の平和保持に任せんとするに當り米國の同情を繫ぎ置くの必要あるべきを思はずんはあらず、茲に於て我邦が米國と歷史的の友誼を保持するに全力を盡すは單に兩邦の利益上必要なるのみならず亦た實に極東平和保持の必要條件なりと斷せざる可らず、吾人は此遠大の見識よりして日米關係の圓滑を最も重要視するものなり。

然れども均勢問題の立脚地より吾人の最も興味ある注意は來らんとする平和克復の際に於ける列國會議に由り惹起されざるを得ず。但た今にして之を云ふは徒らに想像に屬し重きを置くに足らず、寧ろ今日の必要は想像に非ずして行動に在り、我邦は地理の關係上歐洲に出兵する能はずとするも及ぶ丈の力を致して聯合諸國の後援となり、平和克復の際に及んでは與國と力を併せて獨逸軍國主義の跋扈を制限すべき方法を講ぜんことを要す、若夫れ事東洋に關するに於ては國權、國利及平和の爲め毅然として所信を貫徹するに努めずんばあらず。

『中央公論』新年號の豫告は
「小說欄の前に」

『婦人公論』創刊號の豫告は
「卷頭に挿入せり」

大國家には大辭典あり

東京帝國大學文科大學長文學博士　上田萬年先生
東京高等師範學校教授　松井簡治先生共著

大日本國語辭典

全部四卷
紙數約五千頁

第一卷發行　四六倍判背革角革千二百五十頁挿畫三百五十　正價金六圓五拾錢

壹萬部忽ち賣切に更に增刷五千部　特價提供　特價金五圓（貳圓五拾錢宛二回拂込差支なし）

郵税內地二十四錢臺樺四十五錢鮮支五十五錢

國寶的大

▼十有五年苦心の產物

本書編纂の事は夙に學者間に喧傳して、深大なる信賴と同情と希望とを以て其成功を期待せられしが、刊行數日、學界及び有らゆる知識階級注目の焦點となり、尋で感稱嘆美の中心となり、全國學校、官衙、個人、會社、團體を始め、海外植民地等よりの註文大潮の寄するが如く、頓に出版界の沈靜を破りて最高新レコードを作れり、今や出版者は、裝釘發送に全力を傾注して、寸陰尙ほ足らざるの盛況にあり。

(中付一の二)

支那歴朝帝位簒奪史

田中貢太郎



袁世凱と堯・舜・禹

支那の國體變更問題は、圓石を千仭の壑に轉ずるの趣を以て進行し、袁世凱の皇帝となるも、間、髪を入れざるの時期に達して、忽ち日本はじめ英露佛四國協同になる國體變更中止の勸告に接した。これが爲に支那政府は大に狼狽してゐるらしいが、奇策縱横の袁世凱の事であるから、何とかその間に活路を開くべきは、何人も信じて疑はぬ所である。一體支那は、王侯相將寧んぞ種有らんやの國である。勢に乘ずれば、昨日の匹夫、今日は忽ち帝業をなすに不都合の無い國である。袁世凱とも有らう者が、今の身分で、帝王を望むのに不思議は無い。尤も國體變更の結果、内亂續發して、支那全土を殺戮掠奪の巷と化する恐れが無いでは無いので、此の心配から、國體變更に反對するなら聞えるが、國體變更の結果帝王となるのが袁世凱と云ふ所から、之に反對する者があるやうであるが、それは支那の事情に無智であるか、それとも嫉妬かの二つである。儒教の立場から、東洋の理想的帝王とせられて

ゐる堯・舜・禹の三帝も、袁世凱と比較して、さ程相違のある者で無い。

本より神話的な支那太古史、三皇五帝と云つても、北方支那に割據してゐた部族の酋長であつたらうが、その夢幻的な史乘の間から髣髴する所に依つても、堯・舜・禹等の如何なる者であつたかが伺はれる。史家は先づ堯が位を舜に禪り、舜は又之を禹に禪るなど、謙遜推賢の美徳の洋々たる者の有るのを推稱し、堯を評して、「其仁は天の如く、其知は神の如く、之に就くに日の如く、之を望むに雲の如し」と云ひ、舜を評して、「舜、歷山に畊す。民皆畔を讓る。雷澤に漁す。人皆居を讓る。河濱に陶す。器苦窳せず。居る所聚を成す。二年に邑を成す。三年に都を成す。」と云ひ、次に禹を評して、「聲は律となり、身は度となり、準繩を左にし、規矩を右にす。一饋に十たび起ちて以て天下の民を勞す。」と云つて、三人を合せて神聖視してゐるが、その實三人が三人とも、權謀に富み、猾智に長け、巧に當時の群雄の輿望を博した姦雄の徒であつた。

堯はその父帝嚳が崩じて、兄の摯が立つと、九年にして摯に迫つて、帝位を退かして、己れが代り立つた。史記の註には、摯が帝位に登ると、堯を封じて唐侯とした。在位九年にして、政、微弱に陷つて、唐侯たる堯の德望が盛になつたので、諸侯が之に歸した。摯は群臣を率ゐて、唐に造つて禪りを致したとある。袁世凱が宣統帝を威赫して退位せしめたよりは、念が入つてゐる。當時電信があつたら、堯も袁世凱のやうに、高辛氏威赫の道具に電報を應用したのであらう。舜は堯の爲に畎畝にあげられ、堯の二女娥皇と女英とを娶つて、天下の事を攝行した後に、堯の禪りを受けたと云はれてゐるが、汲冢書鈔はじめ其他の書に依ると、堯の德が衰へると、舜堯を執へて、その子丹朱を偃塞して、父子相見るを得ざらしめたとある。禹の父鯀は堯の時洪水を治めて功績が擧らなかつたので、舜の爲に三苗に竄せられた。禹はその後を受けて、身を勞し

思を焦し、外に居ること十三年、家門を過れども敢て入らない程にして、その功を收めたので、舜の心に叶つて、百官を率ゐて天下の事を攝行したが、舜が南に巡狩して蒼梧の野に崩ずると、三年の喪に服した後に舜の子商均に陽城に辟けた。天下の諸侯は商均を去つて禹に朝したので、禹は始めて位に即いたと云はれてゐるが、これは禹が商均の爲す無きに乘じて、有虞氏を倒したものであらう。淮南子原道訓に、「禹、裸國にゆく、衣を解いて入り、衣帶して出づ」と云ふの語がある。それに依つても、多智多策、能く人心を攬るの技術に長けてゐたのが分る。

要するに堯舜禹三代の禪讓の美事と云はれた事は、その實、爭鬪簒奪の結果、帝業をなしたもので、袁世凱が革命亂を利用して、清帝に退位を迫り、そして南軍と和して、徐にその勢力を削除し、次でクーデーターで參議院を滅して、巧に專制君主の實權を收めたと比較して、その猾智姦策の度合も、兄たりがたく、弟たりがたきものがある。袁世凱が帝王となるに不足の點は無い。堯舜禹を聖王とすれば、袁世凱も立派な聖王である。

■殷の湯王、周の文王・武王

支那の歴史は、上下四千載を通じて、帝位簒奪の歴史であるが、その中で人の克く知つてゐる帝位簒奪者を數へてみると、堯・舜・禹に繼いだ者は、殷の湯王である。夏の禹王から十七代目の桀王、淫虐に耽り、肉山、脯林、酒の池では船を運らす事が出來、糟の堤では、十里を望む事が出來たと云ふやうな宴飲の間に日を送つた。その臣關龍逢が之を諫めると、桀王怒つて之を殺した。諸侯の一人なる湯王が人を遣つて、關龍逢の死を弔はした。桀王は之を聞くと、湯を召して、夏臺に拘禁したが、間もなく釋した。其所で湯王は、兵を擧げて桀王を討つた。桀王は戰破れて、鳴條に走つて死んだ。天下は日ならずして殷の有となつた。

湯王から三十一代目が紂王である。紂王は資辯捷疾

智は以て諫を拒ぐに足り、言は以て非を飾るに足れりと云はれてゐる。天下の財をあげて宮殿臺榭を營み、美人妲己を寵して、桀以上の淫虐を縱にした。然し象牙の箸を拵へて、箕子から奢侈だと云はれたのを見てもその淫虐の程度は知れてゐる。百姓怨望し、諸侯に叛く者が出來たので、刑罰を重くして、炮烙の刑を作つた。銅柱の上に膏を塗り、火の上に置いて、罪人をして其上を歩かした。膏に足が滑つて、紅蓮の焔をあげる猛火の中に墜ちた。妲己と之を觀て樂んだ。諫める者は殺された。後宮に納れてあつた九侯の女が淫を憙はないので、女を殺した上で九侯も殺した。鄂侯が之を爭つたので、又鄂侯を殺した。周侯昌が之を見て歎息した。崇侯が之を紂王に告げると、紂王は怒つて、昌を美里に拘禁した。昌の臣散宜生が、美女と珍寶とを獻上した。紂王大に悅んで、昌を釋した上に、弓矢斧鉞を與へて西伯とした。諸侯多く昌に心を寄せるやうになつた。昌は、周の文王である。文王の子は、武王である。文王死して、武王立ち、殷に對して示威運動を行つて盟津に行つてみると、期せずして八百の諸侯が來り會した。其所で武王は、文王の木主を載せて、殷を討つた。伯夷と叔齊とが馬を叩へて、「父死して葬らずして、干戈に及ぶのは、孝でない。臣として君を弑するは、仁でない。」と云つて諫めた。武王は、軍を牧野に進めた。殷の軍は破れた。紂王は寶玉を身につけて、火の中に入つて死んだ。殷は滅亡して周の天下となつた。

■秦の始皇と漢の高祖

周は三十七世に傳へたが、晩年は衰微の極に達し、諸侯が强大となつて、强は弱を呑噬した。魯、衞、晉、鄭、燕、吳、秦、楚、齊、趙、魏、韓などが、その諸侯の國名であつたが、互に翦滅し合つて、春秋戰國の暗黑時代を作り、最後には、周室と共に、秦の爲に一掃せられた。

周の滅んだのは、秦の昭王の時であつた。周の赧王

秦の强大を恐れ、諸侯と從を約して秦を攻めたが、反つて昭王の爲に攻められて、秦に奔り、頓首して罪を謝すると共に、盡く周の版圖を獻じた。秦は之を受けて、赧王を國に歸したが、つゞいて死んだ。

秦は周の幽王の時諸侯となつたもので、繆公に至つて、諸侯の間に覇を唱へ、政に至つて天子となつた。政は即ち秦の始皇である。はじめ秦の昭襄王の時、孝文王柱が太子となつてゐた。その柱に楚と云ふ庶子があつて、趙の國に人質となつてゐた。陽翟の豪商呂不韋と云ふ者が、楚を利用して、功名を立てやうとして、自分の種を宿してある邯鄲の舞姫を楚に獻じた。その腹から生れたのが政であつた。孝文王が立つて三日で薨じ、繼いで立つた楚が四年にして薨じたので、政は十三にして立つて王となつた。呂不韋は楚の時、既に秦の相國となつてゐた。

政、立つて二十六年にして、四方を平定したが、德、三皇を兼ね、功、五帝に過ぎたりと云つて、王を更めて皇帝と云つた。又諡を廢して、己れを始皇帝と云ひ、後世は數を以てはかり、二世三世より萬世に至つて、之を無窮に傳へんとしたが、渭南の上林苑中に營作しようとする朝宮の前殿として阿房宮を作りかけたが、それが出來あがらない中に崩じたので、二世胡亥が立つたが、久しからずして弑せられ、公子嬰が立つ間も無く「壯士死せずんば則ち已む。死せば則ち大名を舉げん、王侯將相寧んぞ種有らんや。」と云つた陳勝吳廣の一呼が導火線となつて、忽ちにして秦の天下も瓦解した。

秦に代つて帝業をなした漢の高祖劉邦は、字を季と云つてゐた。隆準にして龍顏、美しい鬚髯が鬑々と垂れてゐた。壯年にして泗上の亭長となつたが、嘗て咸陽の都に行つて、秦の始皇の鹵簿の盛大なるを見て、「大丈夫まさに此の如くなるべし。」と云つた。

後、縣の爲に、囚徒を驪山に送つたが、途中で逃げる者が多かつた。劉季が思ふのに、驪山に行きつく頃

には、皆逃げかねないので、豐西に到つて、囚徒の繩を解いて了つた。「お前達も逃げろ、乃公も逃げる」囚徒の中には、劉季の意氣に感じて、隨從する者があつた。陳吳の起る時、劉季も亦兵を沛に起した。旗幟は皆赤を用ゐた。楚の懷王、諸將と約束をして、「先づ關中を定めた者が、之に王となるが好い。」と云つた。當時秦の兵が强かつた。楚の項羽、劉季と共に關中に入らんとしたが、懷王は項羽の慓悍にして、良民を戕ふ事を恐れて、劉季を遣つた。劉季は大に秦の軍を破つて關に入り、霸上に至つた。秦の三世子嬰、素車白馬で頸にかけるに組を以てして、軹道の旁に出て降つた。項羽、諸侯の兵を率ゐて、後から關中に入り、西の方咸陽を屠つて、降王子嬰を殺し、秦の宮室に火をかけたが三月まで消えなかつた。其所で項羽は、懷王を江南に徙して、陽尊して義帝と云ひ、自ら西楚の霸王となつた。劉季は巴蜀漢中に王となつてゐたが、項羽が義帝を弑するに及んで、喪を發して項羽を討ち、垓下の一戰に之を倒して、漢業を創設した。

■新の王莽と東漢の劉秀

漢の孝平帝の時、大司馬王莽、政を專にしたが、莽に阿つて、その德を頌する者が、四十八萬人あつたと云はれてゐる。女は皇后となつた。臘日の儀に、莽、椒酒を帝に奉つたが、その中には恐るべき毒液が盛つてあつた。帝はそれが爲に崩御した。莽は、宣帝の玄孫嬰を立てゝ皇太子とし、自ら攝政となつた。人は之を假皇帝と云つた。三年にして漢の天下を奪つて、國號を新と更めた。莽は王曼の子であつたが、父が早世した爲に、憐むべき孤兒となつてゐた。父の兄弟八人、孝元帝の皇后もその一人であつた。一門皆富貴、子弟は時の侈靡に乘じて、金鞍白馬、聲色の巷に佚游したが、莽一人は節を折り學を修め、外は英俊に交り、内は諸父に事へて、禮意があつたので、新都侯に封ぜられたが、遂に大司馬となり、孝平帝を弑し、嬰を廢して自立した。天下騒然として、討莽の軍が起つた。莽、

五石の銅を以て威斗を鑄て、衆兵を厭勝せんとした。その形は北斗に似た物であつた。出入には人をして之を負はして行かした。後、莽の軍が破れて、漢の兵が潮の如く宮殿に入つて來た時にも、猶ほ斗柄の指す方に隨つて坐し、「天、徳を予に生ず、漢の兵、それ予を如何せん、」と云つてゐた。終に漸臺で斬られた。

討莽軍を起して漢業を回復した者は、東漢の光武帝である。名は秀、漢の景帝の遠孫で、縯と云ふ兄があつた。縯は、秀の寛弘にして長者の風あるに反して、慷慨にして大節有り、身を傾け産を破つて、天下の豪傑と交はつてゐた。討莽の軍が起るに及んで、宛人李通、秀を迎へて兵を起した。縯も爲に舂陵の子弟を募らうとしたが、「平生縯の大膽を恐れてゐる者は、「伯升が己れを殺さうとしてゐる」と云つて皆亡げかくれた。伯升は縯の字である。然し秀が絳衣大冠して、矢張り陣中に居るのを見ると、「謹厚な者も復たこれを爲すか、」と云つて安心して從軍した。新市平林の兵が皆これに附いた。更始を立てゝ帝となし、縯が大司徒となり、秀が將軍となつた。其所で秀は、昆陽を狗へて、大に王莽の軍を破つた。縯兄弟の威望が日に盛になつた。更始が縯を殺した。秀は敢て兄の喪に服しない。人と對して言笑する事は平生と少しも變らなかつたが、夜、枕に就くと泣いた。更始が慙ぢて、秀を大將軍とし、幾ばくもなくして大司馬の事を行はして、河北を狗へしめた。秀は行く行く莽の苛政を除いた。中山の地に行つた時、諸將が强請して、帝位に即けと勸めた。秀は從はない平棘に至つて、復た請ふた。それでも秀は許さない。耿純が諫めて、「士大夫が親戚を捐て、土地を離れて軍に從ふものは、固より大王に賴つて、其の志をなさん爲である。若し、衆に逆つて、衆をして去歸の心を起さし、大衆が一たび散じたなら、復た如何ともする事が出來ません。」と云つたので、秀も其言葉に從つて、鄗南で皇帝の位に即き、都を洛陽に定めて、四方を掃蕩して漢業を回復した。

■蜀の劉備、魏の曹操、吳の孫權

漢は二十四世、孝獻帝に至つて亡び、所謂三國時代なるものが出現して、蜀の劉備、魏の曹操、吳の孫權の徒が王業をなさうとした。

劉備は梟雄の姿があると云はれてゐた。言語少く、喜怒色にあらはれず、身の長け七尺五寸、手を垂れると膝から下になり、顧みると其耳が見えた。もと蓆を織つて職業としてゐた。自ら稱して漢の景帝の子中山靖王勝の後と云つてゐた。字は玄德、張飛と關羽が朋友であつた。ある日、曹操と會食すると、操が、「天下の英雄は、唯だ使君と操のみである。」と云つた。劉備は慴れて箸を落した。丁度、雷が鳴つてゐたので、「聖人云く、迅雷風烈必ず變ずと良に故あり。」と云つて紛らした。劉備、操を撃ちて勝たず、荊州に走つて劉表に依つた。ある時、厠に行つて、坐に歸ると、慨然として涕を流した。表が怪しんで其理を聞くと、「これ迄は常に軍陣の間にあつて、鞍から離れた事が無いから、髀肉が皆消えてゐた。然るに今は馬に乘らないので、髀裏に肉が出來た。日月は流るゝやうに過ぎて、老境に近づいたが、功業が建たないから、それが悲しい。」と答へた。瑯琊の諸葛亮を三顧して、情好日に加はつた。「孤の孔明あるは、魚の水有るが如し。」と云つた。

表死して、その子琮が曹操に降つたので、備は江陵に奔つた。操が之を追つた。備は吳の孫權に救を請ふた。權之を諾して、魏の水軍八十萬を赤壁の下に邀へて、燒いて走らした。備は荊州江南の諸郡を徇へた。周瑜が孫權に上疏して「備には梟雄の姿がある上に、關羽・張飛は熊虎の將である。此の三人を疆場に置くは危險である。蛟龍、雲雨を得ば、終に池中の物にあらず。宜しく備を徙して吳に置くべし。」と云つたが、權は魯肅の言を用ゐて、備に荊州を借した。備は關羽を留めて荊州を守らし、自ら兵を引ゐて蜀の成都に入つて益州を得たので、荊益二州を合せ領し、權の催促するにもかゝはらず、荊州を還さなかつたが、後、權と荊州を分ちて、蜀より漢中を取り、自立して漢中王となつた。間もなく荊州は吳と魏の兵を受けて、關羽之に死し、土地も權の手に還つた。

曹操は孝獻の朝、もと兗州の牧から入つて丞相となり、それから冀州の牧を領し魏公に封ぜられたもので、遂に爵を進めて王となり、車服を天子に擬し、出入に警蹕した。子の丕を王太子と云つた。操が死すると、丕が立つて丞相冀州の牧となつた。魏の群臣「魏はまさに漢に代るべし。」と云つて勸めた。丕、遂に帝に迫つて位を禪らしめ、帝を以て山陽公とした。操を追尊して太祖武帝と云つた。蜀では、曹丕が簒立して、帝が害に遇ふたと喧した。漢中王劉備、機至れりとなして、孝獻帝の喪を發して、諡して孝愍皇帝と曰ひ、自から帝位に武擔の南に卽いた。

孫權は長沙の太守孫堅の子、孫策の弟である。孫策、江東を定め、次で許を襲はんとして、もと殺す所の吳郡の守許貢の奴に狙擊せられた。創が重い。弟權を呼んで己れに代らしめて、「江東の衆をあげて、機を兩陣の間に決し、天下と衡を爭はんことは、卿ち我に如かず。賢に任じ、

能を使ひ、各々其心を盡さして、江東を保たんことは、我、汝に如かず。」と云つて死んだ。權、遂に武昌に皇帝を稱したが、後、都を建業に遷した。堅を追尊して武烈皇帝と云ひ、策を長沙桓王と云つたが、傳へて四世、皓の時に至つて、晉の兵大擧して、江を渡り、鼓譟して石頭城に入つたので、皓、面縛して出でて降つた。

蜀漢は二世にして亡んだ。昭烈皇帝劉備崩じて、その遺詔を受けて後帝輔佐の任にある丞相諸葛孔明は、屢々魏を討つて互に勝敗があつた。晩年又渭南に軍して、魏の大將軍司馬懿と相對した。懿が恐れて出ないので、巾幗婦人の服を遺つて之を辱しめたが、間もなく陣中に病んだ。一夜、赤い大きな星があつて、孔明の陣中に墜ちた。幾ばくもなくして孔明が卒した。蜀の勢は、日に縮まつた。魏の將鄧艾、成都を侵かしたので、帝、璽綬を奉じて出でて降つた。

■西晉の司馬炎

晉は人の寡婦孤兒を欺いて天下を得たと云はれてゐる。世祖武帝は、司馬昭の子で、司馬懿の孫である。名は炎、人となり、立てば、髮、地に委し、手を垂るれば、膝を過ぎて、人臣の相でなかつた。

祖父の懿は、魏主芳の時、丞相となつてゐたが、その子師に至つて、芳を廢して、高貴卿公髦を立てた。師死して弟昭が大都督となつたが、髦は魏の威權の日に司馬家に移つて行くのを見て、憤懣に勝へず、「司馬昭の心は、路人も知る所なり。」と云つて、殿中の宿衞・蒼頭・官僮の類を率ゐて、鼓譟して出でて昭を誅せんとして、却つて昭の爲に敗られ、廢せられて庶人となつた。其所で、昭は、曹操　孫常道卿公璜を立てたが、遂に九錫を受け、爵を進めて晉王となつた。繼いで卒したので、炎がその後を襲つたが、魏主に迫つて位を禪らして、自ら帝位に即いた。

■晉朝の簒奪者

晉は二世孝惠帝の時から、既に天下が亂れてゐた。孝惠帝は生れ付昏愚であつたが、皇后賈氏は、凶險にして權詐が多く太傅駿を殺し、其女、皇太后楊氏を廢し、太宰汝南王亮を殺し、太保衞瓘を殺し、楚王瑋を殺し、遂に太子遹を廢して之を殺した。征西大將軍趙王倫、詔を矯めて兵を勒し、宮中に入つて賈后を殺した。倫は勢に乘じて、九錫を加へ、帝に逼つて位を禪

らした。黨與皆卿相となり、奴卒も亦爵位を得て、堂上に立つた。冠の貂蟬が坐に盈ちて見えた。人が之を誘つて「貂、足らず、狗尾續ぐ」と云つた。齊王冏、成都王穎、河間王顒、兵を擧げて倫を討つて之を誅した。亂後、諸王相殘滅して、天下が大に亂れた。

匈奴に劉淵といふ者があつて、左國城から興つて、漢王と稱し、續いて帝と稱して平陽に移つた。子聰及び石勒を遣して、晉の內郡を攻めた。當時晉は、孝惠帝が崩じて、孝懷帝が位に卽いてゐた。劉淵が死すると、子の和が立つた。聰が之を弑して自立し、呼延晏を遣はして、洛陽を攻めさした。洛陽が陷つた。漢兵、帝を執へて、平陽に送つて之を殺した。武帝の孫、吳王晏の子業はその時十二であつた。荀藩に奉ぜられて洛陽を逃れ、長安に至つて位に卽いた。之が孝愍帝である。漢兵又屢々長安に逼つて、遂に之を陷れた。帝出でて降つた。漢の將劉曜、又之を平陽に送つた。聰、群臣を會して宴遊し、帝に命じ、青い衣を著けて、酒をたすけさし、尋いで之を殺した。

司馬懿の子伷の孫に睿と云ふ者があつた。懷帝の時、安東將軍となり建業に鎭して揚州の諸軍に都督となつてゐた。愍帝の時には、左丞相となつて、中外諸軍事を都督してゐた。長安が陷ると、睿、師を出し檄を移して北征する風をしたが、實は行かずに形勢を見てゐた。群臣が勸めて晉王の位に卽かしたが、翌年遂に帝位に登つた。これが東晉の中宗元帝である。

■南北朝の簒奪者

東晉の末年、天下は四分五裂して、茲に南北朝時代が出現した。東晉は帝王たること十一世、恭帝に至つて、宋の劉裕に迫られ、位を禪つてから滅びた。

劉裕は、晉の將相たること二十餘年、四方を戡定して功が有つた。安帝の時、相國宋公となり、九錫を加へ、人をして晉帝を縊らした。恭帝が、安帝の弟として位に卽いた。劉裕は爵を進めて宋王となつたが、遂に恭帝から帝位を奪つて、之を弑した。之が南朝宋の高祖武帝である。

宋に繼いで王業をなしたのは、齊の蕭道成である。人となり深沈にして大量が有つた。每に人に向つて「我をして天下を治めしめば、十年ならずして、まさに黃金をして土の價と同じからしめん」と云つてゐた。宋の後廢帝昱、驕恣にして殺戮を嗜んだので、中外憂惶した。遂に蕭道成の爲に弑せられた。順帝準が立つ

た。道成、相國齊公となり、九錫を加へたが、久しからずして爵を進めて王となり、順帝に迫つて帝位を奪つた、順帝、道成を彈指して、「願くば後身世世、復た天王の家に生まるゝことなからん。」と云つて泣いた。道成又帝を弑した。宋は八世五十九年にして滅んだ。道成は齊の太祖高帝である。

南朝梁の高祖蕭衍は、齊の疎族であつた。廢帝東昏侯のはじめ、南雍州の刺史であつたが、齊の將に亂れんとするを知つて、驍勇の士を聚めた。齊の將軍崔慧景が叛して、建康に逼つた。齊主、衍の兄南豫州の刺史蕭懿を召して、崔慧景を討たしめた。崔慧景が破れると、蕭衍、人を懿に送つて「伊霍の故事を行へ、爾らずんば速に歷陽に還れ。」と云つた。懿は之に從はなかつたので、遂に死を賜ふた。衍怒り、兵を襄陽に起して、建康を圍んだ。齊人、主を弑して衍を迎へた。和帝寶融が江陵に自立して帝となつたが、齊の太后、制を稱し、詔して梁に位を禪らした。尋いで帝は弑せられた。齊は七世二十三年にして滅んだ。

梁に繼いだものは、陳である。高祖武帝陳霸先は梁に事へて大功があつた。梁の高祖の晩年、侯景、梁を恨む事があつて、兵を率ゐて建康を圍み、遂に梁主を盟つて大丞相となり、太宗簡文帝立つに及んで之を弑して自立した。霸先、始興の太守として景を討つて之を平げた。敬帝の時、丞相となり、三年ならずしてその位を奪ひ、尋で之を弑して、陳の國を建設した。梁は帝王たること四世、凡そ五十六年にして滅び、南朝の王業は陳に傳はつた。北朝は諸國が魏に併合せられてから、魏は後に分れて西魏・東魏となり、東魏は北齊に傳へ、西魏は後周に傳へ、後周、北齊を併せて、之を隋に傳へ、隋は又陳を滅したので、而して後に南北合して一となつた。

隋の高祖文帝は、名を堅と云つてゐた。父忠は、魏及び周に仕へ、功を以て隋公に封ぜられた。周主邕、既に北齊を滅して、崩ずると、太子贇立つて、楊堅の女を皇后としたが、一年にして位を子闡に傳へた。楊堅、相國隋王となり、闡の禪りを受けて、尋いで之を弑したので、周は滅んだ。楊堅は其所で陳を討つた。陳の後主長城煬公、之を侮つて、「王氣こゝに在り。彼れなんたる者ぞ。」と云つて、伎を奏し酒を縱にしてゐた。陳の將韓擒虎大兵を率ゐて、采石を濟つた。守兵皆醉つて、拒ぐ者がなかつた。陳の兵が朱雀門に入つた。陳主は景陽の井の中にかくれた。陳の兵が之を見て、石を下さうとした。陳主叫んで救を求めた。繩で引き上げて俘虜とした。陳は五世凡そ二十二年にして滅んで、漸く天下が平定したが、隋は二世煬帝の奢淫の爲に、忽ち政綱亂れて盜賊が蜂起した。煬帝巡遊度なく、江都に至つた時、中原已に亂れたのを見て、北歸する心が無くなつた。淫虐を縱にして、酒巵口を離れずと云ふ有樣であつた。從駕の臣、叛して宮に入り、煬帝を縊殺した。恭帝侑が唐公李淵に推せられて位に即いたが、半歳にして位を唐に禪つた。

■唐の高祖李淵、太宗世民

唐の高祖李淵の祖父虎は、西魏に仕へて、隴西公に封ぜられ、父昞は周に仕へて唐公に封ぜられた。淵は父の爵を襲ふて唐公となつたものだ。隋の煬帝、之を用ゐて弘化の留守とした。淵、衆を御するに寛簡なが爲に人が附いた。寇賊が起るに及んで、淵を以て山西河東撫慰大使として、之を討捕せしめた。突厥が入寇した。淵復之を拒いたが功かなかつたので、罪を獲んことを恐れた。次子世民、聰明勇決にして、天下に號令するの志があつた。間に乘じて淵に說いて、「今、天下の民心に順つて義兵を興したなれば、禍を轉じて福となす事が出來ます。」と云つた。淵は驚いて世民をたしなめたが、翌日、又說くに及んで、やゝ心を動かした。會々煬帝、淵の突厥を拒ぐこと能はざるを怒つて、使者をして淵を執へさせやうとした。今は絕對絕命である。世民、晉陽の宮監裴寂と共に、「事已に迫りました。早く計を定めなさい。」と云つた。淵遂に立つた。晉陽の士馬を募り、又使を遣はして、兵を突厥に借り、大兵雲の如く西に向つた。長安に至つて之を陷れ、恭帝侑を立てゝ帝とし、淵は大丞相唐王となつたが、半歲にして帝に迫つて禪りを受けた。建成を立てゝ皇太子とし、世民を秦王、元吉を齊王とした。爾後七年間、群雄を掃蕩して、唐業を定めたが、秦王世民の威望が日に盛になつた。建成と元吉が之を惡んで世民を除かうとした。武德九年六月、太白星が晝見えた。世民、兵を率ゐて玄武門に伏し、建成・元吉の來るのを待つて二人を合せ殺した。淵、世民を太子とし、尋いで位を讓つた。是が唐の太宗文武帝である。

■周の則天武皇

唐の太宗、在世の時、故の荊州の都督武士彠の女の美しいことを聞いて、召して後宮に納れて才人としたが、年が十四であつた。武氏二十四になつて太宗が崩じたので、濃艶滴たるばかりの女盛の身を尼にした。高宗、ある日、寺に行幸して、武氏を見て泣いた。時に王皇后、蕭淑妃と寵を爭つてゐたので、密に武氏に

髮を蓄へさして、高宗に勸めて後宮に納れた。武氏、明敏にして高宗の旨にかなつた。それが爲に、王皇后も蕭淑妃も寵を奪はれた。三十二にして武氏、昭儀から皇后となつたが、高宗が眼を病んで、政を視る事が出來ないので、武后が代り決した。

武后は權數があつた。王皇后、蕭淑妃も、武后の爲に誅殺せられた。高宗の時、武后既に皇子弘を殺し、賢を廢した。高宗が崩じて、哲が位に即いたが、又廢して廬陵王となし、旦を立てゝ自ら朝に臨んで制を稱した。李敬業・越王貞等討武の兵を起したが、二人とも敗死した。武后遂に唐の宗室を殺して、自ら曌と名を改め、皇帝と稱し、國を周と號した。旦を立てゝ皇太子とした。時に年が六十七であつた。

武后は、内行が修まらなかつた。僧懷義・張易之・張昌宗などが寵幸せられて、中にゐて事を用ゐたが、それでも賢に任じ、能を重んじたので、朝廷には、徐有功・魏元忠・婁師德・狄仁傑・姚元崇等の名臣がゐた。武后が病氣になると、張柬之・崔玄暐・敬暉・桓彦範の輩が、羽林の兵を率ゐて、内亂を討じ、太子を東宮に迎へ、武后を上陽宮に遷したが、その年の冬、殂した。則天大聖皇帝と云つた。年八十二、唐を易へて周となすこと十六年、旦が帝位に復した。中宗皇帝である。

■大燕皇帝安祿山

安祿山はもと營州の雜胡である。幽州の節度使張守珪の將として、奚契丹を討つたが勇を賴んで輕進して敗れた。張守珪怒り、執へて京師に送つた。張九齡見て、「祿山には反相がある。誅しないと、後の害になる。」と云つたが、玄宗帝は、許して營州の都督とした。祿山、傾巧にして善く人の心を得た。又帝の左右の者に賄賂を贈つて己の聲望をあげた。當時天下漸く泰平、帝奢欲に耽り、楊貴妃を寵して、三千の宮女をして顏色なからしめた。祿山は、楊貴妃に請ひて、その假兒となつた。祿山の體は肥大であつた。ある時帝、其腹を指さして、「腹の中に何かあるか、」と問ふと、「た

と赤心があるばかりである。」と答へた。宮中に入れば、先づ貴妃を拜した。帝が其故を問ふと、「胡人は母を先にして父を後にす。」と云つた。祿山が誕生日には、澤山の下賜品があつたが、三日目には、祿山を宮中に召して、貴妃、錦の大襁褓を拵へて、宮人をして綵輿を以て之を舁がした。帝がその笑聲を聞いて、故を問ふと、左右の者が、「只今、貴妃が祿兒を洗うてをります。」と云つた。祿山、それから宮中に出入して、夜遲くまで退出しないやうになつて、醜聲が外に漏れたが、帝は疑はなかつた。

十四年になつて、祿山の叛計愈々熟した。表請して馬三千匹を獻じたが、匹毎に二人の馬丁がゐた。さすがに帝も疑つて、その獻上を止めたが、その年の十月、祿山、所部の兵及び奚契丹の兵十五萬を發して、南に向つた。煙塵千里天下震駭した。祿山進んで東京を陷れて、帝を稱して大燕皇帝と云つた。平原の太守顏眞卿、眞源の令張巡等の義兵が起つた。賊兵が關に入つた。帝は出奔して馬嵬にまで至つたが、扈從の將士、飢と疲との爲に怒り騷いで、先づ楊國忠を殺し、帝に逼つて楊貴妃を縊殺した。父老、太子の馬を擁して行かしめず、靈武に迎へ入れて强ひて帝位に即かした。これが肅宗帝である。玄宗は蜀に幸した。祿山は疽を病んで躁暴に陷つて、嬖妾の子を以て、嗣子慶緖に代へやうとした。慶結が怒つて人をして之を殺さして自立したが、己れもその將史思明の爲に害せられた。祿山の兵は、所在に敗れて、久しからずして壞滅に歸した。

■五代の簒奪者と宋の趙匡胤

唐の末年、天下は又麻の如く亂れた。盜賊全土に蠭起したので、豪傑も因て其間に起つて、互に呑噬を逞しくした。梁、唐、晉、漢、周などが王業を爭つて、遂に之を宋に傳へた。

梁の太祖朱全忠は、もと朱温と云つて、黃巢に從つて盜をなしゐたが、唐に降つて全忠と云ふ名をもらつた。當時は藩鎭が驕慢で、唐の命に從

はなかつた。全忠はその間に横行して、群雄をして慴れしめた。唐の昭宗の時、宦官跋扈して、或は諸王を殺し、或は帝を幽しなどした。全忠同平章事の崔胤と共に、宦官を殺戮し盡したので、全忠の威は、天下に震つた。東平王から爵を梁王に進めて、汴に還り、人をして崔胤を殺さし、劫して帝都を東京に遷さした。全忠には既に簒奪の志がなつてゐたので、昭宗の英氣有るのを憚れ、人をして之を弑さした。哀帝が踐祚した。全忠、廢太子裕等九人を殺した。尋いで相國となつて、九錫を加へ、四年にして哀帝の位を奪つたが、未だ王業をなすに至らずして、その子友珪に殺された。全忠の第三子均王、友珪を殺して梁の二世となつたが、李克用の兵威が日に盛になつた。

克用は沙陀の人、一目眇してゐたので、獨眼龍と號した。連歳、梁と兵を交へて、中頃、勢、衰つてゐたが、その子存勗嗣いで立ち、晉王の位に即くに及んで、連りに梁を破るやうになつた。梁の太祖が感歎して、「子供を生むなら、當に李亞子の如くなければならぬ。吾が豚犬である。」と云つた。呉蜀、書を以て帝位に登れと勸めた。其時、傳國の寳を魏州に得たので、諸將迫つて帝位に即かした。國號を唐と云つた。竟に兵を率ゐて梁都の大梁に侵入した。梁の均王、諸兄の危に乘じて亂をなさんことを恐れて、盡く之を殺したあとで、その下に命じて已れを殺さした。

唐主は、梁に克つてから、驕奢になつた。俳優を宮中にあつめて、自ら粉墨をつけて、獻踊した。優名を李天下と云つた。こんな事で、伶人の徒が跋扈して、搢紳を侮つた。群臣が怒り怨んだ。魏博の戍兵、貝州に至つて、亂を起して鄴都に據つた。李嗣源をして之を討たした。嗣源は鄴の城下に至つた。軍士、叛兵に同情して、嗣源を擁して城中に入つたが、嗣源は詭辭を設けて漸く外に出る事を得た。讒者は、「嗣源が叛した。」と云つた。嗣源大に辨解したが、通じなかつた。石敬瑭・唐義誠等、「主上が無道であるから軍民が怨叛して居る、公、衆の心に從はゞ生き、節を守れば身を殺すばかりである。」と云つて諫めた。嗣源遂に兵を還して大梁に入つた。唐主關東にあつて之を聞き、神色沮喪した。やがて汜水に敵と戰つて流矢に中つて殂した。伶人、樂器をあつめて屍と共に焚いた。嗣源が即位した。嗣源は克用の養子であつた。

石敬瑭は、唐の四世潞王と、仲が好くなかつたが、潞王が唐主となつたので、已むを得ずして入朝した。敬瑭、唐主の已れに害心を抱いてゐることを知つて、陰に自全の計をした。唐主、敬瑭を鄆州に移さうとした。敬瑭之を拒んで叛し、援兵を契丹に請ひて、洛陽を攻めた。唐主自ら宮殿を燒いて焚死した。敬瑭、帝位に即いて、國を晉と號した。

石敬瑭が契丹に兵を借つた時は、契丹に臣事し、事捷たば、地を割かんことを約した。然るに二世出帝に至つて、契丹に臣事しないので、契丹怒つて晉を討ち、汴に入つて二世を執へ、國に歸つた。其所で晉は亡びた。契丹、大梁に入つたが、三月にして去つた。晉の將劉知遠が、之に先だつ一ケ月にして晉陽で帝位に即いた。五代漢の高祖である。二世隱帝周王が立つたが、未だ幼なかつたので、同平章事楊邠、樞密を總べ、

樞密使郭威、征伐をつかさどり、侍衛指揮使史弘肇、宿衛をつかさどり、三司使王章、財賦をつかさどつてゐたが、隱帝長じて大臣の爲に制を受くるを厭ひ、史弘肇章を殺し、郭威をも殺さうとした。郭威は鄴にゐた。將佐、郭威に勸めて自訴さした。威大軍を率ゐて汴に入つた。漢主之を拒いで亂兵の爲に殺された。威、漢の太后に白して、武寧の節度贇を迎へて立てやうとした。未だ至らずして契丹が入寇した。威、兵に將として澶州に至つた。將士威を擁し、黃旗を裂いて、威が體に纒ひ、皆萬歲と叫んだ。遂に兵を還して汴に入つた。贇は既に徐州から來てゐた。漢の太后の令を以て之を廢し、威、監國となつたが、尋いで位に即いて、國を周と號した。

周は三世恭帝に立つて、宋に禪つた。恭帝立つて半歲、契丹が入寇した。超匡胤をして之を禦がした。匡胤、周に事へて功有り、歸德の節度使となつてゐた。陳橋驛に至つた。匡胤の醉臥してゐる間に、軍士が計を定め、黍明、甲を擐、兵を執つて、匡胤の寢門を叩いて、「諸將、主なし。願くば天子となれ」と云つた。匡胤驚いて起つた。軍士之に著するに黃袍を以てし、匡胤を圍んで萬歲を呼び、擁して馬に乗せて南行した。周の都に歸つて、仁和門から入つた。恭王遂に位を禪つた。匡胤帝位に登つて國號を宋と定めた。これが宋の太祖である。

元の世祖忽必烈

宋の社稷を覆して、元の天下を一統したのは、世祖忽必烈であつた。その先世は蒙古の部長であつたが、也速度に至つて蒙古を併呑して、始めて强大となつた。その子鐵木眞の成吉思汗は、西夏を平げて、斡難河の河源で既に帝號を稱した。子は太宗窩闊である。宋と約して金を滅し、國勢愈々昌となつた。その子定宗貴由が嗣いだが、三年にして殂したので、從弟憲宗蒙哥が立つた。蒙哥南征して釣魚山に殂した。その時鄂州の陣にゐたのが弟の忽必烈であつた。阿藍荅兒等が弟阿里不哥を立てんとしてゐると聞いて、兵を還して開平に至つて、位に即いて、國號を建て、大元と云つた。

宋はその時、元に蠶食せられて、滅ぶるになんなんとしてゐた。端宗の弟、昺は、陸秀夫、張世傑等に擁せられて、海に浮び、廣州新會縣の南にある厓山に移つてゐた。陸秀夫、帝をして日々大學の章句を學ばしめた。元の至元十六年二月、元の張弘範、李恒の兵、海を被ふて迫つた。宋の軍は大に破れた。丁度、夜で、風雨が強く、その上迷霧が四方に包んでゐた。陸秀夫

は帝の舟を逃がさうとしたが、舟が大きい上に、從船が邪魔になつて、進退が自由にならなかつた。秀夫、先づ妻子を海へ入れ、つゞいて帝を負つて、海に入つて死んだ。宋の丞相文天祥、この時、弘範の船の中に囚へられてゐたが、後に殺された。宋は遂に滅びた。

■明の太祖朱元璋

元は世祖より十世にして滅び、明が代つて帝業をなした。太祖は朱元璋と云つて、濠州の生れである。年十七にして父母及び兄に死なれて、孤獨倚る所なき身を皇覺寺に託した事もある。はじめは濠城の郭子興に依つて、寇賊を討つて名を知られた。郭子興死して其衆を領し、それから連歳、元をはじめ四方の群雄と戰を交へて、之を掃蕩した。元の至正二十八年に至つて帝位に卽いて、洪武と改元し、國號を大明と稱した。その七月、徐達に命じて燕京を取らした。時に元主は順皇帝であつたが、在位久しく政事に怠つて、遊宴に荒び、廣く女子を聚めて淫戲した。帝の諸弟寵臣その前にあつて相狎れ、男子裸處すると云ふ有樣であつた。明の入寇を聞くや、丞相也速等をして之を海口に禦がしたが、破れて通州が陷つたので、元主恐れて夜半、建德門を開いて、后妃太子を率ゐて、長城の北上都に奔つたので、元が滅びて、明が天下を一統した。

■淸の世祖福臨と黎元洪

淸の太祖努爾哈赤は、愛新覺羅氏、長白山が發祥の地と云はれてゐる。明の萬曆十一年、兵を滿洲に起して次第に王業が定まつて來た。明の天啓六年、太祖崩じて太宗皇太極が嗣ぎ、明の崇禎九年に國號を大淸と改め益勢力を擴張した。屢々明軍を破つて、支那本部を蠶食したが、崇禎十六年に崩じたので、世祖福臨繼いで立つて、順治と改元した。順治元年は明の崇禎十七年である。この時、李自成、燕京を陷れたので、明の吳三桂が援を淸に乞ふた。世祖因て之を援けて、李自成を平げ、遂に明に代つて天下を定めた。明の庶流が帝業を回復しようとしたが、如何ともする事が出來

なかつた。順治二年には、世祖、征服の實をあげるつもりで、剃頭の令を下して、漢人に辮髮を强ゐた。

かくて淸は支那全土を統一した。長髮賊の大亂など、種々の變亂があつて、全然泰平とまでは行かなかつたが、ともかく三世紀に近い間、東洋の大國として帝業をつゞけて來たが、明治四十三年十月十日の夜、武昌の革命黨、黎元洪を擁して革命の烽火をあげた爲に、あはれ愛親覺羅氏二百七十年の社稷が傾いて、宣統帝が退位し、中華民國が出現して、袁氏が大總統となつたが、その袁氏、今や歷代帝業創設者の故智を學んで、黃袍を著て皇帝にならうとしてゐる。袁皇一世の出來る日も遠くはあるまい。袁世凱も亦一代の英雄なる哉である。

幽靈探訪（二）

〔富豪邸内の奇蹟〕

大窪逸人

歲の暮にちかい冬の夜であつた。

一人の未亡人と一人の夫人とが、眞新しい十疊の座敷で、白い桐の火鉢に同じ樣に兩手を翳して、さうして二人とも暫く默つてゐる。

……それはN家といふかなり有名な關西の富豪の家の人達であり、其のN家は東京の陸軍に勤めてゐたM少尉の姻戚にあたるので、Mは夏冬の休暇になると關西に行つて其のN家に遊びに行き、其のK子とA子と

の二人に會ふのを、M自身の樂しい年中行事の一つにしてゐた……

……N家の未亡人のK子(三十二歳)と若夫人のA子(二十三歳)とは、ほんとに仲が善いので、その二人の關西辯の全く他愛のない色々の物柔かな話を傍で聞いてゐるのが、Mにとつて從來から別して樂しいのだつた。所が、或る年の冬の五日ばかりの休暇に、Mが復たN家に遊びに行つてみた時には、K子とA子との仲が決して疎ましくなつてゐるといふのではなしに、二人とも從前のやうには賑かに話をしないやうに成つてゐた。いつものやうに十疊の座敷で、いつもの桐の火鉢の縁に寄り添ひながら、しかし二人とも間歇的に默りがちの時の方が、寧ろ多くなつてゐた。それに氣のついたMは「是は變だ、きつと何か有つたのに相違ない」と思ひながら、猶ほ内々に氣をつけて二人の仲を觀てゐた……

……

今も、K子とA子との傍で、Mは自分の膝のうへに小説本を開いて、桐の火鉢から少し離れて。さつきから、小説を默つて讀み耽つてゐた。

さうしてゐると、咄嗟に、K子とA子とが全く同時に鋭く二人の視線を合はして、そこに「ね、そら」といふやうな強い默契を取りかはしたのに、Mは其の際だつた氣配を、忽ち烈しく感じた。さうして、その刹那の氣配を取り逃さないやうに捉まへて、直ぐに顔を上げると、K子とA子との默契の間に割り込むで行つた――Mの視線が二人の視線を横から衝いた。するとK子はMに、

『あんたも、解んなはつたか』と言つてMの眸を眺めた。A子もK子と同じやうにMを瞶めた。しかしMには最初から何も全く解らなかつた。

『何です。さつぱり解らない』と、Mは言つた。それから「K子とA子とが、此の夏にMと會つたときに比べて、餘程默りがちになつてゐること。それがMには如何にも奇妙に思はれて、いつものやうには面白くないこと。さうしてMは内々に氣をつけてゐたけれども、その奇妙になつてゐる原因がM自身には少しも解

らないこと」などに就いて、思つてゐるとほりを言つてみた。

K子とA子とは其の年の秋から始まつてゐる不思議な事々を、Mに話し始めた。

N家の長男の嫁がK子であり、次男の嫁がA子であつた。

其の長男のTさんは、二年ほど前に亡くなつて、N家の後を繼ぐやうになつた次男のHさんは倫敦に留學してゐた。猶、N家の前代の當主のZ老人は隱居して、山ばかりの國のTの溫泉場の別莊に、大概引籠つてゐるのだつた。

□

K子とA子とが默り始めた年の秋に、別莊に行つてゐるZ老人の珍しい直筆の手紙を持つて一人の男が、N家を訪ねてきた。その男はWといつて少くとも六十歲ぐらゐの老人であつた。そのWが持つてきたZ老人の手紙には、K子とA子とN家の總支配人のCと、三人の連名に宛てゝ「Wを當分のあひだN家に逗留させ、猶Wの說敎を三人とも善く聽くやうに、Wは若い時分から苦行難行を積むだ高德の行者であり、此の老行者を供養することはN家と其の家人達の功德になる」――との意味が認めてあつた。それから「Z老人自身は冬に成るまへに一度N家に歸つてみる豫定であり、それまではWの逗留を必ず續けさせて置くやうに」――とも書き添えてあつた。

N家の離座敷の一つに、Wは逗留することになつた。總支配人のCは『御隱居はんのえらい氣まぐれ』として、Wを觀てゐた。K子とA子との居室は、Wの逗留してゐる離座敷とは餘程隔たつてゐるのと、またK子もA子も一面識の謂はゞ餘り氣味のよくないWに會ふのを、自然に嫌がつてゐた。さうして、初對面の挨拶を交はしたばかりで、K子とA子とがWに會ふことは暫くなかつた。

そのうちに別莊にゐるZ老人――K子とA子との舅が、N家に一先づ歸つて來るといふ豫定の日が近づいてきた。その爲に、K子もA子も少くとも一度だけは

Wの說法といふのを、何とか聞いて置いて、舅への申譯にしなければならなかつた。二人は或る夜Cに連れられて、離座敷にWを訪ねて行つた

　Wは離座敷の八疊の部屋の中央に正座してゐた。純白な木綿の袷に、同じ布の白袴を著けてゐた。さうして、「K子とA子とが此の前の初對面の後に、Wの居る部屋に初めて訪ねて來たのが、W自身にとつて此上もなく悅ばしい」といふ意味を、Wは極く鄭重な語で述べながら、幾度か胸を前に傾けて、慇懃な會釋を、語の切れるごとに繰りかへした。K子とA子とは、Wが如何にも實直な丁寧な人であつたのを、少し意外に思つた。それを初對面の時には、たゞ未知の老人といふことばかりで、もう嫌な氣が萌してゐたのが自分私かに辱しく思はれもした。

　そのうちにWは暫く默つて、K子とA子との顏を眺めてゐた末に、Cの方を向いて、

「Cさん。この御二人さんとも有りがたい相好をしてなはる」と、言つた。

「へえ――」と、Cは言つて、暫くしてK子とA子との横貌を眺めた。

　それからWは猶「K子とA子との顏に、佛相に肖てゐる所が、方々に有ること。さうして、斯ういふ人相をしてゐる人は、容易に佛道に入ることが能きるのであり、佛緣に餘程深い功德を生前に積むで現世に生れてきたことが、Wには直ぐはつきりと分る」といふやうなことを言ひ續けた。

　Wは更に話し續けて言ふのに、

――「K子とA子とは、斯程の有りがたい相好を具へ、佛道との結緣まことに疎かならぬ瑞相が、歷然と現はれてゐる。これに反して生前に淺からぬ罪業を負ふて、現世に生れてきたものは、如何ほど佛道に歸依しやうと、努めても、遂に正覺を得ることは難しい。さうして佛道歸依の本願が成就しないまゝで死んでしまつたものゝ妄執は、永く宙に迷ひ結ぼれ、猶、K子やA子などのやうな佛緣の深い幸なものを羨み慕ふ餘りに、K子やA子などの人達の周圍に群がつてくる。

中にも印度の佛弟子の末派どもや、或は佛敎以外の外道の輩で、長年の間にあらゆる艱難苦行をしつくしながら、終に見性の正覺を遂げ得ぬうちに死んでしまつた者どもの妄執は、殊に深刻に執拗であり、常住それ等の幽氣に融會してゐるWの心には、今も此の離座敷のうちに、さうした六人の靈鬼どもがK子とA子との佛緣を羨み慕ふて來てゐるのがむら〳〵と映る」——

——「その靈鬼が現に來てゐる證據として、皆がよく〳〵心耳を澄まして聽いてゐるならば、ある短切な撥ぢくやうな響が部屋の何處かに、間斷なく起きてゐるのを聞くことが能きる」——

——「それは靈鬼が訪ねて來るのを、自分で知らせる響である」——

Wは斯う言つて、懷中から小さな銀の香箱を取り出し、更に其の底から一摘みの純白な粉を、右横の朱檀の火鉢の火の上に燻べた。

K子とA子とは、その離座敷に來たことを、ほんとうに後悔した。後悔はしたものゝ、Wが最後に言つた響といふのを聞いてみやうともせずに、そのまゝ其の席から自分達の部屋に今更素氣なく歸つてくることは如何にも能きにくかつた。さうして、二人は一生懸命になつて怖ろしい心を沈着けてゐた。

「それ」と、Wが言つた。然しK子とA子とには何も聞こえなかつた。火鉢の中から騰つてくる白い煙が、非常に好い香をして、K子もA子も却つて其の香の方に氣をとられるやうだつた。

そこに、それは眞底から不思議であつた。戞然と幽徹な響が一つ、火鉢の底の邊でした。

其の響は皆に聞こえた。その時に、

「それ」と、Wが復た言つた。

二三秒たつた。復た同じやうな只だ前よりは少し大きい響が、今度は床の間の隣りの違棚の上の邊に起きた。

「それ」と、Wが復た言つた。

K子もA子もCも、その違棚の方を眺めた。Wは、

『聞こえましたやろ。靈鬼が來てます證だすな。未だ

何ぼでも聞こえまつせ」と、言ひ初めて、更に復た次のやうなことを話し續けた。

——「Wが瞑想三昧に入ると、能く宙に立つてゐる靈鬼どもを仰ぐことができる。靈鬼は非常に巨きな體軀をしてゐる。六尺の大男よりも未だ餘程背が高い。さうして黑色人種である。ぼろ〳〵の衣を纏ひ太い帶を締めてゐて、それに長い頑丈な刀を差してゐる。その眞黑な兩つの巨きな脚から、裾、帶、胸の方に仰いで行くのは、瞑想三昧の境に入つてゐても、實もつて怖ろし思はれる。猶更に黑い頸を見、黑い巨きな顏を見あげる時は、最も怖ろしい」——

——「その黑い巨きな顏は、靈鬼によつて一つ〳〵各別に違つてゐる。ある時は全く別の靈鬼が新しく來てゐることもあり、ある時は幾度も見たことのある同じ靈鬼が度々來てゐることもある。それ等の顏々は、あらゆる艱難苦行に忍びながら、竟に成道を果さぬまゝで最後を遂げた斷末魔の死顏である爲に、それは此上もなく凄い相好を現はしてゐる。殊に巨きな黑色人種の然うした死顏は、到底言ふことの能きないほどに眞に物凄い。然し、既に正覺を得てゐるWは、それ等の靈鬼よりは、幾段も上位にゐるのであり、それに連れて法力をも具有してゐる爲に、怖ろしさに耐えて、靈鬼の凄愴な顏を仰ぎながら、その永劫に歸する所なき靈鬼の執着を憫むでやる」——

——「この靈鬼は然し聊かも惡性を具えてはゐない。顏と姿の凄く怖ろしいのに反して、極めて柔かな溫い素直な性情を有つてゐる。さうして三千年以上も宙に迷ひ結ぼれてゐる法の上の妄執に對しては、Wは瞑想三昧の境に入るごとに、その靈鬼を招いて憫むでやつてゐる」——

Wは此處まで話して來て、暫く默つてゐた。

K子とA子とは、その機會に漸く餘裕を得て、其のまゝWに挨拶をして、Cと一所に母屋の自分達の十疊の座敷に急いで歸つてきた。

□

冬になつても、N家の前代の當主Z老人は別莊から

歸つて來なかつた。さうして、「リョマチスが思はしくない爲に、此の冬は其のまゝ別莊にゐやうと思ふ。春にでもなつたならば歸つてみることにしやう。此の前に行つてゐるWには必ず其れまで續いて逗留して貰ふやうに――」

との意味の手紙が、やはりK子とA子とCとの三人の名宛にして送られた。

K子とA子とは、靈鬼の話を聞いた後には、未だ一度もWの離座敷に行かなかつた。Z老人が暫く歸つてこないことは、二人にとつて本當に幸であつた。

然しながら、あの幽微な短切な響は、K子とA子の二人の部屋の中にでも、その後は頻りに聞こえるやうになり、二人の耳に其がはつきりと聞こえるやうになつてきた。殊に、夜になり床に就き、靈鬼の話を聞いて以來は、二人とも眠られぬまゝに深夜になつて行くのに連れて其の響の起きるのが益々多くなり猶時には非常に大きな音がする。

Wの靈鬼の話の印象が、二人に漸く深くなつてきて、それは何と言ひやうもない不氣味な凄い感じに、時々襲はれるやうになつてきた。

さうして二人とも自分ながら困つてゐる所に、ちようどMが東京から遊びにきた。

今、Mが火鉢の傍で小説を讀むでゐるうちに、恰も復た其の響が火鉢の下に起きた。

□

以上のことを、MはK子とA子とから、交る〴〵聞くことが能きた。Mは忽ち「面白いな、すてきに面白い」と、思ひ込むで亢奮した。猶「今から直ぐにWの逗留してゐる離座敷に、K子とA子とM自身との三人で行き、自分をWに紹介して貰ひ、そこでWの正體を即座に觀破つてやる」と、Mは强烈に主張した。

「そんな事言ひなはつたかて、音がするんやもの、仕樣あらへんわ」と、A子は、さも思ひがけもない大事を聞かされたやうな表情をして、Mを俄かに凝視した。

K子も、

「そやわ」と、A子も同じやうな表情をして、A子に

直ぐ賛成した。

さういふ二人を制へるやうにして、Mは自分の希望を毫しも緩めずに主張し續けた末に、

「それでは、僕が獨りで離房に行つてきますよ」とまで言つた。

兎に角、MはA子とK子と同伴して、Cに案内されて到頭離座敷に行くことになり、Mと會ふことになつた。午後の八時すぎであつた。

□

Wは小さく鍛へかためたやうな體格を有つてゐた。それは黒猿のやうな薄黝い皮膚を、K子が話したとほりの白装束に包み、殊に額の濶い氣味のわるいほど長い面を特徴にして、八疊のちやうど中央に、全體の輪廓に動きのとれないやうな硬さを具えて、がつしりと坐つてゐた。

CがMを「陸軍の近衛の少尉はん」などゝ、長い語で冗々しく紹介した時に、Wは繊長い薄黝い指を、新しい疊の上に恭しく伸ばし、ひれ伏すやうに胸を下げきつて、如何にも鄭重に挨拶をした。其の

「へ、へ、成、さやうで御座りやすか、へ、それは〱へ、是は初めまして」と言ふ聲は、嗄れてゐながら强い充實した力を有つてゐた。

Mは極く無造作な御辭儀をしてしまつて、Wの半白な髪と、其の頭の鉢の大きさが、六號ぐらゐの帽子を冠りさうなのを瞰てゐた。起きあがつたWの長い面は顎が又良く發達してゐたので、Mは「辣薤の倒立」と謂はれてゐる友人の顔の型を聯想した。

Wは胸を起すと、睫毛の長い大きな眸で、Mの顔を直ぐ凝視し始めた。MもWの上擦がりの顔を瞶めてゐた。二人は全く正對して坐つてゐた。さうして三分間ばかり經つた。Mは「此奴が何を喋くだらう」と、待つてゐた。すると、Wは俄かに眸の力を柔げて、

「何で御坐りやすな、ほんまにお珍しい。ま、然し何とも妙で御座りやすな」と言ひ初めて、復たMの顔を改めて凝視した末に、次のやうなことを、底力のこもつた嗄れた聲で語り始めた。

――「佛顏を見ると、何れにも眉の間に、點のやうな圓が有る。あれは『白毫』といつて、無量の國を照らす白い光が佛の眉間からさしてゐるのを表はしたもので、佛となれば自然に其の白毫ができてくる。まことに尊いきわみの光である」――

――「其の光がMの眉の間に微かに光つてゐる。K子とA子との眉間には、たゞ白毫の氣が集まつてゐるのが、灰白く現はれてゐるけれども、光をもつまでには二人の心が未だ精錬されてゐない。それがMの眉間のは今現に微さく光つてゐる。斯うい人は千人に一人か、萬人に一人か、それも殆ど有りはしないほどの眞に稀有の人である」――

Mは之を聞いて、「さあ始まつた」と思ひながら、暫く默つてゐた。Wはまた。

――「斯うしてK子、A子、M、Wなどの皆佛に親しい緣の有る者達が集まつてゐる此の一室には、靈鬼の群が簇々と入來して、羨慕の心を殊に烈しく寄せてゐる。わけてMの周圍には最も多く立つてゐる。靈鬼の訪れの響が、今夜は非常に殷に起きてゐる」――と物しづかに娓々と話しつゞけながら、WはK子の話したやうに、白い香を直ぐ傍の火鉢に燻べてゐた。

Mは坐つてゐる兩足が痺れてくるのを忍びながら、然う言ふWの長い薄黝い顏を瞶めてゐた。

そこに、Mの右の方に、部屋の隅の邊に、何といふ怪訝しさであらう、ピチッピチッと二つ連續した强い硬い短切な響が、Mの鼓膜を確かに衝いた。

「それ」と、Wが靜かに言つた、その聲と殆ど同時にMの左の天井の下に、「南岳」の書の額の邊にも、復たピチッと撥くやうな響が起つた。

Mは最初自分の鼓膜の錯覺ではあるまいかと疑ひ、次には淡い玄妙な感覺を萠し、遂に自分が信疑の界に動搖し始めるのを非認することが能きないやうになつた。さうして、聽覺が益々清澄してくるのにつれて、響は殆ど室の隨所に、或は大きく或は微かに、室の方々を點綴するやうに、幾つも續いて、其處彼處に、聚つたり散つたりしてゐるやうに、聽こえてきた。其等

は又悉くMの鼓膜にはつきりと透徹して、既に已に疑ふことの能きないほどに、響と響とが互に呼應してゐるやうにも、聽えるやうになつた。

Mは其の響の音波の本體を探すのに思ひ煩ひ、室の各所に閃くやうな響を聽きつゞけながら、切りに焦燥した。然し、それは總てが徒爲であつた。そこに考のつけやうが全くなかつた。

離房には電燈も瓦斯も引いてなかつたけれども、明るい空氣ランプの炎が、八疊の上と之に相應した容間に、ゆつたりとした光を飽和させてゐた。

さうして、天井、柱、楣、壁、たゞ其だけであつた。響は只だ響として聽くのより、仕方がなかつた。Wは復た話し始めた。

——「佛說阿彌陀經に、（舍利弗極樂國土には七重の欄楯七重の羅網ある七重の行樹あり、みなこれ四寶をもて周匝し圍繞せりとあるが、その『七重の行樹』を現前に見ることが能きる。また（舍利弗かの佛の國土に常に天樂をなす）と書いてあるが、その「天樂」の妙響を此處で聽くことも能きる。猶（晝夜曼陀羅華を降らす）とあるが、其の「曼陀羅華」の降つてくるのを現實に仰ぐことも能きる。佛土といひ極樂といつても、所詮は此の世の他には決してないのであるから、「阿彌陀經」の所說にしても、即ち悉く此の世の事を書いたものである。『七重の行樹』といひ、「天樂」といひ「曼陀羅華」といひ、實に吾々は悉く現實に見聞することが能きるのであり、また然なくば「佛說阿彌陀經」は虛言を書いたことになる」——

Wは斯う言つて、皆の顏を一わたり眺めてしまふとやがて眸を伏せ其の長い睫毛を瞞ましさうに緻かく搖かし、さながら其處に何等かの或る神秘な氣配を身にしみて感じてゐるやうな態度に成り始めた。

然うしたWの態度を凝視してゐたMは、その刹那に我ながら烈しい反感を湧きたゝした。さうして、

「そりや貴方、僕でも分りますよ。七重の行樹なんて天下の樹木は皆然うですよ。天樂などいふのは汽車の笛でも飴屋の喇叭でも僕が斯う言ふ音聲でもすつかり

天樂です。それから曼陀羅華だなんて、雨、雪、露、霰、皆立派な曼陀羅華で、そんな事は佛が態々說かなくつても、僕がちやんと自分で知つてます。靈鬼だなど〻いふ奴は、此處に連れてきて坐らして御覽なさい。僕が忽ち說法して直ぐ極樂に送りこんでやりますから」

Mは斯う述べたて〻、猶忽ち面白さうに、つい大聲をあげて笑つてしまつた。WはMの笑聲の終らぬうちに、やはり眸を伏せたま〻、獨りで呟くやうに、

南無阿彌陀佛、南無彌陀佛、なむあみだーなむあみだーなまいだーなまいだ」と、次第に短く連呼し始めたその嗄れた低濁な聲が微かに下ちて行つた末に、娓々と續いて未だ消えずに、其の唇ばかりが顫へてゐると思ふ途端に、俄かに其の薄黝い長面を、Mの顏前に突きつけるやうに擡ちあげるや否や、

「貴方はん、こ〻に一つ迷ふてゐる靈魂がゐます。よろしいか、これは貴方は知んなはらん迷魂やが、迷魂の方では貴方をよう知つてますのんや。この迷魂と貴方の靈魂とが今から話をしますのやが、何ないな話をしますやら、私が其の話を、貴方に取次いであげます故に、その話を貴方がとつくりと聽きなはつて、ほんまに解釋がつきなはつたら、もう其でよろしい、な、迷魂と貴方の靈魂との話でおますぞ」と、Wは徐かに言つた。

Wは續いて次のやうな會話を、諄々と同じ口調で談り始めた。眸を瞑ぢて、兩掌を膝の上で合せながら。

□

Mの靈魂と迷魂との會話（Wの話の意味）

靈魂。　己の衷には迷魂がゐる、今夜はこの迷魂が迷魂として、其のま〻極くはつきりと自分に映るこの迷魂は己の衷に根を卸し着けてはゐない。己の衷の中空に自由氣球のやうに浮揚してゐる。そして、一點に停まつてゐる。極く靜かな態をしてゐる。更に搖かない。

疲憊も。焦燥も。煩惱も、盲動も、弛緩も、輕佻も、從來から己が自分で嫌忌してゐる夫等は皆此の

迷魂が原動力になつて爲る發作である。

この迷魂は何時ごろから、己の衷に宿り、そして己の一部に成りかゝつてゐるのだらう？　然し己の一部にでも成り了つてゐるとは思はれない。この迷魂は、己の所有であるのは、確かなことであつても、決して己ではない。卽ち、己の所有でありながら、然し己とは別個のものである。

迷魂。己は御前が生きた時に、業に御前に宿つたのだ。

御前は、己が御前ではないと言ふ。けれども、己は現世の動性の本體であり、現世の一面夫れ自身が動的であるのは、己の本性の揮發する仕業である。現世の一面に動性を與へることが、端的に己の本性であるのだ。乃必然に己は人といふ人の靈魂に悉く宿る。宿るのが總てに於て眞實なのだ。故に、現世の一面が卽ち動性と離れることが能きないのだ。然るに御前は己を脫り除かうとしてゐる。好し、己を御前から引離して御覧、その時の御前は何ういふ態で居ると思ふ？　その時こそ御前の衷は空洞に成つてしまう。御前はそこで脫殼になるのだ！　何の力もそこに有りやうはなくなるのだ。御前は、其を知つてゐるか？　恐らくは知るまい。知つてゐる筈はない。

靈魂。いかにも、己は知らない。

迷魂。さうだらう。それだのに御前は、己を取り除きさへすれば、己の居た跡に、別の力——天から降つてでもくるやうな力が、己の代りに、御前の衷に直ぐ充實するやうに堅く信じてゐる。然し、御前は事實を知らない。御前の信じてゐる其は虛だ！　己の居なくなつた跡に、そんな別の力が入つてくるやうなことは、理則のうへから決して無いことなのだよ。

御前は然も其の別の力を信じてゐる。そして、其の力の有るか無しかに就いては、毫しも考へはしないのだ。たゞ然うした力が有るものと、御前の全部が最初から思ひこんでしまつて、更に毫しも疑つて

ゐない。これは大きな盲信ではないか！　この盲信の程度が、御前には大きいだけに、御前は常に苦しんでゐる。自分の盲信の爲に苦しむでゐる。そして其の苦しみの由來に就ても、御前は自分の盲信の爲であるのを無論全く知らない。御前が自分の盲信を盲信と知らないだけに、其の苦しみを滅却することは當然能きない。

　御前は己の存在を知つてゐる。猶、己の本體をまでも知つてゐると勝手に思つてゐる。さうして、己の存在と本體とを知つてゐることが、御前一個の一部の自覺だなどゝ、全く勝手に信じてゐる。然し、今、御前は解つたらう。それは眞實の自覺ではない。御前が御前の盲信を盲信と知ることが、眞の自覺なのだ。御前の思つてゐるやうな、天から降つてくるやうな力といふものなどは、實際は最初からないものなのだ。いゝか。最初から無いものを、何故、有ると御前は初めから思ひこんでしまつたのだ。それが、御前の癖なのだ。前の世から與へられてゐた實に引業な癖なのだ！　莫迦な。だから御前に一番好いことは、己を蛇や毛蟲のやうに嫌はずに、己を可愛いがつたら好いではないか。これが御前に解らないか？　御前も可哀さうなものではないか。

靈魂。そんなことはない。己は御前が何うしても嫌なのだ。

――「嫌なのだ」と言つたのが、靈魂自身に苦しかつた。迷魂は默つてしまつた。

――靈魂の苦しさが擴がつてきた。靈魂は混沌とした黑い色に掩はれた。黑い色は渦を卷いてゐる。さうして其の中に潜んでゐる迷魂を、黑い渦が隱してしまつた。迷魂の行方が判らなくなつてしまつた。靈魂は暫く黑い渦に包まれてゐた。やがて總てが消えた。

□

　Wの右の話は、Mをすつかり愕かせた。それはMが冬休暇になる前の日の、雪の降つてゐた深夜のことであつた。東京の家の二階で、Mは自分の胸のなかに「矛盾」の姿を明かに認識して、「自分」と其の「矛盾」と

が會話したことがあつた。その會話のとほりを、Wは總て話したのであつた。それは「M自身」がWの所謂『Mの靈魂』になり、Mの認めた「矛盾」がWの所謂『迷魂』になつてゐる他は、其の二つの總ての會話を、そつくりと其のまゝ、Wが話したのであつた。

Mは本當に愕き猶少し懼れ始めた。そこに、Wは眸を瞬く開いて、

『ま、何うやら御心あたりが御坐りますやろ。貴方は未だほんまに御若いのやによつて、何でも是からでおます』と、獨言のやうに言つた。

Mは默つてゐた。何か應へなければならぬとは、十分に思ひながら、愕に塞がれて默つてゐた。さうして暫く經つた。

K子とA子とは、MをWの前に連れてきたことを、最う餘程前から、困り〳〵してゐるのらしかつた。Mが默つて考えてゐるのを、直ぐに好い機會にして、二人は同時にMを促がすやうに、Wに恭しく挨拶をしてしまつた。Mは翌日の午前に再會することを、Wと約束した。Wは快く承諾して「翌日の朝には、Mに獨りで來て貰ひたい」と言つた。Mも其を快く承諾した。

K子A子とMとCとの四人が、連れだつて母屋の方に歸つてきた時は、夜の十一時前であつた。

□

Mは其の夜を徹して、寢床の中で、眼を覺ましてゐた。乳の間の直ぐ上に、Wの淡黝い面が、はつきりと宙に浮いてゐるやうに思はれるのが、Mの微睡しやうとする意識を幾度となく舊に復し、睡氣を離れたMは復たWの有つてゐる響の奇蹟に就いて、的もなく回考してみなければならなかつた。

人並を超えて、負けじ魂の餘程强いMは、遂に床のうへに坐つてしまつた。空氣の肌觸りと、鼻腔の味とは、それが曉にちかいことを、Mに仄かに敎へた。

Mは燈を態と消してしまつた其の室で、鳩尾から下を、掛蒲團で隙間もなく厚く包み、坐禪するやうに結跏して、胸を起すと、長い息を徐かに吐いた。さうして、Wを對象にして、一時に强烈な敵愾心が、Mの全

部に快く充溢し始めた。

　MはWに對する熾烈な敵愾心の爲に、殆ど極度まで亢奮しながら、然し先づ自意識を整へる爲に、一切の敵覺を絶滅するやうに、自ら祈念し始めた。さうして其の祈念に對して、驀然と全意識を集中した。激しく靈鐘を連打するやうに、Mの意識は躍動の波をうち、暗から暗へと、鋭く透徹して行つた。その途中の或る瞬間に、Mは自分の眉間の恰も中央に、激しい痛みを感覺した。その痛感は意識の力が眉間の一點に凝集して、猶、直後に破裂するまでに壓搾せられ、同時に極度まで充實して、終に眉間の神經を刺戟する爲に起る痛みであるのを、Mは直ぐ自身に知覺した。さうしてWの「白毫」と謂ふのを、當面に思出した。

　Mは自身の眉間に攅まつてゐる痛みを、故意に解弛する爲に、五分間ばかりを費した。さうしてWの『白毫』の話が、強ちに荒唐無稽のことではないやうに、思はれてきた。また腦の灰白質と『白毫』とが、白いといふのに共通し、また神經脈が白色であることなどを、Mは徒らに聯想し始めた。そこに、意識の凝集――結晶――白――光、等と、Mは咄嗟に回考した。佛像の眉間のうへに在る小さな圓い突起が、やはりWの言ふやうに、何等かの意義を含むでゐるやうに思はれて軈て淡い信心が、萌してきた。

　雨戸の外側に、晨の氣配が薄くかゝつてゐるのを感じながら、Mは仆れるやうに、寢床のうへに仰臥した。掛蒲團を兩乳の邊まで引きあげると、柔く睡り始めた。

□

　朝の八時すぎに、Mは眼を覺ました。

　其の日の午後になつて、Mは獨りでWの居る離座敷を訪ね、Wと自分と唯二人だけで、一時間あまり對座しながら、Wの話を聽いた。

　Wは更に「觀無量壽經」のうちの、「十想觀」と謂ふ十種の感覺を、現實のうへに傳授することも能きるなどゝ、Mに告げた。それ等の傳授の中には「日想觀」と稱するものに、太陽の親しみを視覺に訴へる術策があり、

或は「水想觀」と稱するものに、地上の水氣を介して、天地眼合の文を、同じく視野に映すといふ、何れも神秘的な手段が含まれてゐること等を、WはMに聽かせた。

然しながら、Wは又『Mが未だ全くWを信じてはゐないばかりでなく、寧ろ烈しい反抗心を備へてゐる爲に其の小さな我をM自身が脱却しない限りは經文の眞實を、Mに授けることは許されない』といふ意味を、言ひ添えた。その話の間に、前夜のとほりの短切な彈くやうな響が、殆ど室の隨所に閃くやうに響き交はしてゐた。

Mには Wを稍畏れながら甚しく怪しむ他に、Wを信ずる心は毫しも起きて來なかつた。さうして、畏れと怪しみとに鎖ざゝれて、Mは其處の離座敷を出てきた。

A子とK子とは、Mを待ちくたびれてゐた。Mは、『大變な奴ですよ。あの爺は』と、言つた。しかし其の「大變」の意味は、自分にも分らなかつた。Mは驚異と畏怖とに自ら襲はれながら、只だ徒らに憤慨してゐ

た。

『えらい香のかざがするわ』と、K子が言つた。

Wは携へてゐた小さな香爐に、殆ど限りない香を焚き、その白い煙はWとMとの顔の間に蒸騰してゐた。其の煙の香がMの着物に浸透してゐるのであつた。

夕方になつて、Mは自分の父の家に歸つてきた。Mの休暇の時限は、其の夜の列車で、東京に歸つて來なければならなかつた。

□

歸京後に、MはA子とK子とに、直ぐ手紙を書いた。その返事は折かへして、Mの手許に音信せられた。それは「Wは强いて皆に離別を告げ、Z老人には彼自身から總てを辯解する旨をも言ひ添えて、何か餘程狼狽してゐるやうに、俥を傭つて貰ひ、市の南西のN停車場に行つて、そこから南へW市までの切符を購つた。私達は内々で本當に安心した」との意味が、A子とK子との連名で、比較的詳細に認められてゐた。

MはWの貽して去つた奇蹟を解決したい爲に、姓ば

かりを識つてゐたF博士の私宅を探して訪問し、F博士に快く引見せられた時に、Wに關する一切を、成し得る限り審かに提供して、F博士の感想を訊ねてみた。

F博士はMの話を終始を通じて、餘ほど熱心に聽取りながら、幾度か反問した末に、次のやうに答へた。

『それは實に惜しいことをしたと私は思ふ。阿彌陀經や觀無量壽經の内容を、其のまゝ現實の視聽に感覺させる法術は、古代の印度佛教の一派が、最も尊ぶべき秘法として、相傳したものである。そのW君の話は、彼自身にとつては、或は荒唐無稽のもので無かつたらうと想はれる。貴方が其の法術に接して來なかつたことは、眞に遺憾のことに思はれる。

謂はゆる靈鬼云々に就ては、私は知らない。それは私にとつて全く初めて聞き得た新しいことである。然し、注意すべきはW君の焚いた香の本質如何でなければならぬ。其が先づ嗅覺を刺戟し、次で腦の中樞神經を刺戟する時に、延いて聽神經に錯覺を釀成するなどの作用が、全く無いとは言はれない。貴方がW君の携へてゐた香の小さな粉末さへも、手に入れることを注意しなかつたのは、貴方の手落であつたやうに思はれる。またK子とA子との二婦人が、自分の部屋に居ながら、その響を聞いてゐたのは、殘續暗示に類する作用を、二婦人が自ら起してゐたやうに考へられる。

要するに、貴方はW君に對して、總じて亢奮しすぎてゐたやうに推察される。凡ての事象を探訪する時に人は徒らに亢奮する。然し悉く冷靜且つ犀利でなければならぬ。さうして、貴方はW君の素狀に就いて、今一應Z君に質してみる必要がある。貴方は今までは大方失敗してゐる。さうではないか』

F博士の話は是で終つた。Mは自分達の聯隊に歸つてきた。さうしてZ老人に手紙を書き、Wに關するZ老人の一切の知識を傳へて貰ひたいと依囑した。其の返信は折かへして送られた。

Z老人の代筆の返信には、Mが徒らにWに反抗し、Wの氣色を損ひ、その爲にWがN家を去つたことにしてMを叱責する意味が、簡潔に認められてゐた。さうし

て、Wの紊状などに就いては、何も教へてゐなかつた。Mは乙老人の返信を是認することが能きなかつた。然しZ老人の一徹な性格を熟知してゐる爲に、そのうへ押しかへして反問することを避けた。

Wの消息は爾來Mには全く知れなかつた。MはF博士に言はれたやうに自業自得の不徹底なまゝに、Wの貽して去つた奇蹟をM自身の失敗と共に、今も其のまゝ記憶してゐる。

授爵の噂ある人々

鐵拳禪

一

病氣の中でも、伯大隈の侯爵病と、大倉喜八郎の男爵病とは、生命に別條の無いものとされて居た。大隈も薩長藩閥から排斥されずに要路に立つて居れば、今時分は既に侯爵にはなつて居た。貧か後輩の桂が公爵小村ですら侯爵になつたのだから、都合好く行けば、山縣や大山同様に公爵になつて居るべきだ。夫れがならずに、早稲田田甫で盛んに吹き立て吹き捲つて居た。毛唐や田吾作には非常に通りが善く、伯大隈と云へば大明神のやうに尊敬されたが、吹けば吹くほど長閥からは睨まれ、誹られ、敬遠された。進歩黨總理で威張つて居る際は、抵抗力も強く、何の糞ッと睨め返して居たが、政界から引退すると、漸く箍が緩んだと見え、多少迎合するやうな傾向を生じた。公桂が新政黨を創立する時分から彼等に接近し、軍閥の連中とも交驩する程の寛容な氣分になつた。これは伯大隈の老後の心中を讀んだ桂が、例の魔力ある手で輕く大隈の肩を叩いて、近いうちに侯爵に奏薦すると云ふ樣な事を、少し遠くなつた彼れの耳に囁いたのが原因だらうとの事だ。爾來大隈も桂に厚意を表し、桂も亦大隈を操つて居たが、夫人綾子は殊の外侯爵たらん期待の前に微笑して居ると傳へられた。處が、公桂は政戰に悲慘の最後を遂げたので、伯大隈も一寸手の出し所が無かつたが、甘諸蔓が切れて伯山本が失脚し、誰も内閣の引受人が無いので、彼れは時機到來と大に喜び、元老と輿論とを踏臺にして隻脚を起したのである。此の時分は侯爵病も可

なり暴進して居たので、内閣の壽命を維持する爲めには、善惡共に一切の手段を講じた。けれども、彼れの内閣は當初の聲明を反古とし、其の政綱の如きも、破綻百出の有様で漸く國民の信望を失ひ政敵の乘ずる所となつたのであるが、兎に角御大典までの聲に推されて、御大典まで無事に漕ぎ付けた。

大倉の男爵病は、公伊藤の得意時代からの宿痾で、幾たびか彼れの手にすがつて、平癒を祈つたか知れぬ。男爵にさへなれば、財產の半分位は運動費に散ずるも惜しくないと、云つたとか云はないとか、其様な事まで問題になつた事があつた。日露戰役後に、實業家で男爵を授けられた者が二三のみならずあるが、何時も彼れは取り除けられた。悴の嫁には伯爵家の令孃を貰つて、家門を補彩した位であるから、身分も少しは向上してゐるのだが、世間では依然として昨日の魚屋喜八のやうに嘲つてゐる。夫れに某戰役の際陸軍御用人で忠勤を擢んづべき筈なるに、軍用麵麭の罐詰に石を詰めたと云ふので非難され、宮內省あたりの受が甚だ宜しくない。大倉の是れまで、男爵たるべくして男爵たり得ないのは此處にありと云ふ事だ。今次も大倉の授爵に關しては、非常に異論があるさうだ。大隈の手盛り侯爵に就ても、政界では攻擊の矢を擬してゐる。

二

大倉は、事業界には必ず成功すと褒書されてゐる、辛抱强く、金を溜め込むことの上手な越後人だ。彼れの一生は立志小說を讀むやうで、多種多様の變化あり、波瀾がある。彼れは天保八年九月の生れで、年十八の時に、友の三太郞や今朝藏と別を告げて新發田を後にし、今日越後から來る三助よりも見窄らしい尻切半纒を着て江戸に出で、草鞋を解いたのは某商店の店先であつた。夫れから天秤棒を擔いで、ぼて振りをやつて居たが、素より商機に機敏な喜八郞の事とて、都會の空氣に馴染むに從つて、すつかり商賣の呼吸を覺えた。愈よ一本立ちになつて、雜貨商店などを開いたが、大して甘い汁も汲へないので、慶應元年の頃には早くも商賣換をして鐵砲彈藥、其他舶來の武器を販賣したが、これでは大に味を嘗めた。そこで何でも舶來で儲けるに限ると思つた彼れは、王政維新後直に羅紗毛布の輸入販賣をやり、毛唐を傭つて洋服屋を開いた。『越後のふと』で澄まして居た彼れも、毛唐と接するに從つて、追々ベーロシャ語を覺え、一ぱしのハイカラとなつて、明治五年に海外に押渡り、文明の商工業を視察して歸朝し、同七年に歐米の制に倣つて大倉組を組織し、彼我產物の直輸出入を試みた。處が岡屋に當つて商勢緊張したので、九年には最う英國倫敦に支店を設けるに至つた。今日こそ三井三菱が海外に目を注ぎ、支店を要地に設けて居れ、其の先鞭を著けたのはぼて振り出身の喜八郞である。喜八郞なども、碑文をかかれる時は、『大資聰明、商機に敏にして、夙に眼を海外に注ぎ』と來る格で、天晴の先覺者となり、林子平と識見の光を爭ふことになるかも知れぬ。それは兎に角、彼れは天才的の事業家で、確かに商機を見るの明がある。西南戰役後は可なり身代も太り、二十年には土木會社を起し、土木建築の請負でしこたま儲けた。彼れは斯の如く、時勢を見て諸種の事業を起し、儲け

ることには何でも首を突込んだのである。併し彼れは儲ける一方の時には、殆んど手段を擇ばず、儲けることに全力を擧げてゐる。毛虱のやうに政府者の內に食ひ入る事は其の最も得意とする所で、彼れは御用商人として活動した長い年月の間に、如何程其の膏血を吸うたか知れぬ。日淸、日露の二大戰役後に、彼れの財力が心臟麻痺に罹る程に肥え太つたのは、何人の目にも著く所である。夫れが軍國に對して忠なる所以か何うか、國家に對しての功績か何うか、人に依つて色々解釋の異なる事であらう。

大倉は斯うして、尻切半纏から柔かい着物を着て、自動車に巷の塵を捲り立てるやうになつた。彼れが蛙のやうな口をして居るから、金が溜るのだと云ふ人もあるが、彼れの今日を成し得たのは、事業的の頭腦があるからである。夫れに彼れは太ッ腹で、時によると、人の意表外な事業を企てることがある。細心な者から見ると、「算盤の桁を外れた事業のやうに思はれるが、彼れは時勢の推移を敏感して試みるので、損どころか算盤の桁外れの暴利を豫想してゐるのだ。だから、彼れは人から非難される。恰も非難に生れて非難に死ぬやうな男だが、安田の一生懸命に溜め込んで居るに比すれば、少しは罪滅しもやつてゐる。濟生會には百萬圓を寄附してゐる。美術館を拵つて國防費中に献金した事もある。東京・大阪・京城の三個所に商業學校を創立して育英に盡してゐる。縱令彼れが男爵病の致す所であり、自己廣告の爲めであるとしても、高利を貸付けるより外に社會的事業に對し反省を持たない者に比すれば、何程か勝つて居るとも謂へよう。

森村銀行の森村市左衞門も、大倉の如く裸一貫から仕上げた男であるが、謹直を看板にしてゐるだけ非難が少い。大倉より二つ年下の七十七歲である。色氣も、油氣も抜けたせゐか、だいぶ老い込んで見える。是れでも元は大道商人で、鋭い目を八方に配つて、前通り何錢抔と云つて居たものだ。金持になる者は、何處か人並勝れた手腕があると見えて、艱難辛苦を嘗め、辛抱に辛抱を仕抜いて、玻璃玉を水晶に賣つたやうな富を作つた。夫れから例の碑文式に云へば『夙に海外貿易に從事し』となつて、最初から貿易で巨利を博したやうに思はれるが、其の基礎を作る迄は並大抵の骨折では無かつた。事業界に在つては、大倉の色氣がなく、諸種の方面に關係はしないが、夫れでも富士製紙や、富士瓦斯の相談役になつてゐる。事業に對して創意あり、興味を持つと云つた風の人では無く、飽くまで貿易商人で通さうとして居る。修身齊家を標榜する所は安田に似て居るが、安田よりも眞實な所がある。安田は如何に勤儉力行を力說しても、僞善の皮を被つて居るかに思はれ、人に依つては鼻先で笑ふ。が、森村のは縱令附焼刃にもせよ、實行に現はれるので、信を措くことが出來る。大倉は狂歌や一中節で、自ら趣味の人に成り澄まして居るが、森村はさうした淺薄な趣味に沒頭せず、身を以て人を率ゐようとしてゐる。餘りに心身鍛錬や修養に凝つて、飛んでも無い山師などに擔がれるのは感服もせぬが、善的方面の修養を怠るまいとする努力は多とすべきである。金には吝な方だが、社會的事業に對しては、投資

の惜しからざるを風を示す。現に小規模ながら育英の業もやつてゐる。慈善事業に舌も出さないと云はれる安田に比すれば、其の志に於て霄壤の差がある。曾て某女が劇場建設を思ひ立ち、目白僧園の善智識の紹介を以て會つたが、修身齊家の上より其の不心得を說破し、社會公共の事業になら一臂の勞を惜まないが、淫靡娛樂的の計畫には贊成する事が出來ぬときつぱり斷つたさうである。是れは至つて些細な事ではあるが、彼れの餘裕のない、謹直な性格が目に見えるやうだ。何でもやの大倉は、帝國劇場に關係し、其の愛嬢も俳優の後援を辭さないのだが、森村には到底そんな馬鹿な眞似は出來ないのである。

三

三井高保の兄弟は、二人まで男爵になつてゐる。兄の八郎次郎が先年授爵され、弟の八郎右衛門は宗家を繼ぎ、明治二十九年男爵を授けられた。高保は嘉永三年五月の生れで、明治四年京都府勸業課の役人を勤め、後、京都博覽會社の頭取となつた。別に取り立てゝ是れぞと云ふ閱歷のある人ではないが、二十年の頃歐米を遊歷し、諸銀行會社の事業を視察したと云ふ事は、彼れが半生の頁を飾つてゐる。現に三井銀行社長として、其の行務を主宰してゐるが、其の部下に早川・池田・米山等の德望家乃至手腕家が控へて居るから、自ら手を下す程の事もないのである。盲判を捺してると云へば語弊はあるが、椅子に凭つて端然としてさへ居れば、夫れで睨みが利くのである。下手にこせついて、行務をほじくらず大綱を總括する所に、彼れの品格と、鷹揚さがあるのだ。

古河虎之助は、足尾礦毒事件で有名な古河鑛業會社の代表社員である。父は市兵衛と云ふ頑固な、丁髷爺で、運・鈍・根の三個格言で身代を築き上げた人物である。此の親爺は何と思つたものか、伯陸奥宗光の二男の潤吉を養子として、家督を相續させた。虎之助は即ち其の死後を承けたので、三代目に當るのだ。明治二十年一月の生れの青年で、所謂お坊ちやんである。夫れに細君は、侯西鄕從道の娘で、不二子と云ふ美人だから、生活向までが貴族的で、昔の丁髷時代の面影は殆んど無いのだ。富豪の貴族化は、獨り古河に止まらないが、かの丁髷爺の末だけに、殊に痛切に感ずる。彼れは慶應義塾中途退學後米國に航し、コロンビヤ大學に學んだ。卒業後、得たる所の新智識を以て、各州の鑛山を視察し、數年前に歸朝したので、洋行歸りの匂は未だ全く拔け切らない。事業其物よりも、運動に興味を持つてゐる樣な所も、矢張其の餘臭であらう。東北大學の創立費中に百六十萬圓を寄附したのは、古河家の矜りであるが、之は原敬の盡力になつたので、彼れ自身の發意ではない。併し彼れも、米國の新空氣に觸れた男だから、我利以外に社會的事業に投資する事だらうが、先づ第一に第二の鑛毒事件を惹き起さぬやうに、鑛毒豫防の方法を確實に講じ、民命を害はないやうにするは急務である。鑛毒男爵のニックネームを得ぬやう、注意の上にも注意を加ふるは、銅山新王たる彼れの一大任務であらねばならぬ。

法博穗積陳重は、男澁澤の女婿だ。伜の重遠は、又長閥の伯兒玉と緣を結んでゐる。彼れは何れより見ても、政府の要路から機嫌を取られる

地位にある。夫れに明治十四年以來法科大學に關係し、大學長にまで進んだ閲歴もあり、勅選議員になつた經歴もある。文相の椅子に据えて、何れの方面にも都合の好かるべきは、何人の目にも映ずる所である。第三次桂内閣の時、彼れを文相に擬し、澁澤を利用しようとしたが、彼れは容易に引張り出されなんだ。大隈内閣でも、彼れに色氣が無かつたでもないが、肘鐵を食ふのを怖れて、直接には口說なかつた。が、澁澤との關係上、彼れを優遇することを忘れてはならなかつた。學者としては法典改修の功勞があり、財界にも閥族にも間接に勢力が扶植されてあるから、山川を擧げて彼れを逸する事は出來ないのだ。穗積は宇和島の人で、安政二年七月生れである。始め藩校明倫館に學び、次で貢進生となつて東京に出で、法律學を開成學校に學んだ。後英國に留學を命ぜられ、十二年より伯林大學で法理を研究すること二年餘、十四年歸朝して大學の先生となつたのである。理博山川健次郎は會津の人、穗積よりは一歲の年長である。明治二年上京して英學を修め、翌年工學修業の爲め獨逸に留學を命ぜられ、在留三年、バチエラー・オブ・フヰロソフヰーの學位を得て歸朝した。爾來東京開成學校、理科大學等の教授となり、理科大學長を經て、帝大總長に進み、勇退して明治專門學校長となり、再び起されて九大總長となり、轉じて東大總長となつて現今に至つたのだ。三十七年勅選議員となり、又高等教育會議員にも擧げられてゐる。穗積は自己の研鑽する法理の爲めに官途を退き、敬虔なる學徒の生活に入つたが、山川は帝大の勢力を擁して、教育界に顧眄してゐる。

穗積は往年法科に勢力を張つた時分、學閥の扶植者として多くの敵を作つた。で、彼れと反對の側に立つ者は、彼れを依怙偏頗な、策士的人物のやうに貶して居た。弟の八束には何程か、さうした專横が見えたが、彼れは餘り其樣な事には拘泥しない風であつた。が、自分の乾兒を引立てる爲めには、多少の手心は免れなかつたであらう。山川は氣骨稜々たる人物ではあるが、可なりに策を弄するやうだ。千里眼婦人の現はれた際は、彼れが唯一の專賣たる物理學の權威の失墜を怖れて、小刀細工を用ゐたやうに聞えてゐる。又今次の大學案に就ても、帝大の勢力を利用して、殊更に反抗を敢てするやうな形跡がある。彼れの自由に自己の意見を發表し、若くは勢力者に反抗して屈せざるは多とするに足るも、其の極、黨派的偏頗に墮する事あるは、餘り褒めたものでない。固いばかりが古武士の典型でない。人間には捌けた點もなければならぬ。幾ら變物でも、心の黑くなつた干大根のやうに、煮ても燒いても食へなくても仕方がない。何處かにふつくらした、面白味がなければならぬ。彼れの行動も、例の七博士事件の起つた際、首相桂から之を鎭撫して呉れとの內命が下つたにも拘らず、學界の爲めに政府の干渉を斥け、戶水の休職と共に引責辭職したあたりは、流石に見上げたものであつた。尤も彼れは、此の一事で硬骨の名を唄はれたのである。山川は律義者で、變物で、物事に一向頓著しないやうだが、却々能く氣が附いてゐる。穗積は悧巧なやうでも拔けた所はあるが。山川は愚直のやうだが機鋒辛辣な所がある。一は學者肌なら、一は政治家肌である。一は事務よりも學理に走る

が、一は學理よりも事務に聰明である。外山の帝大總長として、比較的うまくやつて行けるのは、信望以上に此の手腕があるからである。

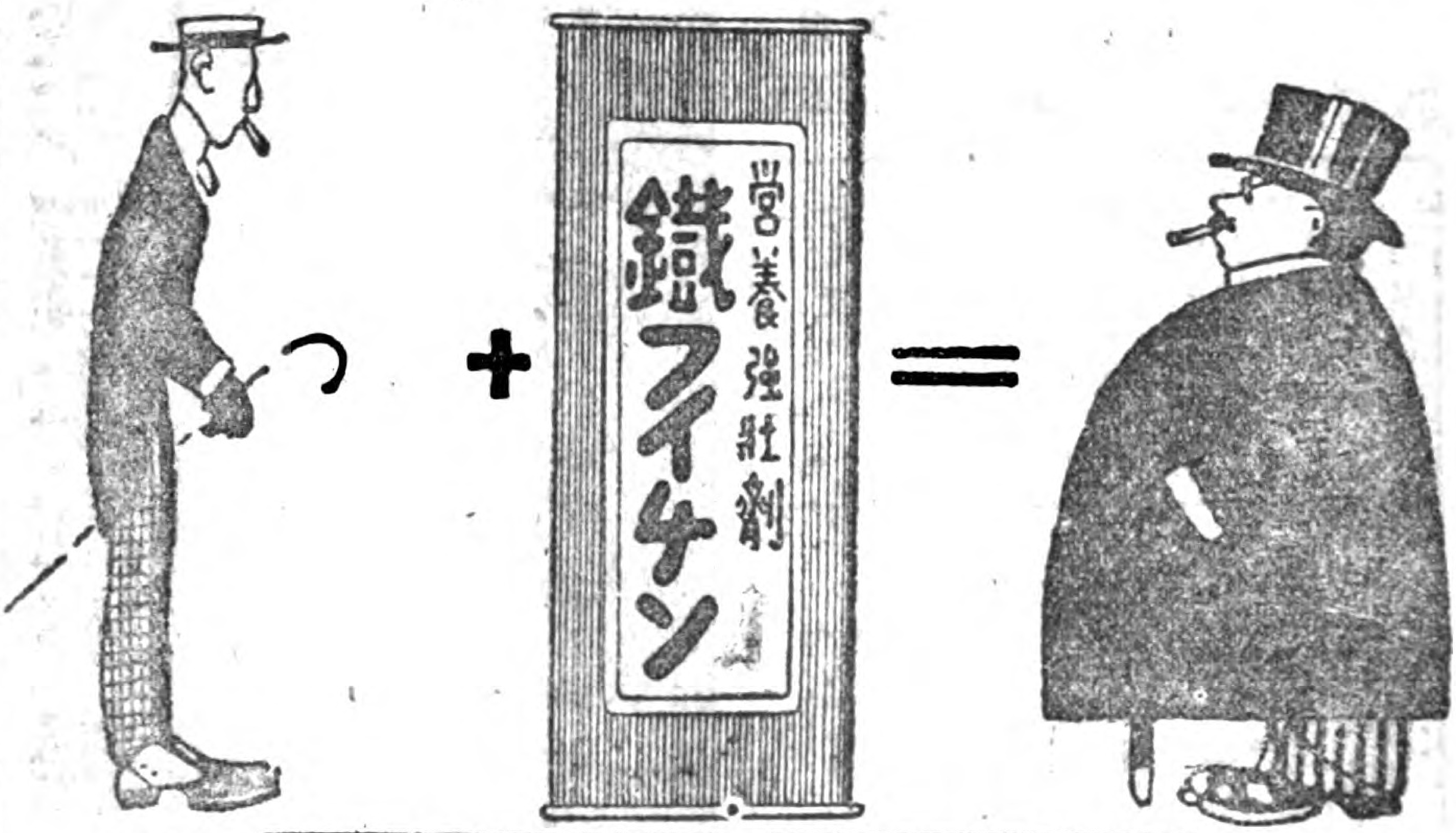
四

田中芳男は信州笠松の人で、大倉と同年の七十九だ。大倉は財界の出世者だが、田中は學界の立身者だ。彼れは理博伊藤圭介に就て博物學を修め、草木金石の實地研究をなすこと多年、頗る得る所があつたさうだ。明治元年開成所御用掛となり、文部小教授、編修掛助等を經て、内務省に轉じ、權大丞、大書記官に進んだが、再轉して農商務大書記官となり、三轉して元老院議官に任ぜられたと云ふのが、彼れの官歷である。勿論何時も車前草や根芹ばかり食べ居た譯でなく、歷朔命を奉じて墺・米・佛等に赴いたから、洋食の作法は夙に心得て居た。今日こそ一部學界の人々より外に記憶せざれ、當時は新智識として相應に推重されたものだ。二十三年に勅選議員となり、次で錦鷄間祗侯となり、靜かに老を養うてゐる。長く官界に游泳して居れば、相當の所まで陞つたであらうと思ふが、根が植物研究家であるから、さう大した覇氣も、野心も持たず、温厚一方で通して來たのである。何かの雜誌に、時たま其の論文を見る位のもので、之を今日の人と稱するには、餘りに古臭くなつた。

文博三島毅は、天保元年十二月の生れて、最う八十六の老齢だが、講釋の態度姿勢は確かりしたものだ。流石は東宮侍講として、鳴した腕だと思はれる。彼れは昌平黌の出身で、明治五年に新治裁判所長となり、八年に大審院判事になつた、無風流の官歷を持つてゐる。十年官途を退いて、専ら漢學の研鑽に從事したが、十四年帝大教授に任ぜられ、斯道の爲めに大に氣を吐くを得た。殊に彼れが創立せる二松學舍は、將に廢滅に歸せんとする漢學界の一大支柱で、是れまで六千餘名の子弟を養つてゐる。作の中には変なぞを持つて、餘り感服されぬ者もあるが、彼れは盛んに妾女を容れて他に嫁入らせ、斤稱を賑かして居るだけで、素行上の非難はないやうだ。著す所の『詩書輯說』や、『中洲文稿』は、篤志者の間に珍重されてゐる。中洲とは彼れの號で、詩書共に平淡の中に一種の雅致はある。其の性格が、或は此の邊に流露しゐのかも知れぬ。世人は頑固一徹の親爺のやうに思つてるが、心の底には清水のやうな洒脫が流れてるやうだ。

京都府知事の大森鍾一は、官界の古物と云ふ印象以外に、其の記憶に浮ぶのは御大典擧行地の知事と云ふことである。知事で勅選議員になつてゐるのは、此の古物と、矢張是れも嘘の文相だけで終らうとしてる兵庫の服部一三だけだ。大森は靜岡の人て、其の官歷は造兵司に始まつてゐる。夫れより陸軍省、司法省を經廻つて、明治十三年に太政官權少書記官に進んだ。以後今日までの[illegible]年間に、參事院議官補、内務少書記官、内相秘書官、内務書記官、縣治局長、長崎・兵庫各縣知事、内務總務長官を經て、現職に納まつたのだ。本人はまだ納まつた積りでないかも知れぬが、今の府知事になつてから最う十四五年になる。風波の荒い官海では勿論のこと、達磨でも尻が腐る時分である。これから働いた所で内相になれるでもなし、養老役の錦鷄間祗侯ぐらゐが關の山だ。夫

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



腦力及體力を増加せんと欲せば鐵フイチンを服すべし

神經衰弱
身體衰弱
生殖器衰弱
特効新藥

鐵フイチン

鐵フイチンは食欲を進め身體の榮養を佳良となし體重を増加し殊に神經系の疾患及生殖器衰弱を治癒し服用後短時日にして著しく身體全般の健康を増加す

定價一罐（百五十瓦入）十七日乃至廿五日分　金貳圓四拾錢

說明書は神戸市江戸町百四番地瑞西パーセル化學工業會社日本學術部より無代進呈す

發賣元
東京日本橋區岩附町　友田商店
大阪市東區道修町　武田長兵衞

全國の有名藥店に販賣す萬一品切の節は直接發賣元宛御注文を乞ふ

（中付二の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

●實業之日本社が提供せる三大日記!!

大正五年 重要日記

四六版總布美本
定價四十錢
郵税八錢

(附東京市地圖)

此の活きたる日記

土用 七月二十日
舊六月廿一日 木曜 戊午

天候
温度

昨年の今日

氣象	温度	風	天氣
東京	九四	○	快晴
名古屋	九七	○	快晴
大阪	九一	北	快晴
福岡	八九	○	曇
新潟	九○	南	快晴
函館	八○	○	雨

▽新たに發見せる本日記の使命!!△

實業の日本社が提供する日記は、本社多年の經驗により、年々改良に改良を加へ、常に多大の好評を博し來れるが、飽くまでも使用者各位の便益を主とする本社は、至誠努力、更に明年度の日記には毎日、**昨年の今日**なる欄を設け、繙けば直ちに昨年の其日の温度、天候、期米正米の値段を知り、其日の出來事を思ひ起し、日記を繙くことが一種の興味となり、知らず識らず日記を繼續する助けとなるやう改良したれば蓋

(中付二の二)

發行所 東京南京橋紺屋町二十番地 實業之日本社出版部

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

醫學博士前田珍男子先生近著

眼と神經衰弱

最新刊

●神經衰弱は將に怖るべき一個の世紀病也。文明の進むに從つてそは社會のあらゆる階級を通じて浸透し、人生の幸福を奪ふ。眼は文明の窓也。神經衰弱は此の窓を通して入り、此の窓に現はる。本書は眼科專門の醫大家前田博士が多年實驗の新知識を傾けて主として眼と神經衰弱に關して詳論せるもの、眼を患ふ者は勿論、文明人必讀の著也。

定價金七拾錢
（郵稅六錢）
三六版總布上製美本

中澤臨川先生著

舊き文明より新らしき文明へ

●現代の文明は爛熟して其の弊に堪へざらんとし、新らしき文明は此の頽廢の地殼を破つて山岳を鳴動せしめ、將に將に全世界に火の柱を擧げんとす。是れを國家に見、是を國家に見る。本書は實に當代第一流の文明批評家、中澤臨川先生が、犀利なる眼識を以て此の當來の新文明の推移及び歸趨を明快に論ぜるもの、興味津々として盡きず、新人必讀の快著なり。

定價八拾五錢
（郵稅六錢）
菊半截總布上製美本

東京京橋南紺屋町
實業之日本社
出版部
振替口座三二六番

（中付二の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

れとも旨く行けば、宮中顧問官か。當年六十歳で、前大隈よりは十九も若いのだから、政界や財界の人々なら之から活動ざかりと云ふ所だ。彼れは比較的長く本省に居たので、大抵の顔は知つてゐる。彼れの女婿の中川望なども、猪小才ではあるが衛生局長になつてゐる。元來は多角形で、頭腦の冷靜な性だが、是等の勢力に負ふ所があるので、内相に反抗するやつた事がないでもない。知事としての貫祿は十分だが、だいぶひびが入つてゐるから、最う大して長い壽命とも思はれぬ。併し游泳で鍛へた腕ではあり、案外如才ない所もあるのだから、服部よりも巧く拔けるだらう。

御大典印象記

△曠古の盛典に參列して

文學博士　桑木嚴翼

幸ひに曠古の盛典に參列の光榮を得て、夢の如き數日を京都で過した。私は今顧て、その時々の感想を纏めやうとしても、たゞ我々の今まで思ひかけなかつた別趣の世界に行つたといふ感じがするばかりである。

十日の春興殿に於て、前庭に竝列する威儀の官人、殿上に端坐する奉仕の人々が古雅の裝ひ麗しきを見た時には、恰も繪卷物を觀るやうに先づ此の世ならぬ感じに打たれたが、暫くして微かに長く笙の音の聞えて森嚴の感四邊に滿ち崇高の念の身心に浸み渡るのを覺えた。聖上陛下の出御を遙かに拜し奉つた時は申すまでもなく、御禮拜あらせられるうちに聞ゆる御鈴の音の單調にして殆んど盡きるなき響きは、敬虔の感を益々深くして無限の世界に身を導かれて行くやうに思はれた。紫宸殿なる御即位の式は、賢所の儀式の神々しさに加へて勇ましく華やかなるところがあつた。庭上に居竝ぶ威儀の人々は前と同樣であつたが、日月大小の旛流が風に吹かれて翩翻として遙かに東山の翠黛に

映ずるさまは、宛然一幅の畫趣、實にこの御儀式は京都の自然と相結んで離れがたきものであるとの感を今更深くした。紫宸殿上高御座は右近の橘に遮られて拜するを得なかつたが、御帳臺の側に起立あらせらるゝ妃殿下の方々の氣高き御姿は繪のやうに麗しく遙かに拜せられた。高御座は伺ひ得ず勅語も遠くして拜聽するに至らなかつたが、參列の諸員何れも姿勢を整し敬虔の念を表して居るのを覩ては、宛然御姿を拜し御聲を耳にする如き感が有つた。大隈首相が彼の不自由なる老軀を以て階段を再度上下し南庭の西側を廻りて音吐朗々壽詞を奏し、萬歳を唱えた時は、私の胸は感激の念に充ち溢れた。斯くて此の御儀式は莊嚴を極め榮え行く我が國運の象徵となつたのである。

十一日の御神樂の儀は初めは前日の御式と異らなかつたが、次第に日の西山に薄れ行くに從つて神々しさを增し、聖上陛下の御禮拜あらせたまふうちに秋の日は遽かに暮れて、殿内は刻々薄闇に蔽はれてしまつた。陛下には微闇き廻廊を靜かに辿らせて入御あらせ給ふたが實に森嚴神秘の感に自然と頭の地に垂れるのを覺えた。陛下の入御と同時に殿内二三の場所に燈火は點ぜられ、暗き闇に燈影は流れて輝き、御簾を隔てゝ微かに人影の見ゆるのは實に幽玄の趣き深きものがあつた。御神樂は我々の退出後行はせられたので窺ひ知ることはできなかつたが、その御模樣を漏れ聞き神々しさを想像したばかりである。

しかし私共に偉大なる印象を與へられたのは實に大嘗祭の御儀である。私共は夜の闇につゝまれた幄舍にあつて何事を窺ふこともできず何事の行はせられたかを知らず、たゞ御垣の外にあつて人々の出入りの音を漏れ聞き、折々燈影の遠く近く明滅するのを見るのみであつた。たゞ一度燈火の光射すあたりに御菅蓋を拜することができた。その他は神秘なる奏樂の音の漏れ聞ゆるばかりであつた。私の列した幄舍の廂からは弦月が松の梢に懸つて眺められた。青白い月光は靜かに流れて參列者の胸間の金色に映じ、月の隱れた頃から樹の間に星の三つ四つ煌々と輝くのも見られ、焚かれ

つゝある篝火の時に強く燃え上り時に弱く光薄くあたりを照すさまなぞは詩と云はうか繪と云はうか之れを表す言葉を知らなきを恥づる。此の式は夕六時から翌る五時過ぎまでの間に前後二回行はれたわけである。その間私共は靜寂に自らの心を直くして控えて居つたが、身も心もたゞ無限の境に入り神秘莊嚴の感を味ふのみであつた。私は終生斯かる神秘莊嚴の感は再びすることはあるまいと思ふ。宮廷の儀式に屢々參列した經驗ある人々でさえ大嘗祭の御式には深き印象を留めたといふのであるから、我々の如き斯かる場合に接したことの極めて稀なものは到底形容の辭なき森嚴の感に打たれたのは當然のことである。

十四日、御式から轉じて十六日の大饗に列すると我々は更に別の世界に引移された感じがする。宮城中の豐明殿を擴められた如き新しき二條離宮の殿中に入つた時には、五彩絢爛の美に先づ眩目するばかり只々感嘆の外なかつた。御料理の土器に盛られた品々は宛ら大嘗祭の日を思ひ起さしめ、插華(かざし)の清美、黑酒白酒の神代ながら珍らしき、さては久米舞風俗舞五節舞のとりどりに趣き深かゝりしことは今更此處に述べ立つる限りでなく、たゞ古への平安時代の官人に還つたやうな感じがした。更に眼を驚かしめたものはその翌る日の夜宴である。電燈の煌々と輝き渡る場内は華麗燦々として前日に彌や增さりて眼醒むるばかりの心地がした。その夜の舞樂は幸ひに良い席を得て悉く拜觀するを得た。萬歳樂の靜かに、太平樂の勇ましき實に面白く覺えた。能樂などとは別種の趣味に屬するは勿論であつて、今日迄屢々觀た舞樂に較べて此の日ほど立派なるはなく頗る印象の深かきものがある。暫く休所に下つて再び誘はれて場内に入れば前の舞樂殿を圍繞して立食場は設けられ式部職の樂人、海陸軍の軍樂隊が整列して將に奏樂を始めやうとするところであつた。前には古への世に逍遙した我れを今は遽に現代の世界に引戻されたやうに精神は自づと緊張した。やがて陛下の出御を告ぐると共に參列の諸員は姿勢を整し三圍の樂隊は悠々迫らず君が代を奏し始めた。洋々たる樂

の音は實に彼の御卽位式に於ける萬歳と共に皇室の彌榮えに榮え國運の隆盛を表すものとの感を深くした。種々の奏樂の間に禮裝の官人や盛裝せる東西の貴婦人達が知己を求めて相將り歡を盡して夜の更くるを忘れたさまは、いかにも新しい文化の興隆せる國土に住むの心地せられた。斯くて此の夜も昨と同樣饗應の品々を戴き長き夢の醒めた心して宿に歸つたのであつた。

二

今、この數日間の詳しきことを記す暇もなく、また私にはそれを專門的に言表す素養もない。多少詳しい印象を書くとしても之れを他日に讓り、私は私の從事してゐる思想界の方面からの關係を二三記してみようと思ふ。私は先づ御大典の儀式全體に就て觀るに、如何にも我が國が古るくて而かもまた新しき國であることが證明されたやうに思はれる。現代の我が思潮は古るきと新しきとの二要素を以て成立してゐる。御卽位の大禮は此の我が一般の思想と文明とを象徵したものである。私は賢所の御儀や大嘗祭に於て我が國の如何にも古るき國であつて古への風俗制度をそのまゝに傳へ得たことを深く感じた。これらの祭祀の內部のことは些しも知らないが恐らくは極めて古風に近かきものと想像せられる。それで若し之れを華麗なる儀式と比較したならば、極めて素朴の感を與へるであらう。また儀式の內容の如きも或ひは簡單なるものであらうと思ふ。併しながらこの簡單なるものが遠き古へより傳はつてゐるのが一種の神秘である。奇績である。而してこれがまた新に種々の象徵となつて來ると共に最初は何等意味もなかつたものが漸次深い意味を有して來る。かくして今日の我々に對して斯かる偉大なる印象若しくは感銘を與へるやうになつたものと思はれる。私は此の儀式が素朴を備えて居れば、それだけ國體に一種の趣きあることを感じた。

轉じて紫宸殿に於ける御卽位式を拜すると元より古るい制度を基礎としてあるから大體に於て形式は舊の儀であるが、その精神に於て非常に新しい氣分を含むでゐる。威儀の官人が大小の幡旗の下に竝列すること

は無論今日では一つの儀式として行はれてゐるが、何となく威を八方に輝すの趣きがある。御即位の精神は矢張其の處にある。また今日は政治上に一般の人民が參與する所から、即位式にも亦一般人民を代表する人々を多數參列せしむることになつた。こゝに又新しい意味が認められる。萬歳を唱へることは古よりの風習ではあるが、しかし一般に御前では靜寂を旨とすることになつて居る他の場合とは多少趣きを異にしてゐる。これらの點は大禮の新しき意味則ち我が國が一面古く一面に新しきを表示するものと思ふ。大饗の場合に於ても古るき儀式を採用しながら新しき氣分を以て行はれた。純朴の古風を存した儀式から一轉して直ちに現在の文明と接觸するところに意味のあるものと思ふ。則ち今回の大禮は古るい儀式をそのまゝ保存してこれを踏襲したものでなく、古るいところに新しき氣運を導かうといふ深かい意味が存するものである。現代の日本の思想界及一般の文化は一面に古代の文明を連續して他面には新來の理想を追求してゐる。我々の

現代は此の二要素の結合し得たものと云はねばならぬから、御即位の大禮が恰も此の象徴となつたのは偶然ではないと思ふ。或ひは之れを以て單に古へに復つたものと思ふならば大間違である。又此儀中に往々新意を混ずるのを怪むものがあらば其は事理を解せざるものである。尠くとも我々は此の儀式に依つて日本の古るいことが新しい意味を以て傳はりつゝあることを非常に愉快に思ふものである。

次ぎに感じたことは大嘗宮の儀である。一體即位式其他の儀式が國體と深かい關係則ち皇室と人民との特殊の關係あることは勅語にも仰せられてある通りである。是等は既に他の人々によつて屢說かれた事であるが、其の他の點に就て私は感じたことがある。大嘗祭の儀式によつて日本の古代が農業を重んずる國であつたことが明らかに表はされてある。實に農は國の本である。しかし之れがために今日に於てもなほ農業のみを本として商工業を輕視するが如き思想を抱くべしといふことではないと感じた。農業を重んずるは我が國

の古より傳はつた思想である。日本が古るい國であるからその風俗を今日まで維持し得た。また國が古るいから國家の基礎ゞ鞏固である。而して斯くの如き儀式に含まれた眞の精神は即ち農業生活に最もよく現れ得べき、平和を重んずる國家たるにあることを私は切に思つた。經濟上の主農説は往々强兵論と連結するが、大嘗祭の儀式が如何にも神聖にして靜寂なるさまを拜して、私には寧ろ反對に我が國の理想は古來侵略攻伐でなくして平和にあつたことが此式に表はれて居ると考へられた。即ち此の儀式から私共の直接學び得ることは經濟上の農業本位思想でもなく、又軍國主義の鼓吹でもなく、寧ろ平靜な氣高い簡素質朴の精神を基として平和の文明に赴くことが我々の理想となるべきことであるといふことだと思ふ。大嘗祭の儀式には固より重大神秘にして我々の測り知るべからざる意味があるが、然し之を現代の思想問題に關聯せしめた方面から見れば、或は誤解があるかも知れないが、邈として尋ねべからざる大古より傳はつた永久平和の文明史的理想を象徴したものであると解することができる。

尙ほ種々感じたこともあるが、今は書き記す餘裕がない。たゞ咄嗟の間に起つた印象と感想とを叙べて、盛典に參列する光榮と幸福とを得た記念をしたいと思ふてゐる。(十一月十八日京都に於て)

大嘗宮の御儀

文學博士　上田　敏

十一月十四日の夜、悠紀殿の祭、眞夜中過ぎて十五日となれば、曉まで、主基殿の祭行はせられた時、畏くも神域近き右の幄舍に着席して、此神祕なる御儀に參列することを得たのは、家門の光榮としていつまでも記憶すべき事と思ふ。御儀の森嚴にして、實に神々しかつた趣は、もとよりの事だが、文章や人傳では、とても充分に知り得る事は出來ない。もし宏大な建築、複雜な儀式、絢爛を極めた莊嚴等が、此儀を飾つて居たのならば、色彩ある文字を列ねて、典禮の美の幾分

かを庶幾せしむる事も出來ようが、簡古醇正にして而も深く、强くわざとならぬ感銘を人に與へる吾邦古代の祭式は、親しく其席に列して、自づから敬虔の情に打たれた者ならでは終に眞の趣を感じ得まい。式は神秘の暗に始り、神秘の暗に終り、如何なる儀式がいつ行はれるかは、參列者の全員にしかとは見えず、諸の祭官等も、己が受持の職を盡すのみにて、中心の最も神聖な儀式に至つては、上御一人の親祭遊ばされるのみで、人間の窺ふ所で無いといふ事實が、此御儀に最も神秘なる性質を加へてゐる。かの夜は、神門内の砂地に月の光も洩れ來ず、そよとの風も無いから、椎の和恵の搖らぐ音も立たず、唯、たま〱に奥殿通ひの衣擦れの音、微かに聞えて、ほのかなる齋火の燈が、柴垣の内にともつてゐるばかり、靜寂の裡、折々古樂の聲のみが、式の進行を知らせる手賴であつた。のどかな稻舂歌が、まづ初に、闇の中から聞えたので感動が一番强かつたが、國栖の歌の中ごろからが、よく考へて見ると、音樂上の効果が最も著しかつたやうだ。此御儀から得た感想は、吾々一個人として思ひ浮べる一時の感想では無く、國民の集合精神から離れた、特殊の感想では勿論無く、上つ代より吾々祖先の精神に流れて來た意識を、此御儀によつて、更に深く更に明らかに、吾々も自覺しえたといふ感想である。吾々は現在だけの國に住んでゐるのでは無い、大なる將來を思はしむる、根柢ある過去を有つた國に生れたので、祖先の聲は常に絶えず、現在よりも更に淸く、更に美しい將來を望め、望めと囁いでゐる如く感じる。大嘗宮の御儀に召されて、神秘の夜の帳をすかし見つつ、斯の如き感想が浮んだ。

人物評論（六十六）

茅原華山論



▽茅原華山先生

松井柏軒

▲中央公論茲に茅山華山先生を主題として評論を徴す、何ぞ其れ皮肉なるや、更に其の評論を余に徴するに至ては、余幾んど言ふ所を知らず。

▲明治三十八年九月初旬華山先生歐洲に遊ぶの故を以て、黒岩涙香氏主催となり、同人數衆と共に別筵を

帝國ホテルに盤る、時に燒打の翌にして、隣合の内務大臣官邸は兵士之を護衛し、彌次馬其の塀外を圍みて、殘炎ブス〱塀内に隱現す、實に物騷千萬也、ホテルのウエタア亦余輩を促して曰く『警戒のため九時を限り電燈を滅すべし、請ふ心せよ』と。

▲此の特異なる離廷の後、先生歐洲に抵て留まること數年、歸來椽大の筆嘗さに一代を傾倒せしむべしと豫期されしも、先生の事業は蓋し雜誌第三帝國に止まれるが如し。

▲十一月十五日夜記者俱樂部の親朋等黑岩氏の敍勳を祝して小集す、食後偶々やまと新聞の夕刊に先生第三帝國の分裂を機として、斷然操觚界より退隱し、郊外に住ひて專念讀書すべしとの記事あり、蓋し先生自から新聞社へ文通せし所なりといふ、玆に於て端なくも先生の事話題に上る、余は坐ろに明治三十八年の往事を回憶して感興に堪へず。

▲一客曰く『此の日先生第三帝國の持主石田某と錦町署の召喚を受け、紛爭示談の勸解に接せしも、確く相執て下らず、法廷まで持出して爭ふこととなれり』と。

▲或は盛んに先生の艷事を傳ふる者あり、或は先生と錢とを談ずる者あり、之に據て結論すれば、蓋し先生は島村抱月、岩野泡鳴の亞流なるが如く、素より人格を以て律す可らざる也。

▲後に傳ふる者あり、先生と石田某との爭ひには、「某海軍佐官未亡人宅に其の最初の禍機を做せりと、歷史上の大事件には、必らず婦人の潜むありといふ、第三帝國の事また又然る乎、唯だ余は之に由て先生が其の唯一の事業を喪ひ、而して先生の文章の世に出でざるを惜むのみ。

▲先生は文士也、詩人也、天才也、素より理智と常識とを以て律すべからず、而して文士として之を視れば、先生は夫れ大正の莊子乎。

▲莊子の文奔放にして天馬の空を駛るが如し、哲學然たる所あるも必らずしも哲學に非ず、單に美文の如くにして必ずしも純文學にも非ず、其の主旨實に窺ふとして捕捉すべからず、先生の文また文武を論じ時事を評するに、哲學に似たる所あつて而して哲學ならず、美文の如くにしてまた純文學にも非ず、天馬の如く人力を以てして要領を得る能はず、然かれども文氣煥然として光彩の陸離たる、讀むものを眩し魅して一切を忘れしむ、然かも讀み畢つて靜かに瞑想すれば、何等印象の存するものあらず、文の至妙なるものに非ずして何ぞ、莊子に非ずんば誰か得て能くせんや、然り、我が華山先生獨り之を能くするのみ。

▲先生嘗に萬朝報を去るの辭を第三帝國に掲ぐるや、汎く當て曰く『此の文實に情理兼ね到る、諸葛亮の出師の表を讀みて泣かざる者は忠臣に非ず、我が斯の文を讀みて感ぜざる者亦人に非ず』と、山口孤劍君之を評して曰く『華山の斯の言を聽いて嗤はざるものは人に非ず』と、大正の莊子も亦斯る皮肉を免かれざる乎。

▲假令筆硯を業とするも、志を經綸に存し、若くば一代の思潮に棹して之が指導を期するあり、先生の期する所其れ何れに在るや、先生の文の捕捉す可らざるが如く、先生の意圖も亦捕捉す可らず。

▲先生今春の總選擧に候補者として立てり、高く天下に宣して曰く『以

て理想選擧を實現せん、成敗の如きは素より問ふ所に非ず」と、然れども先生の所謂理想選擧なるもの、竟に如何の効果かありしぞ。

▲藤村操巖頭の記を遺て曰く「人世不可解也」と、自から華嚴の瀑底に投じて死せり、世には能く莊子を解する者あり、若し斯の如くせば、先生も亦解し得られざるに非ず、然れども是れ寧ろ先生を穢す也、禮に非ざる也、惟みるに先生の眞相は、其の文の如く到底余等凡人の解し得る所に非ず、唯だ不可解を歎じて筆を投ぜんのみ、乃ち記して謹みて中央公論の徵發に答ふ、若し或は余の文意捕捉すべからずといふ者あらば、余も亦聊か先生に私淑する所ある乎。

▽私の觀たる華山氏

安達元之助

△十一月十三日の夜、仙臺より歸京して、華山氏と石田望天氏との間に行違ひを生じ、遂に『第三帝國』の分裂を來したとのことを聞いた、久しき以前より『第三帝國』の利益に着眼し、邪魔モノの石田氏を放逐すべく機會を覗ひ、社員を懷柔して戰鬪準備を整へて居つた華山氏は、石田氏が其夫人をして某々氏等の經營する雜誌『女王』の一員たらしめ、自らも此顧問として盡力することになつたことを聞き付け、社務怠慢と云ふ口實の下に石田氏に退社を命じた、ソレは十三日の午前中で私が事件を知つた數時間前であつたとのこと、當日の華山氏の態度は甚だ傲慢を極め、石田氏の辯解をも耳にせず、其肩に手を掛けて押し退けた程であつたので、石田氏も非常の決心を以て、直ちに友人薄田斬雲氏等に急告し、其援助の下に再び『第三帝國』事務所に驅け入つて、持主、發行人として華山氏及び其配下の鈴木某、松本某等に退社を命じた、紛擾は愈々ホンモノとなり、十四日華山派は事務所を閉鎖して石田派の出入を拒み、石田派は其權利を主張して、警官立會の下に遂に其事務所を占領したと云ふ騷ぎであつたそうだ、十五日に至りて調停者の奔走もあつたが、要領を得ずして十六日となり、此日の大園遊會には兩派の大爭鬪があるだらうとの話であつたが、之れも警察署の干渉の爲め、無事平穩に過ぎて、戰ひは先づ華山派の敗北となつたらしい、華山氏と石田氏とは主義、感情、性格の上より、到底兩立すべき人でない、幸ひに今日迄の持續を有したのは、當初石田氏が華山氏を誤信して居つたこと、及び『第三帝國』の發達が、華山氏に負ふところ多大なりし爲め、石田氏をして自ら忍耐せしむるの餘儀なき事情があつたからであらう、私をして云はしむれば兩者の分離は、當然の歸趣であり結果であつて、斯くてこそ兩者各々その行くべき眞實の道を發見するに至るであらうと思ふ。

△家庭としては私と華山氏とは、可なり親密の交際を持て居る、隨つて若し私の妻が居るならば、華山氏の一面を批評することに於て、多少の徹底、接觸を期することを得たかも知れぬが、本月初旬より京阪地方を旅行して歸家の程も不明である、私自身として華山氏と親しく語つたの

は前後僅かに二回に過ぎぬのであつて、其一回は華山氏が歸朝當時、私が牛込に華山氏の宅を訪問したこと、其一回は一昨年華山氏が私の宅を訪問せられたことである、其他は單に顔を合せたと云ふ位のものであるが、ソレでも新聞、雜誌、友人並に私の妻を通して、若干の華山觀を有して居る積りである、以下失禮であるが叙述の都合上、〔二〕先輩たる華山氏を呼ぶに『彼れ』の二字を以てすることを許して貰ひたい。

△私の觀るところを以てすれば、彼れは一種の報告者(レポーター)である、事件事實の報告者に過ぎぬと思ふ、然かも忠良なる報告者に非ずして、事件事實を誇張し粉飾する癖のある報告者であると思ふ、私は彼れより政治、哲學、藝術に關する意見を聞くことを得なかつた、幾多の著書、雜誌記事及び『第三帝國』一卷を取つて讀む、彼れには一貫したる主張、抱負、理想と云ふものがない、彼れの記述は讀むに隨つて益々要領を得ることが出來なくなる、或は『萬朝報』記者時代及び近き其以後に於て、主として民本主義、衆民政治を說き、青年の味方、弱者の後援者たることを以て任じて居つた彼れが、近時に至りて力の福音を說き、代議政治の無用を論じ、專制政治、貴族主義を唱道することを以て、彼れが思想の矛盾、撞着、背馳を笑ふものもあるが、斯くの如き不都合は彼れの一篇の論文、記事に於てすら見出すことを得る瑕疵である、彼れは好むで創造を叫むだ、然しながら彼れの發表せる何れのものより、改められたる試み、新しき生命を把握することが出來るであらうか、彼れには固より創造はなかつた、更に正確なる說明もなかつた、唯だ報告あるのみであつた、而して之れが彼れの一大長所であることは云ふ迄もない、過去六年間、彼れが一部の階級者より喝采せられ崇拜せられた所以のものは、即ち此の巧みなる事件事實の報告的文章であつたのである、舊劇の俳優の模倣と修整とは、吾々に向つて何等の感激と贊嘆とを與ふるものでないが、色彩を以て誇張せる其技工は、往々にして匹夫匹夫を泣かしむることがある、文壇に於ける彼れの所得は即ち夫れであつた、彼れの文章は「新」と「即」との文字を以て點綴せられて居る、新民本主義、新理想主義、新東洋主義、或は靈即肉、肉即靈、理想即實行、目的即手段、殆むど應接に遑ないのである、彼れは之を以て巧みに讀者を釣り得たのであるが、彼れの思想と文章とは此の新と即との二文字に累せられて、常に其意氣を失つて居る。

△事件事實の報告者としての彼れに對しては、私は多大の敬意を表するものである、假令それが誇張せられ粉飾せられて居るとしても、私は彼れの報告に依りて、少からざる利益を得てあつた、彼れは漢洋の學に通じ、英米に遊び獨佛を經由し、巴爾幹半島と支那南方とを跋涉した、何が世界に起りつゝありや、世界は何を考へつゝありや、人々は如何に動き如何に働きつゝありや、彼れは常に吾々に向つて此種の材料を供給して呉れた、彼れの著作には多くの和漢人歐米人の名と其文章演說の一節とが採用せられて居る、時としては此等の列舉が直ちに著作となつて居ることがある、吾人は其著作の中より幾多の事件事實を拮出することが出來た、私は此意味に於て彼れを凡人にあらずとするものである、彼れ

の文章は華美艶麗を極めて、全國の青年を渇仰せしめて居るらしい、吾々共が其少年時代に於て、北村柴山氏の『世界百傑傳』を讀み、其の搏虎屠龍、迅雷風烈と云ふやうな文字に醉ふた如くに、今日の青年は彼れの文章に魔せられて居る、彼れの著述や文章の中には、他人の執筆に係るものも多分あるやうであるが、彼れの文筆の力は確かに一方面を代表する巨匠であると思ふ、之を要するに彼れ自身は文明批評家、學者、識者を以て任じて居るとしても、彼れ本來の面目は、該博なる見聞を以て事件事實を報告すること、及び挑發的なる文章の力を以て、一部の人を魔醉するところに存ずるのである。

△最も長き年月を英國に送り、歸來『萬朝報』と『第三帝國』とに據り、民本主義を鼓吹して官僚閥族を罵り、『青年の味方として老人を排し、弱者の保護者として強者に反抗し來つた彼れが、近來著しく官僚臭を帶び、專制と力とを說きて、獨帝の崇拜者となり、或は後藤新平、山縣有朋に伺候し、寺內正毅に近かんとし、山本權兵衞に欵を通せむとするに至れるは、深大なる理由のあることとである、彼れは今春の總選擧に東京市より衆議員議員候補者として、勇ましく競場場裡に出馬した、而して理想選擧と云ふことは不徹底であると稱して、自ら模範選擧を實行するものなりと標榜した、代議士は有權者の代表者である、故に自個の理想の代議士を議會に送らむとする有權者は、自ら候補者の選擧費用を負擔すべきものなりと呼號して、大に寄附金を世上に募集した、一部の人々は之を目して彼れ狂せりと嘲た位であり、私も露骨に其立候補に反對したが、彼れは頗る眞面目に且つ非常の確信を以て、其當選を疑はなかつたのである、然るに開票の結果は千五百圓を費して、僅かに百二十九點に過ぎなかつたので、彼は青年の援助、青年の喝采の如きは、實社會の問題に寸毫の價値なきものであるとを悟ると共に、自らの名聲が實社會に何等の權威を有して居らぬことをも知つた、自ら議員たらむとした彼れが、落選後一ケ月ならずして、早く代議政治無用論を書きたる矛盾は、寧ろ之を問ふべきでない、それ以來、彼れは權勢に近きて自個の地位を得べく努めたのである、犬養毅の崇拜者たりし彼れは、長島隆二を通じて同志會に近き、床次竹次郎を通じて政友會に賴らむとし、或は上杉愼吉を訪ひ、或は後藤新平に參じ、寺內伯、山本伯にさへ秋波を送るやうになつたのである、主義なく定見なき彼れにありては、斯くの如き變說改論を當然とすべきであるが、一枚のハガキを以て朝報社の社員籍を除名された彼れも、『第三帝國』に依りて能く其勢力を維持し得たに係はらず、其無節操、拜金病、權勢熱の爲めに、今は夫れさへ失はざるべからざるに至つたとを私は氣の毒に思ふものである。

△私の友人中には彼れを文字の淫賣婦、思想の淫賣婦なりと罵るものがある、甚しきは彼れを猶太人なりとして、彼れの幾多の艷聞(?)も、悉く利害の打算より來て居るかの如く云ふものがある、私は固より之を信ずるものでない、然しながら彼れは頗る貨殖の道に長じて居る、外遊六年の放浪生活に於てさへ、彼れは能く數千金を貯へて居つた、留守宅の彼れの夫人も亦た、月給二拾幾圓の小學校教員として、尙ほ千金を剩して

居つたとのことである、彼れの著書、文章には多くの代作があるとのことであるが、其原稿料の幾割かは彼れ自ら取つて仕舞ふとのことも聞いて居る、『第三帝國』の公表するところに依つて見れば、彼れの貯蓄は少くとも五千圓を下らぬ、生活難に苦しむ文士階級にありては、彼れは明かに物質上の優者であるらしい、明治四十五年の總選擧の當時、彼れは黒岩周六氏と理想選擧本部の派遣員として秋田に行き、所謂土産物に付きて少からず同縣人を困しめたことや、近く鵜崎鷺城と長野縣に講演者として招聘されたときも、同樣の事があつたと云ふことを耳にした私は、彼れの經濟術が餘りに拙劣であることを殘念と思はずに居られぬ、彼れの外遊中の公使館の調書、其他女に關する事柄に付きては、私は其眞實を確むるの方法なき今日に於て、且つ人の陰私に係ることとなる以上、之を發表することを避けねばならぬのである。

△彼れは一種の報告者（レポーター）であると共に、一種のお山の大將である、故に彼れには理解ある識者の友人がない、唯だ叩頭し喝采し來る盲目の青年や婦女子やに周圍を擁せられて、自ら高く標榜して居るに過ぎぬ、大杉榮氏が彼れを「ペ華山」と呼び、生田長江氏が彼れを「瓢さん」と笑ふことの酷なるは勿論であるが、小學校教員、地方の青年、半可通の新しき女より到達した書狀を見せられて、挨拶に困つた人も隨分あることであらう、一片の稚氣愛すべしと云ふべきであるが、彼れは遂にソレが爲めに『第三帝國』を退けられたのである、紛擾後の彼れは『第三帝國』に對する一切の權利を抛棄することを通知し、其部下の不安と窮狀とを顧みずに、品海の沿岸に隱遁して、靜かに讀書するとの事であるが、政界の機運が動もすれば寺内内閣の出現を傳へ、後藤新平等の暗中飛躍を報ずる今日に於て、全權大使、參政官を望みつゝある彼れが、果して自覺の境に入るべきや否や、私は甚だ之を疑ふものである、昨冬『中央公論』に寄せた歐洲戰局觀の一篇を以てさへ、彼れは既に某外務大臣より會見を申込まれたりと自稱し、世界を通じて斯くの如き大論文なしと自賛して居つた、其後の彼れは幾分なりとも實社會に勢力を扶植したのみならす、彼れの移らむとする森ヶ崎の地は、後藤新平の別莊の在るところである、靜か動か、悟か迷か、私には之を豫言するの明がない。

△要するに私は彼れに對して、主義主張を求め、神韻靈性を求むることが出來ぬ、唯た彼れには廣大なる見聞がある、多量なる讀書がある、而して華麗なる筆と舌とがある、彼れの半面なる天眞と稚氣とか、以上の長所に添加せらるゝの時、彼れは優に水平以上の人材を以て社會に目せらるべきものである、不幸にして彼れには先輩なく友人がなかつた、而して彼れの自負心と彼れの門下生とは、遂に彼れを誤らしめたのである、私は『第三帝國』以後の彼れが、彼れ自らの天分を正當に培養して、世人の期待を空ふせざらむことを望むものである。

▽茅原華山先生

中村孤月

茅原先生は所謂政治家といつた側でもなし、また其れかといつて所謂思想家といつた側でも有りませぬ。魚で申しますと鹽水と淡水と兩方に出たり入つたりして泳ぐことの出來る鰡の如きもので、獸では野猪と豚の混血獸、鳥ならば野鴨と家鴨との間に出來た間鴨の如なもので、何づれにしても其兩方に跨つて居られる所が先生の價値であります。

政治家の中に混じつて、同じ如に政治家として居られゝば、假令今日の如な時代を解しない政治家の中にも先生より優ぐれて居る人が幾らでも有ります。むしろ殆んど凡てが先生より優ぐれて居ると申さなければなりません。また所謂思想家文學家の中に入られますと、此れはまた先生の思想の深さでは何とも比較が出來ません。一誰れでももう少し根柢の有る思想を有つて居ります。

つまり茅原先生は、政治家の中では思想家や文學家に似た如なことが言はれ、文章を書かれることが價値が有るのであります。

それですから先生は所謂思想家や文學家を對手になさつて論文を書かれるのでなく其中間にある青年に感心され、自らそういふ議論も文章も書けない政治家仲間に茅原の文章は達者だ、面白いと、しかように調法がられ、面白がられ、茅原はなか〳〵甘いことを言ふと思はれるなればそれが何よりであります。

茅原先生にもう少し悠々たる所が有り、腹に確り爲た沈着が有れば、今までの社會上に得た所のものを善く用ひられて、新しい時代、新らしい思想を論ずる人々に議論を書かせ、自身には其等の言ふ所を理解するに努めて、其等新しい時代の生活の一日も速に來たるように力を盡くさるるべきでありますが、それには先生は餘りに確りとした所が有りません。

しかし確りとした所がないと申しましても、先生に勇氣が無いと申すのでは有りません。

人見知りも爲ずに人の前に立ちて話を爲されたり、演説と申すものを爲される時には眞にめげず臆せず愕くほど景氣のよろしき所を申されるのであります。斯ような點に立ち到りますると、先生の最も美しい點が一時に輝き渡ると申しまする光景で、丁度先生の演説を聽きまする程度の人々が、一時にどつと感激なるものを致しまするのでございます。

この文章と演説の二つのものによられまして、此種の讀者と聽衆をチヤームなさいまするに於かれまするに置きましては、天下人多しと雖先生は確に有數の一人であります。演説だけとか、文章だけとか、一つだけならば、どちらも先生より優ぐれて居られる人が非常に多くあるかも知れませんが、此二つを有つて居られまするとことはまことに少い中の一人と言はなくてはなりません。

茅原先生が此演説を爲、文章を書かれることに苦心をせられますることは一と通りではありません。朝晝晩の區別もなく、來る人來る人每た何

とか彼とか問題を提出せられましては、其人々に意見を聞き、若しそれが先生の心に叶ひまする時には、假令それが其話して居られる對手の言ふ意味を根柢まで深く理解することがなくとも、先生はそれを直ちに先生の都合のよろしい如に解釋して、或る時は演説の中の一句となり、文章の中の一節となりまして現はれることが有りまするのであります。

茅原先生ほど他人の言ふ所をよく聞かれる方も少うございます。例へば誰れの書いたものは面白い／＼斯ういふものが有りまると、先生は其ことを聞かれましたゞけで、大概の場合は直ちに其書いたものが面白くなり、直ちに其書いた當人が氣に入る如になる、まことに無邪氣なよろしき性質をもつて居られまして、其れと反對に誰れの書いたものは面白くない。他にも其う言つて居たものが有ると、斯う申しまするものが有りますると、よしや數日前に大變先生の感服を得ましたものでありましても、先生は直ちに其者に感服しなくなるといふ、甚だ無邪氣な、動き易い性質をもつて居られます。

先生が人を採用なさいまするのは、多く初對面に於いて其人をよろしいと見て、直ちに定められるのでありまして、大抵の人は「其れは面白い、では君、何々の方面に書いてくれ給へ、生活の出來ないようなことは爲ない」と此の如に申されるのでありますが、其後其人の書くものが讀者に受けないとなりますと、假令一、二ケ月の後であつても、直ちに退社といつた如な工合になりまするのであります。

誰れでも現今の人間は神經質でありますが、先生の如に神經質で、人のいふことを氣にされる方は少うございます。先生は自身の意見に贊成されたり、感服されたり、賞められたりすることが非常に好きであられて、先生に喜ばれようと思ひまするど、先生の前に行つた場合に賞めさへすればそれでよろしいので、其賞めて居る人間の腹の中が何んなであるなどゝ言ふことは、先生の到底考へ及ぶことの出來ないほど、先生は善人であらせられるのであります。さやうでありますから先生の文章などに對して眞面目に考へて、眞面目に反省を促すやうなことを致しましても、先生は、其ことを深く考へて見られるようなことはなく、何でも彼でも自身の考へて居られるように言ひ張られ、もし其上對手が追窮するといふ如な場合には、其論はそれだけで切り上げられて、其人間に面白からぬ感情を抱かれるといつた如に感ぜられることが多いのであります。

なほ先生の氣にせらるることは、讀者の批評氣受けといふ如なことでありまして、少しでも讀者から、誰れの書くものは惡い(いけない)と言ふ如なことを聞きもすると、書信ならば二三通、人ならば二三人で直ぐ其う信じられるので有ります。何でも先生に氣に入られて居りまするには、先生を賞めることゝ、讀者に受ける如なものを書くことが出來ることが何よりであります。

斯やうに先生は心のよろしい方でありまするが爲めに先生自身も絶えず讀者に賞贊せられ、氣に入られることを努められて、時代の指導者に推されることを考へられますると共に、例の先生の神經質が凡て

のことに働いて、一度模範選擧に落第を致されますると、其れから間もなく、他の動機によつて代議制度の無用を叫ばれるのであります。つまり先生は落選したから、直ちに代議政體は無用であると其う恐く感じられたのでは有りますまいが、とにかく其よつのことが有りまするど強く神經を刺戟遊ばされ、つく〴〵時勢と申しまするものをごらんに相成りまするど、代議政體無用といふことになるのでありませう。

「選擧團體打破」から「模範落選」となり、それから「思想は何故に一變せざる可らざるか」から「新貴族政治と青年」「代議政治無用」「新英雄主義」「相熱す心」「國民的か黨派的か」「一九一四年は古代史」更らに「政黨政治の最後」「新皇室中心主義」第三帝國へ書かれたものゝ中でも此れだけ讀まれゝば、如何に先生の思想が移り變つて行かれたかゞ解ります。

若し第三帝國の讀者で、先生がはじめの言論に動されて、熱誠の餘り辛うじて貯へた金を基本金に寄附し、其者の思想が先生と同じ如に移り變るといふことを爲なかつたならば、それは甚だ儚いた狀態になりましたものと、ひたすら呆れて居りまするこどでございませう。

先生は今度の第三帝國の混亂によりまして、郊外に退かれ、此の所數年の間と申しまするものは、專心讀書といふことになつたと、人傳ながら聞き知つて居ります。先生は今までとても英語が達者であり、書物は可なり、速かに多くを讀ませられて居られましたから、今後の讀書と申されまするものは、讀む量の多いといふよりも、讀んで考へられる其考へ方にあられるのではないかと思ひます。

さては愈々、淡水を泳いで居た鯉の海に出る如く、野猪と豚の混血族が野原に飛び出すが如く、野鴨と家鴨が夜露を浴びて天を翔ひ行くが如く、所謂從來の兩跨ぎから、政治界に乘り出されるものか、或ひは、鯲魚となり、豚となり、家鴨となるが如くになつて生活せられるものか、とにもかくにも今より思想、生活共に一變の狀態と相成られますれば、唯今の先生に感服して居られる青年も、愈々先生の讀者たることから、全く離れて終ひまする如なことになりまするかも解らない如に考へられまする。

▽茅原華山論

大杉榮

今になると、あのみじめな末路には、少々可哀相な氣もするが、しかしそんな下らない俠氣は出さん方がよからう。

實のところ僕は、あんなぢやない、もう二つの末路を豫想してゐたのであつた。それは、あの男が盛んに馬鹿を晒いて、讀者から全く見はなされて了ふか、それでも其の期を待たずに、內輪の連中が同盟して、總よくか或は慾わるゝか、兎も角もあの男を社から逐ひはらつて了ふかだら

これとても理由のない豫想ではなかつた。第一に、あの茅原と云ふ男

の讀者は、しかも其中の多少堅實（茅原の爲めにではない）な讀者は政治的又は社會的に少しく目覺めたものゝ、猶其の自分と共鳴する政治論又は社會論を見出し得ないでゐる所へ、うまくそれに付けこんだあの男の態度に魅せられて了つたのだ。此の魅すると云ふ事、言葉を換へて云へば、胡麻化すと云ふ事、これがあの男の本當の身上なのだ。小供の時からひねくり廻して來た漢詩、そこから來た文字の豐富、文章の絢爛、若い時からの地方及び中央の新聞記者生活、そこから來たジヤアナリスチツク・キラクタア、人氣取りちよこ才。生來のおしやべり、そこから來たチヤラツポコ、大法螺吹き。此等の諸才能が相集まり相俟つて、又それによつて無邪氣な青年の間に多少の名聲と成功とをかち得るに從つて、愈々益々其の增長を來たして、遂に今日の如き、あのこけおどしと胡麻化しとの、茅原華山が出來上がつたのだ。

雜誌『第三帝國』は民主々義で打つて出た。それに多少の社會主義的色彩すら混えられてゐた。帝國主義・軍國主義との横暴に反動して、又諸種の抽象的新思想の勃興と政治的及び社會的の出來事とに刺戟されて、何等かの具體化された新思想を渴望してゐた青年等は、爭つて此のいかにも元氣のよささうな『第三帝國』に投じた。『第三帝國』の門出の景氣のよさは、あの種類の雜誌としては、實に十數年前の幸德と堺との『平民新聞』以來の事であつた。しかしコケおどしと胡麻化しとの劣は、無邪氣とは云ふものゝ猶自分で物事を判斷する事を始めた青年の目に、遂に剝げざるを得ない。曖昧と矛盾と、及び其中に隱されてゐる不眞面目と野心とは、餘程の馬鹿者にでない限り、遂に露はれざるを得ない。現に多くの青年の間には、茅原に對する此の幻滅の傾向が、『第三帝國』創刊後半ケ年ならずして、既に大ぶあちこちに萌してゐた。僕は、此の意味の訴へを、隨分と地方の青年から聞かされたのであつた。

此の傾向は、茅原が萬朝報を放逐されて、何んとかの辭と云ふ女郎の泣言めいたものを『第三帝國』に載せ、更に各地方を遊說して步いて、うまく〳〵と大卄の讀者をたらしこんで、し濟したりと益々背に乘りかけてゐる矢さきへ、不意に勃發した四方からの茅原攻擊の爲めに、更に一時に激成された。そして此の茅原攻擊の先登は、又其の親玉は、實に斯く云ふ僕自身であつたのだ。

最初僕は、『第三帝國』にも又茅原にも、少なからぬ厚意を持つてゐた。それは、彼れがあの雜誌によつて、青年の間に政治的及び社會的の漠然ながらも自覺を促進する事と思つてゐたからであつた。此の期待は確かに欺かれはしなかつた。『第三帝國』は、新しい意味での自由民權の、寺小屋程の役目は勤めた。けれどもやがて、此の寺小屋で敎へるいろはのお手本に、妙にまがりくねつた文字が現はれ出して來た。最初は大ぶ神妙に、あちこちで聞きかぢつて來た新し物に輪をかけて、切りに新しく新しくと努力してゐたのが、だんだん勢と共に圖に乘つて來て、漸く其の本音を吐き出して來た。殊に例の模範選擧とやらの大失敗後は、新し物はそつち除けにして、いかにかして政權に近づかんとする其の野心が、事每に現はれ出して來た。『第三帝國』は、少なくとも茅原の文字によつ

て、『第一帝國』に後戻りせんとした。軍備擴張結構、專制政治結構、貴族政治結構。何んでも彼んでも、山縣か寺內あたりの喜びさうな事には、すべて結構盡しを並べ立てた。又最初はさうとは明らさまに云はないで搔き上げてゐた社會主義的思想に對して、それがそろ／＼と其の野心の邪魔になるに從つて、機會ある毎にケチをつけ始めた。

こゝに至つて僕は彼れのこけおどしと胡麻化しとによつて害はれる無邪氣な青年の爲めに悲しみ、又僕自身の主義の汚がされた事を憤つて、斷然彼れを社會的に葬り去るべく決心した。斯くして僕が、此の三月の時事新報に茅原攻擊の口火をきつて以來、他にもお尻のむづ／＼してゐた堺利彥、久津見蕨村、淺見鬢海、山口孤劍等の諸氏も、處々に蜂起した。そして僅かに一二ケ月の間に、九千と號してゐた讀者の數が俄然として五千に減つた。それが更に三千となり、一千となり、遂に五百、三百となるのも、決して遠い將來の事ではなかつたのだ。

現に僕が茅原攻擊を始めた際、『第三帝國』の某社員は、君にやられてはとても社の維持が出來なくなるから、僕等の米櫃を助けると思つて中止してくれ、とまで頼みに來た。そして其時に始めて僕は、茅原と他のすべての社員との間の、思想と感情との甚だしき乖離を知つたのであつた。

『第三帝國』創刊の發意者は、哲學院大學出身の二秀才、野村善兵衞松本悟朗の二人であつた。學校を出たばかりの、しかも讀書にのみ耽つてゐた篤學な二人は、矢張り一般の無邪氣な青年と共に、萬朝報紙上の茅原の論議に魅せられてゐた。二人は茅原を訪ふて其の創刊すべき雜誌に助力を乞ふた。然るに當時恰も茅原の許には、是れ亦甚だ無邪氣な石田友治の發意の下に同樣の計畫が齎らされてゐた所であつた。そこで茅原は、直ちに其の計畫をものにして、一見して甚だ有望らしい野村松本の二人をも其處に加へて了つた。猶茅原には、早稻田大學及び明治大學の學生某々に、少々の金を與へて恩を施してある、數名の子分があつた。茅原は、其等の某々をも加へて、自ら主盟と稱して、彼の『第三帝國』を創刊したのであつた。

然るに間もなく、先づ野村善兵衞は、其の雜誌の餘りの茅原化と、又茅原の實際の人物と思想とに呆れ返つて、『第三帝國』を亡命した。其他の諸社員も亦、等しく一方に呆れ返りながらも、猶多少の希望を抱きつゝ、殊に雜誌の發展が米櫃のたしになるようになつてからは、兎も角も辛抱して働いてゐた。其の多少の希望とは、茅原を彼等の欲する方に導いて其の署名と文章と雄辯とを彼等の欲する事に利用する事であつた。

此の希望は、彼等の口からも屢々洩れ、又彼等も其の實現に隨分と骨を折つてゐた。けれども最初の間こそは常に彼等の言を聽いた茅原も、彼等が其の雜誌によつて米櫃を得られるとなると共に、俄かに其の態度を變へて來た。斯くして社員同士の間に、或は個人的に或は集合的に、主盟放逐の案が持ち上がつて來た。茅原恩顧の子分等の間にすらも、彼れの議論や行動の益々變てこになるのを見て、且つ其の『懺悔錄』と稱する自叙傳すらの代筆までも命ぜられるに至つて、窃かに不滿の念は湧き

上がつてゐた。

斯くして僕の目には、『第三帝國』、若しくは其の主盟としての茅原の末路が、既に餘りに明かに映つてゐたのであつた。そして僕は、最後の打擊として、彼れの人格及び思想に對する一大論文を、近く起草する心づもりでゐたのであつた。

然るに此の形勢を見てとつた茅原は、會計にも編輯にも（自分の受取る報酬と自分の書く文章との外には）全く無關係を裝ふてゐた從來の假面を脱ぎ棄てて、突然石田から會計の權を奪つてそれを自分の細君に握らせ、且つ非茅原派の最も露骨なる中村孤月を放逐した。更に機を見て、即ち石田が雜誌『女王』を發刊せんとするに當つて、それを口實として石田にまでも退社を强要せんとするに至つた。そして石田は、其の持主、發行人、兼編輯人たる法律上の權利によつて、あべこべに茅原及び其他の社員を一括して逐ひはらつて了つた。これが今日の出來事の大體の成行である。

茅原は今、郊外に隱棲して一切の論壇から引退する、と稱してゐるさうである。彼れとしては、如何にもさう稱しさうな、言葉である。しかしこれは、茅原自身のためにも、是非さうした方がお得である。彼れの如き、無學、無恥、無誠意の輩は、一切の眞面目な事業から、未來永劫に引退して了ふがいゝ。そして彼は、山縣＝寺内＝後藤系の麾下となつて、何等學問とか廉恥とか誠意とかの用のない、政權爭奪の陰謀にでも加はるがいゝ。そして政治其物の醜陋を、彼等自身の行動によつて、天下に見せつけてくれるがいゝ。彼れの仕事としては、兎に角に社會的に有益な仕事としては先づ此の邊の所であらう。そしてうまく行つたら、何かの副參政官にでも有りつくがいゝ。しかし此處にも亦、只だ一言彼に忠告して置きたいが、そんな夢を見ながら散々こき使はれたあとで、又々逐つぱらはれないやうにね、よく氣をつけるがいゝ。それとも、若しそんな形勢が見えたら、例の手で、急いで貯金をふやして置くがいゝ。

▽人心攪亂も亦一事業

相馬御風

〇茅原華山氏が今回の『第三帝國』の紛擾を機として隱棲するさうであるが、僕にはその隱棲と云ふ事がどうしてものみこめない。つい今し方まで「新健兒主義」とか「新皇室中心主義」とか云ふやうな御大典記念式な景氣の好い新復古主義を主張し、「最も古い自然の日本に還りつゝある日本國民は更に最も新らしい人力の日本を築造する新健兒と爲り、以て日本酒を世界に宣傳する覺悟ありや否や」などゝ元氣の好い事を云つて居た其の人が、他人との共同事業のほんの一寸した行違ひから突如として隱棲することに決したと云ふのは、まつたく僕などには合點の行かぬ事である。日頃から奮鬪主義一點張のやうに見えた其の人のやり方としては、甚だあつけないことではないか。なぜかう云ふ機會に於て、眞

に氏の齊閙的一面を鮮やかに見せてくれなかつたのだらう。常に天下國家を要ひて來た氏にして此の事あるは、畢竟氏も亦天下國家の事よりは私的感情の方に重きを置く人であつたことを證明することになりはしないだらうか。

○尤もこれまでの評論家としての茅原氏の經路――それともこゝ一二年の――から推して考へると、氏は常に突如として種々な變化を經て行く人らしい。だから今日隠棲を口にしても、明日又突如として捲土重來するのかも知れない。何しろ此の一二年の間に極端なる唯物主義から、極端なる皇室中心主義へと推移し來つた四曲五折の變轉は、電光石火にもたとへつべきものであつた。天下の青年中から云つた風な氏の言論によつて、若い熱した頭を攪亂された者はかなり多かつたことゝ思ふ。氏の特色は常に巧みに若い人々の心を焦立たせるところにある。けれども焦立たせたゞけで、中心に保留さすだけの何ものを與へては居ない。

○だが、僕はそれだけでもなかく凡人には出來ない仕事だと思つて居る。無暗と若い人達の心を焦立たせる。動搖させる。それだけでも大に結構な事だ。一たび動搖させられた彼等は、再び容易にもとの眠りには歸れないだらう。そして更に何ものかを求めるだらう、轉化を要する時代には、かう云ふ攪亂者も一人や二人はあつても好いと思ふ。兎に角人心攪亂者としての茅原氏は、かなりに認むべき仕事をして來た。今回の隠棲も矢張此の攪亂の一種ではないかとさへ思はれる。

▽一切が利用、一切が手段

『第三帝國』主事　石田友治

日下『第三帝國』に紛爭の起つてゐる最中である、この際私をして茅原華山氏を評隲せしむるは、聊か隠當を缺くやうにも思はれる、私自身としては、元より進んで茅原氏を批評すべき場合ではない、たゞ『中央公論』の瀧田氏が。諸家の茅原華山論を掲載するに當り、君の一文を逸してはならない、長所美點、欠點短所、共に之を公平無私に見て、永く親しく接した君の評論を發表し、以て茅原氏の眞面目を天下に知らしめよ、と云ふことであつた、若し眞に茅原氏の面目を描き出さんとせば、非常に長いものになる、故に今は簡單に茅原氏の人物を想見し得る一つの材料を提供するに止めやう。

茅原氏に親近しゐる哲學を學んだ或私の友人は、茅原氏のことを暗にから云つたことがある、『世間には、内實は物我の慾求を充たさんが爲めに、陽に民衆に媚びて、ひたすら流行におくれざらんことをつとむる所謂愛國者、煽動的政治家（デマゴーグ）なるものがある、かういふ手合が「民衆に往け」を題目にしてゐるぜ……われくは人間としてまだく皆むべき事、味ふべき事、はた嘗むべき事がどつさりある、一足飛びに天使になつたり、聖人に成り上つたりするのは少し早すぎる、今一度山から谷へ、淺瀬から渦きへ、超人から民衆へ！しかし是れと彼れとは違ふ、名目は同じ

でも、其の動機目的は彼と是とは、まるきりちがふ、之を混同されたらたまらない、物我に執する利己主義者は、たとひ始め社會民衆に阿附してゐても、一度專制的權力を握れば、忽ち其毒惡なる瓜牙を剝き出し、其の野望遂行の爲には、社會を欺き、民衆を犧牲にして、更に顧みない、元來此種の人物には涙と良心が缺けてゐる、人間として有つべきものを有つてゐないのだ、つまり一種のデカダンである（デカダンを藝術家の專賣だと思つたら大間違ひだ）英雄とか豪傑とか云はれた段ではもとより無いのだ』云々と、予は此の言を面白い觀察だと思つた、まだ是れだけでは茅原氏の面目を全部露呈してゐるとは云ふことが出來ないが、少くとも或半面は道破してゐる。

多くの場合、茅原氏に取つては、人と物と事件と、其の凡てが或事の手段である、こゝに同氏の長所もあると云へば云はれないこともない、併しこれは予の與せぬ處である、或は名を賣らんが爲め、或は利を貪らんが爲め、或は地歩を得んが爲め、或は同情を得んが爲め、或は權力に近かんが爲め、或はそれ等の何かに利用せんが爲め、文を書き、演說を爲し、讀書をする、談話もする、青年にも近づく、先輩をも訪問する、新聞記者にもなる、雜誌もやる、と云ふやうに見える、一切は利用である、一切は手段である、廣く一切を利用し、何物をも何人をも手段に供すると云ふ其の大才偉能に至つては、之は驚くの外はない、之を長所と云へば長所、偉大なる點と云へば偉大な點であるかも知れぬ。

從つて茅原華山氏は、自ら新唯心論者であり、新理想主義者であると云つてゐるが、その思想となつてゐるものは、全然唯物思想である、しかも其の唯物思想も、思想と云はんよりは寧ろ物我的衝動であり、物我的計略であると云ふ方が、實際に近い、適當であるやうに思はれる。

今度の『第三帝國』の事件にも、茅原氏の此の性格が遺憾なく發揮されてゐる、『第三帝國』が創刊當時若し失敗に終つたならば、最も悲慘なる目に逢ふものは僕であつて、茅原氏は原稿を書いた位の程度で何の事も無かつたであらう、若し成功したならば、乘取つてやれと云ふのだ、その詳細は『第三帝國』に發表したから、こゝには簡單にしか云はれないが、僕は茅原氏によつて、最も多く最も永く利用された唯一人である、今尙ほ盛んに利用されつゝある一青年を、予は知つてゐる、萬朝報退社當時の財產公賣も、所謂模範選擧も、一切は手段的である、今回の如きも、僕を追ひ出さうとし、妻君に云ひつけて、僕の印形まで持ち出させ、僕の承諾を經ずして名儀がへをしやうとしてゐながら、事窮するに至れば、翼下の鈴木松本の諸君に騷がせ、訴訟まで起させてゐながら、表面猫を被りて、退隱讀書の人となるなど云ひ振らし、それを自ら新聞に通信して、世間の同情に訴へんとするが如き、數へ來れば、茅原氏の心術は、歷々之を指點すべく、其の爲す處、云ふ處、凡て是れ手段、凡て是れ利用に過ぎざるは、親しく交はれば交はる程、深く事を共にすれば共にする程、益々明瞭となるばかりで、此の一事を示すだけでも、茅原氏の面目に略々之を告げることが出來るやうに思ふ。

その文章の華麗なる、その詩人的の素質に富める、共に華山氏の才氣

を窺知することが出來るが、畢竟は才の文、才の人たる以外、何でもない。

君子は交りを絶てども惡聲を放たずとか、予は既に大分惡聲を放つて了つた、此の上茅原氏の人格や私行にまで言及する程、無常識でない、たゞ大方の茅原氏を觀る人々に對し、一片の警告をなし、殊に心醉し易き青年諸君の、今後予が如き不明の誹を受くるなからん爲め、その華麗なる文章に魅せられて、一生を誤るが如きなからん爲に、敢て恥を忘れて一文を草したまでゞある、之を以て茅原華山氏の人物全體を評隲したものと誤解せられては困る。(十一月二十日華山派訴訟提起の翌日記)

▽茅原華山とは怎んな人

松本悟朗

茅原華山氏と私との接觸は、雜誌「第三帝國」創立の約一年前から始つて居る。殊に氏の雜誌事業に參加して、その下に働くやうになつてからは、常に相見えて居るのみならず、いろ〱な意味で隨分世話にもなり、厄介もかけて居る。氏に對して斯うした關係を有つて居る私は、充分公平な第三者の立場から氏の思想なり人物なりを論評すべく適當した者ではないかも知れぬ。また所謂燈臺下暗しで、氏を理解すべく私の位置は却つて適當して居ないかも知れぬ。併し事實、第三者といふ者が常に公平な、そして肯綮を得た論評を下すかといふと、必ずしもそうでない場合が多い。殊に華山氏の如き性格に矛盾の多い多角多面の人物は、稍もすると馬鹿々々しく世間の誤解を招いたり、さうかと思ふと輪に輪をかけて大袈裟に吹聽さるゝ結果、人物の眞相を捕捉することが極めて困難のやうに思はれる。

私は平常、華山氏に接觸して、その特長と缺點とに打つかる毎に、單に表面に顯れた處だけを觀て、一切を判斷し去るの輕卒を避けやうと努めて來た。一體華山氏は天才肌の人で、その性格に甚だしく出世間的、超俗的な趣があると同時に、また一方には妙にヤマ氣の多い、所謂世間師風の所がある、斯うした全然相反する二つの性情が綯れ合つて、それが一種不思議な、兎もすれば他人から誤解され易い性格を形作つて居る。

ある人は、華山氏ほど無邪氣は人物はないといふ、それは確かに氏の一面を語るものに相違ない。一體氏は却々愛相の好い人である、又よく他人の面倒も見るし、親切な人でもある、それが單に普通の世間師に見るやうな策略から來るのではなくて、矢張眞からさうなのである。又どこかに人を信じ易いやうな所もあつて、それが爲めにどうかすると飼犬に手を嚙まれるやうなことも起り勝ちである。今度の「第三帝國」對石田氏の事件なども多少這般の消息を語るものと見て可かろう。

氏は世間流の俗事には到つて無頓着な人でさうした點から隨分非常識に見えたり、初對面の者からは妙な人だと思はれたりする、從つて又奇想天外より落つる底のお愛嬌の種を播くことも屢々ある。氏は人と對談

中、突然詩を吟じ出したり、途を歩きなが始終ブツブツ獨口を利いたり、知人を訪問する毎によく下駄を穿き違ひたりする、又子供のやうに人の力を借らなければ滿足に着物を着ることも袴を穿くことも出來ない、それらが傍から見ると馬鹿に他愛がなく、無邪氣に見える、夫人に言はすれば隨分世話のやける坊ちやんなのである。

併しそう言つたことは、ホンの外面に表はれた部分で、それも實は氏の頭が常に天下國家の問題や、時代思潮の推移や、そうしたことばかりを始終考へて居る、否、寧ろそうした考に溺沒してゐる結果に外ならない。氏は時として馬鹿に無愛相に見えたり、不親切らしく見えたりすることもあるが、さうした場合は氏の頭がきつと何かの問題に充たされてゐる時である。

氏は元來、天才肌の人であつて、斷じて學者肌の人ではない、だから論理的頭腦は乏しいが、直覺力に於いては著しい能力を示して居る。從つて政局の推移、時代思想の轉化等を豫覺し、直觀することに於て大に卓越して居る。しかし氏には、それを充分精密に考へ拔いて理路整然たるシステムにまで築き上げると言つた處はない。電光の如く一種のインスピレーションが内に閃めくと、氏は直ちに筆を驅つて滔々數萬言を聯ねて了ふ。この時氏の頭には前に發表した思想と一致しやうがしまいが一向そんな考へはないらしい。こゝらが又世間からは變說、改論までは行かずとも矛盾に充ちてゐると言つたやうな非難攻擊を受ける原因となるのではあるまいかと思はれる。

華山氏の思想が近來になつてから大分調子の變つて來たことは一般の認めるところであるが、併し私に言はせると氏の思想は方に行くべき方向に向つて行きつゝあるのであると思ふ、同時に氏の近來の思想に、確實に、より密接に氏の人格又は性格にひつたりと符合して來たことを認めずには居られない。氏は近代思想の一特色たる利己的個人主義に反感を懷いて來た、機械的凡俗的民主々義に反感を懷いて來た、唯物的な功利的な法治的な俗物思想に反感を懷いて來た、そして凡てをもつと內部的な本能的な人間的な方面から觀察し思索しやうとするやうになつた、具體的に全的に物の眞生命を把握しやうとする傾向が增して來た。氏が傳統を重んじ、國家又は民族を重んじ、國民性を重んじ、特殊の環境を重んずる風が著しくなつたのもその爲めであり、また凡てに自分及び自分の立場又は境地を深く反省する事よりして、漸く遠くに眼を放つと言つたやうな、謂はゞパースペクテイヴを重んずるやうになつたのもその爲めである。つまり氏の近來の思想は一面に於ては氏自身に歸つて來たものであり、又他面に於ては將に開けんとする新しき時代（眞の二十世紀）の方向に步み寄つたものであるとも言へやう。或る人々は氏の思想を退步だと見て居るが、私は寧ろ進步だと考へて居る。少しく心して華山氏昨今の主張を見るものは、確かに氏がこれ迄に唱へた何物よりも一層意義深きサムシングを提唱してゐること、尠くともそれらを暗示してゐることに氣がつくだらうと思ふ。

最後に今度勃發した「第三帝國」對石田氏の問題に就いて一言して置

きたい、一體、華山氏は法律とか權利とか言つたやうな事柄を三百代言式に事々しく述べ立てることの大嫌ひな人である。従つて「第三帝國」は創立の當初から署名人が誰であろうと、持主が何うであろうと一向お構ひなしにホンの相談づくでやつて來たのが、偶々石田氏の乘ずる處となつたやうなワケで、實を言へば石田氏に對する反感は、最初華山氏よりも寧ろ他の同人間にあつたことは確かである。社員が石田氏に關する苦情を華山氏へ持込む度毎に、氏は言葉を盡して社員を宥め、石田氏のために辯解頗る努めたものだが、追々事實が曝露され、正直一圖に見える石田氏に案外暗い蔭のあることを知るやうになつた、そして氏は石田氏に對して再三忠言を試みたが、それは一向甲斐がなく、遂に今日の破裂を見るに到つたやうな次第である。事件の突發した際、華山氏が容易く「第三帝國」を石田氏の前に投出さうとした理由も、畢竟氏が法律を盾にとつての喧嘩や、名義上の爭ひなどを好まぬことゝ、一方には御大典を傍に控へて詰らぬ人騷せをすることを避けやうとした處からさう言つた態度に出でたもので、勿論「第三帝國」が石田一瓢に脊負ひきれる荷ではない位のことは心得て居たに相違ない。華山氏は實力の競爭最後の勝利を心懸けて居る、氏の最高政略（ハイ・ポリシー）は來るべき政局並に思想界の轉廻期に着眼してゐる。素より氏は石田氏などの相手ではないのである。



漱石夏目金之助先生著

社會と自分

▼好評湧くが如く▲

縮刷

▼忽ちにして八版▲

▼本書は我現文壇の大家、思想界の明星夏目漱石先生唯一の講演集也。

▼吾人は本書に於て社會及び文藝に關する最も卓越せる大識見を聞くべく、趣味豐麗にして何人をも魅了せでは息まざる内容に觸るゝを得。

▼本書一度世に出づるや、好評湧くが如く、重版又重版、時代の要求は之を縮刷として普く世の讀書子に頒つに至れり。

▼吾人が本書に於て學ぶべき所は如何？　曰く……

内容

▼職業と道樂
▼現代日本の開化
▼中味と形式
▼文藝と道德
▼創作家の態度
▼文藝の哲學的基礎

津田青伯装幀
袖珍總布美本
定價壹圓廿錢
郵税八錢

▼眞理は永久に朽ちず、寶玉は無限に其の光を失ふものにあらず！

▼本書を讀める者は何人も嘗て先生の小説にも評論にも現はれざりし赤裸々の姿、偉大なる思想家の眞面目を見るを得ん。

▼津田青楓先生の装幀、瀟洒よく内容と相照映し、永く書架を飾るに足る。

▼今や縮刷を普く發賣するに當り、我社は切に新人の愛讀を希望して息まざる也。

發行所　東京京橋南紺屋町　實業之日本社出版部　振替口座三二六番

（中付三の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

帝大教授 法學博士 吉野作造先生著

最新刊

菊版總布 上製美本

現代の政治

定價 壹圓參拾錢（郵税十二錢）

此の内容を見よ！

海の内

民衆的示威運動を論ず：畢竟するに憲政の失敗：民衆運動に對する今後の方針：山本内閣の倒壞と大隈内閣の成立：政黨内閣論：現下の政局と憲政の將來：現政府に對する政友會の態度：新勢力圏の開拓：議員選擧の道徳的意義：選擧道徳高調の必要：選擧道徳の三大綱領：如何なる人物を擧ぐべきか：立憲の本義より見たる今次の政爭：我國今日の選擧界：今次選擧の豫想：選擧後の問題：婦人の政治運動：所謂當局者の意見：婦人と政治：議會の言論：言論の農視：其弊並に矯正策：大正政界の新傾向：新らしい傾向：民衆の勢力：日本に政黨政治が行はれ得るか……

海の外

對支外交の批判：日支交渉の來果 支那の側より見ては如何：支那帝政論：支那の帝政は實現の見込ありや：支那帝政の實現の結果如何：我國の態度：日米問題：排日問題の根本的研究の必要：羅馬法皇の更替：新法皇ベネヂクト十五世：法皇の選擧外數十項……

▼海の内外を問はず、此の一兩年間は政界多事の時であつた。其の間には内閣の更迭や選擧問題や戰爭や支那の問題等時事問題が踵を接して起つた。此の間にあつて國民はどんなに政治的に教育されたか知れない。

▼然し盲目千人の世の中だから、國民として此の意義ある諸種の經驗を身にしめて感じない者も尠なくないことであらう。又、感じても結局事の眞相に徹し得ずに居る向も極めて多いことであらう。

▼本書は吉野博士が其の折々の時事問題に對し、深遠な識見を披瀝せられたもので、最近の精細な政治史であると同時に最も新らしく、最も高遠な、最も實際的な政治論でもある。

▼著者は永い將來を有する有爲の學者で、帝國大學の教室から明星のやうに輝いて居る、極めて鋭利な頭腦を有つた學者であることは既に賢明なる人士の認めて疑はない處である。新人は本書に依つて現代政治の眞相を知り、著者の高邁なる識見に觸れなければならぬ。

東京京橋南紺屋町 實業之日本社出版部 振替三三六番

（中付三の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

（最新刊）

獨逸從軍記

洋装四六判美製全一册紙数二百餘頁
戰線實寫眞二十餘挿入

正價金八拾錢

郵税（内地金八錢 朝支金十二錢 臺樺金十二錢）

歐洲大亂の戰況を眼前に髣髴する快著は此あるのみ

杉村楚人冠序　岡本一平装幀　宮家壽男譯

ヘディン博士の西部戰線記を前編とし**ヒンデンブルグ軍從軍記**を後編とす**楚人冠氏の序**に曰く「大亂煥發以來詳細の事情の傳るは何時も三國協商側からで獨墺からは甚だ鮮い之が爲に日本に知られてゐる**戰況は公明を缺**くのみならず丸で事實の傳はって居らぬ事もある此の點に於て**本書**は**頗珍**しい今まで日本に知れて居ない**獨逸側の狀況**が詳しく出て居る曩に本書の一部が朝日新聞紙上に連載せらるゝや**好評嘖々**之が輯集を慫慂する向鮮からざりしは**內容**の**興味津**々たると**譯述**の**流麗**たるを證するに足る本書を讀まざれば歐洲大戰亂を語る能はず



發行所　東京日本橋　**大倉書店**
（振替貯金東京二三八番）

（中付三の三）

花袋全集 第壹卷

少し早いやうな氣もするが、自分の生存中に全集を出して置いた方が、完全な理想的なものが出來ると言ふ花袋先生の考から、內容に於ては後世に殘して恥かしからぬもののみを選び、裝幀、紙質等に至るまで先生の嚴重な監督の下に此花袋全集が出版されることとなつた。全六卷を以て完成し、發行の順序は新しきものより順次に古きに及び、年二冊の豫定を以て發行される計畫である。敢て大方讀書子の深厚なる同情に依る盛なる歡迎を希ふ。

大形四六版約七百頁
總クロース箱入美本
總九ポイント活字
一頁約八百字詰

定價壹圓八十錢
郵税十二錢

(中付三の四)

內容

春雨
髮
殘る花

代表的長篇三篇

本書に收めたる三篇は、花袋先生が**女性を研究し、戀愛**を描かんが爲めに、特に筆を執られた三部曲とも見るべきもので、**共に藝妓を主人公**とした最近の作に係る長篇である。現文壇の巨人の圓熟渾成せる筆致を見るに缺くべからざる代表的作品として敢て江湖に推奨する。

發行所 田山花袋方
東京市外代々木百卅二番地

發賣所 株式會社 植竹書院
麴町區三番町八十四番地
振替東京一二九五三番

評論

内外時事評論

古川學人

大隈伯隱退說と其後繼者問題

大隈伯が御大禮の無事終了と共に退隱するだらうといふ說は、前々から唱へられて居つたが、過般公開の席上に於て、伯自ら自分が挂冠する時には必らず其後繼者を奏薦する責務があると云ふ意味の言葉を洩らしてから、伯の隱退は政界の一部に眞面目に信ぜらるゝやうになつた。大隈伯自身が果して此際圓滿辭職をしたいといふ希望を眞實有つて居るのか、或は伯自身に此希望あるに非ざれども、周圍の者が伯の晩節を全うせしめんが爲めに、圓滿辭職をさせたいと希ふて居るのかはよく解らない。只伯の平常に徵し、殊に伯の元來樂天的傾向を有する性行に徵して、吾人は伯が故なくして中途大任を拋擲するやうな事はあるまいと思ふ。遣れる處までは何處までも遣るといふ積りで居らるゝのではあるまいか。然し伯の此際高踏勇退すると、又は留つて更に奉公を續くるとは、我國憲政の進步の上からは、何れになつても左まで重要な關係はない。

人或は伯の爲めに策を建てゝ曰く、現內閣が上　陛下の御信任を恭うし、下、國民の信望を繫いで居る以上、故なくして退くのは正當でない。圓滿辭職の美名に隱れて、國家多端の際に處する責任を避け、獨り自ら淸うせんとするのは、男子の屑しとせざるところであると。斯くて伯をして最後まで踏み止つて、國政を掌らしめんとする。此說も一應は尤もである。伯にも

此位の元氣はあらう。然し若し伯に斯う云ふ考が少しでもあつて強て瘠我慢して留職するのならば、それは全く誤解である。予の考では伯にはそこまで踏み込むの義理はないと思ふものである。政治家が一旦責任の地位に立つた以上、故なくして其地位を去るべからざるは、素より當然の事である。内閣を組織する者は、議會に於て多數的基礎を失はざる限り、何時までも其地位に留るべき徳義上の義務あること勿論である。然しながら吾人は我が大隈内閣が此立憲の常道を以て律する事の出來ない内閣であることを忘れてはならぬ。何故なれば、大隈伯は去年三月山本内閣倒壞の後を受け、政友會が多數黨にして而かも内閣を去らざるべからざる變則的形勢に促されて出現したものである。政友會が絶對的多數を占むる以上、どの黨派も、否な他の黨派が皆聯合しても、政友會に取つて代つて内閣を乘取ることが出來なかつた。是に於て大隈伯といふ巨人の出現を當時の變則的政界は必要としたのである。故に大隈内閣は此變則的政界の急に應じて、政界の形勢が順當に歸するまでの間の繋ぎとして出現したる。謂はゞ經過的内閣である。此の一時の急に應ずるといふのが、大隈内閣の存在の理由である。而して今や政界の形勢は順當に歸した。本年三月の總選擧によつて政友會の多數は崩れ、同志會を中心とする所謂政府黨は議會に絶對多數を占めて居る。然らば伯は我任務畢れりとなして其職を退き、任を同志會一味の者に讓るに毫も差支はないのである。

さればと言つて、伯には政界の形勢順當に歸したからと云つて、必らず直ちにやめねばならぬといふ必要もない。尤も總選擧の後適當の時機を見てやめるのは、所謂最も賢い方法であつたらう。而して總選擧後最も適當なる時機とは、御大禮の結了に於て之を見るともいへるから、伯にして若し所謂賢い方法を取らんと欲するならば、風說の如く、御大禮の結了を以て圓滿辭職の方法に出づるのも亦一策かも知れない。斯くなす事に於て伯は固より正當の理由を有する事前述の通りである。けれども伯にして若し獨り變則的政情の急に應ずるのみを以て甘んぜず、更に多年抱懐せる「高遠の理想」に基き遠大なる經綸を行はんとするに志あらば、其儘留つて引續き大政を料理する是亦毫も差支はない。故に我々國民としては、伯が其職に留るも或は其職を去るも、共に立憲の本義より觀て、之を非議する權利はないのである。只問題は、伯に果して此上

更に經綸を續行するの大抱負を有するや否や、又現在の頗るお粗末な閣僚を以てしても果して此遠大の經綸が行へると信ぜらるゝや否やといふ事に歸する。伯の所謂政治的經綸の如何なるものかについては已に試驗濟である。我々は在野諸黨の難ずるが如く、伯を以て徒らに大言壯語するのみに止り、何等實際的手腕なきものと思ふものではないが、さりとて伯を以て從來世間に期待された程の實際的大政治家とも許す事は出來ない。若し夫れ其閣僚に至つては、殊に改造後の其顏觸に至つては、二三の例外を除いては、只多年政界に馳驅したといふ骨董的經歷を有するの外、何等の實際的智識と手腕とを有せざる凡骨揃である。こんな顏觸を揃へたところを以て觀れば、或は伯に永く其職に留るの考が無いのかも解らない。

斯く考へれば、伯の隱退は我々國民として之を引留める理由もなし、又之を惜むべき理由もない。寧ろ軍國多端の際、眞に有能なる人才を必要とする今日の時勢に照して、大隈内閣の隱退は或は寧ろ希望すべき事に屬するものかも知れない。

只茲に一つ希望に堪へないのは、若し伯にして退隱するに決心する以上、其跡始末を立憲的に立派に遣つて貰ひたい事である。言葉を換へて言へば、後繼内閣の組織者としては、必ず議會に於て絕對多數を制し得べき者を奏薦する事である。更に簡單に之を言へば、

同志會總理加藤高明男を後繼内閣の首相として奏薦する事である。予が茲に加藤男を奏薦すべき事を勸奬するのは、敢て同志會の主義政策に贊成するが爲めではない。予一個の政治上の意見として、同志會に傾くか政友會に傾くかと問はるれば、自ら又一個の定見はある。然し予輩は茲處には予一個の私見を離れ、只立憲の常道として此際伯が何人を後繼者として奏薦すべき道理であるかといふ立場から、此議論を進むるのである。若し夫れ一部の人の唱ふるが如く、議會の勢力と何等の交渉なき寺内伯の如きを擔ぐに至つては、寺内伯自身の技倆手腕は別問題として、憲政の發達の上から見れば正に是れ一大逆轉である。加藤男乃至同志會の政權掌握を嫉視する連中は、寺内伯の一派の勢力を、少數黨たる政友會に連結して、所謂擧國一致の人材内閣たる美名の下に、政權を自家の手中に奪還せんことを策して居るとの事である。在野黨として、敵黨の永く勢力を持續するを默視し得ざるは、誠にさる事ながら、斯くして閥族官僚の跋扈を意とせざるは、甚だ心

なき等し言はねばならぬ。

成程擧國一致內閣は、近頃英吉利、佛蘭西に現はれて居る。軍國多事の際、暫く內紛を忘れて共に國家の大事の爲めに協力するといふ事は、極めて必要である。然しながら擧國一致を名として敵味方共に廟堂に竝立するといふ事になるに付ては、そこに至るまでの實際の緊契の必要がなければならぬ。實際の緊契の必要なくして徒らに擧國一致の名の下に異分子を集むるは、却て弊害の續出に困むであらう。凡そ政黨が數個に分れ、互に相牽制し、互に相競爭するのは、之れもと自然の必要に出づるものであり、且又望ましい事でもある。此競爭對立の形勢が、實に政界を清め且つ之を進步せしむる所以である。只非常の時に際し、暫く不急の內爭を忘れて眼前の急務の爲めに事を計るを要する時に、所謂擧國一致內閣の說が起る。而して擧國一致を必要とする事項は、從來主として外交問題についてである。從來の例によるに、政黨間の論爭は主として內政問題について激しく起り、外交問題については各黨均しく步調を一にするに努むる傾きを示して來た。今度の戰爭のやうな危急な場合になると、益々敵味方相協力するの必要に迫らるゝのであるが、併し之は目前急迫の事件の起れるに非る限り、從來各國の例によれば 政府が事每に反對黨の領袖に事情を打明け相談をするといふ事によつて、協戮の目的は達せらるゝ。それでも事件が急速に運ばない、而かも敵は段々手近に進んで來るといふやうな場合に迫れば、玆に初めて敵味方の區別を忘れて同じく廟堂に立つといふ必要に迫らるゝ。故に擧國一致內閣を必要とするには、事件の重大といふことの外に、事件の急迫なるといふ事がなければならぬ。此點から見て、現今の我國には、或は戰後の經營といひ、或は對支外交の交涉といひ、性質上より觀て重要なること戰爭其者に勝る事件が澤山あると云はねばならぬ。けれども此等は極めて重大な事件ではあるが、ゆつくり相談の上で決定する事の出來ぬ性質のものではない。極めて迅速なる處置を要するといふ急迫なる事件ではない。之を疾患に譬ふるな

らば慢性的の事件にして急性的の事件ではない。故に現今我國に於て擧國一致內閣を必要とする理由は毫末も存在しないのである。斯くて我輩は同志會內閣なり、政友會內閣なり、一黨派のみの政府を以て可なりとするものである。只此事に關連して予輩の切望に堪へざるは、政府當局者が從來の如く偏狹なる態度を取らず、事ある毎に胸襟を披いて反對黨の領袖と懇談熟議するの雅量に出でられんことである。

尙終りに臨み、更に予輩は將來の內閣は何人が組織するにしても、其閣僚の人選に於て眞面目なる用意を加へられんことを切望せざるを得ない。今までのやうに、閥僚に氣受けの好い人とか、政界に於ける經歷とか、議員元老等に通りのよい人とか云ふやうな標準で大臣を登用するやうでは、太平無事の世閥僚に事を任かして置いても可なる時代には差支なからうが、一旦國家の大事に遭遇して、腦漿を絞つて之に處するの途を研究せねばならぬと云ふやうな場合には、甚だ困る。獨逸の偉い處は實に玆に在る。人は多く獨逸の强大なる理由を其の軍國主義に置くが、之は正當の見解ではない。軍國主義其物には大いなる弊害がある。それにも拘らず獨逸のエライのは、大臣などに擧げらるゝものが皆眞に社會の上流に立ち得る非凡の人才であるからである。獨逸は平素軍國的氣分に滿ち充ちて居るが故に、大臣などの人選についても、經歷がどうの、氣受けがどうのと云ふ暢氣な事を考へては居れない。本當に役に立つ事實上の人物をドン〱拔擢する。空名空望は彼等の顧みる所でない。故に今度のやうな大難に當つても、いろいろ奇拔な智惠が出て、いかに窮迫しても夫れ相當に處置して行く。之と比較して露西亞などは、大臣の人選にも從來隨分情實があつたから、イザと云ふ時に幾人寄つても旨い智惠が出ない、茫然爲す所を知らざる有樣で、軍國の大事を處理するにも常に後れ勝ちである。我國に於ても戰後の最も重大なる地位を思ふ時にどうか今までのやうな暢氣な態度で、大臣を人選する事は是非やめて貰ひたい。

自ら青年團指導者たらんとする者に與ふ

九月十五日、一木内相・高田文相の連名で、青年團に關する訓令なるものが發せられてから、此問題は盛に新聞雜誌等の議論を賑はした。中には議論の不徹底なのもあり、見解の吾人と異なるものも少くなかつたが、併し今頃本誌に於て之を問題とするのは、些か六日の菖蒲、十日の菊の感なきにしもあらずである。けれども讀者の中、此問題について特に我々の意見を徵せらるる向が少くないので、後ればせ乍ら茲に之を論ずることにする。

先づ參考の爲めに右の訓令なるものを掲げると次の如くである。

△青年團改善訓令

青年團體の設置は今や全國に洽く、此際一層青年團體の指導に努め完全なる發達を遂げしむるは、内外現時の情勢に照し最も喫緊の一要務たり、抑も青年團體は青年修養の機關たり、其の本旨は健全なる國民、善良なる公民たる素養を深からしむるにあるを以て、團體員をして忠孝の本義を體し、品性の向上を圖り、體力を增進し、實際生活に適切なる智能を研き、剛健勤勉克く國家の進運を扶持するの精神と素養とを養成せしむるは刻下最も緊切の事に屬す、其之をして事業に當り實務に從ひ、以て練習を積ましむるもの又固より修養に資せしむる所以に外ならず、故に地方當局者は須く此に留意し、地方實際の狀況に應じ最も適實なる指導を與へ、以て團體をして健全なる發達を遂げしむべし。

△青年團體設置標準

△組織　青年團體は市町村内の義務教育終了者又は同年齡以上の者を以て組織し最高年齡廿年を常例とす。

△區域　青年團は市町村を區域と組織し地方狀況に依り部落又は小學校通學區域等を區域と組織し、又は支部を置く事を得。

△指導援助者　青年團體の指導者は小學校長又は市町村長其他名望ある者の中に就き最も適當と認むる者をして之に當らしめ、市町村吏員、學校職員、警察官、在郷軍人、神職、僧侶、其他篤志者中適當と認むる者をして協力指導せしむ、又團體員にして常例の年齡を過ぐる者は團體の援助者として其力を竭さしむ。

△維持　青年團の經費は努めて團體員の勤勞に依る收入を以て之れを支辨す。

單純に此訓令丈けを觀れば、其の趣旨は大體に於て至極結構であると思ふ。凡そ青年の修養は學校教育ば

かりでは固より足りない。是に於て所謂社會教育なるものが必要である。而して所謂社會教育の必要は、學校に行つて居る青年にとつても必要であるが、天下幾萬の青年の中には義務教育を終つた後更に中等教育に進まずして居るものが大多數なるを思ふ時に、我々は社會教育の必要の特に大なるを思はずには居られない。而して我々は更に此社會教育なるものが特に我日本に於て一層必要なる事を思ふ。何となれば、我國に於ては第一に年寄りと若い者との間が非常にかけ離れて居る。西洋などでは、老人と青年との間柄が餘程親しい。爲めに青年は不知不識老成人の善良なる感化を受くる機會に富む。此點に於て我國の青年は丸で野放しである。其上に我國に於ては、西洋に於けるが如き宗教等の教養機關がない。故に日本の青年は西洋の青年に比して、著るしく先輩の指導訓練を受くる機會に乏しいのである。此點より觀て政府が各地に青年團の發達を獎勵して青年修養の好機關たらしめんとするのは、極めて機宜に適したる考案であると云はねばならぬ。

只一つこゝに問題となるのは、本訓令は果して青年修養の目的を達するに完全なるものなりや否やといふ點である。表面に現はれた所では大體は結構である。けれども、年齡を制限して義務教育終了より滿二十年までとしたのは如何なものであらうか。尤も此制限は嚴格に之が勵行を期するものではないかも知れぬ。然し若し此趣意を何處までも貫かうとすれば、從來各地にあつた青年會の組織に革命的變更を來たすの恐があるまいか。何となれば、從來の青年會は、廿才以上のものが決して少く無かつたからである。尤も一部の人の云ふ所によれば、今度の青年團訓令の趣旨は、義務教育を了つて徴兵に至るまでの青年に、軍事上の豫備教育を與へんとするに在ると云ふ事であるが、若し果して之が實際であるならば、それは大いなる誤りである。世間には軍隊を以て一種の教育機關と視る所の人が少くない。そこで十二三歳までは學校教育を受くる、廿才からは軍隊で教育をうくる、其間まるで青年を放

任しては不可ぬから、之に軍隊の豫備教育を與へて、軍國青年の教育を全うしようと云ふのである。然しここに忘れてならぬ事は軍事教育は青年教育の總てゞはないといふことである。從つて折角青年の修養の爲めに起つた團體をば、軍事教育のみの目的の爲めに利用せらるゝに任すと云ふ事になれば、必ずや爲めに少からざる弊害を來たすであらう。尤も、初めから軍事上の豫備教育を與ふる爲めと云ふ目的を露骨に掲げ、之は青年に只一方面の教育を與ふるのであつて、青年の教育は之に盡きたのでは無いと云ふ事を、初めから明かにしてかゝるならば、或は大した不都合はないかも知れぬ。けれども青年團の指導者が軍事教育を唯一萬能のものと考へて、そして其指導に當られては堪つたものでない。何れにしても、此種の團體の成功すると否とは、表面に掲げた目的趣旨の如何よりも、實際之を指導する當局の精神如何に係ることが多い。然るに仄かに聞く所によれば、今度の青年團の訓令は、陸軍省側から起つた思想であるといふ事である。而して陸軍省が斯の考を起したのは、今度の戰爭に刺戟された結果であると云ふ。それかあらぬか、參謀次長の田中義一中將の如きは、最近頻りに青年團の問題を論ぜられて居る。氏はいろいろの機會に於て、青年團は須らく修養團たるべく、事業團たるべからざる事を說き、又修養の精神を吹き込む爲めには、全國の青年團を劃一的に統一するの必要あることを說き、其模範として獨逸の例を掲げて居らるゝ。氏の敎ふる所によれば、獨逸では政府の奬勵の下に各地に青年團を置き、各邦に於ては國王若くは王太子が自ら總裁となつて之を統一し、更に之を帝國全體に亘つて一大同盟に統一して皇太子殿下を總裁に仰ぎ、フオン・デル・ゴルツ將軍を會長に戴いて居る。帝國陸軍省は此事業に多大の補助を與へ、而して各地の青年團は現役若しくは在鄉の將校に其指導を托し、又青年團の事業としては體操、野外演習、遊戲、遠足等を行つて、青年の思想を練るといふのださうである。是に由つて之を觀れば、我國に於て青年團の保護奬勵を政府でやるといふ實際の精神

は、表向きは何と云うても、内容は矢張り獨逸のやうな青年團を作る積りらしい。果せる哉、久保田内務次官は先達てある新聞記者の問に對し、「適齢前の青年に對し、野外に於ける軍事的豫備智識を與へ置く」事が青年團の主なる目的であると答へたと云ふではないか。斯う云ふ考で青年團の指導を實行されては、其結果はどうなるであらうか。聊か寒心に堪へないのである。

尤も青年に軍事的豫備智識を與ふるといふ事夫れ自分は、決してわるい事ではない。却て青年の身體を强健にし、心膽を堅剛にするの利益はある。けれども爲めた之を以て青年修養の唯一又は最重要の眼目とするものあらば、之れ非常なる誤謬である。殊に在鄕軍人などが指導者となる事であれば、心なき軍人は地方にあつて自分のする事のみを唯一の價値あるものと爲し、斯くて他の社會的、宗敎的若くは藝術的修養を青年に與へんとする類の企圖をば嫉視排斥すると云ふが如き弊害が生じはしまいか。現に今日まで各地方に於ていろ〳〵の目的を以つて起つた靑年會がある。中にも政府當局者の所謂事業團の性質を有する靑年會も、其數頗る多く、而も其大部分は、實は曾て政府の奬勵によりて出でたるものである。然るに今や政府は事業團ではいけない、修養團でなければならぬといふのは、餘りに靑年を弄ぶものではなからうか。政府は曾て危險思想の勃興を憂へて青年に勤儉の風を植えつけんと欲し、殊に一時盛に唱へられた二宮宗の說に動かされて、地方の靑年に勤儉勞作の風を强いんとの目的で、共同して山に木を植えるとか、一緖に集つて夜業に草鞋を作るとかの趣意で各地に靑年會を作らしめたのである。是れ即ち事業團である。予の考では斯種の靑年團も決して在つて惡くはない。然るに今や、獨逸に於て適齢前の靑年が軍國の爲めに多少の貢獻をなして居るのが感心だといふて、直ぐ今迄の方針を一擲し、軍事敎育の方に靑年會の方向を變へしめんとするが如き態度に出づるのは、却て靑年をして其才就に迷はしむるの怖なきを得ようか。要するに、靑年が其心身の修養の爲めに執るべき方策は一にして足らない。野外演習や體操ばかりが大事なのではない。國民として又人間として、修養すべき大切なものは外にまだ幾らもある。其大切なものは外にいくらもあるといふ事を萬々承知の上で、初めて軍事的修練といふものも弊害なくして行はれ得るものである。

又單に獨逸流に適齢前の靑年に軍事的敎育を與ふると云ふ目的だけを取つて見ても、今日我國に於て在鄕の軍人を各地の靑年團の指導者たらしむと云ふ事が、實際上果して適當なりや否やは、大に疑ありといはざるを得ぬ。成程獨逸に於てはこの方法に依つて首尾よく成功しては居る。けれども獨逸に於て靑年團の成功して居るについては、裏面に實はいろいろの條件が附け加つてをることを看過してはならぬ。是等の條件が備つて居ればこそ、獨逸の靑年團は將校の指導に學んで今日軍國の要求を

充たして居るのである。若し我國に於ても青年團を斯の如き目的に訓練する事に成功せんとせば、單に其形式を獨逸に模倣するに止めずして、獨逸が此點に成功した根本的の諸條件を審かにして、其點まで遡つて學ばなければならぬ。然らば獨逸が青年團に成功した根本的條件とは何か。其主もなるものを數へれば、第一には獨逸の青年は一つには年長者が好んで青年に接近するの結果、又一つには宗教家教育家の道義的勢力が地方に於て強大である結果の初めから行き屆いた精神的訓練を受けて居ることである。日本では宗教の勢力と云ふものは殆んど全く缺けて居る。教育家殊に小學校の教師は待遇もわるく、父兄も之れを尊敬せず、從つて教師自身亦自ら卑下して居ると云ふところから、實際上青年の上に大した勢力を有つてゐない。若し夫れ成人の少青年に對する、假令それが自分の子弟であつても、若いものとなると頓と話相手にしない。故に日本の青年は、年長者と親しみ、心から其教訓を受くると云ふ貴い經驗を與へられてゐない。されば青年の先輩に對する普通の關係は、盲從にあらずんば反抗である。青年が先輩に對して偏らざる柔順の態度を一般に有すると云ふ事は、青年團成功の第一の素因である。獨逸は此點に於て誠に行き屆いて居る。第二に、獨逸の軍人社會は、實際上社會の多大なる尊敬を受くるに値ひするやうな立派な有爲の人格に富んで居る。獨逸で軍人と云へば大抵は貴族である。貴族といへば夫れ自身已に社會に於て一種の傳説的權威を有し、社會は何となしに之を尊敬するものであるが、獨逸の貴族に至つては、父子世々皆偉い人物に富み、馬鹿者の出ることは少い。之は餘程教育に力を入れてゐる結果であらうが、貴族の子弟といへば殆んど悉く皆偉いと云ふ所が、我國と彼國と違ふ所である。斯く貴族であり、而かも偉い其貴族が軍人となつてをるのであるから、軍人の尊敬さるゝ事がまた實に非常である。のみならず之等の軍人は偉いだけに亦頗る常識に富み、自ら青年の指導者となつても決して其途を誤らない。殊に獨逸で在郷將校といへば、多くは其土地に於て封建時代の昔の殿樣の子弟である。斯う云ふ人が指導者の地位に立つと云ふのであるから、青年の爲めに非常に權威がある。獨逸で將校を青年團の指導者に仰ぐのは、當局者の要請に出づるにあらず、地方人士の自發意向に出づるといはるゝが、是れ固より當然である。然るに此點に是て我國の狀態は如何といふに甚だ遺憾がある。第一に我國の軍人の思想は概していへば極めて偏狹である。在郷軍人などと稱して大尉や少佐位で田舍に引込んで居るものに、地方全體の人望を一身に博するやうな人才は極めて稀だ。將校ならまだよいが、下士位で在郷軍人となつて居るものの間には、隨分地方の爪彈きになつて居る不處存者も多いやうだ。故に少くとも日本では、軍人を指導者にすると云ふ事は事實上不可能であらうかと思はるる。現に江原素六氏が青年團問題について「早稻田文學」十一月號に書いて居らるる所によれば、先般大阪地方に講演に行かれた時、村の者共が非常によく働いたから、どうしてさう働くのかと聞いたら、此村には將校がゐないからだと答へたと云ふ事である。斯う云ふやうな有樣では、吾々は到底安んじて青年の指導を軍人に托する事が出來ないのである。

又托しても實効は擧がるまい。獨逸の軍人は地位もあり、名望もあるが、流石に常識に富んで一般人民に對しても極めて親切である。從つて心から社會の心服を博して居る。第三に獨逸では非常に軍人を尊敬する。啻に制度の上に於て之を尊敬する許りではなく、社會的にも亦非常に尊敬するのである。從つて國民は軍人たらん事を非常に名譽と心得て居る。又軍人になる事は、なつたものゝ物質的利益にも合する。將校になれば給料も好いし、富家の子女と結婚することも出來る。又下士や兵卒にしても、獨逸の法律は是等のものに生活上の保證を與へて居る。例へば郵便・電信・鐵道等の役員は、軍役を終つた者にあらざれば從事する事は出來ないとか、又特に八年なり十年なり務めて下士となつて現役を退く者は、必ず警察とか鐵道・郵便等の相當の役につけて、立派に生活する丈けの途を與へてやるとか、其他いろ〳〵の方法を設けて居る。斯くして軍人といふ地位は、上は將校より下兵卒に至るまで、社會の心から親しみ尊ぶところである。又社會の人の喜んで其中に投せんことを欲する階級である。斯る狀況であれば、年若き青年が此等の羨望の的であるところの軍人の眞似をするといふ事は、固より非常に喜ぶところである、然るに我國に於ては如何。貴族や金持は兵役を忌避し、中には其子弟を海外に送つて此重大の義務を免れしめて居る者が多いではないか。軍人階級の長老達でも、現に日露戰爭の時、其子弟を安全の地位に置いたといふ批難があつたではないか。國民一般も國家に對する義務であればこそ、止むを得ずして兵役に服すれ、心から之を喜び之を名譽とするものは極めて少ない。地方農村の子弟に至つては、此義務を以て非常な苦痛と感じて居る者もある。斯ういふ風では、青年團で野外演習をやらしたところが、決して實効はあるまい。普通教育に於ても正課として課せらるゝ體操、殊に兵式體操が最も蔑視せられて居る我國に於て、ひとり軍事的訓練を目的とする青年團の成功することを望むのは、木に緣つて魚を求むるが如きものではあるまいか。

要するに形式は末である。獨逸に倣つて軍國男子の精神を養はんと欲せば、先づ其本を省る必要がある。

よく軍人は軍隊精神といふ事を言ふ。軍隊精神は即ち上官の命令に絶對に服從するといふ心の習慣をいふのであらう。獨逸に於て此關係の旨く行はれて居るのは、主として上に立つ上官がエライからだ。上官の人格と、命令服從の關係で織り成されて居る組織と、兩々相待つて軍隊精神が茲に養成されるのである。而して我國の所謂識者は、啻に形式的の組織のみを見て、無暗に絶對服從を强要し、以て軍隊精神の養成の能事畢れりとする。而して其弊は一方には人權の蹂躪となり、一方には常識を缺ける偏狂極る所謂軍隊式思想の醸成を見る。故に予は當分のところ、軍人の指導の下に青年

團の發達成功する見込は、全然無いと信ずるものである。

青年團の發達は實は各地青年の自發的奮起に任したい。若し政府に於て之を助長奬勵せんとせば、斷じて偏狹なる目的を立てゝはいかぬ。何處までも青年の一般的修養を目的とする方針を立てねばならぬ。其爲めには指導者としては何處までも學校の敎師を立てゝ行かねばならぬと信ずる。何となれば、學校の敎師は、地方に在りて青年の精神的發達の爲めに心を碎く唯一の人であるからである。尤〻現在の學校敎師は、皆此任務を果たすに適して居るとは言はぬ。けれども、學校敎師を措いては、他に適當なる指導者を求むるといふ事は、一般に困難である以上、出來る丈け學校敎師を立てゝ、之をして青年を指導せしむるの外に良法はない。若し父兄が青年の爲めに心配するならば、先づ敎師を尊敬して、青年に其模範を示すべきである。若し地方の官吏にして青年團の發達を希ふならば、官制上の監督權を楯にして、小學校敎師を眼下に見下すやうな横柄な態度を取らす、之を尊敬して、敎師をして大いに自覺するところあらしめねばならぬ。若しまた中央政府にして青年團の成功を希ふならば、地方官・裁判官・軍人其他あらゆる官吏に訓令を發して、學校敎師と協力して事に當らしめんことを努むべきである。青年團の發達成功は、學校敎師を指導の中心とする事の外に斷じて途はない。

對支警告の批判

我輩は前號に於て、警告の不可なる所以、若し止むを得ずして警告を發するならば、關係列國と熟議を遂げた上、共同の歩調を取つて之を爲すべき所以を說いた。而して其の論文の讀者に見ゆるに先だつて、帝國政府は十月二十八日いよ〳〵支那政府に警告を發したのである。警告の趣旨は、二十九日外務省の公表し、三十日の各新聞に現はれた所謂帝國對支勸告公文なるものに現はれて居るが、之によれば、歐洲大亂の今日、世界何れの地たるを問はず新たなる不安の狀態の發生

は極力之を避けねばならぬ事、支那に於ては國體の變更の爲めに、表面は左迄では無いけれども、其實反對の氣勢が各地に著しい事、又袁總統の過去四年間の施政は、大に支那の平和的開發を進捗し、此儘にて進めば支那の安寧幸福の上に此上もないのに、今俄かに國體を變更して帝政を樹つるのは、是福を轉じて禍と爲すものであつて、支那の爲めに甚だ取らざる事、而して爲めに支那に擾亂の起る事は、獨り支那の爲めのみならず、關係列國、殊に我國の損害を蒙る甚だしきものある事を懇切に支那政府に説明して、國體變更の計畫を延期せん事を友誼的に勸告したといふ次第である。而して駐支小幡代理公使は二十八日の午後五時支那外務省を訪問して此趣旨を述べ、同時に英露兩國の公使も亦同席して同樣の勸告を述べたといふ事であるから、此勸告が協同熟議の結果である事は疑ない。佛國は本國よりの訓令が後れたとかにて、十一月三日に至つて初めて勸告を申し出た。其後伊太利も亦同樣の勸告を支那に發したのであるが、少くとも此警告を發するといふ事に就ては、我國と英佛露(或は伊も之に加はつて居るかも知れぬが)との間に篤と相談を纏めたるべき事は疑ない。現に其頃の我國の新聞紙上にも、此問題の初めて閣議に上つたのは十月十四日で、此席上で大體の閣議の方針が決定し、而して外は英・佛・露等の諸國に、內は元老其他の有力者に交渉する等の爲めに十日餘りの時日を要し、いよ〳〵最後の決定を見たのは二十六日であると云ふ樣な報道があつたのを見ても、今度の勸告は日本單獨の發意に出でたもので無いと云ふ事は明白である。

只玆に問題となるのは、此對支勸告と云ふ事は、元來日本の發意に出でたものか、或は又英や露の發意に誘はれたものか、此問題の最初の提案者は抑も何人であるかといふ事である。尤も日本に於ける前々からの新聞などの論調のみを見て居ると、日本が發意者である樣にも思はるゝ。前號にも述べた如く、我國の操觚界は袁世凱氏に對して一般に甚だ同情がない。彼を隣邦の皇帝として仰ぎたく無いと云ふ感情は、多く人の何と

なしに懐いて居る所である。從つて帝政の實現を希望しないと云ふ傾向は初めより我國の言論界に普ねかつた。此點から見れば、警告の發意者が我國である樣にも見えるのであるが、然し支那の事情にも相當に通じて居るべき筈の我政府當局者までが、世間の感情論に動かされて、警告提出の發頭人となつたとは、吾人のどうも考へ能はざる所である。第一にさう云ふ意味で警告を發するならば、もつと早く之を實行すべきであつた。支那で萬端の用意が調つて今更手を引く譯に行かないやうな破目に進んだ後に至つて警告を發するといふのは、如何にも時機の選擇が惡い。尤も人によつては、日本では眞逆袁世凱氏が本氣に皇帝になる積りではあるまいと考へて居つたといふ。聞く所によれば、帝政運動の起るや、某々大官は再三念を押して支那公使に向ひ果して帝政の實現すべきや否やを尋ねたるに、陸公使は斷じて此事なかるべきを明言したと云ふ事である。此說の果して事實なりや否やは予の確言する能はざる所なれども、假りに此風說を事實なりとしても、

然し是等の說を信じて袁政府に國體變更の決心なしと信じたりとせば、予輩は我が當局者の迂濶無識なるに驚かざるを得ない。少しく支那の事情に通ずるものに取つては、帝政實現の避く可からざる勢は極めて明白である。此事は前々號の本欄に於ても些か說明を試みた。斯く帝政實現の避け難き事が明白なるに何故に、愈々刀の鞘を拂ふまで我國は傍觀 態度を取つて居つたのか。而して最早動きの取れない場合に爲つてから警告を發すると云ふのは、皮肉といへば餘りに皮肉に過ぎると思ふ。さればこそ支那でも、そんなに押詰まつてから警告をされたので。我國の眞意の如何を測り兼ねたやうである。或は新利權要求の手段としてこんな事を云ふのだらうと觀たり、又は日本は斯くして支那の人心を攪亂して火事場泥棒を働くのであらうと觀たり、稍穩かな見解を立つるものも、日本は初め打ち合せをされなかつたといふ事に腹を立て、殊更にいよいよの間際になつて我々を窮境に陷れんとするのであるなどゝ觀たのである。要するに支那では、少くとも

初めは、警告の眞意を測り知るに苦しんだやうである。故に假りに一歩を讓つて警告を發するに相當の理由があつたとしても、警告を發する時機の選擇が極めて宜しきを得ない。警告を發する以上は、發するものにも相當の覺悟があらう。元來列國の同情好意を無視する事の出來ない地位に在る袁世凱氏に取つては、此警告に對しても亦相當の敬意を表せない譯には行かない。然ればと云つて、彼處まで進んだのを今更をめ／＼と手を引いては大總統の威信に關する。且つ又列强が國體變更に反對の決意をなしたとあつては、現政府反對派に乘ずるの機會を與へないとも限らない。斯くては却つて反政府熱を煽るの結果となる懸念もある。斯くして支那政府は進退維れ谷まる窮境に陷るものと云はざるを得ない。斯くの如き、どの點から考へても失當と云はねばならぬ警告の發し方を、日本の發意で以つて行つたとは我々はどうしても思へないのである。

然らば此一件は西洋の方に發意者があると見て、扨て之等の西洋諸國もかねての方針に基き熟慮を重ねた上で此處置に出でた者かと云ふに、之にも疑がある。何となれば若しも列國間に相當の時日間熟議を凝らした結果として生じた事柄であるとすれば之ほど拙劣な手段には出でなかつたらうと思はるゝからである。して見れば、假りに此問題が他の外國の發意に出でたものとしても、之は恐らく長き協議の結果に出たものではあるまい。何か最近に特に起つた政事情に促されて、列國が急に警告を發するを必要なりとしたものではあるまいか。日本で此問題の閣議に上つたのは、前述の如く十月十四日であるが、十月十四日は石井新外相の就任した翌日である。而して石井新外相は、何かの機會に於て、對支警告の事は歐洲より歸航の途中、船上に於て已に廟議を極めたといふやうな事を新聞記者に話して居られたが、して見れば、或は外相が英佛を去るに臨んで彼國當局者との間に大體の話が出來て、其結果本國に歸つた上、親しく英佛當局者の意見を我國の閣僚に傳へ、他の各大臣の同意を得ていよ／＼警告を發するといふ事になつたのではあるまいか。斯く考へて予は對支警告も發頭人は我國にあらずして寧ろ歐羅巴にありと觀測するものである。我國の新聞などでは、前々から帝政反對の議論が多かつたから、帝國政府の對支勸告は恰も民間の輿論を容れたるものなるかの如き外觀を呈する爲めに、深く警告を發するに至つた事情を問はないやうであるけれど、當初から俗論に反對して警告の不得策なる事を信じて疑はなかつた吾人の立場よりしては、敢て此不得策なる警告を發するに至たについては、必らずやそこに何等かの事情の伏在するに相違なかるべき事を思はざるを得なかつた。而して種々考察の結果、遂に其所謂事情

とは恐らく一種微妙なる邊に存在するものではあるまいかと疑ふに至つたのである。

我輩は此微妙なる事情の何たるかを尋ねて歐洲戰局の最近の形勢に之を求めた。歐洲戰亂の一方の交戰國英佛露が、戰爭の初めから大に我國の助力を期待して居つた事は今更ら云ふを俟たぬ。而して戰局の發展は、是等の國の日本の助力に待つの情をして益々深からしめた事も疑のなき事實である。而して此夏の露西亞の敗戰は、益々武器彈藥其他の供給につき猶一層日本に恃むの必要を感ぜしめ、最近では、日本は各方面に於て殆んど全力を擧げて露西亞、英吉利等の註文に應ずるといふ有樣である。今次戰局の膨大なる、到底日本のやうな國が二つ三つ懸つて全力を擧げた所で、軍需品の供給を十分に受持ち切れるものではない。而して今次戰爭の勝敗は、兵員の多寡よりも寧ろ軍器彈藥の供給の多少によりて決せられる有樣であるから、此供給の點に於て後れを取つて居る聯合軍側は、彌が上にも日本の助力の有難さを感じて居るのである。かくて日本は最近是等の國から餘程敬重せらるゝ地位に立つて居る。彼の英・佛・露が去年の九月五日締結したる共同講和協約、即ち現戰爭中は單獨に講和せざるべき事、又講和條件を議する場合には、何れの同盟國も豫め他の同盟國の同意を經ずしては單獨の要求をなさざるべき事を約束した共同宣言に、我國も本年の十月十九日に至つて加入する事を得たが、斯の如きは又日本最近の國際的地位の如何を語るものである。去年此條約の發表になつた時に、我國は除外されたる事を遺憾として、加藤外相より英國外相グレー卿に質問を發したるが、此時は彼より日英同盟第二條の規定ある事を指摘せられ、我國は其儘引下らなければならなかつたのが、今度は堂々と對等の關係で此宣言に加はり得ると云ふのは、以て如何に彼等が我國を今日頼んで居るかといふ事が分る。此點に於て我國の地位は、現に兵員を送つて助けてゐないに拘らず、協同戰爭に參加して居る伊太利よりも一層高く認められて居るものと云はなければならぬ。然らば斯くの如く英・佛・露が切實に我國に

恃む所以は何かと云へば、畢竟我國よりの軍需品の供給を目當として居り、而して此供給が彼等に取つて極めて必要であるからである。而して予輩は此事が或は對支警告に關係があるのではあるまいかと推測するのである。其故如何といふに、我國の軍需品供給が、彼等に取つて夫れ程必要であるとすれば、何かこゝに不時の出來事があつて、爲めに我國は武器彈藥の一部分を割いて共方に向けなければならぬと云ふやうな出來事の生ずるのは、英・佛・露に取つて最も苦痛とする所でなければならぬからである。而して支那に於ける擾亂の發生は、是れ取りも直さず我國をして聯合軍に對する軍需品の供給に專心するを得ざらしむる所以の者ではないか。此等の點よりして英・佛・露の三國は、此際支那に於て擾亂を誘致すべき出來事については、非常に神經を過敏ならしめて居ると觀なければならぬ。況んや歐洲に於ける戰局は、最近巴爾幹方面に擴大し、延いては小亞細亞から埃及・波斯の方面にまでも擴がらんとするの形勢にある。尤も獨逸とても餘程急迫の極に達して居るやうである。十月末、十一月の初めから食糧品缺乏の聲が益々高くなつた。十一月の十二日には再び食物供給に關する新法律を發布し、肉食禁斷日といふものさへ定めたといふ事が我國の新聞にあらはれて居る。故に獨逸が更に破竹の勢を以て阿弗利加、小亞細亞の方面に盛に發展するだらうとは思はれない。が、兎に角、巴爾幹に於ける形勢は、決して聯合軍に取つて有利なるものではない。之につけても、聯合軍が我國の助力に賴むの必要は益々盛んになつて來る。斯く考ふる時に、予は支那に於ける擾亂の發生を憂ひたるものは、我國にあらずして寧ろ英・佛・露の諸國であつたと思はざるを得ない。斯くて支那をして暫く現狀を維持せしめ、少くとも戰爭の終局までは、擾亂の發生を誘致すべき問題をば一切延期せしめようといふ希望は、英・佛・露の側から起つたのではあるまいか。若し斯ういふ事情で、我國が同盟三國の勸誘に接し、其訴ふる所に同情して餘義なく帝政延期の警告を發したと言ふのであれば、茲に初めて我々は帝國政府

の取つた所置を認容すべき理由を見出し得るのである。勿論帝政の實行は必ずしも擾亂を誘致するとは限らない。此事は予輩の繰返して述べた通りである。然し事情を知らぬものから觀れば、斯く信ずるのも無理がない。且つ又萬に一つ擾亂が起つては、大變な結果になるのだから、此際は、擾亂の起るや否やの見解に就ては、彼と我と其見るところを異にしても、暫く彼の見解に讓步し、同盟の誼を重んじて彼の乞を容れたのは必ずしも不適當な所置ではないと思ふ。

以上の如き見解を誤なしとすれば、我々は今度の對支警告に就ては、深く政府の所置を非難せざるのみならず、同時に此問題に對する我々國民の態度も、玆に明白に定むる事が出來ると思ふ。即ち本來支那の内政に干涉するのは、我々の本意ではない。只止むを得ずして此警告の態度に出でたのは、歐洲戰爭の終局まで支那が現狀を維持せん事を希望するに外ならぬのである。斯くして我々は支那に對して、歐洲戰爭の終局まで、國體變更問題の進行を停止せられんことを希望するのである。無條件的・絕對的の中止を希望するといふのは、之は全然支那の内政に干涉するものにして、我國の德義上支那に要求すべからざる事に屬する。我々も一個人の希望としては、支那が共和政體を繼續するのを、支那の爲めにも得策と信ずる者である。然し之が爲めに我々は、支那人が自ら其國體を定むる事に干涉すべき理由はない。我國の言論界の大勢は、或は支那の回答を以て曖昧となし、暗に袁世凱氏をして絕對的に無條件的に帝政を思ひ止らしめようと希望して居るやうであるが、こゝまで袁政府を窮迫するのは我國の立場として得策ではない。若し我國が支那政府より、戰爭終結後まで延期するといふ暗默の承認を得る事を得ば、支那の政府にも十分の面目を立てゝ遣つて、形式上多少不滿足な回答でも、之に滿足して可なりと思ふ。英・佛・露三國は恐らく戰爭終局の際まで延期して貰はふといふ事以上に、此問題に立ち入る希望も考もないとと察せらる。我國獨り此れ以上の希望を抱いて突進するのは、外交上極めて不得策であり、且つ又四國協同の步調を保つ所以でもない。

巴爾幹其後の形勢

巴爾幹に於ける戰局は、當初吾人の豫期した通りに進んで居る。而して羅馬尼・希臘の態度は、聯合軍側に取つて益々變調を呈して來た。羅馬尼は十一月初旬、露領ベッサラビアを得るの條件の下に、露國軍の自國領通過を許したとか許さぬとか、又は勃牙利及び洪牙利國境に合計四十五萬の兵員を集めたとか、又參謀會

議に於て、時機を見て聯合軍側に加擔するの決議をしたとかの報知があつたけれども、今日までのところ旗幟甚だ鮮明を缺いて居る。十一月八日には、塞國に向ふ軍需品を搭載せる露國の汽船を差抑へたといふやうな報道もあつて、同國の形勢は何となく聯合軍側に不利なやうに發展せんとして居る。若し夫れ希臘に至つては、十一月四日政府は主戰黨の攻撃に破れて辭職をなし、一時我々をして希臘愈々起つと思はしめたのであるが、結局矢張り皇帝腹心の者が後繼內閣の組織に當り、十三日議會は遂に解散された。議會の解散は則ち國內主戰黨に對する國王の挑戰である。十二月十九日の總選擧の結果を見なければ解らないが、若し政府黨多數を占める時には、希臘は永久に聯合軍に背くものと見なければならない。茲に於て聯合軍は最早や羅馬尼、希臘を頼むを得ず、其獨自の力を以て奮起せねばならぬ事になつた。十一月七日の新聞は、聯合軍側の巴爾幹に於ける策戰計畫の一變を報じ、次いで英國將軍キッチナー元帥は、現職のまゝ或る重要なる任務を帶びて東に向つたとのことである。

獨墺軍側は、巴爾幹半島に於て着々として豫定の成功を收めて居る。十一月八日には、塞國の新都ニッシを攻略して、茲に獨・墺・土の鐵道聯絡略ぼ成るを報じた。更に彼は勢に乘じて彼斯・印度の方までも手を伸ばし、英吉利をして送迎に遑なからしめんとして居る。もとより獨逸とても今日は勢餘程極つて居るから、非常の活動を之に期待する事は出來ない。けれども、聯合軍側にして此際大いに奮起せずんば、容易ならぬ大事に至るの怖れなしと限らない。十一月半ば伊太利が巴爾幹に於ける聯合軍の成功を保證すべき十分の援助を能ふることに同意したといふ事であるが、之れ亦聯合軍側奮起の一端であらう。只伊太利の巴爾幹に對する派兵は、之と直接に利害を異にする希臘の反感を刺戟することなきや否や。予は此點に關しては豫め總明なる協商國側の外務當局者の間に、相當の協議のあつた事を想像するものである。

之を要するに、巴爾幹半島に於ける形勢は、大體に

於ては獨墺軍側に有利な狀態にあるとはいへ、今日のところ仍ほ形勢混沌と言はざるを得ない。少くとも羅馬尼、希臘の今日の如く中立を繼續して居る間は、形勢は何れとも定まらない。そは聯合軍側の進勢がグヅグヅして居つても、獨墺軍に亦驀進の氣力乏しければである。されば巴爾幹に於ける兩軍の關係は、宛かも西歐の本舞臺に於ける兩軍の對陣の如く、矢張り結局は對陣持久の勢を續くるものではあるまいか。而して此對陣持久の形勢を一變するものありとせば、そは羅馬尼、希臘の何れかの方に加擔するといふ事である。それ丈け此兩國に對する兩交戰國の外交的暗鬪は激烈を加ふるのであるが、それ丈け又此兩國はうつかり何方にも加擔する事は出來ないのである。

追記

右脫稿後、十一月十九日の新聞は、巴爾幹の形勢に關して、種々重要の事を報じて居る。第一は英佛軍事會議の開催である。英よりは首相アスキス、海相バルフア、外相グレー、軍需大臣ロイド・ジョージの四名、佛よりは首相兼外相ブリアン、陸相ガリニエ、海相ロカゼ、總司令官ジョッフルの四名、以上八名巴里に相會して十七日第一回の會議を開いたのである。巴爾幹に對する策戰計劃が相談の主題たりしことは疑を容れぬ。之によりて吾人は聯合軍の半島に於ける活動の、近き將來に於て面目を一新すべきことを想像するに難くない。第二は、佛國特使のアゼンス到着である。特使デニスコチン十七日希國の首都に着し、群衆の熱誠を込めたる歡迎を受けた。彼の使命は、希政府に最後の決心を促すに在るや論を俟たぬ。第三は、英國に於ける希國船舶抑留の命令である。英國政府は、一つには希の決心を促す爲め、一つには萬一の變に備ふる爲め、此の斷乎たる所置に出でたものと見ゆる。第四は、希王がキチナー元帥に會見を希望せりとの風說である。傳ふる所に依れば、會見の目的は、キチナー元帥より親しく連合軍に勝利の確信ありや否やを確めんとするに在るとの事だ。此風說果して眞なりや否や聊か疑はしいけれども、又以て希政府の板挿みとなつて今や大

に苦しい地位に在ることとは、之によつても察することが出來る。

只玆に一つ注意すべきは、連合國の希政府に對する要求の程度である。連合國は目下果して希國の加擔を要請して居るのか。又は玆處までは要求しない、只連合軍側の兵士が萬一戰に敗れて希國領土内に逃れ來りし際、之に對しては塞國軍の遁竄兵とは異つた待遇をして呉れといふ事を要求するに止るのか。此點は十分に明瞭でない。希政府は先きに、交戰國兵士の自國領内に逃れ來る際には、其塞國兵たると英佛國兵たるとを問はず、中立條規に照し武裝を解除して拘禁すべしといふ事を宣言した。之に對して英佛側は、既にサロニカを經由して上陸を許した以上、又同地を經由して乘船することをも許すべしと主張して英佛國兵に對しては、塞國兵に對するとは異れる待遇を與へられんことを要求した。之れが希國と英佛との最近の懸案であつたが、今度英佛が斷乎たる決心を以て希國の處決を促すのは、此點の讓歩を迫るに在るか。更に進んで塞國救援の約を履んで出兵すべきことまでを迫るに在るのか。之等の點は、巴爾幹形勢の推移を觀るものゝ注意を怠るべからざる所である。

思潮評論

軍國主義を排す

中澤臨川

今回の歐洲戰爭の勃發以來、世界の思想界はいろいろの變遷を閲みしたかに見える。勿論、その動機と發現とは千差萬別である。そのあるものは、平和の日に推し隱してゐた獸的な國民的衿誇が、急に手綱をゆるめて、一種狂忘的な放言となつて現はれたのがあり、世紀病的頽廢のどん底から急に揺り起されて、苦しい覺醒の聲となつて現はれたのがあり、無告の弱小國民の上にふりかゝた横暴と悲慘とに對して發せられた人道的憤怒があり、更に政略、阿諛、衒學などの動機から出た挑發的な又は事さらしい聲もあつた。凡そ是等

の紛々たる叫びの中にあつて、何人にも、又は何國民にも、強く感銘し、深く植え附けられた一種の思想がある。その思想は、本能から發し、自覺によつて鍛えられ、思索によつて形造られ、更に理想に手をとられて宗教化した趣がある。戰爭によつて覺醒された世界の國民は、改めて眞生命の熱望に煽られ、その要求を悟つたかの如く、眞理と愛と正義とから、そして自己に對する深い悔恨と憤怒とから、新しく把握したのがこの思想であらう。

然らば、その思想とは何であるか。それは生命の正しき傳統を踏む具體的人道主義である。或は之を個人―民族主義又は新民族主義と稱へるも差支ない。思ふに、生命は一直路の單純な進行ではない。生命はいろいろの種に分れ、その分派の一つなる人類は更に民族に分れ、國家に分れ、家庭に分れ、個人に分れる。而かもその分れるに當りてや自然の傳統あり、即ち正しき個性あり、各自の生命には獨我にして侵すことのできない領土がある。我等の民族、我等の個人は惡童に紛碎されて路傍に散る煉瓦のかけらの如き雜然たる分散ではないのである。その來るに道があり、その分れるに傳統がある。分離の中の統一、統一の中の分離が生命の特徴である。煉瓦のかけらは或は巧みに繼ぎ合せることによつて舊態に復することができるが、一たん分れた個性からは永久にその獨立性を奪ふことが能きない。之と反對に、一個の煉瓦は之を分てば最早ちりぢりの破片であるが、個性はどこまで分れて行つても、必ずその全體なる生命、即ちその故郷と有機的連絡を保つてゐる。かく部分と全體と、多と一とが神秘な調和をなして、渾一の妙と複雜の美とを兼ね具へたのが即ち生命である。『ひとりの人間と他人との間の差は至て僅かであるが、その僅少なものが最も必要である』とウィリアム、ジェームスが言つたが、眞理には更に他の一面がある。『ひとりの人間と他人との間の差はどれだけ甚大であらうとも、萬人を通じての統一を見逭してはならぬ』と我等は言ひたい。

分離の中の統一、統一の中の分離――多的單、單的

多——これが生命その物と、民族なり、國家なり、個人なりの傳統的個性との間の美妙不可撓な關係である。されば生命から見れば、個性への分離はそが複雜化即ち進化の當然の道であり、個性から全體としての生命を見れば、その故鄕——その目的の發源地への融合は、調和の第一步である。此に於てか、我等は個性の尊重啓發とゝもに、宇宙精神への融和を圖らなければならない。この兩途は相反するが如くにして、而も最も自然な徑路である。なぜなら生命の正しき傳統の大道が兩者の間を通じてゐるのであるから。之によつて、我等生命の旅客は、千里遠征して而も故鄕を忘れざる遊子の心を心とせねばならない。人世迷路多し。行き〱て歸ることを忘れるものは極端な個人主義に陷る。歸つて出づることを知らざる者は回避的な隱遁主義に陷る。人生の大道は古來是等の病者、狂者を以て充たされた。

然るに十九世紀物質主義の毒流に流された最近文明の迷子は、みな行いて歸ることを忘れたる者達である。國家も個人も推しなべてさうである。彼等の踏み込んだ迷路は物質的個人主義の一本筋である。國家も、社會のあらゆる機關も、思想も、科學も、凡てが個人の物質的利慾心を充たす爲めの方便として用ゐられた。文化の假面を被り、科學の犀利な武器を利用して、獸的本能滿足の一途に向けた文明に、「科學的野蠻主義」は最もうがつた形容詞である。

その結果は何うであつたか。覿面の効果は今回の戰爭が齎した絶大の悲慘である。そは過去百年の文明が積んだ富と利慾との代償としては、餘りに多きほどの報果を酬ひた。人は今更のやうに耻ぢ、心づき、そして顧みて過去の失策と罪惡とを悔ひざるわけにいかなんだ。彼等は前途にユートピアを望むべく誤つて喘ぎ喘ぎ驅けて來た利慾の邪路を辭して、もとの家路を尋ねる必要を感じた。彼等は今まで餘りに個人の利慾の爲めに、生命や國家を弄し過ぎたとを覺り始めた。實際、個人それ自らの爲めの個人主義は、人類と個人との不自然な分離であり、生命の機械化である。で、かやうな

盲目的個人主義の殼を破つて出た人間は、當然民族的自覺に入らなければならない。今迄分離の一面にのみ走つた者が眞生命への歸復は、逆に調和と統一とを尋ねることであらねばならぬ。換言すれば、それは生命の共通呼吸に生きようとする努力であらねばならぬ。しかしそれには階段がある。我等の個性はそれ〳〵一定の傳統を辿つて分岐されたのであるから、歸復の順序も亦この傳統に從つて、個人から民族へ、民族から人類へと行かねばならない。一足飛びの暴擧は、えて抽象理想主義や抽象博愛主義の如き無意義の結果に終るのである。個人を苦み上げて民族へ、民族を苦み上げて人類へといふのが、人間の正しき道である。

要するに、正當な個人主義は民族の背景を有つた分離本能であらねばならず、正當な民族主義は個人の强い土臺の上に立つた抱擁本能でなければならないとがわかる。分離の中の統一、統一の中の分離が生命の眞自覺である。そこで個人主義も民族主義も絶對であつてはならず、また兩者が相對であつてもならず、實に二にして一の離るべからざる有機關係に立たねばならぬ。私が先に個人―民族主義といつたのはこの意味である。然しこの主義を今日までの絶對個人主義に對比して言ふとき、それは新民族主義と稱へても差支ない

民族的自覺は實に現代の世界を通じての一大潮流である。それが新國家主義となり、新愛國主義となつて、四方から喧傳されつゝある。然るにかやうな傾向を誤傳し、曲解し、或は殊更に利用して、一種の帝國主義または軍國主義を鼓吹する者の我國にもあるのは注意すべき事柄である。眞正の民族主義、國家主義と帝國主義、軍國主義とは、其形に於て相似て、實は全く異つた思想である。

思ふに、最近の獨逸が採つた如き軍國主義は、矢張十九世紀物質文明の發現であつて、かの病的個人主義の一變形に過ぎない。かやうな利慾本位の個人主義が國家に應用せられ、國家の名に於て行はれるとき、それが暴慢な帝國主義となる。で、かやうな行爲の便宜の爲めには、國家は强大な權力（パワー）を要し、國民は甘んじ

てその訓練に服する必要がある。詰り、この場合その國民は大きな利慾の爲めに自己を國家の機械的頤使に委ねるのである。物質的利我主義の發現たるに於ては更に變りがない。利慾を唯一の目的として結ばれた斯様な國家は、勢ひ機械的であるほかはない。而も軍隊的國家に於ては、その方便としても國民を機械化することの必要がある。かくてこの二重の理由から、かやうな國家はたゞ一つの大きな機械として其齒を磨くべく生存するのである。物質的個人主義に於て、生命のいみじき『分離の統一』が破られるやうに、軍國主義に於ても矢張その調和が破られる。絶對個人主義の非なるが如く、絶對國家主義即ち軍國主義は非である。思ふに軍國主義は民族主義の假面を被つたエピル、ゼニアスである。

十九世紀の物質文明が醸した一大罪惡は實にこの帝國主義、軍國主義である。富の殆んど神聖視されたやうに、横暴な權力(パワー)が一種正義化されて現はれたのが近代の國家である。で、この新宗教は幾多の使徒と實行者とを出し、ゴビノオとトライチユケとキツプリングとの筆に由て、ビスマルクとカイゼルと、チヤンバーレーンとセシル、ローヅとの手に由て、喧傳せられ、そして開發された。その結果が今回の戰亂である。で、たま〳〵民族的自覺の勃發を見て早計にも之をかの帝國主義と結び付け、或は獨逸の戰捷に眩惑されてその軍國主義を謳歌し、或は興奮しつゝある民心を利用して、一時の政略の爲めに他國民の行ひたる罪惡の淵に導かうとする如きは、今日我國民の最も思ふべく愼むべき事である。

それ生命の道は、豊かにして且つ美妙に統一されたる複雑である。民族乃至個人の個性をして思ふがまゝに發達せしめよ。然し、それと共に渾一と融和との道を塞がしめるな。殊に國家或は人間をして窮屈な機械となつてそれ自らを縛らしめるな。生命をして物質の奴隷たらしめるな。他人の一時の捷利に眩惑して人類の大道を思はざる如きは、國家永遠の計ではない。よし、獨逸は勝つてあらう、そして英佛露は或は一時世

界地圖から其大いさをけづられるであらう。而し思へ、かの優越なラテン族とアングロ、サクソンとスラブ族とが此地上から姿を消す如きことは斷じてない。勝つた獨逸が物質上の疲弊と自己誇大とに己れを食ひつゝある間には、曩日の悲痛と涙と義憤とは新しい生命を呼び起し、新しい文明を樹てるに違ひない。勝敗は一時であり、生命は永遠である。

要するに、世界の各國民はみな其方向を誤つた。彼等は之が爲めに今高價な代償を拂ひつゝある。彼等は餘りにその道念（モーラル、フオース）を物質の力に依賴し過ぎた。外から集めた借り物には限りがある。そこでかやうな國民は物質の力の盡きると共に彼等の力も盡きねばならぬ。盡きざる力は我等の內にある。內の力は使はれるだけそれだけ新しく補はれ、より多く積まれる。これが生命の奇蹟である。

（了）

文藝時評

讀後の雜感

正宗白鳥

近松秋江氏の「愛着の名殘り」は、「疑惑」の續篇ともいふべきものだが、あれに比べると旨い汁を絞り取つてしまつた後の出し殼のやうに思はれる。書いてある事柄はいたましい事實ともいふべきもので、從つて筆にも浮薄な點はないが、しかし如何にも氣餒ゑ神疲れてゐる。思ひに疲れた人を書いてゐるのではなくつて、作者その人が疲れてゐると思はせるやうな小說である。「疑惑」は云ふまでもなく、その他最近の氏の作物でも、女性に對する愛着を描くことに於ては、氏は當代無比の作家であつて、普通の作家の感じ得ない點までも感じ、感じても書くことを憚つてゐることも遠慮なく書いてゐるので、私は常に愛讀してゐる。氏は私が常に興味を寄せて讀んでゐる少數の作家中の一人

である。作の材料が汚らしいとか、作中の男の氣持が未練臭くつて醜いとか評するのは、あまり通俗的な批評である。私はむしろ氏としてはこ　愛着や未練の心持をます／＼深く掘つて讀者の目の前に突付けて身震ひさすまでに進んだならばと思ふことがある。ストリンドベルヒはそれをやつたのである。しかし、氏の好んで取らんとしてゐる傾向は、近松とか紅葉とかを宗とした只の甘い情話であるらしい。をしむべし。

後藤末雄氏の「某夫人の自殺」を、秋江氏のを讀んだ後で讀むと對照が面白い。華やかな明るい小說である。私からは初めて接した作家であるが、文章がよく練られて全體の段取りもきちんと出來上つてゐる。しかし花が多くて實の少い感じがする。女主人公が新婚した親友を訪問したあたりは輕妙にその光景が現されてゐるが、概して作中の人物が常に餘所行の衣服を着て動いてゐるので、作者の狙つた人生の記錄といふほどのものがあまり見當らなかつた。

吉井勇氏の「おまん源五兵衞」を讀んでも略々似通つた感じを得た。辭句が面白くて筋の運びも旨く出來てゐるので、終りまで凝滯なく讀めたが、只それだけに過ぎなかつた。近松の「薩摩歌」から材料を取つたのであらうが、新な意味が加へられてゐるさうではないし、放縱な人間の氣持が豐かに漲つてゐるやうでもない。吉井氏のある傑れた作に見るやうな清新な感じやローマンチックの匂ひがこの作には割合に薄いやうにも思はれた。しかし、舞臺上の技巧はそれだけ進んでゐるのかも知れない。

人間の心ほど複雜で索り難いものはない。恐ろしい所もあれば賴もしい所もあるのであらう。凡庸な人間も事に觸れてはどれほどの變化に富んだ心の働きを見せるかも知れないが、私は作物に於てもこの心の放つ光を見るといふことに最も多く望みをかけてゐる。私の性癖であらうが、情調一點張りのものとか感覺的筆致で普通の人事を詠歎してゐる作物に對しては淡い興味しか持つてゐない。言廻しの旨い思はせ振りな筆だ

けが取得で、しかもその指示してゐるところが何でもなかつたりする作物は尙更詰らない。この頃讀んだ新進の靑年作家の作にもこんな風の作物が少くなかつた。

岩野泡鳴氏の作物は筆が無器用で讀みづらいこと甚しいものであるが、私は可成りの努力を用ひて讀んで、あまりに自分勝手な獨斷に呆れることがあると共に、他の作家には見出しがたい力强い眞實性を認めることがある。氏が人間生活の上から醜いとされてゐる事を露骨に書くから眞實に富んでゐると云ふのではない。氏は男女關係については、色艶もない筆を走らせてゐながら、案外に微細な心理に立入つて描いてゐる。「放浪」から「毒薬を飮む女」までの作物は、男女關係についての所謂「人生の記錄」としては明治以來比類のないものである。無論作家の甚しい好惡の念に左右されて、ある種類の人物に對しては無法なる自分勝手な判斷を下してゐるが、當面の男女の交渉については奥行の深いものがある。燃燒してゐる。秋江氏のに見るやうな情味はないが、心理的記述に於ては泡鳴氏の方が遙かに富んでゐる。先頃氏は「四十女」といふ短篇を出してゐたが、あれなどは汚らしい感じのするものである。讀んだ後で人間の價値が卑しくされた感じのするものである。これが藝術品だらうかと疑はれたが、しかし、ある四十女は事實かうに違ひないと思はれたから、私はどうすることも出來ない氣がした。十一月の新小說に前半だけ出てゐる氏の小說には感心しない。

田山氏の感想文「廣い空間」は、氏の從來の作風や感想の變遷を見て來た私には甚だ面白く讀まれた。昔は似寄つてゐたが、泡鳴氏などゝは非常に傾向が違つて來た。社會から生活、個人、廣い空間と、花袋氏がつひに宗教的氣分を感ずるやうになつたのは意外であると共に、私はそれを喜ばしく思ふ。氏は宗教ではないと云ひ、むしろ宗教を嫌つてゐるが、氏が茫漠たる言葉で空間と云つてゐるものには、宗教的氣分が含まれてゐるのである。無論耶蘇教とか佛教とか天理教と

か一種の型につくられたものではないが、泡鳴氏やあるひは花袋氏自身が描いたやうな生活裡に蠢動してゐるのがいやさに、何か知ら明るい光を見たいと思ふ氣持は、これぞ本當の宗敎心ではあるまいか。目を社會から離して「さびしい心を空間に向けた」……私も花袋氏等の作物を讀んだ後で時々こんな氣持になる事がある。日本現代の作家には國木田獨歩を除いたら、かういふ宗敎的氣分のない人ばかりである。

小山内薫氏の「?を賣る男」は珍らしい外國人を書いてゐるので面白く讀んだ。氏は大川端とか第一課第二課などで面白さうな事件を書いてゐるが、讀者は何時も喰ひ足りない思ひをさせられる。さつぱりした分りのいゝ氏の文章は獨得だが、しかし情話に於ては三味線なしの素淨瑠璃で興味索然たるものがある。「?」などの單に面白い事實話には氏の筆がよく適してゐる。

谷崎氏の「獨探」は日本にゐる外人を描いてゐるので、小山内氏のと同じやうに面白く讀んだ。此等の話は氣輕に樂んで讀まれていゝ。鷗外氏の小說は話上手が昔話をして聞かせてゐるやうで面白いが、現在の珍らしい事件や人物の噂を面白く、しかし事實を揑造したのでなしに、書いて讀ませて吳れる作家があれば、私は千篇一律の小說臭い小說よりもどれほど有難いか知れないと思つてゐる。この意味で坪内士行氏の「旅役者の手記」は毎月私の好きな讀物の一つになつてゐる。

聞いたこともない作家だが、早稻田文學に出てゐる榎本獨境氏の「鬪鷄」は、胸に觸れるところのあるいい短篇である。鬪鷄場の光景がよく寫生されてゐるし、作者の氣持が全體によく浸渡つてゐる。文章は幼稚で、强いて敎訓的に見た所にいやな點もあるが。……

小說ではないが、新潮に出てゐる吉田常夏氏の「自殺未遂者」には、かういふ少年の心理がよく現はれてゐた。自分達の少年時代の心持を思出させる所もあつ

た。

ピエル、ロチの「お菊さん」を讀んで、彼等が外形の文明に慢心して、未開國の人類に皮相な觀察を下して嘲笑してゐる淺薄さを見たが、今月野口氏の紹介したキップリングの日本罵倒録を讀んでも同様に感じた。これにつけても日本人と英人や佛人とは眞の理解も心の融和も得られるものではないと思ふ。この頃の新聞に彼等の空ら世辭がよく出てゐるのを見て滑稽でならない。

新刊批評と紹介

△大隈伯　横山健堂著　實業之日本社發行

大政治家としての伯、教育家としての伯、雄辯家としての伯、趣味の人としての伯等あらゆる方面から此一代の偉人を解剖評論したるもの也（定價壹圓拾錢）

△ダリアの前にて（定價五拾錢）　黒頭巾著　大日本雄辯會發行

△ダヌンツイオの死の勝利（定價二十錢）　西宮藤朝著　敬文館發行

△浪六全集第七編（定價壹圓參拾錢）　村上浪六著　至誠堂發行

△九星學の人生（定價七十錢）　無位眞人著　東亞堂發行

△薔薇叢書椿姫（定價五十錢）　デューマ作　福永挽歌譯　植竹書院發行

△薔薇叢書クリスマスカロル（定價五拾錢）　ヂッケンス作　矢口達譯　植竹書院發行

△腰辨ノート（定價四十五錢）　安藤政治郎著　保險銀行通信社發行

△現代名作集（鈴木三重吉編各拾五錢）　毒藥を飲む女（岩野泡鳴）密會（徳田秋聲）春の晩（田村俊子）別るゝまで（田山花袋）秘密（谷崎潤一郎）父親と三人の娘（野上彌生子）風流織法（高濱虚子）

△平凡（二葉亭）何處へ（白鳥）耽溺（泡鳴）代表的名作選集（定價參拾錢）　新潮社發行

△新知識叢書（定價各貳拾錢　實業之世界社發行）

獨逸工業の發達（永代靜雄）飛行機の進歩（仲木貞一）婦人參政權運動（福永挽歌）科學の根柢（小原愼三）

△ローマ字詩集土に歸れ（定價五拾錢）　鳴海うらぶる著　日本のろうま字社發行

△新聞記事捏造の魂膽（定價五拾錢）　北山米吉著　實業之世界發行

△源氏物語（定價參拾錢）　相馬泰三編　日月社發行

△情話新集舞妓姿（定價參拾五錢）　長田幹彦著　新潮社發行

△タゴールの思想及宗教　江部鴨村著　日月社發行

此書はタゴールの思想とは如何なるものかを知らんと欲する者に、極く解り易く其思想を紹介したものである。（定價金七拾錢）

△宗教の哲學的基礎　藤田逸男著　警醒社發行

本書は著者が大學卒業論文として提出したる物にして、宗教の社會的基礎と、哲學的基礎を論ぜり。尙宗教の宗教的基礎を論じて宗教哲學を完成せん望なりと言へり。（定價金七拾錢）

△奇物凡物　鵜崎鷺城著　隆文館發行

鷺城氏の人物評論は已に定評あり、此書は特に新奇の者を選び、從來論評せられたる人物は特に當面問題より之を月旦せり。（定價金八拾五錢）

△獨逸落ち　小田部莊三郎著　警醒社發行

此書は歐州戰亂勃發と同時に辛うじて獨逸を遁るゝを得たる記錄にして、其間に著者が得たる雜多の經驗と所感とを述べたるもの、戰爭に依つて曝け出されたる赤裸々の、獸的の、野蠻い國民性を寫し出せる戰爭の裏面觀として興味深し。（定價金九拾五錢）

△久堅町にて　安井哲著　警醒社發行

穩健なる立場に立つて、現在女子の心得べき修養のかずかずを論ぜり。其筆致の穩かにして、日常些事に對する心懸など現在女子の缺陷を穿つて、當を得たるもの多し。（定價金壹圓）

△バッハよりシエーンベルヒ　太田黒元雄著　山野樂器店發行

本書は古來代表的音樂家六十名を選びて、各其生涯と樂風を評述せり。即古典學の大家なるバッハより筆を起して、未來派の新人シエーンベルヒに至る間特に近代の各家を詳にして、音樂發達の徑路を示せり。（定價金壹圓五十錢）

△遺傳學教科書　田中長三郎著　丸山舍書籍部發行

遺傳學は最近其基礎を確立した一新學科にして、是れが研究は最も興味あるもの也。本書は中等教育程度教科書として編纂したるものにして、本書を以て其嚆矢となす。其說明懇切にして其體を得たり。著者の勞を多とせざるべからず。（定價金七拾五錢）

△家康論　中谷無涯著　增上寺文書科發行

偉人家康の生涯を敍して其功業偉德を讃へたるもの、波瀾あり曲折ある公一代の面目は此書に依つて活躍せらる。（定價金壹圓二十錢）

△神慮論　鈴木大拙譯　丙午出版社發行

瑞典の人基督教神學の一偉才スエデンボルクの「神慮に關する天人の智識」と題する原書の譯書也。神慮とは如何なるものか、人は神慮の外に出づる能はざるを論じ、神學的に神と人との關係を詳述せるもの。（定價金貳圓三十錢）

△人物評論公開狀　冬湖學人著　大日本雄辯會發行

現代知名の政治家又は實業家に與へて其國事を論じ、政治家の所謂出處進退を議して光明正大ならんことを期せり。文尙稚氣を脫せざるものなきにあらずと雖も克く其機微を捉へて之を俎上に上せり（定價壹圓廿錢）

△政爭と黨弊　細井肇著　益進會發行

著者我國の政爭と黨弊の久しきを慨し、其由つて來るところを明かにせんとして、各府縣に蟠まれる黨弊を剔抉して餘すところなし。（定價金壹圓）

△踏査研究南洋の寶庫　　神保文治著　實業之日本社發行

著者が實地踏査の上に成れる南洋の富源を紹介せんとする物也。南洋に於ける各國人の狀況、移民農業、天候衛生及び殖民實行方法等、渡南の志ある者にとりて參考となるべき事多し。（定價金八拾五錢）

△コサック奮闘錄　　土岐松也譯　明治出版社發行

本書は英國人 Francis Mc Cullagh の手に成れる With the Cossacks と題する日露戰記を譯せるものにして、觀察の奇警深刻なる、絢爛の筆を以て悲壯の文を遣る、洵に戰記文として稀に見るところのものといふべし。讀者は本書に依つて戰爭の實記と公平なる批判と教訓とを得べく愛誦するに足るを信ず。（定價金壹圓五拾錢）

△女、女、女　　小野賢一郎著　興成館發行

著者自由の健筆を以て女を叙す。照葉あり、萬龍あり、世はさまざまの數奇なる運命に弄ばれたる女性を描いて、讀過何興味の盡きざるを覺ゆ。（定價金八拾五錢）

△夢遊病者（定價金壹圓）　　江部鴨村著　日月社發行

△薔薇叢書第三編水の上（定價五拾錢）　　モウパッサン作　吉澤孤雁譯　植竹書院發行

△戰爭是非（定價參拾五錢）　　小泉信三　三邊金藏　共譯　慶應義塾出版局發行

△近代思潮叢書第六編ダゴール聖者の生活（定價五拾錢）　吉田絃二郎著　天弦堂發行

△同上第二編惡魔主義の思想と文藝（同上）　岩野泡鳴著

△同上第五編印象主義の思想と藝術（同上）　高村光太郎著

△アルス歐文叢書第一編青春（定價四拾五錢）　平田喜一解題洋註　阿蘭陀書店發行

△同上第二編ペンリイ・ライクロフトの手記（同上）　戸川秋骨解題及詳註

△經濟全書大日本地方財政史（定價七拾錢）　中島信虎著　寶文館發行

△屁の喝破（定價八拾錢）　溝口白羊著　本郷書院發行

△若い女（定價六拾錢）　喜多川楚山譯　菊屋出版部發行

△修養負訓（定價五拾錢）　友田宜剛著　大日本雄辯會發行

△灰の音（定價六拾錢）　與謝野ひろし著　植竹書院發行

△無絃琴（定價八拾錢）　村井至知著　四方堂發行

△幽靈新論（定價五拾五錢）　田中祐吉著　杉本梁江堂發行

△腦の衛生（定價四十錢）　桜田十次郎著　實業之日本社發行

△奥様の智惠袋（定價六拾錢）　木造龍藏著　東亞堂發行

△智能開發之鍵たる精神能率增進法（定價五拾錢）　西郡如本著　人品雜誌社發行

△自然療能の覺醒術健康能率增進法（定價三拾五錢）　同上

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

安樂前警視總監閣下序
法學博士江木衷先生序
辯護士高木益太郎氏序

△日本最初の私立探偵長 岩井三郎氏談
△△ 松崎天民新著

探偵ロマンス

△中版布裝上製函入
△定價金九十錢
△郵稅金八錢

本書は日本最初の私立探偵として隨一たる岩井三郎氏が過去二十年間に取扱へる數萬の事件中最も興味深く波瀾に富める者を選んで著者獨特の筆に上せたもの、奇怪なる物語に纒綿せる探偵上の苦心は小説以上にして、而も一の架空虛構なく、凡て是れ世間未知の「**眞實の記錄**」である。著者曾て本誌に犯罪ロマンスを連載して盛名を走す、而も本書の受くる諸君の驚異と讃嘆とは正しく**犯罪ロマンスに百倍せん**

痛快な内容一斑

■海軍收賄事件 ブーレーリヒテル尾行記
□一通の僞電報 一萬五千圓の土地詐欺
■戀の子罪の子 富豪―妾―若紳士―?
□寶石女郎若紫 四萬圓の寶石竊盜
■疑問の三萬圓 軍票三萬の行方不明
□紙屑の中から ××鑛山會社百萬圓事件
■進藤大將閣下 主計正辯護士結托の詐欺
□離座敷の惡夢 岩岡仲買店の公債被害
■明石町の銃聲 伊達男令息と不良少年
□若奥様の家出 華族家庭の内幕暴露
―其他數項―

大迫大將 題字
阪谷男爵 序文
福井教授 校閲
渡邊白水 新著

乃木大將

學生訓

附乃木將軍詩歌集

小型布裝上製函入 價六十錢郵稅六錢

本書は神人乃木將軍の曾て學生に與へられたる教訓を網羅せるもので精神の修養、忠孝、勇氣、交友、勉學其他十五門、何れも十數項に分たる。眞にこれ將軍心血の結晶といふべし

コナンドイル傑作文庫

第一編 矢口達 **疑問の指環** ―最痛快な探偵小說―

第二編 石川宰 **クロマテ館の秘密** ―不思議な神秘小說―

布製上製 各冊八十錢 郵稅四錢

發兌 東京京橋區銀座四丁目 **銀座書房** 振替口座東京三〇三九六番

賣捌 全國各地書店

(中付四の一)

信用ある老舖大店が卑猥なる賣品の廣告[illegible]謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大町桂月先生著　大好評　忽三版

儀式書翰文範

四六判美本　紙數九百四十頁　定價壹圓五拾錢　送料十二錢

■儀式文、儀式演說及び書翰文の寶典

文明愈進むに從ひて、愈多く儀式文と儀式演說の必要を生ず。今や御大典を擧げらるゝに際し、當代の文豪大町桂月先生、本書を公にせり。是れ一面御大典を記念し奉ると共に、我が同胞をして文明の必要を充さしめんとする者也。その內容たる、儀式の篇にては、祝賀弔祭に際して、或は文章を朗讀し、或は演說を爲す人の爲に、有ゆる場合を網羅し、各章に涉りて、その構想法を一々丁寧に說明し、夫に要する成語を蒐集し、添ふるに和漢古今の名家及び自作の作例を以てす。又書翰の篇にても同じく各章に涉りて說明を附し、成語を置き、古今の名家及び自作の作例を添へたれば、世の儀式に關する文章演說及び書翰文を學ばんとするの士は、速に本書に就かざるべからず。而して本書が御大典を記念し奉る微意としては、儀式篇の劈頭に於て、『御大典祝賀會』なる一章を設け、御大典の祝賀會及び各種記念事業の着手竣成式に要する文章演說の構想法を說明せり。本書一たび出でゝ、茲に始めて完全なる儀式書翰文を見るもこの種の書物としては實に空前の壯觀なり。

■式辭演說書翰文に上達せんとするものゝ羅針盤

■東京市神田區小川町一番地　文會堂書店　電話本局一四二一　振替東京三五一三■

(中付四の二)

在佛國 不盡生 石川三四郎氏著

砲聲を聞きつゝ

本書の一部は不盡生の名を以て「萬朝報」に通信を寄せ、多大の感興を與へたるもの也

新刊出來

地圖及び悽慘なる寫眞版數十葉挿入

四六判三百五十頁

定價金壹圓二十錢

送費金八錢

■日本人の手に成れる最初の歐洲戰爭實見記及び批判■

■重要目次■

三年前、迫害に追はれ、生活に疲れ、僅々百フランの金券を懷にして、飄然として歐洲流浪の途に上りたる一社會主義者が、獨兵の馬蹄に蹂躙されたる白國ブルツセルの空屋に潜伏すること數個月、幸ひに身を以て倫敦に逃れ、更に轉じて佛國の邊陬に隱れ、其間常に敵兵よりも恐るべき衣食の缺乏と戰ひながら、絕えず身邊に砲聲を聽きつゝ、孜々として本國に書送りたる通信の集積せる者、即ち此書である。此書は即ち歐洲大戰の內面觀であり、社會觀であり、人情觀であり、道德觀であり、根本觀である。熱烈の辭、悲壯の調、哀怨の聲、懷鄉の情、而して又、愛人の誠、憂世の淚、希望の光、救濟の道。著者の思想と性格と抱負と自信と、悉く此一書の中に漲溢するを見る。

(中村四の三)

發行所 東京市日本橋區檜物町九番地 **東雲堂書店** 振替東京五六一四番 電話本局一八七一番



絶壁

田山花袋

私は默つて圍爐裏の火の燃えるのを眺めた。外には凄しい風が山の巓を渡つて、それが谷から谷へとわかれて落ちて行く。と、底の底にある深い谷川が、四方にそゝり立つた絶壁に反響して、凄い音をあたりに漲らせた。

大きな丸太に移つた火と、渦のやうに簇り上る黒い濃い煙とを私は唯凝と見た。

私は屈曲した細い谷川を想像した。そこには一つの岩があつた。そこには水が一ところ深い潭をつくつて靜かに淀んで流れてゐた。繩のついた桶を其深潭に投じて、毎日そこから水を汲んで來る人間、汲み上げた水桶を擔つて靜かに林の間の道を辿つて來る人間――それは私だらうか。

私は何年も滅多に口を開かない私を其處に見た。それは曾て、「人間は皆な孤獨だ。何をすることも出來ない孤獨だ。人間は種々な言葉、種々の表情、種々

な心を持つてゐるけれども、それは唯一人々々の言葉、表情、心で、互に理解されずに話をしたり思つたりしてゐるばかりだ」から言つたことのある私と同じ私だ。燃える火は矢張私の體の中に凄しい焔をあげてゐる。感情は四圍にそゝり立つた尖つた絶壁のやうに、矢張私を取卷いてゐる。

圍爐裏の火の燃えてゐるところから、奥に入つて行くと、其處に、さう大して廣くない一室があつた。その隅には、机が置いてあつて、種々な書籍やら、日記やら、反古やらが一杯載せてある。その中には、法華經の斷册もあれば、フランス革命史の一册もある。"En Route"もあれば、焔えた火の餘燼とも言ふべき『懺日記』もある。卓の上には、ピストルが一つ載せてあつた。

その一室には、いつも朝と夕とに靜かに光線がさし込んで來た。それは黄い佗しいしかし明るい光線であつた。そしてその光線は、破れた窓の間から、こつそりと忍び込むやうに、室の中を照し、卓を照し、ピストルを照し、机の上の書籍を照し、最後に私のさびしい顔を照した。

そして暫くすると、その光線は、一日の勤めを終つたかのやうに、靜かにさびしくその窓から消えて行つて了ふ。そして卓の上のピストルは、再び薄暗い佗しい光の中に沈んで行つて了ふのであつた。

谷の底の底にゐることを私は意識せずには居られなかつた。それは深い深い谷の底だ。出やうにも出ることの出來ないやうな谷の底だ。それを出やうとするには、少くともその周圍を圍んだ凄しい恐ろしい絶壁を攀り上らなければならなかつた。あまつさへ、その絶壁には、足場とすべき岩角もなければ草木もない。一條の蔓すらもない。私は永久に、さうだ、永久に其處から出ることが出來ないのだ。私は

かう思つてをりをりその黒い滑らかな絶壁を見上げた。
ある日、私は驚くべき壯嚴な落日の光景を其處に見出した。それは何う形容して好いか、何う描寫して好いか、私にはわからないほどそれほど美しいものであつた。切立つたやうな絶壁と絶壁との間から、靜かに靡いて入つて來た光線は、一時暗い谷を極樂境のやうに明るくしたばかりではなく、あらゆるものを輝かし、あらゆるものを閃めかし、あらゆるものとして光彩陸離たらしめるに十分であつた。光焰のない日輪は、丁度絶壁と絶壁との間に金環のやうに輝き、その餘光は深く曳いて谷といふ谷の隅々までを遍ねく照した。
私は眺め盡した。
私の心は明るく、私の胸は爽やかに、私の魂は歡喜に戰えた。『いかなる日、いかなる時、かうした落日があつたであらうか。いかなる日、いかなる時、かうした壯嚴な光線が私の胸に沁み込んで入つて來たであらうか。』しかし見よ、そのかゞやきは、次第に薄く、その歡喜は次第に消えて、谷は再びもとの暗黒にかへつて行くではないか。
見よ、美しい日輪は、絶壁の陰に。光線は次第に斜めに、明るい耀やきは次第に茶褐色より灰色に……。谷はもとの佗しさと悲さと淋しさにかへつて行くではないか。

ある日は私は谷川に添つて下つた。
折れ曲つた谷は、絶壁に添つて、處々に淒しい泡立つた潭を開いてゐた。鳴る音は巨人の叫びのやう

にあたりに反響して聞えた。

谷に添つた路は、初めは廣く坦々としてゐた。草花などが路傍の藪を美しく彩つてゐた。渡るべきところには橋あり、橋のあるあたりには人家があつた。そこには戀もあれば物語もあつた。人間の形が嬉々として其間を通つて行つた。

しかしさうしたものも次第に見えなくなつて、谷は益々狹くなつた。絶壁と絶壁との間に水は怒號して流れ、細かく折れ曲つた谷は、行つても行つても盡きやうともしなかつた。

ある期待とある希望とを抱いた私は、疲れ果つるまでその谷川に添つて下ることをやめなかつた。丘と丘との間をも越れば、山と山との間をも攀ぢた。ある暗い林の中からは、その下に白く泡立つた瀬の渦卷いて流るゝを見た。林からやゝ開けたところへ出た時には、あるものを前に發見したやうに、ほつと溜息を吐いた。

私は人間の形をしたあるものに訊ねた。

『この末は、何うなつてゐますか？』

『行つて見なければわからない』

『行つたことはありませんか』

『行つたことはない。此處まで來たものさへ既に少い位だ』

『誰か行つたものはないでせうか』

『行つたものはあるかも知れん。しかし私はまだ聞いたことはない。生と死との間の谷がこれから始ま

るといふことだ」

「生と死との間の谷?」

「さうだ」

「行く道はないでせうか」

「あるといふことは聞いてゐる。しかし、私は行つたことがないから知らない」

私は默つて狹い石門のやうになつてゐる絶壁の方を見た。

「行つたものの話では、この石門を越えると、ひろい野があるさうだ。その野は、我々人間の頭上を蔽つてゐる空間と同じ空間で、ひろ〳〵とした好い處だと言ふが、それには——そこに行くには、秘密な愛慾と恐ろしい煩惱とピストルと經文とを持つたものでなければ行かれないといふことだ」

「難有う」

かう言つて私はその人間にわかれた。

私は猶谷川に添つて下つた。我々の頭上を蔽ふ空間——その空間に一致した空間に出ることは年來の私の唯一の希望であつた。私は行けるところまでは行つて見やうと思つた。谷は愈々狹く、水聲は愈淒しく鳴つた。ふと見ると、石門を前にして、路は絶えてゐた……。黑い滑な石門の中に、水は泡を立てて流れ落ちて行つてゐるが、それから先は見えない……。

絶望して、私は其處から引返した。

ある日は、私は私の裏にそゝり立つてゐる絕壁の一角にある細い道を發見して、それを辿つて行つた。

「さうだ、此處に路がある」

から思つた私は勇み立つた。私は今度こそはその廣い空間に合した空間を發見することが出來ると思つた。絕壁と絕壁との間からさして來る光線の路――たしかにそこだ。から私は思つた。

少し登ると、平らなところがある。そこから見ると、下に寺が見える。人間の心理の各方面を象徵した尖つた屋根と開いた窓とが見えた。古い彩色の加はつた窓に日の反射するのが美しく輝いて見えた。私は立つてあたりを眺めた。

私は種々なことを想像した。あらゆる愛慾とあらゆる煩惱とを持つた人間と、そのあらゆる愛慾とあらゆる煩惱とを持つた人間を摸した佛像との相違などを考へた。そしてその大きな佛像がその寺の中にあつて、その前にある大きな扉に面して、大勢の善男善女が蟻のやうに集つて來てゐるのである。香烟が遍ねくその山の半腹に靡きわたつてゐるのである。唄音と鐘聲とがその下界に滿ちわたつてゐるのである。ある川の緣には、石で刻んだ佛像が數千年來寂として並んで立つてゐるのである。

私は私の庵室の中の生活を振返つて考へた。其處では、いろいろな形をした形相が絕えず私を苦しめた。その中には妻の顏もあれば、子の顏もあつた。深く契つた女の顏もあれば、離れずに深く强く絡み着いて來る獸のやうな形をしたものもあつた。ある女は白い衣を着て髮を長くして、鑷を手にして私の傍に步み寄つた。そして、「これは私と貴方の淚です。この淚の處分をして下されなければ、私は歸らない」から言つて其女は欷歔げた。

顔は鳥で、體は獸のやうなものもあれば、體は蛇で、顔は美しい女のやうなものもあつた。ある時は、小さな小さな子供が十人も二十人も揃つて並んで私の庵室へと入つて來た。

私は戰慄した。

私は下を見ることをやめた。今の場合、寺の屋根や窓を見ることさへ、自分には危險に思はれたのであつた。私は眼を閉ぢて岩角に凭り縋つた。

しかし再び眼を開いた時には、幸ひにも、下は霧に一面に蔽はれて了つてゐた。寺の屋根も古い彩色した窓も、香烟も何も彼もこの前から消え失せて行つてゐた。私は急いで、細い路を上へと攀ぢ登つた。路は辛うじて續いた。兩側には草もなければ木もなかつた。唯、細い路が絶壁の間を縫つて狹く續いてゐるのを私は見た。私はやゝ落附いた氣分で歩いた。

不思議にも、今まで見えなかつた谷が新たに私の前に展開されて來るのを私は見た。下から見た絶壁――到底その上に到達することが出來ないと思つた絶壁が、遙かに下になると共に、更に廣い高い絶壁がその外廓を劃つてゐるのを見た。

夕日は美しく谷を染めた。

突然、私の前の路は絶えた。

私はまた其處にゐた人間の形をしたものに訊ねた。

「もうこれから上には行かれないのでせうか」

「行かれないと見える」

かう言つたが、『でも、千人に一人、萬人に一人、行かれるものもあるといふことだ』
『それは何ういふ人ですか?』
『よくは知らないが、何でも、藝術とかいふものを持つたものが、これからもう少し先きまで行けるといふことだ。』
『藝術ですと?』
『さうだといふことだ。これから先に行くと、少し平らな綺麗なところがあるさうだ。それは、この我々の頭上を蔽つた空間にはまだひとつにはなつては居らないけれども、それでも、我々人間の見ることの出來ないやうな美しいところださうだ。昔から、それでも、五人や十人は此處を越えて、向ふまでは行けたさうだ。しかし、そこも我々の頭上を蔽つた空間ではないので、矢張、失望して、戻どつて來るものも偶にはあるといふことだ』
『"En Route"を作つた人は?』
『此間、通つて行つた』
『トルストイは?』
『あれも通つて行つた』
『フロオベルは? モウパッサンは?』
『皆な通つて行つた人達だ。しかし、そこだつて面白い生効のあるところではない。退屈で仕方がないと言つてゐる』

「私は通れないでせうか？」

「通れるか何うだか、行つて見るが好い。しかし、行つて後悔するよりも、お前は、お前の庵室に戻つて、じつとしてゐる方が好いだらう。庵室の中にゐる方がお前には適當だらう」

「でも、私の庵室の中は、さびしくて寒くつて仕方がない。それに、いろいろな形をしたものが日夜に襲つて來てその苦しさに堪へられない。私は、もう二十年以上も、さういふものと戰つて來た。初めの五年は私はその巴渦の中にゐて戰つた。次の五年はその巴渦から出やうとして戰つた。その次の五年は、戰つても戰つても遂に遂に克てないことを悟つた。あとの五年は、私は全く沈默した。」

「何故沈默した？」

「人間は孤獨でなければならないことを悟つたからです。沈默でなければ、遂に孤獨に打勝つことが出來ないことゝ悟つたからです」

「そして孤獨に打克つことが出來たか？」

「出來ません」

「何故出來ない？」

「何故だかわかりません。」

「それは自分の血が他人の血であり、自分の心が他人の心であり、自分の體が他人の體であることがよくわからないからだ。まだ、沈默が足りないのだ」

私は默つて立つて、前に聳えた絕壁の上を仰いだ。成ほど細い道がそこについてゐるらしく思はれ

た。しかし、いかにも險しいので、とても其處に登つて行けさうには思はれない。私は止むなく、其處から引返した。

一室の中にほつねんとして私は猶ほ坐りつゞけた。

私は一室の中の長い年月を繰返した。室、壁、長押、卓、すべて同じだ。すべて同じ灰色だ。矢張同じやうに、窓から黄ろい夕日がさし込んで來た。

圍爐裏の丸太は、何百年を燃えつゝ經過した丸太のやうにぶす〱とくすぶつてゐた。

かうした沈默と孤獨の年月を經過した今でも、昔の苦悶や懊惱や愛慾は、鏡に映つた影のやうに、をりをり私を襲つて來た。そして空間に向つて憧れ渡る心と體とを再び汚ない泥濘の中にひき落さうとした。ある光景とある光景とは、無數の繪卷物になつて私の靜座の眼の前を掠めて通つた。私は妻子の涙に引寄せられる私を見た。美しいやさしい情にひかされる私を見た。ある時は私は自己の持つた敗徳と罪惡との苦痛とに堪へられなくつて、强いてその敗徳と罪惡とを承認する私の姿を見た。それは血みどりになつた私の姿だ。大童になつた醜い私の姿だ。

ある時は降頻る風雨の中にびしよぬれになつて歩いてゐる私を見た。私は醉漢のやうにして蹌踉として歩いた。頭から足の爪先まで雨の滴がしだゝり落ちた。髮はぬれてひつたりと首筋にくつついてゐた。それでゐながら、私は何か大聲を擧げて、叫んで歩いてゐた。丁度一生の大事件でもあるかのやうに――。

「何だ、馬鹿！」

ある處では、私はかう言つて叫んだ。私の前には、あらゆる美しいもの、やさしもの、正しいものは亡びた。私は強いて否定を肯定した。

歡樂の巷にゐる私は、中でも殊に慘めであつた。卑められ、虐けられ、あなどられ、笑はれ罵られた。執着と煩惱と愛慾とが雜り合ひ絡み合ひ縺れ合つた。闇の中に泣いてゐる男、明い灯のかげに欷歔げてゐる男、それは果して私だらうか。

ある時は私は"A Rebours" の中の Des Esseintes のやうな境に身を置いてゐる私を見た。あらゆるものから私は離れて住むことを計畫した。所謂ヒユマニチーなるものは中でも殊に嫌つた。社會や人道は箇人を測り知れない泥濘の中にひき落すものとして少しも疑はなかつた。私は其時分、黃い色が好きだつた。紅よりも紫よりも黃い色が最も神秘に近いと思つた。私は人の顏を見ることを避けた。人と語ることを避けた。私は黃い壁の中にひとり住んでゐる私を見た。

戀を得た喜悅よりも戀を失つた悲哀の方に私は一層深い興味を感じた。「もう、お前とはこれでおわかれだ。それがいやなれば、何故お前は私に惚れた。何故私を最後まで振つて振つて振りぬかなかつた。別れる原因は他にはない。それはお前が俺に惚れたからだ。俺の所有物ときまつたものに、其處に、何の興味があらうぞ。俺の言ふなりに何うにでもなるものに何の興味が起らうぞ」こんなことを言つて私はある女と別れた。それは細い巷路のやうなところであつた。黃いくちなしの實が垣根から覗くやうにして見えてゐた。

さまざまな形相とさまざまの光景とが私の眼の前を過ぎて行つた。心といふものゝ複雜さ廣さ不思議さよ。かう思つて、私は眼を閉ぢた。偏つたもの、歪んだもの、不整なもの、不統一なもの、さういふものが絶えず私の心の興味を支配して來た。私は肉體と精神との亡靈が絶えず私にある復仇をしてゐるのを感じた。

そこに一つ鏡があつた。

それは私がこの室の奧の物置からさがし出して來た古い古い鏡だ。硝子の鏡が始めて此の土地に渡つて來た時分に、この菴室の昔の主が、高い價を拂つて買つたものであるといふことは、その鏡のつくりや裝飾やらで知れた。裏にはある象形人物が浮彫にしてあつた。

私は埃を拂つて、それを私の卓の前の柱にかけた。

其處には終日長く、机の上の書籍と花瓶に生けた赤いダリアとが映つてゐた。丁度靜かな秋の空がその前にあらはれたものを明るく鮮やかに映したやうに――。

時には私の衣の裾が映り、私の靑白い手が映り、ピストルが映り、『戀の日記』が映り、卓の上の白い陶器が映つた。私はある時、その明るい鏡の底に、蒼白い髮の長いある顏を發見した。

不思議な形相だ。

「お前は何だ」

答がなかつた。

「お前は何だ」

その顏は笑つた。しかし、矢張答へがなかつた。

「本當に、何だ。話して與れ。賴むから話して與れ」

「Holra―」

「お前かHolraか。何うしてお前はこゝに來た？海を越えて來たのか。山を跨つて來たのか」

その形相は頭を振つた。

「また、このおれに取つかふと思ふのか。それで來たのか」

「………」

「默つてゐてはわからない。お前は俺の孤獨の隙を覗つたやつて來たのか。昔からお前はゐた筈だ。千年も二千年も前からゐた筈だ。そして、お前はいつも孤獨の境にのみその形をあらはして來ると聞いた。さうか」

その形相は點頭いて見せた。

「お前は海を越えた名高い詩人の頭に住んだことがあるだらう？」

その形相は笑つたが、やがて恐ろしく空虛な聲で言つた。『私は今、來たのぢやない。私は何處にでもゐる。其處にも此處にもゐる。今までも常にお前の體の中に住んでゐた。唯、形を現はさないばかりだ」

「何うして、形を現はさずにゐた？」

『要求がなかつたからだ。要求さへあれば、私はいつでも形を現はすのだ』

「俺は要求したか」

形相は默つて點頭いた。

「これから終始この俺に附纒つて離れないのか」

答がなかつた。

私は深く其鏡の底に見入つた。形相は段々小さくなつて行つた。遂には底の底に沈んで見えなくなつた。あとには依然として卓の一部と赤いダリアとが靜かに映つた。

霧の中から無限の喧噪が手に取るやうにきこえる。叫ぶやうな聲もすれば、笑ふやうな聲もする。泣くやうな聲もする。欷歔けるやうな聲もする。そして、それが一つの雜音になつて、靜座した私の耳に入つて來た。行進曲のやうなものは中でも殊にはつきりと聞えた。

そしてその聲は何を言つてゐるのかよくわからない。何か話してゐるには相違ないが、それが一つの音と他の音と混亂して、時には高く時には低く、唯騷々しい音と調子とがあるばかりである。と、急に悲壯な張詰めたセンチメンタルな聲が起つて、裂帛のやうな急調を促して、忽ちそれが絶えて了つた。あとは暫ししんとした。

底では低い雜音が響いてゐた。

そしてその雜音が一刻〳〵に波動を起して、次第に高くなつて來るのを私は耳にした。それは丁度泥濘の中から無限の亡靈が浮び上がらう浮び上がらうと努力してゐるさまに似てゐた。高くなつて來る聲は

浮ひ上つたものの聲だ。確かにさうだと私は思つた。しかし大抵はその途中で、他の多勢の亡靈に引摺り落されて、同じ泥濘の中に落ちて行くのであつた。

また悲しい聲がきこえた。

しかし、あとからあとへと續いて湧いて來る雜音は、決してその最初の希望と期待とを失はなかつた。如何なる難關をも突破するやうな强さと若さと鋭さとを持つてゐた。『己の生活は己がして見なければわからない。己の人生は己が通つて行つて見なければわからない。』あらゆる箇々の聲は、皆なさうした心と言葉とを旋じるしにして、上へ上へと浮び上つて來た。

霧は漸く深くなつて行くらしかつた。騷音は次第に底へ底へと沈んで行つた。段々遠く微かになつて行つた。

今度は谷川の音が聞え出した。

と、私の經て來た人生は再びありありとその前に現されて見えた。私は眼を閉ぢた。重り合つた木葉のやうだと私は思つた。何千年、何萬年、それが全く重り合つて地に委した。泥塗に委した。戀も苦痛も歡樂も何も彼も皆同じやうに、名譽も富貴も貧賤も何も彼も同じやうに……。

「あゝまた人生の波の音がする。あの騷音がきこえる。」

かう獨語した私は再び靜かに耳を欹てた。霧の海の深い底には、不整な、混亂した、ある一種の調を持つた悲壯な音がそれからそれへと長く續いた。

沈默は再び全く私の一室を封じて了つた。落日にも再びその美しい壯嚴な光景を見せず、Holra もその不思議な姿を鏡の底に現はさず、霧の海も底に悲しい騷がしい音を立てなかつた。朝毎の霜は唯赤裸々の木々の梢を白くするばかりであつた。

私は終日唯默して靜座した。

『さうだ。この路があるばかりだ。この路を他にしては、私は行くべき路を知らない。生死の谷を越えることも出來ず、藝術の山を攀ることも出來ない私は、唯拱手し靜座してゐるばかりだ。沈默、唯、沈默があるばかりだ』

ある時は又考へた。

『この沈默した形、そこに、刹那即永久の谷があるのではないか。靜座――この靜座は刹那にして且つ永久たるものではないか。卓、書籍、光線、鏡、赤いダリヤ、かういふもののあると同じやうに、この我があり、この我の心があるのではないか。否、この我、このわが心、この心がこのまゝにして、我々の頭上を蔽つた空間と同じ空間を持つてゐるのではないか。かうしてこの一室に坐つた自己の形が、そのまゝ空間になるのではないか。鏡の中に一度現はれた Holra、それも矢張自分と同じものではないか』

ある時は、私はいつもに似ない寂寥と焦燥とを渾身に感じた。自己の周圍の壁、その壁が牢獄ではないかと思はれた。『一刻も早く、此處を拔け出てなければならない。このまゝにしてゐては身は亡びるばかりだ。腐つて、たゞれて、亡びて了ふばかりだ。孤獨の快感は、私を亡すこと、女色と鴆毒とに均しい。爾は何故にかくしてあるか。かくしてあらねばならぬか。何故にかうした一室の中に身を閉ぢこめ

て靜座してゐなければならぬか」

私は答を待つた。しかし、何の答をも得ることが出來なかつた。

「この骨に徹する冷めたさ。この魂に滲み入るさびしさ。爾はこれを如何に堪へやうとするのか。爾は如何にこれを超脫しやうとするのか。或は、或は、この骨に徹する冷さと魂に滲み入るさびしさとをそのまゝ自己の中心にしなければならないのか」

またある時は經過した。私はある日、深く底に穿たれた洞窟をその靜座の下に發見した。暗黑は暗黑に續いた。四壁のまゝに、私は深くその洞窟の中に身を沈めた。其處には些の光線もなければ、些の色彩もなかつた。私はある暗い洞門を通過した。ふと水の滴る氣勢がした。

形は見えずに、ある聲が其處から聞えた。

「誰だ」

「孤獨の道を行くものです？」

「孤獨はさびしいか？」

「さびしい」

「孤獨は辛いか」

「辛い」

「さびしい辛い孤獨の道を、お前は何故に守らなければならないのか」

「何故か、それを私は知つて居りません。知らずに、私は此の道へと入つて來ました」

「入れ」

かういふ聲がした。

で、私はその暗い洞門の中にある更に小さい洞門をくゞつて入つた。暗さは更に一層の深い暗さになつた。全く漆のやうな暗黑である。四壁からは冷たい水の滴の落つる音が、絶えず瀧津瀨のやうにきこえた。

暗い中を無數の不思議な形相をしたものが逅つて行つた。それが時には影のやうに、時には幻のやうに見えた。あるものは早く早く私を掠めて逅つて行つた。

ある聲とある聲とは話した。

「光の見えるところまで行つたか」

「行かれない。とても行かれない」

「でも、引返しても仕方がない」

「まだ、この先には凄しい瀧津瀨がある。高い岩石がある。この道が一番辛いといふことだ」

「しかし、光に達するには一番正しい道だと言ふではないか。」

「正しいかは知れないが、容易ではない。私はこれから五つ洞門を越えたが、暗くなるばかりで、少しも明るくはならない。」

「しかし、初めて最初の光を仰いだ時は、到底形容することの出來ない歡喜を感ずるといふではないか。あらゆる苦痛も、あらゆる艱難も物の數ではないと言ふではないか。まだその光を見ないか」

「見ない」

二つの聲は絶えた。種々の形相は私の立つてゐる傍を行つたり來たりした。洞門がまた一つ私の前に現はれた。

黄い美しい花が暗黒を地にして、くつきりとそこに現はれて咲いてゐるのが見えた。世間では到底嗅ぐことの出來ない匂ひがあたりに高く薫じた。

「孤獨に咲いた花だ」

から誰かが説明してきかせた。

洞門の前には、無數の群集が織るやうに集つてゐた。誰も彼も爭つてその中に入らうとしてゐるのであつた。「他人の心、自己の心」かう云ふ聲が喧しく聞えた。

群集を押わけて私が入つて行かうとすると、ある力とある聲とは、急に私を遮つた。聲は言つた。

「もう一度歸れ。また、お前は菴室の中にゐなければならない」

で、止むなく私は其處から引返した。

私はまた私の一室に歸つた。やがて谷の花は咲き、山の鳥は歌ひ、川は雪消の水に凄しく音を立てた。

一年はまた過ぎた。

洞門の中で見た「孤獨に咲いた花」の色彩は、長く私の眼に殘つた。そのかをりは長く私の周圍に薫じた。私は暗黒の四壁から冷たく滴り落ちる水の音を聞いた。「生死の谷でもなく、藝術の道でもなく、

私の通つて行く路は確かに其處だ」私はかう考へて、默つて猶ほ靜座を續けた。

ある日、戸を叩く氣勢がした。しかしさういふことは今までについぞ無かつたので、私は立つて行かうともしなかつた。戸を叩く音は段々高くなつた。

遂に私は立つて行つた。

扉の半ば明いたところには、ある人が立つてゐた。その人は蒼白い疲れた顏をして、手にはステッキを持つてゐた。五年前の私の苦惱と煩悶とを私はその人の顏に見た。

「何處から？」

「人生から」

「何を求めて來たのです」

「人生の波から辛うして浮び上つて來たものです。私はそこから浮び上るのに、全力をあげました。今でも、いろいろなものが私を元のところに引き戻さう引き戻さうとしてゐます。私は疲れ果てゝ了つた。」

「何故、人生の歡樂を求めやうとしないのですか」

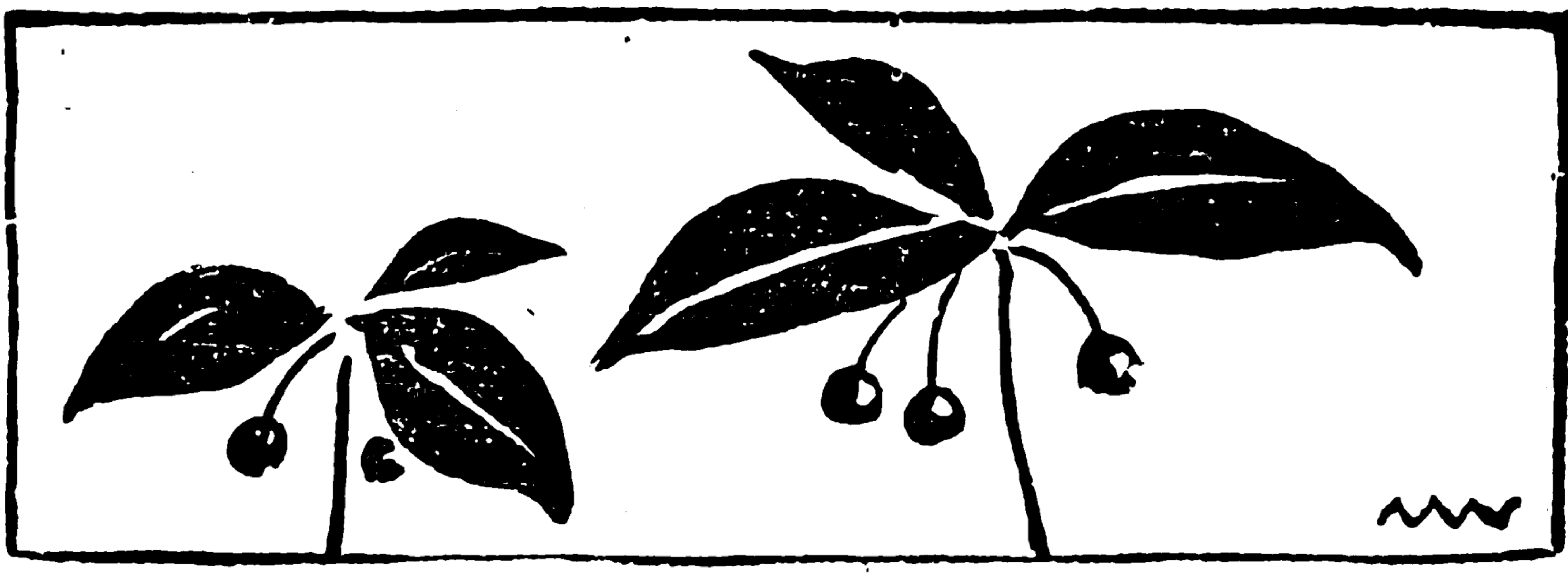
「歡樂は歡樂ではありません。苦痛は苦痛ではありません。私は何うしても、その中から遁れて來なければならないと思ひました。私は二十年人生の巴渦の中にゐて戰つた。權力とも戰ひました。名譽とも戰ひました。中でも愛慾とは最も烈しい戰ひを戰ひました。疲勞、困憊、さういふものは、皆なその戰から贏ち得たものでした。しかし、私はその盡きない戰ひから、漸く遁れて浮び上ることが出來ました。」

私は私の苦痛と歡樂と疲勞と困憊とをその人の顏に見ることが出來た。五年前の私は、矢張その人と

同じであつたことを私は考へた。私は言つた。『まア、お上んなさい。しかし、こゝは私の室だ。私きり入ることの出來ない室だ。こゝには、貴方を長く留めて置くことは出來ません。貴方は貴方で、自分の孤獨の室を新しくつくらなければなりません。そして辛い長い努力をつゞけて行かなければなりません。しかし、まアお上んなさい。貴方は疲れてゐらつしやる。休まなければならない』で、新しい客の爲めに私は谷の水を沸かして勸めた。

暫くして客は矢張私と同じ沈默をつゞけるために、別な巷室をもとてめ林の中へと出て行つた。日は月と經つた。谷の草花はまた咲いた。卓、ピストル、鏡、すべて元のまゝにそこに置かれてあつた。夕日は窓にさしてそして消えた。

靜座した私の姿は、朝に夕に猶ほ依然として其處に見えてゐた。



代議士の家（三幕社會劇）

木下杢太郎

時。現代。

所。東京。

第一幕。第一の現はれたる世界。

第二幕。第二の隱れたる世界。

第三幕。舊の第一の世界。

第一幕

人物

津田　叔。（六十歲、代議士。）

同　みき子。（五十歲、その妻。）

同　國彦。（二十七歳、長男。）
同　富子。（十九歳、長女。）
山口自成。（四十歳、學校教授。）
小代新。（六十五歳、牧師。）
田邊圭助。（三十歳、牧師）
中岡左右。（五十餘歳。代議士）

津田氏宅。五月中の日曜日。午後一時。後ろ、洋館、前、庭。芝生の上には白布を懸けたる食卓とそを圍む數脚の椅子と。

國彦と富子と

富子。おや、兄さん、しばらく……
國彦。お前教會へ行つて來たのかい。
富子。ええ。
國彦。おつ母さんも御一緒？
富子。いいえ、おつ母さん今日はいらつしやらないの。
國彦。どしてだらう。家にもお出でゞないねえ。
富子。さう、それぢや私の後でお出になつたのかしら。
國彦。おつ母さんが教會へお出でにならないやうな事は無かつたらう。
富子。さうねえ、どうしたんでせう。
國彦。何か家に變つたことはなかつたのかい。
富子。變つた事つて？變なことを仰やるのねえ。
國彦。兄さんは此四五日は下宿へ歸つて來たが何か陰氣臭いやうぢやないか。
富子。家は何時だつて陰氣臭いわ。母さんは、下町の町家でなけりや陽氣な家はないつて仰やるわ。昔だつて侍の家は陰氣臭かつたつて。兄さんも獨りで下宿なんかなさらないで、家へ歸つてお出でなさいよ。
國彦。僕はこんな陰氣な家庭は嫌ひだ。
富子。獨りぢやなほ寂しいぢやありませんか。（間。）ねえ、兄さん。（間。）私――どうもさう疑はれてよ

——兄さん。

國彦。む？

富子。さあ——こんな事を言つて可いのかしら。

國彦。何？

富子。私‥‥兄さんは（顏を赤め、涙を催さむ許りとなりて）兄さんは背教者ぢやないかと思ふのよ。間違つたら御免下さい。（兩手を眼に當てる。）

國彦。（感動して）背教者?!

富子。（顏を隱したるまゝ。泣聲。）兄さん、私にみんな言はして下さい。兄さんは京都からお歸りになつてから、舊とはすつかりお變りですねえ。母さんもさう言つてらしつたわ。私、今日教會で兄さんの爲めにお祈りをしたのですよ。兄さん、また舊のやうに信仰に歸つて下さい。

國彦。お前は泣てるのかい。——さう、そんな事はもう考へたことはないが——成程兄さんは背教者だつたかも知れないね。

富子。兄さんのお顏にはいつも不安が見えてよ。何か始終お考へになつてるやうに。

國彦。それはさうさ。兄さんだつて考へることはある——然し昔のやうな事は考へない。主觀的と云ふことと、社會的といふことを、後で說明してやる。兄さんの考への多少變つたことをもね——だけど此處の家は人を罪人扱ひに爲たがるよ。そりや基督教徒の惡い癖だ。僕が高等學校の時分、學校で、教會の仲間と話をしてゐると、他の人が屢自分達の惡口を言つてるだらうと邪推を廻はして、困つたとがあるが、然し實際そんな所もあるのだ。だが自分の兄弟から罪人扱ひを受けるには厭ぢやないかい。おつ母さんなども、僕がこの家の閾を跨ぐと、まるで惡魔の臭でも着物に附いてゐるやうな眼をなさるんだ。お父さんも僕を不良少年か高等遊民のやうにお考へになつていらつしやるんだらうよ。此處の家へ來ると、だから僕は裁判所へでも行つたやうな氣持になるん

だ。教會へ行かないつて事がそんなに惡い事なのかい。憚りながら兄さんだつて、ニイチエ位は讀んでゐるよ。——お父さんは基督教徒ぢやないぢやないの。教會なんぞ行つたことはないぢやないか。そしてまた世間も潔白な國士としてのお父さんの人格を疑ふものは無いぢやないか。

富子。（常に復して）私にはむづかしい事は分らないのよ。だけどねえ兄さん、兄さんの考へだつて、間違つて居ないとも限らないんですから、も一遍考へ直して御覧なさいよ。母さんだつて兄さんのお考へになるやうに、そんなに兄さんの事を惡く思つていらつしやるんぢやなくつてよ。何時もお祈の時には兄さんの事ばかり言ふのよ。

國彦。（苦笑して）迷へる羊といふわけだな。おつ母さんは兄さんをどう思つてるのだらう。

富子。本當はねえ、兄さん、兄さんの洋服の隱しからお茶屋の書付が出たことがあるのよ。

國彦。む？

富子。おつ母さんが洋服のズボンをお疊みになるつて云つて、皺くちやになつた手帕だの、煙草だのをお出しになつた時——それが一緒に出たのよ。

國彦。（慚愧の相を表はす。）

富子。その時母さんはいやあな顏をなすつたの。その後でみんなに八ツ當りをしたの。

國彦。さう、それは兄さんも覺えがある。成程ねえ、自分には分らないけれども、さう云はれれば、兄さんの生活も變つてゐるねえ。廻りがさう云ふ事には平氣だから、何とも思はなくなつてゐるが——あれは何かの會で兄さんが幹事をやつた事があつた時のことなのだ。然しね、富ちやん、職業に依つては、さう云ふやうな機會——お酒を飲んだりするやうな事が多少あるのは仕方がないねえ。

富子。皆さう云ふ風にお言ひになるわ。——さう母さんが言つてたわ。

國彦。さう――牧師とか哲學者といふやうに、書齋の中で物を考へる人には、生活の純粋は保たれる。少し大きく社會的の仕事をする場合には、正濁併せ飮むつて事も必要になる。

富子。だから兄さんの考へが變つたつて言ふのよ。――母さんがさうお言ひでしたわ。

國彦。何だい、母さんが――僕が神學をやつて牧師にならうと言つた時、第一にお止めになつたのは母さんぢやないか。

富子。私そんなこと、ちつとも知らないわ。

國彦。女なんぞ馬鹿だ、男の造つたものを唯奴隷的に守つて行けば之れで可い。――あの時分は僕の胸の中にも燬くやうに理想の火が燃えて居たんだ。僕には天母上の祖國が目の前に見えて居た。到底法律學なんて云ふ、下らない世間的の學問は出來なかつたのだ。其時に一番先きに反對したのは母さんぢやなかつたかい。師範學校の伯父さんを呼んで僕に意見さしたんだ。お父さんは氣が大きいから、そりや心では何とお思ひになつて居たか分らないけれども、そんな事には干渉なさらないで放任主義を取つていらしつた。兄さんは餘りおつ母さんが心配なさるんから、お氣の毒に思つた。是だけは小代先生にも御相談は出來なかつたらうからね。兄さんが牧師にならうと思つたのは、小代先生の感化だつたから。――僕は京都へ行つてからも二年間はこの問題で苦しめられた。大學の始めの二年間はその爲め學校も面白くなく、休んで許りゐた。それでも成績の惡いのは厭だつたよ。大學を卒業する時に牧師になつた人がある。母さんも他人の事だと感心なさる。僕はその時分は初心で、物を合理的に考へる性だつたからそんな事が刺戟になつて、大ぶ煩悶したよ。然し學校が後一年といふ時に、僕もかうしちやあ居られないと考へた。どうせ學校へ入つた以上まづい成績で社會へ出たくない。――そして――唯競爭心ばかりで勉強したのさ。

すると面白いもんぢやないか、今まで厭だとばかり思つて居た法律學が面白くなつた。

富子。兄さんはお出來になるからよ。

國彦。その代り、お前、兄さんの心には神の國より大事なものが現はれて來たのさ。

富子。神の國よりですつて。

國彦。地上の國家！もつと大きい現實の國だ。目前の事實だ。耶蘇教なんぞ馬鹿らしくなつた。

富子。まあ。

國彦。合理的な考を持つ男の人には、價値の變つた二つの權威に同時に服從することは出來はしない。耶蘇教は世界的で、沒國家的で、理想的だ。國家的の耶蘇教なんぞ有りやう筈はない。僕はもう目に見えない神の理想なんぞに係つては居られない。さう云ふ風に兄さんの思想が變つて來た。それを母さんがまた舊の所へ戻さうつて、出來る筈は有りやしない。いくら親だつて子供の思想まで干渉することは出來ない。

富子。ひどいわ。

國彦。ひどい事があるものか。女なんぞ、馬鹿で保守的で、昔の人が定めた宗教、道徳の權威に從ふが可い。新しいものを創成してやるのは男の仕事だ。男は思想がずんずん進歩して行つて、それをその度毎に實行すりや破壞ばかりになるから、そこに女が調停者になつて、一定の時期だけ、型にして保存して置くのだ。それが反對になつて、女の保守が男の進歩を阻害しちやならない。女に世話を燒かれるのは子供のうちだけの事だ。ツアラツストラの外套の隱しから「眞理」が何と叫んだ。「お前は女の所へ行くのか。鞭を忘れて行つちや不可んぞ、鞭を。」——

富子。そりや、兄さんは知識がお有んなさるから理窟はどうでも附くわ。

國彦。理窟ぢやない、眞理だ。

富子。私には何も分りませんから、兎に角兄さん、好

く考へて下さいよ。もう一時が打ちましたよ。そりや私は兄さんを信用してるのよ。時子さんなんかは、私が餘まり兄さんの事ばかり言ふて言つて笑ふくらゐよ。

國彦。有り難う。心配しないで見てお出でよ。大きな善人は、大きな惡をも爲る事が出來る人からでなけりや、出來ないんだ。兄さんが新しい敎を說いたらまづ第一に歸依するんだよ、可いかい。(笑。)

富子。そりや其時にならなくちや分らないわ。

國彦。皆な遲いね。今日の日曜會はお流れかしら。

富子。お流れになることはないわ。いつも一時過でなけりや始まらないのよ。

國彦。また師範學校の伯父さんが來るだらう、田邊さんもお出でかい。

富子。多分お出でになるんでせう。

國彦。田邊君は――田邊君としては――立派な人だ。兄さんも運命に依つてはああ成つたかも知れない。あんな立派な人に愛せられるお前は幸福だ。

富子。(顏を赤くす。俯く。)

國彦。戀愛と結婚と云ふことが、お前さんたち見たやうに、理想的に調和する例は餘り世間にない。羨んで可いくらゐだ。

富子。いやよ、兄さん、そんな事はまだ極つたんぢやないのよ。

國彦。兄さんは戲談を言つてるんぢやない。まだ極んないのなら、早く極めるが可い。――兄さんは背教者だが、お前の結婚の時には、お祝ひしよう。

富子。(兄の顏を見、案外にまじめの相なるが爲に、俯く。)

玄關にて戸の開く音。

國彦。おつ母さんだらう。

富子。さうでせう屹度。(去る。)

富子と母と

みき子。(冷淡に)おや、いらつしやい。

國彦。(輕く會釋す。)

みき子。（次の間に入る。）
國彦。どうも皆遲いね。

再び玄關にて物音。

國彦。今度は誰だらう。お父さんかしら。
富子。さうねえ。（去る。）

富子と田邊と。

國彦。おや。
田邊。今日は。久しく會ひませんでしたねえ。大層御健康に見えます。
國彦。さうですか、有り難う。少し旅行をして居ましたから。
田邊。もうお體はすつかり好うございますか。
國彦。有り難う。すつかり好いのです。
田邊。夏休みにお目に掛つた切りでしたね。――お勤めの方は？
國彦。まだぶらぶらして居ます。東京の大學で、大學院へ入りました。
田邊。さうさう、その事は伺つて居りました。さうですねえ。貴方にはやつぱり學問の方がお向きでせう。
國彦。さう云ふわけではないのです。一生學者で暮す筈ではないのです。口が見付かるまで、腰かけです。
田邊。然し學者の生活の方が、思想の純粹が保たれて可いでせう。實世間へ出るといろんな危險がありますから。
國彦。私が實世間の危險に堪へられないと云ふお考へですか。
田邊。いや決して、決して。そんなわけぢやないんです。
國彦。危險に臨むのもまた趣味でせう。
田邊。私はさうは思ひません。態々自分を不愉快な危險の地に置く必要はないと思ひます。例へば政治ですね――一度宗敎的の自覺を通つて來た人が、實際苦痛なしに、日本の政界へ飛び込むことが出來るで

せうか。

國彦。國家の政治機關を否定しようと云ふのですか。

田邊。いや、私はそんな抽象的な理窟を言ふのではない。現狀を指して言ふのです。無論貴方のお父さま見たやうな方もお有りです。が、然し、お父さまの立場としても、內心に苦痛はお有りだらうと私は考へるのですよ。

國彦。凡ての人が皆神の國からの派遣者でもないでせう。

田邊。然しさう云ふ渦中に投じないで、安らかに自己の純粹を保つ事の出來る領域が許されてあるなら、そこに住んで居た方が可いでせう。

國彦。貴方は消極論者ですね。

田邊。いや、私は積極論者の積りです。

國彦。どうしてです。

田邊。私の場合には一切の妥協調停に就かないからです。

國彦。（いやな顏をする。）さうです個人主義の立場からは積極論者です。

田邊。そんな主義からではないのです。心からの要求です。

富子。（話を外らさんとして）何故今日はみんな遲いでせう。――先生、今日のお話は大變むづかしうございましたね。私共には分らない所がありました。

田邊。さうでしたかねえ。私の云ひやうが惡るかつたんでせう。皆さん解らないつてお云ひですか。

富子。皆さんお解りでせうけれども――

田邊。僕もね、今一寸革命が起りかけてゐるから――もつと廣い、もつと基督に近い教儀に就て考へてゐる――僕はベルグソンを讀んで大に動かされた――

富子。おやまたお客さんらしい。（去る。）

田邊。僕は今本を書かうとしてゐるが、そしたら或は小代先生と衝突しはしまいかと思ふ――

國彦。若い時代には若い思想が必要だ。君の良心の求

むる所なら、構はないからやり給へ。小代先生の宗教はパオロの亞流だ、それと東洋思想との結び付いた偏狹な嚴肅主義（リゴリズム）だ。――君だから云ふが、僕の母はやはりあの通りの嚴肅主義者（リゴリスト）だ。――僕は無論父をば尊敬するが、僕の父は教徒ではない。一體日本の家庭に本當の基督教徒（クリスチャン）の家庭があるだらうか。

田邊。それは有る、少いには少いが――

國彦。恐らく表面（うはべ）だけの妥協だらう。形式的のことだらう。

田邊。さう云ふべきではない。――然し時勢が宗教的感激に乏しいと云ふことは事實だが――

富子。山口氏。

人々交互に挨拶する。

國彦と田邊とは一たび庭の彼方（かなた）に去り。再び舊位置に戻り來る。

國彦。どうも舊（もと）とは感激の源（みなもと）が變つて來たやうに思ふ。今僕は實行の慾望に燃えて居るのです。實世間的の事業がしたい。そしてまた實世間的の快樂が味ひたい。――僕は形式的な宗教の教儀に縛られるより、自分の本當の欲求に從ふ方が一層人間的だと思ふ。僕は宗教的の自己內省なんぞは厭だ。內生活に沈潛すると、實行的方面の能力が鈍（にぶ）るからね。

田邊。さう云つて多くの事業家は實の上に蹉跌するよ。

國彦。然し僕は往々、僕の體（からだ）の中に殘つてゐる耶蘇教の血を咀ふ位だ。

田邊。おお、全く、背教者の言葉だ。

玄關にて人聲。老教師小代氏來る。人々此人を迎へ、尊敬を現はす。

椅子は食卓より退けられ、人々芝生の上に不規則に坐す。

小代。大部（だいぶ）夏らしくなりましたな。（國彦を見て）おお、久しぶり。どうです、近頃は。

國彦。（小學校生徒の教師に對する時の如き畏怖と、自家苦責との心持。）いや……

小代。さう、さう、君はもう大學を出たのだつたね。法學士か。幾つ、幾つでしたなあ、年は。

みき子。二十六です。――おや、七だつたねえ。

國彦。二十七です。

小代。ちつともやつて來ないぢやないか、來給へちつと。

國彦。（顔を赤める。）

　最後に主人來る。

叔。や、今日は大變失禮しました。何時も日曜日は開けて置くのですが、急に今日は用が出來て呼び立てられたものですから――一寸御免下さい。着物を着かへて來ます。

　下女ボオイ等この間に食卓を調へる。

みき子。さあ、それぢや皆さん、何にもありませんが、食卓に御就き下さい。

　人々食卓に就く。

　主人和服となりて來り群に加はる。

小代。（祈る。）今日――私共が、かかる些細な、然し清い集りを、此處に持つことの出來るのを、あなたのお力と思ひ、感謝いたします。どうぞかう云ふ機會にも――かう云ふ單なる食事に於ても、あなたの御力の現はれんことを望みます。そして是があなたの爲めに善き働きをなす爲めの糧となることの出來るのを望みます。この祈を、主イエスの御名を通じて聞しめされむことを。

　人々稽首す。主人と山口氏とは唯沈默してゐる。國彦は其顔に異常なる自家苦責の相を見せて、同じく沈默してゐる。

みき子。さあ、何もありませんが、粗末なものですけれど、召上つて下さい。

岩代。いや、結構です。（人々食事を始む。）津田さん、大部今度の司法事件はやかましくなりましたな。

叔。いやどうも政事のことは、いつもごたごたばかりで困つたものです。

岩代。日糖事件は以來兎角ごたごたがありますな。

みき子。ねえ、先生、如何なものでせう。かう社會の上流の方々が牢などへ入るやうになつたら、教育の爲めに善くはないでせうがねえ。——

小代。どうも仕方がないですなあ。各自自分の家庭だけづつを清潔にして行くより外は仕方がないでせう。

山口。どうも近代の經濟主義の餘弊ですな。

叔。政治家は誰も彼も皆惡人のやうに世間では思つてゐますな。

小代。我々素人が考へても、政治社會にはどこにもかしこにも乾度暗い所があつて、偶然光で照らされた一角だけが罪となつて現はれるやうに見えますなあ。

叔。心外ですが已むを得ませんな。

みき子。今度なんぞも是非さう云ふ風にしなければならなかつたものでせうか。それともお上の方の手心でどうもなるやうなものでせうか。

小代。さて、そこが問題ですてなあ。

田邊。私は時々さう思ふことがありますよ。一體裁く人を誰が裁くかつて——。

みき子。何ですか、西洋には戰爭があつて、理が否でも強いものが勝つと云ふことが露骨に知れてまゐりましたし——また日本は日本で、今まで立派な方々とばかり思つてゐた人樣が罪人になつたりしますと——何かかう大さう氣味が惡るく思はれてなりません。

山口氏。（多少皮肉に）西洋の耶蘇教的道德も多少疑はれて來ましたな。

小代。教儀と政治との混淆はどうも弊害があるものだが——。

叔。どうも政治には政權、金權の爭が始終附隨してゐるのですから、往々罪惡も生ずるのですよ。それに御存知でせうが、代議士といふものが、みんな立派な紳士としての教養のあるものと限りませんからな。

小代。何時ぞやは議會の中に大變な騷動が起つたと云ふことでしたが、實際あんなものですかな。

叔。殘念ながら、珍らしいことではありません。

田邊。官吏や政治家は、今何と云つても一番尊敬されて居るのですから、政治家の行動は一番世間に影響するだらうと思ひますが——

小代。(皮肉に)さうさ。宗教や道德などの權威をも、凡て政府の機關の下に置かうと云ふ位だから——いつかの三敎會同のやうに。

山口。あれはさうお取りになつては不可いでせう。何も別に內務省や文部省を道德の府にしようとしたわけでも無いでせう。

小代。床次はあれで何を爲ようと思つたのかしれんて。

山口。然し西洋にも近頃は、宗敎などにも國家的の觀念を加へようと論じる人が多いやうですな。宗敎だとても一概に世界的のものだとは限らないでせう。

一番世界的の宗敎を持つて居る印度人の運命はどうでせうか。私の考へでは、人道などももつと差別的でなければならないのですな。實行の本源は國家ですから。無論排外的な、頑冥偏狹な主我的の愛國主義は不可いのですが、國家的生活を離れて、人道の實現を望むことは出來ないのですから、人道の理想の實現上、極めて重大な使命を有する自覺の上に立つた國家主義を建てなければならないでせう。私などを三敎會同は時機を得たものと思つたのです。

小代。さうですな。何事も政府の力を待たなくてはならない國ですから。

叔。それはやはり民間に金が無いからでせうな。亞米利加などは民間に金があるから、敎育でも、工業でも、民間の事業としてどしどし發達して居ます。

小代。(みき子に)さうさう、貴方にはまだお話しませんけれども、我々の敎會もやうやうミッショナリイの手から獨立が出來さうですよ。——亞米利加から歸

朝した有力な信者が出來ましてね。

みき子。へえ、それは好う御座いますね。

小代。或は會堂の建築にも來年の春あたりは取りかかる事が出來るかも知れません。

叔。寄附金の方は大部集りましたか。

小代。塚村さんが——今の亞米利加から歸つた事業家ですが、其人が亡くなつた奥さんの記念として二萬圓寄附することになりましたから。

叔。塚村？塚村銀行の塚村ぢやありませんか。

小代。や、さうでせう。

叔。（額を顰める。）

小代。御存知ですか。

叔。いや、知りませんが。

山口。貴方の教會では金持を優遇すると云ふ評判がありますなあ。

小代。（憤りて）そんな事はない。あらう道理がない。

山口。當節は凡ての事業が大規模になりましたから——

——傳道のやうな精神的の事業にも、經濟上の後援が必要になるでせう。

小代。それだから經濟の上で獨立する必要がありますな。兎に角ミッショナリイから獨立することの出來ただけでも大成功です。

小間使の女名刺を持ち來り主人に渡す。

叔。ふむ。（考へて）只今は來客中で都合が惡うございますから、用事ならば明日午前事務所の方で伺ひませうとさう申せ。分つたか。丁寧にさう申すのだぞ。

婢去る。

みき子。先生、家の弟の方が、近頃の風にかぶれて、繪かきになるだなど申して困りますが、一度伺はせますから、どうか一つ御話して下さいまし。

小代。みき子さんは到頭息子さんたちに感化を及ぼすことが出來なかつたのですな。

みき子。どうも私が何ですから。

小代。國彦さんは何故御宅に一緒にお出でにならない

のです。

みき子。（辯解的に）家は來客が多くてやかましいと申しまして。

小代。こんな廣い家なら靜かな部屋は幾らでもあるぢやありませんか。――國彦君もまた少し教會へ來たまへ。

國彦。（顏を赤くする。）

小代。下宿などに居ると浮浪人臭くなつて不可んよ。（みき子に）どうも下宿に居るのは善くないやうだな。殊に大學の上級とか、大學を卒業してからは不可ないやうだ。うちの教會のものでも、下宿に居るものは善くないやうだ。交際は廣くなる。いろんな客が來る。酒は飲む。夜は夜深しをする。それでも社會はもう學生ではないから干渉しないが、あれでは浮浪人も一緒だ。

國彦。（髯を顫はす。）

小代。舊幕の時代には武士道と云ふやうなものがあつて、侍の間にはお互に禮儀があつたのだが――今はもう全く方便主義だから。それは學問とか工業とかの、特別の仕事には働いてゐるだらうが、道徳的の意義などは乏しいものですな。我々は國彦君見たやうな人から、――別に宗教家を望むのではないが、教徒として立派に實世間に働く人を要求したいのですなあ。

前の婢再び來る。

婢。何か急用で、是非五分間で宜しうございますから、お目にかかりたう御座いますと申して居ります。

叔。（額を顰む。）さうか、それぢや應接間へ待たしておけ。（みき子に）中岡だ。

婢去る。

國彦。私は感激のない――形式に使はれるのは嫌ひですから――私はもつと自分の、本當に思ふことの通りにして見る積りです。

小代。君の本當に思ふことは、まあどんな事です。

國彦。もつと人間らしい事です。――道德でも、法律でも、宗教でも――昔からの習慣や、何かでは無く、もつと本當の人間の要求に添つたものにするのです。――敎會なんて形式的のものでなく――

叔。私は失禮ですが、一寸中坐します。どうも一刻も靜かにしては置かないのですから。(去る。)

小代。屡さういふ風な事を近頃の青年は言ふが、どうも僕には好く分らないが――然し道德上の交友がないと、道德の意識は衰へてゆく。敎會は一方から云へば、多少形式的なものであるが、然しその形式とても、放縱には勝るのだから。今君、敎會を離れて見たまへ、全く世間の人のやうに、今日主義になつてしまふよ。もつと立派な、宗敎的の感激に滿ちた、緊張した生活を創造したいぢやないか。

國彦。貴方は私の生活が如何にも醜い、惡いもののやうにお考へになつて居るのですね。それは基督敎の排外思想です。自分の敎派以外のものは皆罪惡視する、獄吏の思想です。私はもう基督敎徒では無いのですが、自分の良心に恥ぢない、人間のもつと本然的な、好い生活をして居るつもりです。

みき子。お前は何て云ふ物の言ひじなをするのだえ。

小代。(人惡るく)ねえ、國彦君、僕には君の話の間に、ちらちらと、君がどうも安んじて居ない所のあるのが見えるがねえ、唯僕は君が何かする時には、本當に一遍反省し見てからするやうに忠告して置きたいねえ。一遍實行になつた過は取り返しがつかないから。

國彦。先生は何か私の行爲は不德でもあつたやうにお話しなさいますね。

小代。いやそんな事はない。無論具體的に言つたのぢやない。――諸君我々は國彦君の爲めに祝はうぢやありませんか。國彦君の門出に當つて、今後の多幸であることを。

人々立ち上りかける。

國彦。（激して）先生、――私は義務づけられるのは厭(いや)です。私は私の心の外(ほか)に、――若し今貴方から祝福して頂くと、私は自分の心を枉げても、貴方(あなた)の御心持に順應するやうな氣になりますから――私と貴方(あなた)がたとは考も心持も大變變つて居るのです。私は一體貴方がたと一緒に食事するのが間違つて居たのです。かう云ふ清い席に、背教者たる私の居たことは善(よ)くなかつたのです。私は行きます。（去る。）

小代。（皮肉に）現代人(モダアン)だ。

一種の相そぐはぬ心持にて人々相對す。

みき子。先生、國彦は我々から失はれたのでせうか。

小代。決してさうではない。國彦君は良心を持つて居られる。何よりも先きに我々は、國彦君を呼び戻さなくてはなりません。我々は我々の周圍から、神の國の實現をして行かねばならんのですから。

主人再び戻り來る。全く別の世界より來りしが如き、苦惱の相其顏に現はる。

みき子。中岡さんはもうお歸りになりましたか。

叔。歸つた。

みき子。何用ですか。

叔。いや大したことぢやなかつた。

みき子。おや富ちやん、どうしたの。

富子。先生。（流涕す。跪きを兩手を合はせる。）先生、兄さんを救つてやつて下さい。

――（幕）――

第二幕

人物

覆眼の青年
その友人
四人の紳士
文江
多くの男女

五月半の午後五時ごろ。

或る大きなる料理屋に於て妓女の温習會ある日。

舞臺は二間續きの仕度部屋を現はし、舞師の舞臺はその奥にある心持。下手の襖よりそこの觀衆客に通じ、上手よりはそこの舞臺奥の間に通ず。

上手の室には調度混雜す。下手の室には藝人男女の出入するものあり。

日未だ全く暮れたるにはあらねども、銀燭既に點き、紅紫等色彩絢爛の調度及び女人の膚膩に當り、燦々の美を現はし、且つ音曲の旋調の加はるありて、前の第一の世界とは全く異りたる情調的雰圍氣を現ず。

この第二の世界は、第一、第三幕の間に、殆ど聯絡なく挿入せられ、恰も暗變(ダアクチエエンヂ)を以てする夢の場の如き看をなす。

○(下手より來れる女。) 今何をやつてるの。

○長唄の踊(をどり)よ。

○誰(だれ)だ、誰だ。

○市松に鶴子に松わかよ。

○地(ぢ)は誰(だれ)か彈いてるの。

○百合子さんよ。

○隨分今度は盛會ねえ。ぎつしりだわ。

○おや、お仙ちやん今晩は。

○今晩は。能(よ)ういらつしやい。

○君も出るのかい。

○もう濟んだのよ。

○それで踊つたのかい。

○まさか。高音(たかね)に出たのよ。

○鶯見たいだな。藪鶯だらう。

○どうせさうよ。貴方(あんた)見たいにどら犬ぢやなくつてよ。

奥にて喝采の聲。

一群の妓女石橋の踊の衣裳にて上手の室に入る。

人々の出入少時混雜する。

○どうも御苦勞さま。

○有り難う。

○綺麗だつたわ。

○随分見にくかつたでせう、姉さん。
○大變に結構よ。
○あらお世辭ばかし。
○今晩は。
○今晩は。

老人

老人。一龜さんは居ませんか。もう直ぐ始まりますよ。仕様がない。どこへ行つたんだらう。一龜さんに雛子さん。一龜さんに雛子さん。（去る。）
○お龜さんに雛つ子さん。

人々笑ふ。

三人の女

○私も今度の會には出ようかしら。
○お出なさいよ、あんた。
○氣味が惡いわねえ。
○構はないから出て御覧なさいよ。
○だけど不可いわ。もつと上手にならなくつちやあ。
○そんな事を言つてた日にや出る時はありやしないわ。
○餘り遠慮してゐちや、藝は上らないつて言ふわ。
○それもさうねえ。私が出たら誰か上調子を彈いてくれる人があるかしら。
○お前さん立で出るの。
○いゝえ唄でなくつちや。
○唄なんかどうでも可いから私三味線が上手になりたいわ。
○私神田の方へ行かうかしら。
○淺草へいらつしやいな。
○いやよ。私神田へ行くのよ。おつ母さんがその方が可いと言ふのよ。
○あの人の三味線は撥がうるさいねえ。
○大きな聲でそんな事を言ふと聞えますよ。
○もう始まるのよ。
○さよちやんだわね。さよちやんは巧いわねえ。

○だけどあの人は早間だわ。
○あの人は綱吉さんに夢中なんだから眞似をするのよ。
○綱吉さんは樣子は好いけど恐いわ。あんな人は恐いわ。
○本當よ。
○藝人は恐い、恐い。
○入つて見て見ませうよ。
○さうねえ、おや中岡さんが居るわ。あの方の御連の方が大部見えるわ。（人々去る。）

後方の室にて音曲始まる。
舞臺には三四の男女の後ろむきになりて後方の室内を眺めて居るものがある。
藝者文江、料理屋の女中。

女中。山さんからさつき電話がかかつて來たのよ。
文江。今日來るつて？
女中。二三人でいらつしやるかも知れないつて。
文江。知れないのは心細いわね。
女中。大抵いらしやるのよ。今夜は何かお奢んなさい。
文江。その時になつて見なくちや分らないわ。奢るかも知れないわ。
女中。あんたも亦知れないの方のね。
文江。お座敷があつたの？
女中。離れの六疊が一つ明てるわ。
文江。狹いわねえ。
女中。外はもう皆ふさがつて居るんですもの。
文江。狹くつても離れなら可いわ。
女中。山さんは本當の名ぢやないんですつてね。
文江。さう、誰に聞いたの。
女中。この間お連れの方が仰つたわ。
文江。さう。私には敎へないのよ。今夜來たら苛めてやらう。

出入の人に交互に挨拶し或は戯謔をなす。
後方の音樂佳境に入る。

文江。さよちやん好い聲ねえ。
○姉さん、今晩は。
文江。あんたもう濟んだの。
○えゝ一つ濟んだの。も一度地に出るの。
文江。忙がしいのねえ。若いうちにたんとお働きなさい。
○まあ、有り難いわねえ。

看客、遊子、妓女等の會話は宜しく機に臨み變ずる所あるべし。

二人の青年。孰れも和裝にして、うちの一人は片眼を繃帶して居る。

覆眼の青年。(文江の前に立ちふさがる。)
文江。まあ、山さんなの。誰かと思つた。
覆眼の青年。もう濟んだの。
文江。(丁寧に、慇懃に、つくろつたる口調にて) いんえ、まだこれからなの。まあ好く來て下すつたのねえ。(他の青年に) 今晩は。この間は。

第二の青年。あれからどうしたい。
文江。(蓮葉に、ぞんざいに) 隨分しどいわねえ、もうすつかり醉つちやつて、家へ歸つたのも分らないくらゐよ。
第二の青年。(皮肉に) 噓だらう。種は上つてるよ。
文江。何に？可笑しいことを言ふのね。
第二の青年。君がいくら隱したつて、もうすつかり山君から聽いちやつたよ。
文江。(一種の媚態を示したる笑ひ方をする。) 何を言つてるの。――(覆眼の青年に) 餘程あんたもおたんちんねえ。どうなすつたの、お眼は。
覆眼の青年。トラホオム。
文江。あら恐いわねえ。移るでせう。
第二の青年。(狡猾なる笑をして) 移つたつて大丈夫だよ。眼だから、安心するが可い。
文江。どうして眼なら可いの。(急に暗示を解したるが如く、第二の青年を誇張したる眼にて叱しながら) あんたはいけ好

かない人ねえ。
第二の青年。所が本當は眼が惡いんぢやないんだよ。今日實は山君を僕が無理に引つぱつて來たんだ。先生例によつて、まつ暗な本の一杯つまつてゐる部屋の中で勉强してゐるのだらう。そこへ僕が尋ねて行つたのさ。そしてファウスト先生と呼んだものさ。
文江。フワスト先生つて何なの。
第二の青年。お前さんは帝劇の伊場孝の芝居を見ないから話にならないよ。
文江。見たわ、幽靈の芝居でせう。
第二の青年。まづ聽いてお出でよ。先生大部御勉强ですな。わつちはメフィストですつと言つたね。
文江。あんた何處かで召上つていらしつたのね。
第二の青年。先生大部御勉强のやうですが、今は氣候も夏の初めですぜ。一寸窓から首を出して御覽なさい、椎の樹には花が一杯さいて、ぷんぷんと好い香を立てゝるぢやありませんか。あの香をかぐと、至く海のそばへ行つたやうな氣になりますねえ。心かすうつと紫色の水平線へ消えてくやうでさあ。人生は快活です。愉快です。もつと漂渺として居て面白いところです。さあ書齋をお出でなさい。街頭へでませう。街は夏になつて、女の人が綺麗ですぜ。さあ耶蘇教の臭ひを洗ひませう。人の家の軒には丁度火が點く頃です。歡樂はこれからですつて――さう云つて無理にファウスト先生を引つぱつて來たのさ。
文江。フワスト先生はお氣の毒ねえ。
第二の青年。然しその御氣の毒は愉快なお氣の毒だから可いのさ。先生は人中へ出るのが厭だといふから、僕が一策を献じたのさ。
文江。一さくつて何。
第二の青年。入智慧さ。
文江。まあ、惡るい人ねえ。
第二の青年。もとから僕は惡るい人に生れついて居るのだが、それはどうでも可いんだよ。そこで僕がか

かりつけの醫者へ飛び込んで行つたものさ。そこの息子で僕の飲み仲間を買收して、この通りの假病人さ。

文江。まあ、さう云ふわけだつたの。

第二の青年。そこで勇氣を附ける爲めに、資生堂でヰスキイソオダを一杯やつたのだが、一寸妙策だらう。誰か分らなかつたらう。

文江。直ぐ分るわ。

第二の青年。それや君の眼だからだよ。

第二の藝者。

第二の女。おや林さん、今晩は。

第二の青年。大變な頭だねえ。

第二の女。早く來て御覧なさい。あんたの何が今踊つてるわ。

第二の女、第二の青年去る。

文江。どうしたんです。隨分御無沙汰ねえ。

覆眼の青年。あゝ。

文江。あゝだつて。變な御返事ねえ。あれからもうかれこれ一月になるのよ。

覆眼の青年。さうかなあ。

文江。今晩いいんでせう。お緩くりなすつていらつしやいな。私もうこの次に出れば、暇くんですから。――あれから誰かに會ひましたか。

覆眼の青年。いんや、誰にも會はない。

文江。おかみさんねえ、山さん隨分お變りになつたと云つてたわ。どこか他で御遊びになるでせう。

覆眼の青年。そんな事はない。

文江。でも分らないわ。

覆眼の青年。そんな事はありやしない。

文江。だつて隨分久しくお見えにならなかつたぢやありませんか。

覆眼の青年。家にばかり居たのだ。

文江。も少しいらつしやいよ。――今晩は緩りしていらしつても可いでせう、本當に。お宅に不可ないん

ですか。
覆眼の青年。(答へず。)
文江。またあすこの家へ行つて面白く遊びませうよ。此處には座敷が取つてありますから少時こゝに入らつしやいな。それから林さんと一緒にお出でになつて、途中から貴方一人でお歸いんなさいよ。このお坊つちやまは是程敎へて上げないと分らないから。
覆眼の青年。氣が向いたら。
文江。氣が向いたらぢやなくつてよ。乾度よ。私電話かけときますよ。(突然) おや。

二人の紳士。そのうち一人はいたく酩酊してゐる。

文江。(其方に行きて) ま、入らつしやい。彌からお出でになつたのですか。
第一の紳士。いや、今來たばかりだ。隣の家で今まで飲んで居たのだが、こゝに踊があると云ふから一寸見に來たのさ。
文江。皆様御一緒ですか。
第一の紳士。君もあとで隣へ來たまへ。——勢田ヶ谷君、一寸踊を見て行から。
第二の紳士。今行くよ。(兩人奥に入る。)

女中。

女中。文江さん、津田さんが入つしつたのよ。
文江。さう?(顔を顰める) 宅へ寄つていらしつたかしら。
女中。隣の家で何か相談會がおあんなすつたやうよ。
文江。仕様がないねえ。
覆眼の青年。どうしたの。

第三第四の紳士

第三の紳士。でも一寸見て行かう。
第四の紳士。こんなものを見たつてしようがないがな。(通過の途中文江を見て認識の表情をする。低く) 何かやるのかい。
文江。貴方、うちへお寄りでしたか。
第四の紳士。いんや。

覆眼の青年。（ふと第四の紳士を見る。忽ち異常の驚愕の相を現はし、直ぐに眸を轉ず。一瞬の後には彼は後ろを向き、障子に面したるまゝ、身動きもせず、凝としてゐる。）

第四の紳士。（怪訝の相より驚愕の相に。やがて一種の不安なる容貌をなして、後向きに立てる青年の姿を見詰む。默したるまゝ奧に入る。）

奧の音曲例の如し。

覆眼の青年。（後を向く。蒼白の色、うち顫ふ脣。）

文江。どうなすつたの、貴方。

覆眼の青年。（異常なる調子にて）お前、今の人。

文江。え？

覆眼の青年。今の人は誰。

文江。當てゝ御覧なさい。

覆眼の青年。誰だか言つておくれ。

文江。お客さんよ。

覆眼の青年。お客さんて？

文江。お客さんてお客さんよ。（微笑）ぢや言つて上げませうねえ、怒つちや不可ませんよ。貴方がいつも聞きたがつてゐた人なの。

覆眼の青年。僕が聞きたがつて居たつて？

文江。私の旦那よ。貴方何時か、どんな人だか見たいと仰やつたぢやありませんか。御安心なさい、あんな老人よ。（笑ふ。）

覆眼の青年。（無言。烈しき發作的の表情。）

文江。まあ、どうなすつたの？

覆眼の青年。（女に支へられたるまゝ）あれは僕の父だ。本當の父親だ。

文江。（あきれたるこなし。）まあ――さう。（少時して烈しく笑ひ出す。）兄弟つてことは屢言ふけど――まあ、私は何でせう。――本當に貴方のお父さんだつて苗字が違ふぢやありませんか。

覆眼の青年。僕の苗字は變つてゐるんだ。

文江。あら、本當に？――私はなんでせう。可笑いわねえ。

覆眼の青年。(憎悪の眼を以て女を見る。)可笑しい?(障子の所へ兩腕を當てて額を押へる。)

第二の青年。

第二の青年。(奧より來りて)山君。君の父らしい人が來たぜ。見つかると不可ない。あつちへ行かう。(覆眼の青年を促して自らまづ去る。)

文江。(後より覆眼の青年を追ひ、耳許にささやく。)御安心なさいよ。私がうまく繕つて置くのよ。何でもないわ。
氣を大きくお持ちなさいよ。私待つて居ますよ。

覆眼の青年。(少時女の顏を見詰める。默つて去る。)

奧の座敷さわがしくなり、舞踊の終りに近きたるを暗示す。
二三人の人々既に出て來る。

文江。(青年の後姿を見送りながら、一種複雜の表情を爲す。)

——〔幕〕——

第三幕

人物

第一場の時の人物より二三の人々を缺く。

津田氏宅日本室客間。
五月末の夜十時ごろ。

みき子。(外より歸りたるままに坐つてゐる。)

山口。(奧より來る。)

みき子。どうでした。

山口。今電話で聞いて見たら、大抵巧くゆきさうです。も一人、私は新聞社に關係した人を知つてゐるのですが、今から直ぐ車で行つて見ようと思ひます。

みき子。お氣の毒ですねえ。

山口。一寸車を頼んで貰ひませう。

みき子。富子や、富子。

山口。妙な事が役に立つものです。私の高等學校時分の友達ですが、道樂の爲めに學校を廢めて新聞記者に成つてゐるのがあるのですがね。それが今ぢや中

々新聞記者中の勢力家になつて居るのださうです。偶然二三日前に遇つて話をしたのですが、丁度可い。今から行つて一つ頼んで見ませう。私はどうもかう云ふ事は不得手ですから。少しお金は使はなくては不可ませんよ。

みき子。可ござんすとも。其事は心配なく貴方の思ふやうにして下さい。

富子。

富子。母さん、何です。

みき子。早く、お前、一つ車を誂へさしておくれ。

富子。はい。(去る。)

みき子。山口さん、私本當に心配ですよ。もうどうして可いか、分らなくなつてしまひました。

山口。御安心なさい。生命には障りはないさうですから。

みき子。だけど何で自殺する氣になつたでせう。私は少しも分りませんよ。

山口。國彦さんはそんな人ぢやなかつたのですがねえ、やはり時代の風潮に感化れたのでせう。さう云ふ様子は少しも見えませんでしたか。

みき子。いんえ、ちつとも。尤もあれつから家へはちつとも來ませんでしたからね。

山口。さうですな。それぢや分りませんな。

みき子。然し突然そんな風に精神病が起ることがあるのでせうか。

山口。さあ——宗教のことなどで餘り煩悶したりするとあるものですが。

みき子。子供に宗教を吹き込むのは惡いものでせうか。その爲めぢやないでせう。

山口。何時か小代さんのお出での時も妙だつたぢやありませんか。

みき子。さうでしたねえ。あれも氣が小さい方ですから。

山口。宗教は兎角人の氣を小さくしますよ。兄さんは

何て言つて居ました？

みき子。何とも言つて居ませんよ。忙がしいつて云つて碌々話もしません。唯國彦が病氣が直つたら、本人の希望に任せて、直ぐ亜米利加へやるつて言つて居るんですがね。

山口。阿米利加へですつて？

みき子。私などにも病院へ行ちつや不可ないと言ふのですよ。父だけには國彦も何か話したと見えます。

私には何にも言ひません。

山口。私は悪いともつたから、餘り聞きませんでしたが。何かわけがあるのですか。

みき子。私には、ですから些とも分りません。出世前の大事な體だから、三四年亜米利加へやつて修業させようと宅では申して居りました。

山口。そんな先の事は今はどうでも可いのです。それより悪い記事が新聞へ出ないやうにしなけりやなりません。新聞では嘘の事を面白く書き立てたがりますからね。女と關係があつたとか、哲學に中毒したとか——。

みき子。そんな事は決して有らう筈はありませんよ。國彦は女などゝ關係するやうな子ぢやなかつたのです。

山口。兎に角無根の記事が出ると不可ませんから。新聞屋は機敏ですからね。誰でも可いから早く上手な専門家に頼まないと不可ませんね。私共はかう云ふ世間の事には慣れないから、骨が折れます。

みき子。島上さんにでも頼みませうか。辯護士ですから。何しても宅が歸らなくちや。

山口。忙しさうですね。

みき子。何しろ、貴方、出川さんの事件が大變ですから——政治家なんて職業は厭ですねえ。

山口。出川さんは拘引されたんですね。

みき子。まあ、本當ですか、あの人が——宅の親友です。

山口。多分本當でせうよ。貴方は知りませんか。
みき子。宅はそんな事は少しも話しません。
山口。さうですか。それぢや兄さんもお忙がしいでせう、同じ政黨などゝ云ふ關係から――。
みき子。ねえ、山口さん、宅は私にはそんな事は少しも申しませんが、宅などはそんな事に少しも關係は無いでせうねえ。
山口。無論ですよ。ありや皆、政事家と云つても、極品性の惡い人達だけの事ですよ。
みき子。それでも近頃は大部世間のえらい人に、いろいろの事がありますねえ。

富子。

富子。お車がまゐりました。
山口。それぢや姉さん、私一つ行つて來ますよ。首尾は兎に角途中から電話を懸けて寄越します。若し都合が附いたら、歸りに一寸病院へ寄つて様子を見て來ませう。
みき子。山口さん、餘り深くは聽かないで下さいよ。
山口。いや大丈夫です。若し寢入つて居たら會はずに來ます。醫者に好く聞いて見ませう。(去る。)
みき子。濟みませんねえ。

皆々山口氏を送りて出づ。少時素舞臺。
みき子、富子再び戻り來る。

みき子。今夜小代先生に來て頂かうかしら。母さんはどうして可いか、分らなくなつてしまつた。
富子。母さん、本當に兄さんはどうしたんでせうねえ。
みき子。淸い家庭から離れて、獨りで遠くへ行つて居たからだよ。さあ、お前も兄さんの爲にお祈りなさい。

(兩人祈る。その言葉間々聞かれる。)

富子。かあさん。(みき子に取り縋り、顏を埋む。)
みき子。田邊さんの所には電話はないかねえ。車をやつて來て頂かうか。
富子。さうねえ、私手紙を書きますわ。

みき子。さうしておくれ、私は本當に心配になるのだから。だつてお父さまが些とも取り合つて下さらないのだもの。

富子。（一たび去り、再び硯箱、卷紙を携へて出づ。）

みき子。ねえ、富子、母さんが昨日いやな夢を見たつて言つたねえ。

富子。えゝ。

みき子。その夢がねえ、或るえらい人の事なのだよ。

富子。さう。

みき子。下手だつて構はないよ。そんなに破つてばかし居ちや、仕方が無いぢやないの。

富子。でも。

みき子。立派な先生の方が、芝居小屋見たやうな大きな所で演說していらつしやるのだよ。それを大勢聽いて居て、母さんも山口さんやなんかと聽いて居たの。——またむだなの。

富子。だつて母さんが御話なさるんですもの。間違ふのよ。

みき子。さう、御免なさい。

富子。可いのよ。そしてどうなの。

みき子。さうするとねえ、突然演說なすつていらしつた方が血相變へて飛び出したのよ。

富子。へえ。

みき子。そして母さんや山口さんなんぞの居る桝の中へ隱れてぶるぶると顫へていらつしやるの。

富子。どうしたんですつて？

みき子。何か惡るい事をなすつて、警察から人が來たんですつて。母さんはいやな氣になつたのよ——恐ろしい——。それがねえ、名を云つては不可ないけれども、お父さんのお友達の大學の先生の方の顏なの。

富子。まあ、いやな夢ねえ。

みき子。餘りいやな夢だつたから、母さんは朝起きると直ぐお祈りをして、昨日は一日斷食したのよ。

富子。さう、それでないの。お腹がお惡いんぢやなかつたんですねえ。

みき子。一度だつて思つたことも、考へたこともないやうな夢ぢやないかい。いやな夢は人に話してしまつた方が可いと云ふけれども、餘りいやな夢だつたから話されなかつたのよ。そしたら兄さんがあんな事でせう。やつぱり話してしまつた方が可よかつたんだねえ。

富子。そりや迷信よ。そんな事はありやしないわ。私こゝおぢや手紙は書けないわ。あつちに行つて書くわ。

みき子。唯用だけ短くかけば可いのよ。

富子。そりやさうですわ。何を他の事を書くものですか。(去る。)

玄關に車の着きたるけはひ。

叔洋服にて座敷に入り來る。

みき子。(立ち上りながら)まあ、貴方で御座いましたか。お歸んなさいまし。

叔。(何も言はず次の間に行く。)

みき子。國彦の所へ寄つて來て下さいましたか。

叔。到頭隙がなかつた。鍵を借してくれ、簞笥の鍵を。——それから玄關へ人が尋ねて來ても留守だと斷つてくれ。

小間使

婢。奥さま、奥さま。

みき子。(戻る。)何だえ。

女中。(名刺を出す)かう云ふ人がまゐりました。

みき子。(名刺を見て)いやだねえ、また新聞記者——御主人は御不在だと申しなさい。

婢。さう申しましたら、奥さまでもよろしうございますから、御目に懸りたうございますつて。

みき子。奥さまはお出でだと言つたのかい。

婢。いゝえ。

みき子。奥さまも急用で外出したとお云ひ。

婢。(去る。)

富子。

富子。母さま、車をやりました。――お父さまが外所行きの和服を出して下さいつて。

みき子。さう、只今。――お父さんはまた何處かお出でになるのかしら。

叔。(洋服を脱ぎたるまま、大たる鞄に書類など入れながら、それを携へ出づ。)車屋を呼べ。車屋を。

小間使。

婢。奥さま、どう申しても歸りませせん。

みき子。何だと云ふのだえ。

婢。お歸りまで待つて居ますつて。

叔。面倒臭いな。俺が會つてやる。西洋館の應接間に通してお置き。

みき子。それぢやお前あとで車を誂へておくれ。

婢去る。

叔。(洋服を和服に着代へながら)俺は今夜今から急に大阪の方へ行かなけりやならない。詳しいことは手紙で寄越す。大抵五六日で歸つてくる積りだが――留守中人が尋ねて來たら、好く名を聞いてお置きよ。――。

みき子。何でそんなに急にお立ちになるのです。國春の事はどうしませう。

叔。あの方はもうあれで可いぢやないか。もう大丈夫だ、心配はない。ひ丶、彼奴が氣の小さい奴だからあんな事になつた。もう好く話してあるから心配はない。

小間使再び來る。

婢。旦那様お電話でございます。

叔。誰からだ。俺が居ると言うたか。

婢。お留守と申しましたら、奥さまでもよろしう御座いますから――中間ですからと申しました。(去る。)

叔。中間?――それなら俺が出る。(去る。)

富子。母さん、何故そんなにぼんやりして坐つて居らつしやるの。

みき子。早く山口さんが歸つて下さればいゝねえ。新

聞記者は何だといふのだらう。

富子。いやなものねえ、人の家の不幸につけこんで來て。

みき子。私會つて見ようかしら。

富子。母さん、およしなさいましよ。

叔。

叔。(戻り來りて) 富、こゝの荷物を片付けて置き、客が來るから。

富子。はい。(片付けながら去る。)

みき子。何ですか、話して下さい。私は心配ですから。

叔。政治家といふ職業には時々厄介な事がある。お前も知つてゐる通り。

みき子。(蒼白になる。) 何か——何か事件が起りましたか。

叔。さ、早く帶を出してくれ。——羽織——良い方の紋付だ、良い方の——いろんな運命の傍杖を食つて困つてしまふ。

みき子。(物を揃へてゐる。)

叔。さ、早く。今夜大阪へ行つて、一週間ぐらゐの內には歸つて來る積りだが——事に依るとも少し遲くなるかも知れない。詳しい事は後で分る。留守中萬一何か用事が出來たら山口と相談して呉れ。——俺は一寸新聞記者に會はふ。(去る。)

玄關にて物音。山口氏。

みき子。お歸んなさい。御苦勞でした。

山口。(激昂してゐる。)

みき子。どうでした。

山口。兄さんは?

みき子。今新聞記者と話しをなすつてゐます。

山口。姉さん、仕様がない。もう夕刊へ出ちやつた。「最後日報」だ。一番質の惡るい新聞です。

みき子。何だつて出てゐます。

山口。それやもう出駄ら目ばかり。

みき子。お見せなさい、新聞を。

山口。見ない方が可いのですよ。困つちやつた。困つちやつた。――當分姉さん、世間の誤解から來る不愉快を忍ばなくてはなりませんよ。

みき子。でもお見せなさいよ。

山口。さあ見るなら御覽なさい。

みき子。（新聞の夕刊を見る。異常なる感激を示す。所々讀みさしながら獨語をいふ。）――紳士の家庭に――耶蘇教の家庭に有らう筈はない事ぢやありませんか――おゝ苛い事――何て惡徳新聞でせう――隨分嘘な事を――おゝ私もう讀まないハ。

山口。お休しなさい、姉さん。

間。

みき子。山口さん、貴方はこの新聞を信じますか。

山口。無論、姉さん、そりや皆嘘です。

みき子。無論嘘ですけど――ねえ、山口さん――もし此萬分の一でも本當だつたら――

山口。姉さん、貴方は今日は餘り興奮して居ますから、正當な判斷力がありません。

みき子。若し然し少しでも本當でしたら――神さま。

小間使。

婢。奥さま、御客樣です。中岡さんがいらつしやいました。

みき子。旦那樣にさう申し。――山口さん、彼方へ行きませう。

みき子、山口氏去る。

其後に中岡氏案内もなく上つて來る。

叔、急ぎ來り、椽側より客に（や、失禮、今直ぐ來る、）と云ひながら居間の方に入る。

後より女中座蒲團、茶など持つてくる。山口氏主人に代り、居間の方より、西洋館の應接間に行く樣子。

叔再び來る。

叔。やあ、失敬大變に早かつたなあ。

中岡。（低聲にて、重大らしく）いやそこまで自働車で來たから。――自働車はわざと角に待たしてある。

叔。不可んか。

中岡。いよいよ拙い。

叔。うむ、不可んか。

中岡。事によると覺悟を要するぜ。

叔。實は今夜名古屋へ行く積りだ。

中岡。もう遲い。

叔。兎に角行つて見よう。

中岡。さうか。

叔。兎に角嚮き打合せたやうな筋で行かう。

中岡。(考へる。)もう然しどうなるか、分らぬぞ。

叔。鞄は君に依托するよ。

中岡。俺の番までにはまだ間があるだらう。

叔。然し俺の歸るまで中は開けてくれるな。

中岡。大抵はさうする。場合に依つちや臨機應變の處置を取る。

叔。君を信用するより他はあるまい。

中岡。それぢや歸るとしよう。誰か車まで持つて行つて貰はないと困るな。運轉手は殘して來たから。

叔。車屋を呼ばう。

中岡。面倒臭いな。俺に持てるだらう。どれ見せたまへ。

叔。(隣室より鞄を持ち來る。)是れだ。これだ。

中岡。持てる、持てる。

叔。僕は今度だけは恐ろしいよ。

中岡。もう一か跋かになつたら覺悟を決るさ。ぐづぐづすると却つてみつともない。何時かの鹿村のやうに。惡人になつたら惡人の隈で行くんだ。それぢや歸らう。

叔。君の自働車ぢやないか。自働車が來たぜ。

中岡。成程、だが俺のぢやない。この家を數へて置かなかつたから。

叔。はて、可笑しいな。自働車などの來る通りぢやない。

中岡。留つたかな。さうさう、君の息子さんが怪我をしたつてねえ。

叔。誰に聞いた？

中岡。誰かに聞いた。

叔。どうも飛んだ恥さらしだ。もう言つてくれるな。

——門が開いたぜ。

人々沈默して異常なる靜さとなる。門者の自働車の音、門を閉く音、人の靴音などはつきりと聞える。

叔。（不安さうに）何だらう。

中岡。可笑しいぞ。

再び沈默。

呼鈴の音。やがて女中の玄關に出てたるらしきけはひ。

主客は相對しながら、注意深く耳を傾けてゐる。人の聲もかすかに聞える。

やがて女中襖を開けて入る。

婢。（一種緊張したる容貌にて、一枚の名刺を主人に渡す。その際一言も言はず。）

叔。（名刺を取る。直ぐ中岡の顏を見る。やがて名刺を中岡に渡す。突然無意識に立ち上る。）

中岡。（同じく立ち上る。）

女中。（同じく無意識に急ぎて奥に入る。）

叔。（慌てて外へ飛び出す。）

中岡。（續く。）

舞臺少時素舞臺。

女中。その後よりみき子。

みき子。まづ此方へお通し。あ、それより西洋館の應接間が可い。もう新聞記者は歸つたのだらう。

女中去る。

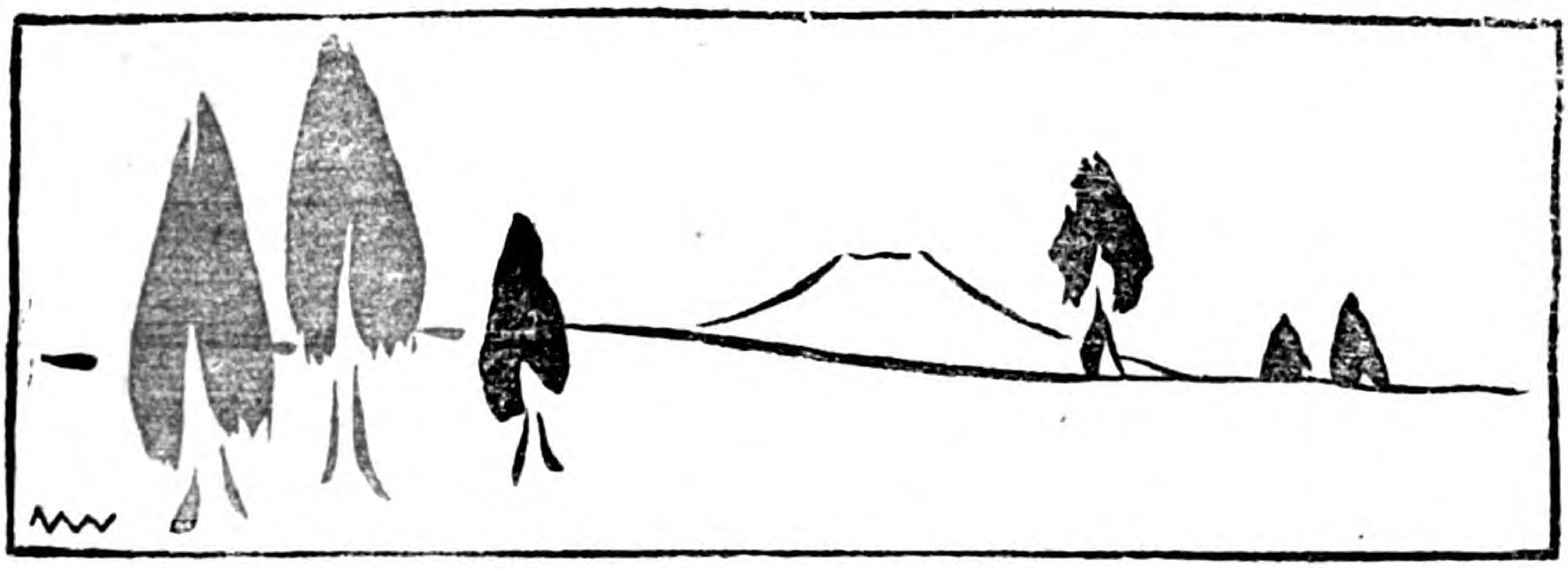
數人の足音。

みき子。（山口氏の肩に手をかける。）山口さん、どうかして下さいよ、山口さん。

富子。

富子。（奥の間より座敷を覗ひ、他の人の在らざるを見て、そのまま疊の上にうつぶしになる。）

——（幕）——



膝に飛び付く女

岩野泡鳴

『島津さァん！』ねばりッ氣のある調子でよく斯う叫んで、突然こちらの――まだ多少は遠慮勝ちがあつた時から――坐わつてる洋服の膝の上へ飛び付いて來た女だ。こちらをも酒に醉はして置いて、かの女の得意の淸元を聽かせた位では納つてゐずに、いつも興が涌いた上にも興を涌かせて、男に突飛なことをしてかからねば滿足しない女だ。

平氣でこちらが膝をくづすやうになつてからも、――さし向つてゐながら、――今か、今かと、向ふが飛び付くのを待つてる間は、膝が空虛を感じて、何となくむづ／＼し詰めになるやうになつた。

ところが、今、その自分の膝にうんと力を入れて、島津は雪が東京には珍らしく四五寸も積もつた夜ふけの道を、女をしよつて歩いてゐるのである。一ッ木の狹い圓通寺通りをだが、探してゐる人の家が分らない。

『どうして呉れるのよ、島津さん！』―脊中では大きな赤ン坊がだだを捏ねるやうにからだをゆすつた。その癖、捏ね返した泥まじりの雪の上へ落されまいとして、かの女の兩手をこちらの兩の肩からまわして、こちらの喉くびのあたりでしツかり握り合はしてゐるので、こちらは息さへ碌々出來ない。

『さう悶いちやア――』渠は不平さうに云ひかけたが、高いカラの合せ目が喉の肉を嚙んだので、何よりも先づその痛みをはづす爲めに、頸をヤツとのことで加減した。

惚れ合つてる女の方の發議であつたからとは云へ、全體、何の爲めにこんなところをこんな風つきでぶら付いてるのだ？脊中のお荷と、その重みに堪へる苦しさと、頰をちぎるやうに吹く風とで、飲んだ酒の醉ひはさめかけて來た。

然し冷たい感じを與へるのは雪やから風ばかりではない――どうも、この女は今探してゐる瀨尾にも氣があるらしいのだ。して見ると、渠は自分の愛する玉を奪はれにその玉を運んで行くやうで、馬鹿々々しくなつて來た。

思ひ出すと、こよひ、まだ少し明るかつたうちに、――旦那が今夜は來ないと分つたので濱町の家を赤坂の田町まで出て來て、――例の玉突屋の戸口で先づ瀨尾を呼び出した。で、瀨尾がいい氣になつて、

『おい、露子さんが來たぞ――どこかへ飲みに行かうツて』と告げた。

それから、島津は雪の中を自分等の行きつけの田町の待合田毎へ案内したのであつた。女中が驚いたほどの意氣な美人をつれて行つたので、女中が氣を利かせて呼んだ藝者は、如何にも三味は達者であつたが、踊取りも劣らぬやうな格腹をしてゐた。

露子は自分ももと新橋藝者であつたことをほのめかすやうな口ぶりで、近頃有名なもとの同業者どもの名を擧げて、その消息を聽いた。それから瀨尾にへたな唄を歌はせたあとで、あらたまつて「明け烏」の一段をやつて聽かせた。その聲にも音樂論に巧者な瀨尾は一度で感服したやうであつたが、露子が瀨尾にちよッと惚れしたのはこの前に一度——而も初めて——會つた時からだらう。

島津の考へは濱町の方へ飛んで行つた——自分が或相場師を尋ねて向ふの方面へ行つた時、その人がつれて行つて與れたのが初めで、よく玉突をやりに行つた。その玉突屋で一二度自分は一名の美人に突き方を敎へた。誰れかのめかけだらうと云ふ見當は付いたが、それが三度目にそこで自分をも加へて二三名のものに蕎麥を馳走した。四度目には、自分だけをかげに呼んで、これからどこかへお伴致しましようと云つた。そしてとう〳〵斯う云ふあひだがらになつたのだが——。

「なぜ僕なんぞに惚れたのだと聽くと、落ち着いた玉の突き方にもだが、また女に對する言葉の優しいのにと云つたよ」と瀨尾に報告すると、瀨尾は例の無頓着で、

「そりやアさうだらう——君のやうな不男が——まア、アメリカ歸りのお蔭、さ」と云つたッけ。

かの女に前々から附きまとつてゐた同町内の若い衆、と云ふよりも寧ろ若い遊び人肌、が一名あつて、かの女に云ひ寄つたり、金の無心をしたりしてゐた。渠と自分とは、自分のかの女と密會する鳥屋で度々出くわすので、とう〳〵渠は感づいてしまつて、これを種にかの女を强迫して、旦那に云ッ付けられるのがいやなら、まとまつた金を出せと云ひ出した。

自分は渠を同じ鳥屋へ呼び寄せて、直接に談判して見ると、金よりも寧ろかの女に氣があるのだと白

狀した。

「何をなま意氣な！」いきなり渠を――かの女の見てゐる前で――柔術の手を以て猫がひじめにしてやつたら、渠はこれから自分を先生と云ひ做すから許して呉れろと云つた。

「今夜はいい氣び、ね――あなたをまたずッと好きになつたの」と云つて、かの女はあとで自分に抱きついた。

その島屋で自分は瀨尾と今一人の女人とをかの女に紹介しようと思つて待つてた時、――その若い男も一緒について來てゐたが、――夜中の十二時過ぎまで待つたが、そして何度も女中を密使につかはしたが、姉のうちのお波ひへ世話しに出てまだ歸らないとの返事であつた。

電車が無くなりさうなので、そこを出て、皆でぞろ〳〵と或河岸まで來ると、向ふから橋を渡つて來た車がぴッたりととまつた。

「島津さん！」月の光に透き通るやうな聲であつた。

「今まで例のところで待つてたが、ね、歸らないと云ふので――」

「それは濟みませんでした、ね。いらッしやい、な。」

「もう、おそいぢやアないか？」斯う云つた瀨尾の聲が先づあとまでもかの女の耳に殘つたと云つてるのだが――氣があるからだらうと責めた時、かの女はさうぢやアない、自分を思ひながら來たところで折角出會つたのを、はたから歸らうと云つたからだと答へた。

「まア、さうおッしやらないで――どうか。」兎に角、しやんとした言葉つきて、而も人をそらさない女

だ。

かの女をさきに驅けらせて、自分等は皆揃つてあとからその家へ行つてごた〱と二階へあがつた。婆アやを鳥屋へ走らせても、もう、斷わられた。蕎麥屋へ行かせても寢てゐた。どうせ電車もなくなつたから、皆で一緒に夜明しの話をでもしようと、火鉢に火を澤山おこして、雜談に耽つた。

歸つて來たまゝの服裝でゐるので、

『衣物を着かへたらどうだ』と注意すると、

『わたし、出の衣物で慣れてますから、少しも窮屈ぢやアありませんの』と云つた。

『これが一番よく似合ふのよ』と云つたことがある廂髮を戴いた、おも長の、鼻すぢのよく通つたかの女が、少し缺點だと云へば云へる大きな口をつゞましやかに動かして、瀨尾と頻りに日本の音樂のことや芝居のことや全くの笑ひばなしなどを語り合つた。

あまり酒を好きでない瀨尾は、他の客どもの背ひに飮んだ酒の醉ひが段々さめて行くに乘じて、獨り天下のやうにかの女と向ひ合つて、かの女を笑はせた。

肝腎の自分はそこどけにされてゐたやうであつたので、かの女が圓い眼をねむさうに細くして自分の方を見た時、自分はちよッと合ひ圖をして下へおりると、かの女はいきなり自分の頸に抱き付いた。

『あなたお獨りでいらしつたらよかつたのに！』

『でも、紹介しろと云ふから――』

こんな時にまた旦那と云ふ老人が來たりでもすると、自分が再びあの黑塗りの土藏のわきに隱れるや

うなことではおッ付かなかつただらう。

だのに、その次ぎからは、逢ふ度毎にかの女が『瀨尾さんは、瀨尾さんは』と云ふやうになつた。そしてとう〳〵辛捧し切れなくなつて、今夜、まだ雪が降つてたのに、自分を出しにして、かの女は瀨尾のよく來る玉屋へ出かけて來たのぢやァなからうか？

『藝者でも何でもおごりますとも！』かの女は待合へ向つて歩きながら、瀨尾に斯う受け合つた。氣まへのいい女であることは、自分にも慣れ合ひのそも〳〵から分つてゐたが――。

『僕はいつもの浪花節をやつたッけ』と、島津はその時のことを思ひ浮べた。

『平ペッたい鼻の、大きな顏の人にやァ、浪花節の聲が一番釣り合ひます、わ、ね』と、かの女は瀨尾に笑つて告げた。

『馬鹿を云つてらァ！』自分はこれでも浪花節と講談とにかけては、紳士の隱し藝としてアメリカに於いても、また歸朝の船中に在つても、有名な者であつた。

『奧さんの淸元と云ひ、旦那さんの浪花節と申し、皆お手の物で――』幇取り藝者に斯う云つて、三味線を置いてゐた。

『この人のなんかと比べられちゃァ、ねえ』と、露子は瀨尾に云つた。

『そりやァ、――勿論、あなたが可哀さうだ。』

『ねえ、さうでしよう。』かの女は床の間を脊にして、黑縮緬の羽織りの左りの襟と共に、左りの手を後ろへすべらせて、疊の上に突き、それとなく藝者につら當てのやうに、しだらのない眞似をした。しッ

くりとからだに添つて曲線をゑがいてる、茶と黒との大名縞のお召しのうは膝をこちらの方にずらせたのだが、板じめ縮緬の赤地に蘭と菊との花か何かを白く染め拔いた長繻絆の端が、ちよッとうへしたの膝と膝との間に出たのを意識してから、眼を細くしてちやぶ臺の向ふなる瀨尾の顏を見詰めて、突いた手と反對の方に頸を曲げて、どうかして呉れろと云はないばかりに、醉ひ苦しさうな息をして見せた。それと知つてか知らないでか、瀨尾は少し心配さうに、

『さう苦しいんですか？』

『この馬鹿が！』自分はをかしくもなつた。

『苦しいの、瀨尾さん！』女は肩をゆすつたのが、腰の方までも動いて、下着の裾の裏葉色がおもてへ返つた。

『どこまでもあの狂態を突ッ込んで來るから面白いのだ。』

待合での客三名のうち、酒を控へる友人を除いたあとのものは隨分醉つてゐた。そして露子は例の手を友人にも行なつたのである。

『瀨の尾さアん』と叫んで、かの女は突然立つて行つて、渠があぐらを端座に直したそのセルの袴の膝の上へ、かの女がまた右から裾を取つて前を包んだからだをまたぎ掛けた。そして兩手を渠の肩にかけてゆすぶりながら、『なぜ飮まない――もッと飮みましようよ。』

渠は兩手を後ろに突いてにが笑ひをしてゐたが、調子ぬけがした聲で、

『飮みますとも！』

「ぢやア、先づあなたについで戴くの。」後ろを向いて延ばした右の手で臺の上から猪口を取つた。藝者が横から銚子を持つて來たのを見て、渠はそれに向つて、

「ぢやア、賴みますよ。」

「そんな水くさいこと、いや！」露子はからだを左右にふりながら、猪口を持つ手を引ッ込めた。

「ぢやア、僕が確かにつぎます。」渠はその言葉に生地の無骨をまる出しにしたけれども、それでもずッと碎けてゐるつもりのやうに左りの手を後ろに突いたまゝ、右の手に銚子を受け取つて酒をついでやつた。

それから、三四度も立てつづけに二人は、同じ態度で、飮みかはした。そしてこちらの考へでは、自分がうち忘れられてゐるかのあり樣であつたが、瀨尾が自分に遠慮した爲めにか、時々自分の方に渠のゑがほを向けるので、その度每に自分はにが笑ひをして見せた。

「醉はなけりやアいや！醉はなけりやアいや！」かう云ふ風にかの女が瀨尾に對して調子づいてるうちに、却つてかの女自身の醉ひが十分にまわつたものと見え、珍らしくも吐き氣が出たので、苦しさうにしてその室を出て行つた。

自分が介抱してやらねば承知すまいと思つて、島津が直ぐ立ちかけたところ、出口に近くゐた瀨尾が先づ立ちあがつたので、自分はまた渠にかの女をまかせるつもりにして、座に殘つた藝者を相手にしながら、直ぐ橫の壁ひとへ隔てた手洗鉢の方に耳をかた向けてゐた。すると、暫らく經つてから、

「もう、大丈夫」と、渠は得意がほをして獨りで戾つて來て、「僕が口へ手を突ッ込んで吐かせてしまつ

たから。」ハンケチで手をふきながら、どッかりとあぐらをかいた。

「ひどいことを！」斯う云ひたかつたのを押さへて、思はず立ちあがつて、飛んで行つて見ると、かの女は戸を明けッ放しにして便所へ這入つてゐた。

「どうだ？」自分の聲はむッつりしてゐた。

「苦しい！――手を取つて頂戴よ。」立ちあがつて、かの女はいきなりこちらの肩に抱き付き、殆ど全身のおもみをもたせ掛けたので、そのまま引きずるやうにそこを手洗鉢のそばへつれ出しながら、滿身の恨みを込めて、

「馬鹿！」

「でも」と、聲を低めて、こちらを訴へるやうに見ながら、「ひどいのだもの――わたしの口へ手を突ッ込んだりして！」

かの女の出した手へ、返事はしないで子杓の水をかけてやつた。自分にも、瀬尾がやつた應急のあら療治の理由が分らないことはなかつた――蓋し手洗鉢のあたりを探して見ても、ふりやんだ雪を咲かせてゐる何かの木はあつても、南天はなかつた。從つて、その葉を取つて嚙ませることが出來なかつたのだ。

それでも自分の氣はどうしても平らかでなかつた。

皆が再びもとの座に納まつてから、かの女は叱るやうにだが、笑ひながら、

「瀬尾さんはひどいの、ね。」

「失敬しましたが、吐いてしまへばけろりとするのは僕も經驗がありますから。」渠はこちらにもゑがほを見せたが、自分は答へをしたくもなかつた。

座が白けてしまつたので、

「早く一と休みおしになつた方がようございましよう」と云つて、先づ藝者が引けた。

「僕はあす、朝から學校がある日だから」と、瀬尾が次ぎに歸つた。

「先生、おぼえていらッしやいよ、いづれこのかたきはお打ちしますから。」こんな言葉を、かの女は横にぶッ倒れたまま、瀬尾の後ろ姿に浴びせかけた。

「如何に調子づいたからッて、――おれの友人にまであんまりだらしが無いんぢやア――」

「さう。」かの女は嶮ある聲を出して、俄かに半身をはね起した。そしてこちらを見詰めた眼は意地惡さうに据わつて、顏の色は青ざめてゐた。「あなたにそんな燒き持ちをおッしやる權利があつて?」

「……………」自分はこんなことをかの女に云はれたのは初めてなので、ちよッとまご付いた。低い窓の敷居に脊中をもたせかけて、兩足を投げ出した洋服の片膝を立てて、これを兩手でかかへ、顏はかの女の視線の箭を洗ひ落されて向き出しになつたやうでも、なほ恨みがましい腹の中を自分の眼に燃やして、じッとかの女の視線を眞正面に受けると、かの女が片手を突いてこちらの方へ投げ出した足を重ねてゐるその姿がそッくり眼に這入つて、やわらかい縮緬に包まれた白い肌の、至るところつる〳〵してゐるのが思ひ出された。それをもやがて獨占したいほど自分の熱心は嵩じてゐるのに、かの女は却つてそれを誰れにでも觸れしめて、美人たる條件を飽くまで手廣く廣告しようと云ふ氣味がないでもない。その

無學と無見識とはさきにも一度諄々と說き聽かせてやつたところ、如何にも御尤もと涙を流してまでありがたがつたではないかと云つてやりたかつた。けれども、まア、おとなしく出てゐろと決心して、「そりやア、お前にやアれッきとした旦那がある、さ——而も老人の、ね。」

「老人だッて、何だッて」と、無しように强い早口で、「あなたはまだ部屋住みぢやアないの——」

「……」自分はいつも斯うあなどられてゐる爲めに、かの女に愛せられながらもなほ夫婦になる機會がないのである。

「而もからだがちんちくりんで、平べッたい顏の、ね？」

「ふ、ふン！」自分はいや／＼ながら鼻で笑ふより外、仕かたがなかつた。

「……」なほこわい顏をして見詰めてゐたかの女も、「ふン」と急に鼻で吹き出して笑つたかと見ると、どッかりあふ向けに倒れてしまつた。うは着、した着の裾がはね返つて、長襦袢の綾が眞紅に燃えると見えた。

その上に眼を放つてゐると、自分の情が段々と集中して來て、瀨尾のことも何も忘れて行つた。

「おい、風を引くよ。床を取つて貰つたら、どうだ？」

「……」

女に返事は無かつたが、自分はぽん／＼、ぽんと手をたたいた。

「可にして頂戴よ、島津さん！」起きあがつて來て、かの女は自分の肩に抱き付いた。「惡かつたわ、ね。」そして大きな口を持つて來た。

女中が椽がはをつたつて來る足おとが聽えたので、二人は手を離した。

「でも、瀬尾さんは――」かの女は笑ひながら、平氣で云つた。「わたし、好き――うぶで、無骨で、正直で。」

「而も」と、自分は最初に自分から出た口調をかの女が模したその優しい口調になぞらへて、後ろ襟を後ろへ突き出す眞似をして見せながら、なほ嫉妬の消え殘るやうに、「學校の教師で、子供がぞろ〱ゐて、ね。」

「さう」と、かの女は知らなかつたがと云ふ風に、下から顏を少しこちらへ突き出した。

「ふ、ふ、ふ、ふ」と、自分は自分の前の言葉につづいて、なに氣ないやうに笑つた。

二人の女中が食器やちやぶ臺をかたづけて、床を一つ敷き延べるまでは、こちらの二人も口を入りまじへて、下だらぬことを語り合つて笑つた。

「御ゆッくりお休み遊ばせ」と云つて女中どもが行つてしまつたあとで、直ぐ床に就くのだらうと思つたところ、かの女は氣ぶんも直つたかして、また元氣づいて來た。

それをこちらから押さへてやるつもりで、下の方に突ッ立つたままわざとにもからだをすくめて、筒袖の兩肱を兩わきに縮めて見せながら、

「寒くなつた、寒くなつた。」

「そのざまッたら！」かの女は上の方にペッたりと坐つたまま、微笑して見あげながら、

「これから瀬尾さんのところへ行きましよう。」

「もう、遲い。」いやな顏を見せてそれが爲めにまた意地張られるのも厄介だと思つたから、成るべく素直に受けるつもりで、こちらも微笑を返しながら云つたが、その聲は自分にも否定的な重くるしいものとしか聽えなかつた。

「遲くッたッてようございましょう。」かの女の言葉は憎いほどとどこほりなく出てゐた。

「寢てゐる！」

「叩き起します、わ。」

「……」何を云つてると云はないばかりになつて、炬燵の這入つた赤うら蒲團の端に腰をおろすと、したたかに嫉ましくなつたその女の實姿(じつすがた)が却つて觀音の坐像のやうに目の前にちら付いて、自分のからだ中(ちう)がからだぼになつて、たゞ一方にそそいで行くやうであつた。

「それしきのことアしたッて——わたしだッて、いつか一晩ぢう、徹夜をして、あの人につき合つたぢやアございませんか？」

「下だらない！」斯う云つて、自分は横を向いた。

「それに、今夜だッて、わたしの口へ手を突ッ込んだりまでして——」

「……」自分は、もう、返事をしなかつた。

「行きましよう——どうしても今夜ぢうに二度のかたきを一緒に取つてやる、わ。」かの女は立ちあがつた。そしてすッきりした腰のしごきをしッかりと締め直した。

時計を出して見ると、もう、一時を少し過ぎてゐた。それでも、自分もしぶ／＼立ちあがつて、

「一時十五分だ。」

「一時だッて、二時だッて――」かの女は早速さきに立つて室を出た。

新らしい葉卷き煙草に火をつけたのを口に喰はへてから、手を叩いて置いて、自分も室を出て、足を靴に入れて編み上げの紐をかけた。かの女の足駄の音がもはや袖垣の向ふなる敷き石の上にきしつてると思ふと、

「早いの、ね、もう門を締めて。」

「ふン」と、こちらは獨りで私かに笑つた。何が早いものか？そして、敷き石を三つか四つか踏めば達する玄關口へ進んで行つて、締まつてる戸を叩いた、

「姉さん――おかみさん！」

「はい」と、奥では直ぐ返事をした。そして戸を明けに來た女中に、ちよッと出て來るが、直ぐまた歸つて來るからと告げた。

「まア」と、びッくりしたッけが、それは尤もなことだ。

自分で門のくわん貫きを拔いたが、明けて置くのだらうと思つたから、そッと締めた風に見せかけて置いた。外へ出ると、そらはからりと晴れて、星がきら〳〵してゐたので、雪あかりが一層あかるく見えて、歩くのには樂であつた。

が、高齒の足駄をはいた露子は、溜池の電車通りをたッた半丁ばかりで左りへまがるところまで來るにも幾たびも倒れかけた。

『全體、無理だ――物好きにも程がある』と叱つては見たが、手を引いてやらねば一層あぶなッかしかつた。

「コートを置いて來ましたが、ね、さう寒くもありません、わ」と云ふほど、かの女は苦心して歩いてゐたけれども、ひゆう〳〵風が吹いてるので、こちらは――同じく外套を忘れて來たので――寒くてたまらない。

田町二丁目から新町二丁目へ渡るところで、冷えた頰をこすらうとして、ちよッと手を放すと、早速かの女は片足を足袋はだしになつた。

「しまつた」と云つて、かの女はその場に股を少し開いたまま立ちどまつてしまつた。そして情けない聲を擧げて、『薄情、ね、あなたは！』

「それだから、よすがいいと云つたのだが」と返しては見たが、自分はかの女の樣子をすッかり氣の毒にもなり、可哀さうにもなつた。

「おぶつて貰ふ、わ、島津さん！」

丁度自分もその氣になつたのだから、直ぐ脊中を向けてしやがんだ。

一ッ木の交番では、うろん臭く思つたのか、それとも急病人とでも推したのか、巡査が一人つか〳〵と出て來て、

「どうしたのです」と尋ねた。

「なアに、今」と、葉巻きを口にくはへたまま、「下駄の鼻緒を切らせたので――」こんなわけであつた

が、やッとのことで、この圓通寺通りの中ごろまでやつては來たところ、一度來ておぼえてゐると思つた友人の家がどうしても見當らないのだ。

「どうして呉れるのよ、島津さん！」

「さう悶いちやア――」高いカラの合せ目が喉の肉を嚙んだのはこの時だ。

高が女の一人をだが、斯うつゞいてしよつてるとますく重くなる。自分は段々力が出るに從つて寒氣には平氣になつた代り、今度は女が、

「寒い、寒い」と云ひ出した。

自分の兩手を後ろへまわして、女の兩足を膝の折れ目のあたりでしッかり持ち上げてはゐるが、なほ殘る重みを女はその兩手の握り合せ目に集めるので、自分は喉の骨を力ませてそれを受けるのが如何にも苦しい。

片手を放して口の煙草を手に取り、殆ど口一杯にたまつたつばきを吐いた。

「落ッこちるぢやア――」

「うー！」急いでまた葉卷を喰はへて、遊んでる手を後ろへまわして、やッとのことで、あとずさりして行きかけた自分のからだの中心を取つた。

「どこよ、瀨尾さんとこは？」

「困つた、ね。」獨り言のやうに云つて、立ちどまつて考へながら、「この通りぢやアなかつたか知らん。」

「あら」と、また女はからだを小さくゆすつた。「薄情、ね！　お友達の家を忘れちまつたッて！」

戻つて見ると、田毎の門は締つてゐた。その一方に垂れた柳の枯れ枝が風に烈しくゆれてるのが電燈の光りに見える。

二人の體を自分の溜らなく勞れた弱りにまかせて、どんと戸に押しつけて見たが、うちがはからかかつたくわん貫きはしッかりと戸を喰ひとめてゐる。

渠は右の手を後ろから外して、どん〱と二三度に戸を叩いた。しんとして奥から何の返事もないので、今度は思ふさま叩いた。おほきな聲で、

「おかみさん――おい、おかみ！」

「姉さん！」ずッと聲を低くして、「おほさわぎ、ね。」

矢ッ張り、返事がない。

「畜生！コートと外套を擔保に取つたつもりだ、な。このおかみは少し因業で、ちよッと借金を溜めると、直ぐ催促しやアがるんだ！」

「溜め池ですもの。」

「冗談ぢやアない！」

「しッかりお叩きなさいよ。」

「待て――ちよッとおりてゐな。」渠はかの女を平たいどぶ石の上におろして、兩手を上に延ばして門の戸に飛びかけた。そして、うんと力を入れて自分のからだを引き上げ、片足を戸の上にかけて馬乘りになつてから、他の片足をもうちがはに外して、庭に飛びおりた。靴のうらが石にすれて、じやりりと音がした。

それでもあたりに憚ることもなしに、がたぴしとくわん貫きを外して。門をひらくと、寒さうにだが、足袋はだしで、右の手を袖の中に縮めて、左りの手で褄を――どろ足にさわらないやうに――あげてゐた女は、にッこりと笑つた。（完）

興味あり權威ある史學泰斗の新著

文學博士

久米邦武先生著

國史八面觀

四六判五百頁　總クロース函入　正價金壹圓貳拾錢　送料金八錢

曩に裏面より觀たる日本歷史を著して平安朝史に峻嚴なる批評を加へられたる久米博士は今回更らに其時代を擴大し其舞台を一層大にして日本全史の縱横觀を新たに叙述せられ名づけて國史八面觀といふ

◎卓越せる識見大膽なる批評眼を有せる史家として先生が最も明快平易なる叙述法によつて國民全般に歷史思想を普及せしむべく新たに書き下されし本書の價値は絶大なり

◎凡そ國史に關して萬人の抱ける諸種の疑問は本書中に悉く說明せられたり學者も見よ學生も見よ教師も見よ宗教家も見よ歷史上の一切の疑問は——隱れたる歷史未だ何人にも語られざる歷史は公けにせられたり

◎本書を繙いて正史に現はれしよりも更により偉大なる國家國民の過去の足跡を知れ

◎久米博士自身も亦從來の著作中最も興趣あるものは本書なりと自信せらる

發行所　東京日本橋鐵砲町　振替一五〇五六番　磯部甲陽堂

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區尾張町	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮內立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝	藤村梅松堂

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢 但支那を除く）

冊數＼區別	內國	國外
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
	以上郵稅共	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

送金注意

一　誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一　郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本鄉區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一　振替貯金口座は**東京三十四番**なり

一　郵券代用必ず**一割增**の事

一　集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢　及送料共）

一　受領證請求は必ず返信料を要す

大正四年十一月廿九日印刷納本
大正四年十二月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

東京市本鄉區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話 下谷九一一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



What Sanatogen Will Do for Your Health.

サナトーゲン

「**サナトーゲン**を服用し給はゞ數週間にして貴下の健康狀態は驚くべく一變すべし、食慾は進み、筋力は加はり、神經は旺盛なる活動を促し、生活上凡ての快樂は恢復すべし」

腦力及體力增進の要あるとき今日幾多の臨床大家は實驗上の確信を以て**サナトーゲン**を處方せらる。

過去數年來**サナトーゲン**は醫學社會に於て空前の賞讃を博し既に無慮一萬八千餘を算する諸種の醫學的報告出でたり。

加ふるに第十七回萬國醫學大會にて幾多の滋養劑中獨り本品のみ最高賞**グランプリ**を得て現代滋養强壯劑中最も進歩せるものと公認せらるゝに至り其の聲價益々加はれり。

サナトーゲンは自然界に存する最も純粹なる營養劑にして不自然なる成分を含まざるのみならず衰へたる胃腸にも良く堪ふるが故に食物を取る能はざる重症者、嬰兒の滋養劑としても缺く能はざるものなり。

到る處高等の藥店にて販賣せられ大瓶と小瓶とあり、白色の細かき粉末にして牛乳、湯又は隨意の飲料に混じて用ふべし。

神戸市海岸通一ノ三

タムソン商會

詳細說明書進呈

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.